

山王遺跡VI

—多賀前地区第4次発掘調査報告書—

山王遺跡VI

—多賀前地区第4次発掘調査報告書—

平成二十六年十二月

平成26年12月

宮城県教育委員会
国土交通省東北地方整備局

宮城県文化財調査報告書第235集

山王遺跡VI

—多賀前地区第4次発掘調査報告書—

平成26年12月

宮城県教育委員会
国土交通省東北地方整備局

序 文

ゆとりと豊かさを目指すことが重要となってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保護・活用の取り組みへの気運が高まっています。しかし、その一方で道路建設や住宅造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模な圃場整備や道路建設、工業団地造成などの各種事業も年を追うごとに激化しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきております。なかでも、土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には重要な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災は、宮城県内にも甚大な被害をもたらしました。震災の復旧・復興事業が進められるにつれ、埋蔵文化財と関わる場合が多く出てまいりました。本県では早期復興のため、宮城県発掘調査基準を弾力的に運用するとともに、他県・市からの職員派遣を得ながら迅速的な発掘調査に努めているところです。

三陸沿岸道路（仙塩道路）4 車線化・多賀城インターチェンジ建設事業は震災前に凍結されていた事業ですが、震災後に復興道路として位置付けられるようになった復興関連事業です。本書は、この三陸沿岸道路（仙塩道路）4 車線化事業に先立って平成 24 年度に実施した多賀城市山王遺跡多賀前地区の発掘調査報告書です。今回の発掘調査により、陸奥国府多賀城跡周辺の土地利用のありかたを解明していく上で貴重な成果が多く得られました。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりますが、遺跡の保護に理解を示され、発掘調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに厳冬期に至るまで通年の調査に取り組んでいただいた自治法派遣職員や多くの皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成 26 年 12 月

宮城県教育委員会

教育長 高橋 仁

例　　言

1. 本書は、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所が担当する復興関連事業の三陸沿岸道路仙塙道路4車線化工事に伴い、平成24年度に実施した山王遺跡多賀前地区第4次発掘調査の成果をとりまとめたものである。宮城県教育委員会は、同事務所からの調査依頼を受け、平成24年度は発掘調査とその整理作業、平成25年度は整理・報告書作成作業を行い、平成26年度に報告書を刊行するものである。
2. 発掘調査は、宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。調査に当たっては、他県市からの自治法派遣職員及び東北歴史博物館職員の協力を得ている。
〔文化財保護課職員〕白崎恵介、鈴木啓司、村田晃一・斎藤圭一・濱中一道、〔東北歴史博物館職員〕柳澤和明、〔他県派遣職員〕高橋保雄（新潟県）、阿部明彦（山形県）、西岡巧次（神戸市）、西岡誠司（神戸市）、伴瀬宗一（埼玉県）、山下平重（香川県）、末木啓介（埼玉県）、遠藤武（愛媛県）、田口明子（山梨県）、中川寧（鳥取県）
3. 発掘調査および資料整理・報告書の作成に関しては以下の方々および機関からご指導・ご助言を賜った（敬称略）。
《個人》箕浦幸治・平野信一・山田努（東北大）・松本秀明（東北学院大）・千葉孝弥・武田健市・島田敬・相澤清利（多賀城市埋蔵文化財センター）・今泉隆雄・相原淳一・佐藤憲幸・古川一明・及川規・芳賀文絵（東北歴史博物館）・吉野武（宮城県多賀城跡調査研究所）・《機関》多賀城市教育委員会・多賀城市埋蔵文化財センター・東北歴史博物館・宮城県多賀城跡調査研究所
このうち、東北大大学院理学研究科の箕浦幸治教授、平野信一助教授、山田努助教、東北学院大学の松本秀明教授にはイベント堆積物の調査に当たって御指導いただきとともに、本報告書に原稿を執筆いただいた。また、1号馬の実測・取り上げ、各区出土獸骨の同定は文化財保護課の西村力があたり、1号馬頭部の取り上げとその後の保存処理は、東北歴史博物館学芸部の保存科学担当の及川規・芳賀文絵があつた。また、通年調査協力いただき、派遣元に戻られた阿部明彦氏（山形県教育委員会）・末木啓介氏（埼玉県教育委員会）・田口明子氏（山梨県教育委員会）には、整理・報告書執筆にあたり、事実関係の確認やご助言をいたいただいた。
4. 本書における平面図は、東日本大震災後の世界測地系の国家座標第X系で表示・作成した。
5. 本書における土色の記載は、『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄、1973、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修、日本色研事業株式会社発行）に依拠した。
6. 本書の遺構は種別にしたがって、以下の記号を使用した。
豊穴住居跡（SD）、掘立柱建物跡（SB）、材木堆跡・柱列跡（SA）、井戸跡（SE）、土壤（SK）、溝跡（SD）、水田跡・小溝状遺構群（SF）、道路跡・土器埋設遺構・河川跡・その他性格不明の遺構（SX）
7. 土器実測図面のうち土師器内面にグレー塗り表示してあるものは、内面が黒色処理されていることを示す。
8. 軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦の分類と記載は、同一の瓦類が出土してその基準となっている多賀城跡分類（宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡 政府跡 本文編』）に依拠した。
9. 本書の執筆は、調査担当者との協議の後に以下の分担で行い、柳澤和明が全体を編集した。
第1章（天野順陽）、第2章～第7章1・第8・9章（柳澤和明）、第7章2（箕浦幸治東北大大学院理学研究科教授、同平野信一助教授、山田努助教）、第7章3・付章1（松本秀明東北学院大学教養学部教授、伊藤晶文山形大学人文学部教授）、付章2（鈴木敏彦東北大学歯学部准教授）、付章3（藤根久樹）パレオ・ラボ）
10. 発掘調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。

目 次

調査要項

第1章 調査に至る経過	1
第2章 遺跡の概観	4
1. 遺跡の位置・地理的環境	4
2. 歴史的環境	4
3. 本遺跡周辺におけるこれまでの調査	12
第3章 調査の方法と経過	13
第4章 基本層序	18
第5章 第IV層遺構面（奈良・平安時代）の確認調査・本調査	22
1. 南1西2区	22
(1) SX1300 南1道路跡	22
(2) SX1350 西1道路跡	30
(3) SD1020 遣り水遺構、SD10061 連結溝、SK2298 大土壙	39
(4) 掘立柱建物跡	47
(5) 竪穴住居跡	54
(6) 横位合口土師器甕棺墓	55
(7) 土壙	58
(8) 小溝状遺構群（烟跡）	59
(9) 基本層III a 層	63
2. 南2西1区	78
(1) SX3461 南1－2間道路跡	78
(2) SX1900 南2道路跡	79
(3) 掘立柱建物跡	90
(4) 竪穴住居跡	108
(5) 横位合口土師器甕棺墓	121
(6) 井戸跡	123
(7) 土壙	123
(8) 小溝状遺構群（烟跡）	125
(9) 区画溝等の溝	127
(10) 河川跡	129
(11) 基本層III b 層	130
3. 南2道路跡以南	135
(1) SX1950 西0道路跡	135
(2) SX10240 東0道路跡	139
(3) 掘立柱建物跡	141
(4) 井戸跡	141

(5) 土壌	146
(6) 溝	146
(7) SF3700 水田跡	148
(8) 河川跡	151
第6章 第V・VII層（古墳・弥生時代）の調査	160
1. 橋脚P 71の調査	160
2. 橋脚P 65の調査	161
第7章 イベント堆積物の検討	164
1. 各イベント堆積物の概要と年代の検討	164
(1) SX10233 イベント堆積物	164
(2) SX10114 イベント堆積物	166
(3) SX10234 イベント堆積物	167
(4) 市川橋遺跡八幡地区D区SX700 西4道路跡のイベント堆積物	167
(5) 各イベント堆積物の比較	169
2. 山王遺跡多賀前地区、市川橋遺跡八幡地区にみられるイベント堆積物の堆積学的・古生物学的検討 (箕浦幸治・山田 努・平野信一：東北大学大学院理学研究科)	171
(1) はじめに	171
(2) 堆積学的検討	171
(3) 古生物学的検討	173
(4) 堆積学的・古生物学的検討に基づく砂層の起源に関する解釈	175
3. 山王遺跡多賀前地区におけるイベント堆積物の粒度分析結果（松本秀明：東北学院大学教養学部）	182
(1) SF3700 水田域内の SX10234 イベント堆積物	182
(2) SD1020A 道り水道構付近の SD10161 連続溝の SX10233 イベント堆積物	184
第8章 総括	187
1. 東西大路跡以南における土地利用の変遷	187
2. イベント堆積物の要因	192
3. 南1西1道路交差点近くの SX10090 横位合口土師器甕棺墓	193
第9章まとめ	194
註	195
引用文献	196
付章1 山王・市川橋遺跡周辺の地理的環境の変化（松本秀明：東北学院大学教養学部、伊藤晶文：山形大学人文学部）	199
付章2 山王遺跡多賀前地区 SX10090 横位合口土師器甕棺墓出土の人歯（鈴木敏彦：東北大学歯学部）	204
付章3 1号馬周辺堆積物中の珪藻化石群集（藤根久：株/パレオ・ラボ）	209
写真図版	215
抄録	

図面目次

第 1 図	陸奥国府多賀城跡と方格地割、遺跡の分布	5
第 2 図	多賀城跡城外の方格地割と既調査区・今年度調査区の位置	9・10
第 3 図	調査区の位置	14
第 4 図	基本層序柱状図	19
第 5 図	南 1 西 2 区主要遺構全体図	24
第 6 図	南 1 西 2 区分割図（1）	25
第 7 図	南 1 西 2 区分割図（2）	26
第 8 図	南 1 西 2 区分割図（3）、南 2 西 1 区分割図（1）	27
第 9 図	南 1・西 1 道路交差点付近平面図	28
第 10 図	南 1・西 1 道路跡交差点付近断面図	29
第 11 図	西 1 道路跡の D～F 側溝と路面上の SX10114 砂層（イベント堆積物）	32
第 12 図	西 1 道路跡の側溝下部と路面Ⅰ整地	33
第 13 図	西 1 道路跡断面図	34
第 14 図	西 1 道路跡 A 東側溝出土 1 号馬平面図・断面図	38
第 15 図	SD1020 造り水遺構周辺の主要遺構—洪水砂層堆積前	42
第 16 図	SD1020 造り水遺構周辺の主要遺構—洪水砂層堆積後	42
第 17 図	SD1020 造り水、SK2298 大土壙、SD10061 連結溝、SB10083・10084・10085 挖立柱建物跡 平面図	43
第 18 図	SD1020 造り水、SK2298 大土壙、SD10061 連結溝断面図	44
第 19 図	SB10083・10084・10085 挖立柱建物跡断面図	52
第 20 図	SB1245・1246・3129・10212・10229 挖立柱建物跡平面・断面図	53
第 21 図	SI10037・10098 穫穴住居跡平面図	55
第 22 図	SI10099 穫穴住居跡平面図	56
第 23 図	SI10186 穫穴住居跡平面図・断面図	56
第 24 図	SX10090 横位合口土師器甕棺墓平面図・断面図	58
第 25 図	南 1 西 2 区土壤平面図	59
第 26 図	南 1 西 2 区検出の主な土壤断面図	60
第 27 図	南 1 西 2 区出土の主な土器（1）	64
第 28 図	南 1 西 2 区出土の主な土器（2）	65
第 29 図	南 1 西 2 区出土の主な土器（3）	66
第 30 図	南 1 西 2 区出土の主な土器（4）	66
第 31 図	南 1・西 1 道路跡関係の主な土器（1）—SX10090 横位合口土師器甕棺墓	67
第 32 図	南 1・西 1 道路跡関係の主な土器（2）—南 1・西 1 道路跡 A～C 期	68
第 33 図	南 1・西 1 道路跡関係の主な土器（3）—南 1・西 1 道路跡 D 期	69
第 34 図	南 1・西 1 道路跡関係の主な土器（4）—南 1・西 1 道路跡 D～F 期	70
第 35 図	出土した主な瓦（1）	73
第 36 図	出土した主な瓦（2）	74
第 37 図	出土した主な土製品	76
第 38 図	出土した主な石製品	77
第 39 図	南 2 西 1 区主要遺構全体図	80
第 40 図	南 2 西 1 区分割図（2）	81
第 41 図	南 2 西 1 区分割図（3）	82
第 42 図	南 2 西 1 区分割図（4）	83

第 43 図	南 2 西 1 区分割図（5）	84
第 44 図	南 2 西 1 区分割図（6）、南 2 道路跡以南分割図（1）	85
第 45 図	南 1～2 間道路跡と上層の SF1625 小溝状遺構群、下層の SD1602B 河川跡平面図	86
第 46 図	南 1～2 間道路跡、SF1625 小溝状遺構群（烟跡）、SD1602B 河川跡断面図	87
第 47 図	南 2 道路跡、SX1964 横位合口土器甕棺墓、SB3685 掘立柱建物跡平面図	89
第 48 図	南 2 道路跡、SB3685 掘立柱建物跡断面図	90
第 49 図	SB10213～10218 掘立柱建物跡平面図	94
第 50 図	SB10213～10218 掘立柱建物跡断面図	95
第 51 図	SB10219・10220 掘立柱建物跡平面図	96
第 52 図	SB1549・1812 掘立柱建物跡平面図	97
第 53 図	SB10221 掘立柱建物跡平面図	98
第 54 図	SB1549・1812・10220・10221 掘立柱建物跡断面図	99
第 55 図	SB3438～3441・3447・10225 掘立柱建物跡平面図	100
第 56 図	SB1873・1929・3442・10223・10224・10226～10228 掘立柱建物跡平面図	101
第 57 図	SB3440・3442・3445 掘立柱建物跡平面図	102
第 58 図	SB1873・1929・3438～3442・3445・10223～10228 掘立柱建物跡断面図	103
第 59 図	SI10123 穴住居跡平面図・断面図	109
第 60 図	SI3206 穴住居跡平面図・断面図	110
第 61 図	SI10018・10170 穴住居跡平面図・断面図	112
第 62 図	SI10013 穴住居跡平面図・断面図	114
第 63 図	SI10014・10015 穴住居跡平面図・断面図	115
第 64 図	SI3227・10019・10182 穴住居跡平面図	117
第 65 図	SI3227・10019・10182 穴住居跡断面図	118
第 66 図	SI10125 穴住居跡平面図・断面図	119
第 67 図	SI10134 穴住居跡平面図・断面図	120
第 68 図	SX1964 横位合口土器甕棺墓平面図・断面図	122
第 69 図	SE10012 井戸跡平面図・断面図	123
第 70 図	南 2 西 1 区検出の主な土壤断面図	124
第 71 図	南 2 西 1 区出土の主な土器（1）	131
第 72 図	南 2 西 1 区出土の主な土器（2）	132
第 73 図	南 2 西 1 区出土の主な土器（3）－SK10140 土壙	133
第 74 図	南 2 道路跡以南分割図（2）	137
第 75 図	SD2000 河川跡、西 O 道路跡、東 O 道路跡、SK10194 土壙断面図	138
第 76 図	南 2 道路跡以南分割図（3）	142
第 77 図	南 2 道路跡以南分割図（4）	143
第 78 図	南 2 道路跡以南分割図（5）	144
第 79 図	SD3700 水田跡周辺断面図	145
第 80 図	橋脚 P 65 本調査区の SF3700B 水田下層調査・建物跡と溝	147
第 81 図	南 2 道路跡以南の主な土器（1）	156
第 82 図	南 2 道路跡以南の主な土器（2）	157
第 83 図	南 2 道路跡以南の主な土器（3）	158
第 84 図	橋脚 P 71 本調査区の第 V 層面調査平面・断面図	162
第 85 図	橋脚 P 65 本調査区の第 V 層面調査	163
第 86 図	陸奥国府多賀城跡の方格地割、発掘調査区とイベント堆積物、珪藻分析試料の採取位置	165
第 87 図	平成 24 年度市川橋遺跡八幡地区 D 区西 4 道路跡で検出されたイベント堆積物（砂層）	168

第 88 図	市川橋遺跡八幡地区 D 区西 4 道路跡断面にみる上方粗粒化砂層と下底に発達する火炎状構造	172
第 89 図	山王遺跡多賀前地区 SX10233・10234 イベント堆積物とサンプル採取位置	172
第 90 図	堆積物試料中に含まれる珪藻化石環境指標種群の割合	178
第 91 図	堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真 1 (海水性環境指標種群)	179
第 92 図	堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真 2 (淡水性環境指標種群)	180
第 93 図	堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真 3 (淡水性環境指標種群)	181
第 94 図	堆積物の粒度分析結果	183
第 95 図	SD10061 連結溝のイベント堆積物の粒度分析結果	185
第 96 図	南 1 西 2 区における主要遺構の変遷	189
第 97 図	南 2 西 1 区における主要遺構の変遷	191
付図 1	多賀城跡城外方格地割 (1)	
付図 2	多賀城跡城外方格地割 (2)	

表 目 次

表 1	第 1 図掲載の遺跡	6
表 2	山王遺跡・市川橋遺跡における大規模な本発掘調査一覧	11
表 3	山王遺跡多賀前地区における 3.11 超巨大地震後の地殻変動量	15
表 4	第 13 図掲載西 1 道路跡断面図土層観察表	35
表 5	第 18 図掲載 SD1020 造り水道構築断面図土層観察表	45
表 6-1	第 26 図掲載土壤断面図観察表	60
表 6-2	第 26 図掲載土壤断面図観察表	61
表 7	南 1 西 2 区検出の土壤一覧	62
表 8-1	南 1 西 2 区、西 1 道路跡出土土器観察表	71
表 8-2	南 1 西 2 区、西 1 道路跡出土土器観察表	72
表 9	瓦 (第 35・36 図) 観察表	75
表 10	南 2 西 1 区検出の土壤一覧	125
表 11	南 2 西 1 区出土土器観察表	134
表 12	第 75 図掲載西 0 道路跡、SD2000B.C 河川跡等断面図土層	139
表 13	第 79 図掲載 SF3700 水田跡周辺断面図土層観察表	146
表 14	南 2 道路跡以南土壤一覧表	146
表 15	南 2 道路跡以南出土土器観察表	159
表 16	珪藻分析用試料の記載	171
表 17	珪藻化石産出表	176・177

写 真 図 版 目 次

図版 1	多賀城跡と山王遺跡・市川橋遺跡の航空写真.....	217
図版 2	調査区遠景(1).....	218
図版 3	調査区遠景(2).....	219
図版 4	調査区真上空撮.....	220
図版 5	南1西2区真上空撮.....	221
図版 6	南2西1区真上空撮(1).....	222
図版 7	南2西1区真上空撮(2).....	223
図版 8	南1道路跡、南1西1道路交差点.....	224
図版 9	西1道路跡A東側溝内出土1号馬.....	225
図版 10	西1道路跡全景.....	226
図版 11	西1道路跡路面上の洪水砂層.....	227
図版 12	南1—2間道路跡.....	228
図版 13	南2道路跡.....	229
図版 14	西0・東0道路跡.....	230
図版 15	SD1020A 道り水道構周辺.....	231
図版 16	SK2298 大土壤・SD10061 連結溝とSX10233 砂層(イベント堆積物).....	232
図版 17	竪穴住居跡(1).....	233
図版 18	竪穴住居跡(2).....	234
図版 19	竪穴住居跡(3).....	235
図版 20	横位合口土師器甕棺墓.....	236
図版 21	主な掘立柱建物跡の柱穴断面.....	237
図版 22	小溝状遺構群(烟跡).....	238
図版 23	SF3700 水田跡とSX10234 砂層(イベント堆積物).....	239
図版 24	SF3700 水田域内のSX10234 砂層(イベント堆積物)とSX10211 濡地断面.....	240
図版 25	砂層(イベント堆積物)の調査と断面剥ぎ取り.....	241
図版 26	SD1602・2000 河川跡断面.....	242
図版 27	橋脚71Ⅲ層以下の本調査.....	243
図版 28	遺物写真(1) 土師器壺.....	244
図版 29	遺物写真(2) 土師器壺・塊.....	245
図版 30	遺物写真(3) 須恵器壺.....	246
図版 31	遺物写真(4) 須恵器壺・鉢.....	247
図版 32	遺物写真(5) 須恵系土器1.....	248
図版 33	遺物写真(6) 須恵系土器2.....	249
図版 34	遺物写真(7) 土師器甕・鉢・羽釜・甑.....	250
図版 35	遺物写真(8) 甕棺墓.....	251
図版 36	遺物写真(9) 甕棺墓3点集合、製塙土器集合.....	252
図版 37	遺物写真(10) 瓦.....	253
図版 38	遺物写真(11) 土製品・石製品・頭巾.....	254
図版 39	遺物写真(12) 墨書きアップ.....	255
図版 40	遺物写真(13) 集合写真.....	256
図版 41	西1道路A東側溝出土1号馬の保存処理.....	257

調査要項

遺跡名 山王遺跡（宮城県遺跡地名表搭載番号 18013）

遺跡記号 F X 12

所在地 宮城県多賀城市多賀城市市川字多賀前

遺跡種別 弥生時代～古墳時代の集落跡、古代都市

調査次数 山王遺跡多賀前地区第4次調査

調査原因 三陸沿岸道路仙塩道路4車線化工事（東日本大震災復興関連事業）

事業者 国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所

調査箇所 三陸沿岸道路仙塩道路の現在供用されている2車線西側、側道との間の2車線分
(橋脚P 54から橋脚P 71に至る長さ約440m、幅約13m)

調査面積 本発掘調査 橋脚18基（橋脚P 54～橋脚P 71）箇所 約1,400m²
確認調査 橋脚間 約3,320m²
合計 約5,720m²

調査期間 平成24年（2012年）3月26日～12月12日

調査主体 宮城県教育委員会（高橋仁教育長）

調査担当 宮城県教育庁文化財保護課

調査員 〔文化財保護課職員〕白崎恵介（4～6月）、鈴木啓司（7～12月）、村田晃一・斎藤圭一・濱中一道（随時）
〔東北歴史博物館職員〕柳澤和明（通年で長期出張）
〔他県市派遣職員〕高橋保雄（新潟県：随時）、阿部明彦（山形県：通年）、西岡巧次（神戸市：10月）、西岡誠司（神戸市：随時）、伴瀬宗一（埼玉県：10月）、山下平重（香川県：10・11月）、末木啓介（埼玉県：通年）、遠藤武（愛媛県：5・6月）、田口明子（山梨県：通年）、中川寧（島根県：10・11月）

臨時職員 登録37名（発掘調査現場）

調査協力 國土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所、(株)岩田地崎建設、多賀城市埋蔵文化財調査センター、東北歴史博物館、宮城県多賀城跡調査研究所

整理作業 ①平成24年度 〈職員〉鈴木啓司、柳澤和明、阿部明彦、末木啓介、田口明子、西岡巧次、
〈臨時職員〉赤間三重子、浅野明美、伊藤美代子、伊藤幸絵、今井真知子、大沼美代子、尾形美津江、小山悦子、加藤明日香、加藤妙子、岸柳あきら、木村孝子、木村奈保美、小林由美、
佐藤せい子、佐藤沙織、佐藤友子、菅原真由、鈴木ひとみ、高橋智佳子、瀧澤恵子、只木一美、
千葉千恵、土屋優子、西村ゆき子、與名本京子。
②平成25年度 〈職員〉柳澤和明、〈臨時職員〉浅野明美、加藤明日香、佐藤沙織、鈴木ひとみ、瀧澤恵子。

第1章 調査に至る経過

1. 発掘調査に至る経過

三陸沿岸道路建設は東日本大震災発生以前から進められており、山王遺跡においても平成元年度から三陸沿岸道路（仙塩道路）4車線化及び多賀城インターチェンジ建設事業に先立ち宮城県教育委員会と多賀城市教育委員会がそれぞれ調査主体となり本発掘調査を実施していた（宮城県教育委員会 1994a・1994b・1997・2009、多賀城市教育委員会 1991b・1992・1997）。しかし、社会情勢の変化等により三陸沿岸道路（仙塩道路）は暫定2車線を開通した段階で、事実上、事業休止状態となり、平成7年度の調査を最後に当該事業に係る本発掘調査を中止することとなった。

事業休止から約15年後の平成23年3月11日に東日本大震災が発生した。三陸沿岸道路は被災箇所が随所に認められたものの、応急措置を経て、震災直後から被災地への生活物資等の運搬に重要な役割を果たしたため、平成23年度、国により被災地復興のために重要な「復興道路」に位置づけられ、未開通区間と併せ三陸沿岸道路（仙塩道路）の4車線化及び多賀城インターチェンジ建設事業が優先的に整備されることとなった。

この決定を受け、平成23年度の下半期以降、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所（以下、「国交省」）と宮城県教育委員会は本事業に先立つ山王遺跡発掘調査の早期着手、早期終了のための方策等について協議を重ね、震災発生から約1年後の平成24年3月26日より山王遺跡八幡地区と多賀前地区の発掘調査（表土・瓦礫除去）に着手した。

2. 発掘調査の方法

（1）基本方針

復興事業に伴う発掘調査の方法等については、文化庁主催の「東日本大震災に伴う埋蔵文化財保護に関する会議」（第1回開催は平成24年6月24日）において、被災3県（岩手・宮城・福島県）で大きな差が生じないよう協議・調整した結果、「本発掘調査の範囲については工事によって壊される範囲のみとする」基本方針が定まり、宮城県においても、宮城県発掘調査基準を弾力的に運用して発掘調査期間の短縮化を図り、復興事業を推進していくこととした。

なお、明文化はされていないが、「遺跡の性格や内容等を踏まえ、各教育委員会の判断により必要に応じて遺構の掘り下げ等の調査、盛り土部分についても遺構の内容を確認する調査を実施することは可」であることも同会議で共有されている。

（2）山王遺跡における具体的な発掘調査方法

三陸沿岸道路の4車線化及び多賀城インターチェンジ建設事業は、国により復興事業に位置づけられたため、山王遺跡多賀前地区・八幡地区の発掘調査の実施に当たっては、上記方針を踏まえ、調査の迅速化を図った。

山王遺跡多賀前地区における三陸沿岸道路（仙塩道路）4車線化工事は、既存の2車線道路（橋脚構造）の西側に2車線を増設する工事であるため、工事により壊される橋脚部（約12m四方）が本発掘調査の対象となった。また、橋脚間については、基本的に遺構が保存されるため本発掘調査は不要となるが、

山王遺跡多賀前地区においては、これまでの調査により古代町並みを形成する上で基準となる東西大路ほかの道路跡や国司館等の重要な遺構が多数発見されていることから、工事に影響が生じない範囲で遺構の内容を確認する調査を実施した。

山王遺跡八幡地区では三陸沿岸道路（仙塩道路）4車線化工事（橋梁方式）及び多賀城インターチェンジ建設工事が施行される。4車線化部の調査方法は前述の多賀前地区と同様であるが、インターチェンジのループ部分については、基本的に盛り土構造であることやループ内部の事務所等建築物も基本的に基礎掘削が遺構面に及ばないことが設計上確認されたため、ループ部、ループ内部については遺構の内容を確認する調査までに止めた。ただし、料金所については一部下層（山王遺跡のV層）付近まで基礎掘削が及ぶ構造であったことから、その部分について本発掘調査を実施した。

なお、多賀城インターチェンジのループ部分の盛り土厚は最大10m程度で、通常はその土圧により下層（山王遺跡の場合はV・VII層）の遺構が壊されると判断されるため本発掘調査の対象としているが、今回の工事では軽量盛り土工法（土の代わりに工業用発泡スチロール様の部材を多用した工法）を採用し、計算上は下層の沈下がほとんど生じないことが確認できたため、本発掘調査の対象とはせず、遺構の内容を確認する調査に止めた。

また、事業者とは橋脚下部工事受注業者を交えて当課担当班長、現場担当者との間で適宜打ち合わせを行い、発掘作業の進捗状況や現場工事の予定など協議した。そして、6月26日の打ち合わせでは、6月3日付け「東日本大震災の復興事業に伴う埋蔵文化財の取り扱い（通知）」に基づき、山王遺跡の発掘調査を復興事業の取り扱いとし、原則として掘削される部分（橋脚等）のみ本発掘調査を実施することにしたことを事業者に説明した。ただし、多賀前地区では弥生時代中期（楕円形式期）の遺物包含層が検出される可能性は低いこと、古墳時代前期の水田域のみを対象とした調査は旧調査成果と宮城県発掘調査基準に照らして不要であることから、多賀前地区では北端部の橋脚P71と南端部の橋脚P54における弥生時代中期遺物包含層の有無を確認するための調査が必要であるとした。

さらに、10月2日の打ち合わせで、弥生時代中期（楕円形式期）の第VII層調査については、山王遺跡多賀前地区北端部の橋脚P71とこの北の山王遺跡伏石地区的橋脚P84でまず行うこととし、その調査結果をみて伏石地区と多賀前地区的間の橋脚P72～P83間、多賀前地区的橋脚P70以南の本発掘調査の取り扱いを判断することにした。また、橋脚部の調査は地盤強度を保つため、フーチング（直径1.2mの杭掘削を行う橋脚部掘削底面）の底面までとし、それ以下に掘削が及ばないよう十分に注意しながら、各橋脚部での本発掘調査を実施することにした。

橋脚P71のVII層までの本発掘調査については10月9～12日を行ったが、弥生時代中期（楕円形式期）の遺物包含層や遺構は検出されなかったため、橋脚P70以南でのVII層を対象とした橋脚部下層の本発掘調査は行わないことにした。

（3）調査体制の強化

復興事業に伴う発掘調査を迅速に進めるに当たり、宮城県教育委員会では他県市から派遣職員の応援を得て調査体制を強化している。平成24年度は17名（上半期9名・下半期17名）、平成25年度は24名が派遣されているが、山王遺跡においても各年最大10名程度が多賀前地区または八幡地区の

調査に携わり、復興事業に伴う発掘調査（以下、復興調査）の推進に大きな戦力となった。また、県教育委員会内においても、東北歴史博物館と多賀城跡調査研究所から毎年計3名の調査協力が得られている。

3. 報告書の作成方針について

復興調査に係る報告書の作成方針等については、主に平成25年度の「東日本大震災に伴う埋蔵文化財保護に関する会議（第16回～第19回）」において調整が図られてきた。最終的に3県で多少の違いは認められこととなったが、宮城県では報告書作成を含めた復興調査を早期に終了させるため、「復興調査に限り報告書の内容を必要最小限に止める」方針を定め、平成26年2月7日（金）に県内各市町村教育委員会を対象とした「復興調査に係る連絡調整会議」において県教育委員会がこの方針を説明した。これに対し各教育委員会から賛同を得たため、平成26年度以降に刊行する復興調査に係る報告書については、基本的にこの方針に基づき作成することとなった。

ただし、この方針は本報告書を作成し始めた平成24年12月には十分な結論が得られていなかったため、本報告書の作成に当たっては、一部、遺構の説明・遺物提示等で簡略化を図った部分もあるが、ほぼ通常時の作成方法となっている。

第2章 遺跡の概観

1. 遺跡の位置・地理的環境

山王遺跡は、宮城県仙台市の中心部から北東へ約10km、多賀城市街の北西部に所在する。古代の陸奥国府である特別史跡多賀城跡の南～南西部前面、標高約2～3mの水田地帯に位置する。東西約2.1km、南北約1.0km、総面積約2.1km²にも及ぶ広大な遺跡で、縄文・弥生・古墳・古代・中世にまたがる複合遺跡である。三陸沿岸自動車道仙塩道路東側に隣接する市川橋遺跡は、本遺跡と時期を同じくする複合遺跡である。山王・市川橋遺跡は一連の複合遺跡で、三陸沿岸自動車道仙塩道路の西側を山王遺跡、東側を市川橋遺跡と呼んで登録しているにすぎない。山王・市川橋遺跡の中心部をJR東北本線が東西に横断し、遺跡の境を三陸沿岸自動車道仙塩道路が北西～南東に縱断する。また、遺跡の北側では東西方向に仙台市と塩釜市を結ぶ県道（都市計画道路）泉～塩釜線が通る。

山王・市川橋遺跡は、弥生時代から中世まで長期間にわたって断続的に営まれ、一般的には古墳時代～奈良・平安時代を中心とした遺跡として知られている。特に、古代には陸奥国府多賀城跡と密接な関係を持ち、東に隣接する三陸沿岸自動車道仙塩道路東側の市川橋遺跡とともに、多賀城跡城外の方格地割に基づいた街並みを形成していたことが明らかになっている（菅原弘樹 1993a・1993b、千葉孝弥 1993・1994a・1994b・1995、宮城県教育委員会 1995・1996a・1996b・1997・1998・1999・2001・2004・2007・2009、多賀城市教育委員会 1999・2001～2004・2006～2008、武田健市 2010a・b、村松稔 2013）。この一帯は、三陸沿岸自動車道仙塩道路建設以前には大部分が水田として利用されていたが、その後の城南地区など大規模宅地造成や道路整備に伴い、その景観は大きく変貌しつつある。また、平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震後には、凍結されていた多賀城インターチェンジ建設事業、三陸沿岸自動車道仙塩道路4車線化事業、県道（都市計画道路）泉～塩釜線4車線化事業が復興関連事業として再開された。これら道路網が再整備されるに伴い、今後さらに周辺地域を含めた開発が進むものとみられる。

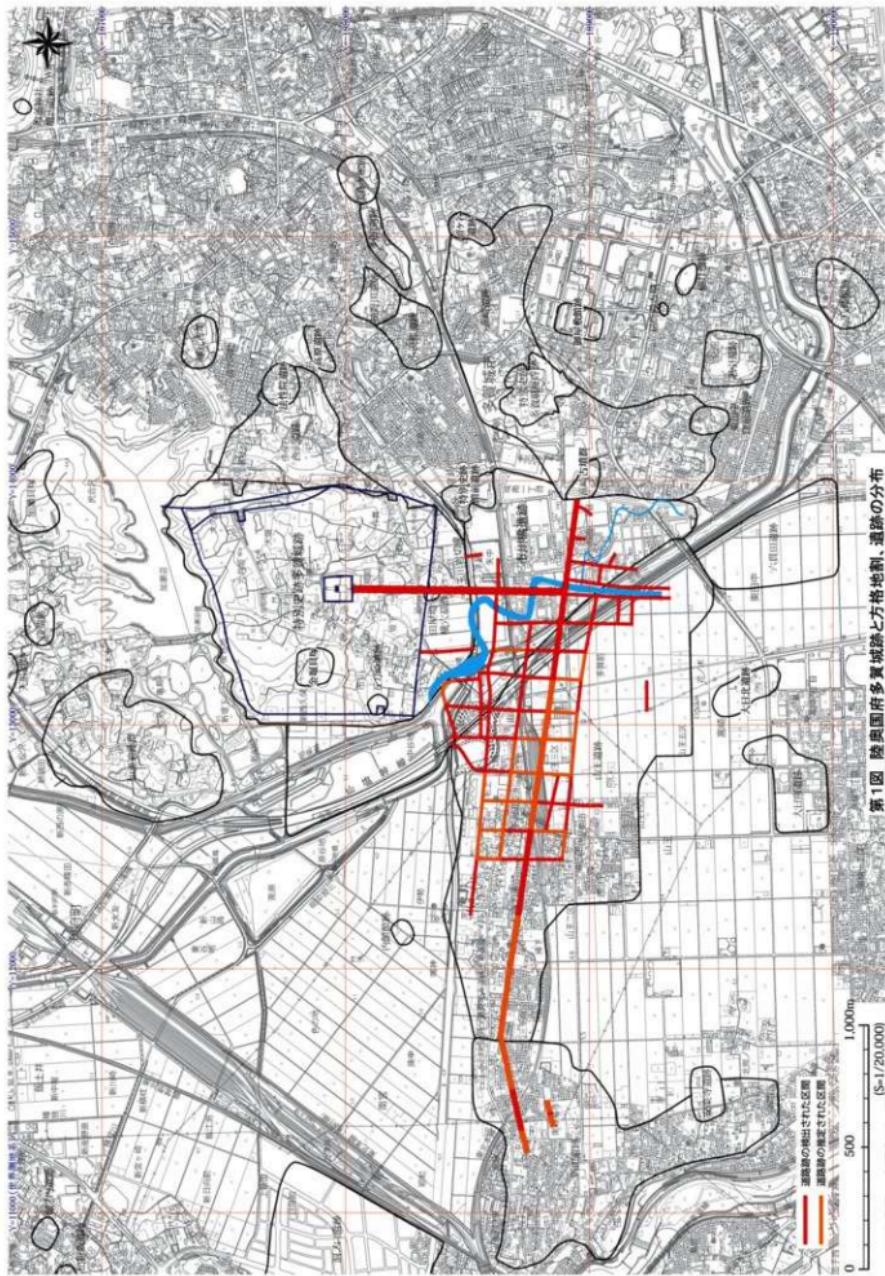
地形的にみると、遺跡は仙台平野の北端部、砂押川左岸の丘陵地から沖積地への移行する低地上に立地している。遺跡の北～東部にかけては陸前丘陵から派生する、緩やかな起伏を持つ多賀城台地が広がる。この多賀城台地は標高50mほどで、東の塩釜・松島方面へと高度を緩やかに上げながら連続している。この台地の南西端には陸奥国府多賀城跡が所在する。本遺跡東側の市川橋遺跡を南北に縱断した砂押川は、本遺跡ではさらに南流し、低平な沖積地が南に広がっている。

2. 歴史的環境

本遺跡周辺には奈良・平安時代の陸奥国府多賀城跡をはじめとする多数の遺跡がある（第1図）。本遺跡を含む近年の調査成果から弥生時代～近世までの周辺の様子が次第に明らかになってきている。その概要は以下のとおりである。

（1）弥生時代

周辺の丘陵上ではいまのところ当該期の遺跡は認められていないが、多賀城跡五万崎地区で弥生時代中期の舟形圓式と十三塚式の土器と石包丁が出土しており、この付近に集落の存在が想定される。



第1図 陸奥国府多賀城跡上方格地網、道路の分布

遺跡名	種別	時代	遺跡名	種別	時代
特別史跡多賀城跡	園庭	奈良・平安	田坂加穂穴墓群	横穴墓	古墳後期
市川城跡	集落 都市	石器時代・繩文・古墳・奈良・平安	金剛山遺跡	貝塚	縄文前・後期
山王遺跡	集落	都市 墓地	西沢遺跡	集落	古代・中世
特別史跡多賀城庵摩寺跡	寺院	奈良・平安	法住院跡	聚落 寺院	古代
高畠遺跡	集落 市街	奈良・平安・中世	冠元山地	円墳	古墳後期
(特別史跡)船岡遺跡	古墳	古代・中世	高瀬遺跡	散在地	古代・中世
新田遺跡	集落 墓地	縄文・古墳・奈良・平安・中世	小沢山遺跡	散在地	古代・中世
内折御跡	城跡	中世	細井川遺跡	散在地	奈良・平安
化粧塗跡	城跡	中世	野田川遺跡	散在地 墓地	古代・中世
船ノ谷遺跡	城跡	中世	久作山遺跡	城跡	古代・中世
大羽遺跡	散布地	古代	留之谷遺跡	城跡	古代・中世
彦澤跡	散布地	古代	高崎山跡群	円墳	古墳後期
佐藤跡	散布地	古代			
加瀬山遺跡	貝塚	縄文中期・古代	御壁山遺跡	城跡	中世
加瀬山遺跡群	散在地	縄文中期・古代	福浦古墳	円墳	古墳後期
洞ノ口遺跡	集落 城跡 水田跡	奈良・平安・中世・近世	東岸中庄前遺跡	散在地 墓地	古代・中世
安楽寺遺跡	寺院	古代末～中世	志引遺跡	散在地 墓地	縄文・繩文・古代・中世
大日山遺跡	集落 墓地	平安・中世	桜井船跡	散在地	古代
大日山遺跡	散布地	古代	八幡原跡	散在地 墓地	古代・中世
六貫山遺跡	散布地	古代	樺深山社 岩内遺跡	散在地 墓地	縄文・繩文
五万松遺跡	墓	縄文前・中期・奈良・古墳前期			

表1 第1回掲載の遺跡

また、沖積地に立地する山王遺跡八幡地区（平成4・5年度に発掘調査されたI区西半部からII区東半部に集中、宮城県教育委員会1994b）では、弥生時代中期の楕形団式の遺物を含む黒色泥炭層が標高1.8～1.9m、地表下1.8～2.0mの深さで検出された。また、その南東30～130mの市川橋遺跡八幡地区では、同時期の黒色泥炭層が標高1.2～1.4m、地表下3.3mの深さで検出され、東西31m、南北24mの範囲に弥生時代中期の楕形団式の遺物包含層が形成され、遺物集中箇所の北側の低地に溝を巡らしていた（宮城県教育委員会2009）。この他、弥生時代中期以前の水田跡が山王遺跡八幡地区（多賀城市調査のJ区）で検出され（多賀城市教育委員会1997）、新田遺跡後地区では溝跡や土器などが発見されている。

しかし、これまで近辺では竪穴住居跡などは検出されず、集落跡は未発見である。山王遺跡八幡地区や新田遺跡での弥生時代中期（楕形団式期）の遺物包含層や構造は現地表下2m前後にであることから、この深度の沖積地の微高地上、山王遺跡八幡地区内に弥生時代中期の集落跡があると想定されている。

（2）古墳時代

古墳時代前期には、本遺跡の北から東の丘陵上や西側の自然堤防上の山王遺跡に集落や墓域が営まれていたことが確認されている。中期になると、本遺跡の西側に位置する新田遺跡後地区、山王遺跡東町浦・西町浦地区、山王遺跡八幡地区などで竪穴住居跡が発見され、自然堤防上に集落が存在したことが明らかになった。八幡地区では鍛冶工房跡が確認されている。後期（栗圓式期）になると山王遺跡八幡・伊勢地区や館前地区、新田遺跡後地区などでは旧河川に挟まれた微高地上からさらに多くの竪穴住居跡が発見され、大規模な集落が営まれていることが明らかになった。なかでも山王遺跡八幡地区的旧河川跡には、仏具である柄香炉、ト骨・斎串など後の律令的祭祀と共に通する先駆的な祭祀遺物、在地産の須恵器が定量含まれていた。このことと集落内外を区画する溝の存在から、この地域の基幹的集落とみられている（宮城県教育委員会1994a・b）。この拠点的集落の性格については、6世紀後半頃～7世紀前半頃にかけての服属蝦夷の拠点的集落跡であり、郡山遺跡I期官衙成立期の7世紀中頃に他所に移住されたとみられる（柳澤和明2010b）。

また、古墳は横穴式石室をもつ稻荷殿古墳、多賀城跡外郭南門西側の外郭南辺築地塙跡の下層で発

見された田屋場横穴墓群がある。後者には山王・市川橋遺跡の栗圓式期の拠点的集落首長墓とみられる（宮城県多賀城跡調査研究所 1986・2002、柳澤和明 2010a）。

（3）奈良時代

神亀元年（724）に陸奥国支配の根拠地である陸奥国府多賀城が本遺跡北側の丘陵上に築かれる。多賀城跡は一辺 670 ~ 1000m の不整な方形の範囲を築地塀で囲み、ほぼ中央に政庁が置かれ、周囲には実務官衙が配置されている（宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 1982）。外郭南辺・東辺・西辺には門が開かれており、南門一政庁間や東門一西門間の道路跡も明らかになっている（後藤秀一・柳澤和明 1991）。また、外郭南門の傍らには多賀城碑があり、天平宝字 6 年（762）に多賀城を修造した藤原朝貢の顕彰碑とみられている（安倍辰夫・平川南編 1989）。

一方、周辺では南東約 1.2km の丘陵上に多賀城付属寺院の多賀城庵寺跡があるが、他には遺構が少なく、本遺跡や市川橋遺跡、新田遺跡、高崎遺跡で竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが散在的に検出されているにすぎない。ただし、本遺跡や市川橋遺跡では多賀城跡外郭南門跡から南に延びる南北大路跡や外郭南辺に並行する東西大路跡が確認されており、南北大路の造営は奈良時代半ば以前に遡る可能性も考えられている（宮城県教育委員会 2001a）。また、山王遺跡八幡地区では漆作業関連遺物や、鉄滓・炉壁などが出土しており、漆や鍛冶の工房の存在が考えられている（多賀城市教育委員会 1997、宮城県教育委員会 1997）。

（4）平安時代

多賀城跡の南面一帯の広い範囲で、多数の遺構がみられるようになる。特に本遺跡や山王遺跡には、幅 23 m の南北大路や幅 12 m の東西大路を基幹道路として、多賀城跡政庁跡一外郭南門跡中軸線や外郭南辺築地塀跡を基準とする東西・南北道路が移盤目状に配された約 1 町四方の方格地割が施工されている。その範囲は東西約 1.5km、南北約 0.8km にも及ぶ（千葉孝弥 1993・1994a・1994b；宮城県教育委員会 1996a・b、第 1 図）。

方格地割は南北大路跡の西側を中心に検出されていたが、近年の発掘調査では南北大路跡の東側にも広がることや、南北大路が東西大路との交差点より南には造られなかったことが明らかになってきた（多賀城市教育委員会 2001・2002・2003・2004a・2004b）。

方格地割内は遺構の密度が高く、道路と方向を揃えた掘立柱建物跡、塙跡、区画溝跡、井戸跡などがみられる。遺物も土師器・須恵器の他に施釉陶器や硯が多くみられ、貿易陶磁器や石帶も出土するなど、一般集落跡とは様相が異なる。このうち南北大路跡・東西大路跡交差点の北東区画では、桁行 11 間、梁行 2 間の南北棟 2 棟が 2 列に配置されたとみられる城外で最大級の建物群が検出され、城外に置かれた官衙として位置付けられている（多賀城市教育委員会 1999・2001）。また、東西大路に面する山王遺跡千刈田地区・多賀前地区的区画には、廂付きの大規模な掘立柱建物跡が発見され、貿易陶磁器や多量の施釉陶器が出土したことから、国司など上級官人の館跡と推定されている（多賀城市教育委員会 1991・1992、宮城県教育委員会 1996b）。

一方、東西大路を離れた区画では、小規模な掘立柱建物跡が主体となり、鍛冶や漆作業に使用したとみられる遺物が出土することなどから、多賀城に関わる作業域やそれを支えた人々の居住域とみら

れている。

方格地割が確認されていない区域は一般に遺構は少なく、水田などの耕作域となっているが、一部には重要な遺構もある。館前遺跡には四面廻付大型建物跡を中心とする建物群があり、国司など上級官人の館跡と推定されている（多賀城市教育委員会 1980）。山王遺跡東町浦地区、高崎遺跡井戸尻地区では、万燈会等の仏教行事に係わる土器集積遺構が発見され、国府主催の仏教儀式が行われた可能性も指摘されている（多賀城市史編纂委員会、1991）。また、山王遺跡中谷地地区では 100 基以上の木棺墓・土壙墓・横位合口土器師襄柏墓からなる大規模な墓域を確認し（宮城県教育委員会 2003）、貞觀 11 年（869）陸奥国大地震（以下、「貞觀地震」と適宜略称する）を契機に形成された集団墓地とみられている（柳澤和明 2012a）。しかし、こうした重要な遺構は少なく、山王遺跡多賀前地区や市川橋遺跡中谷地地区の方格地割の外側は水田など耕作域となっている（宮城県教育委員会 1996a・1996b・1997）。

このように、平安時代の多賀城跡の南側には南北大路・東西大路を基準とした方格地割が展開し、多賀城とその関連施設に係わる人々が居住する古代の都市的な空間が広がっていた。それは陸奥国府・多賀城の整備・充実とも連動するものであり、律令的支配の拡大・整備の進展が背景にある。したがって、10 世紀後半頃に多賀城が衰退するとともに周辺も次第に荒廃し、衰退をともにしたとみられている。

（5）中世

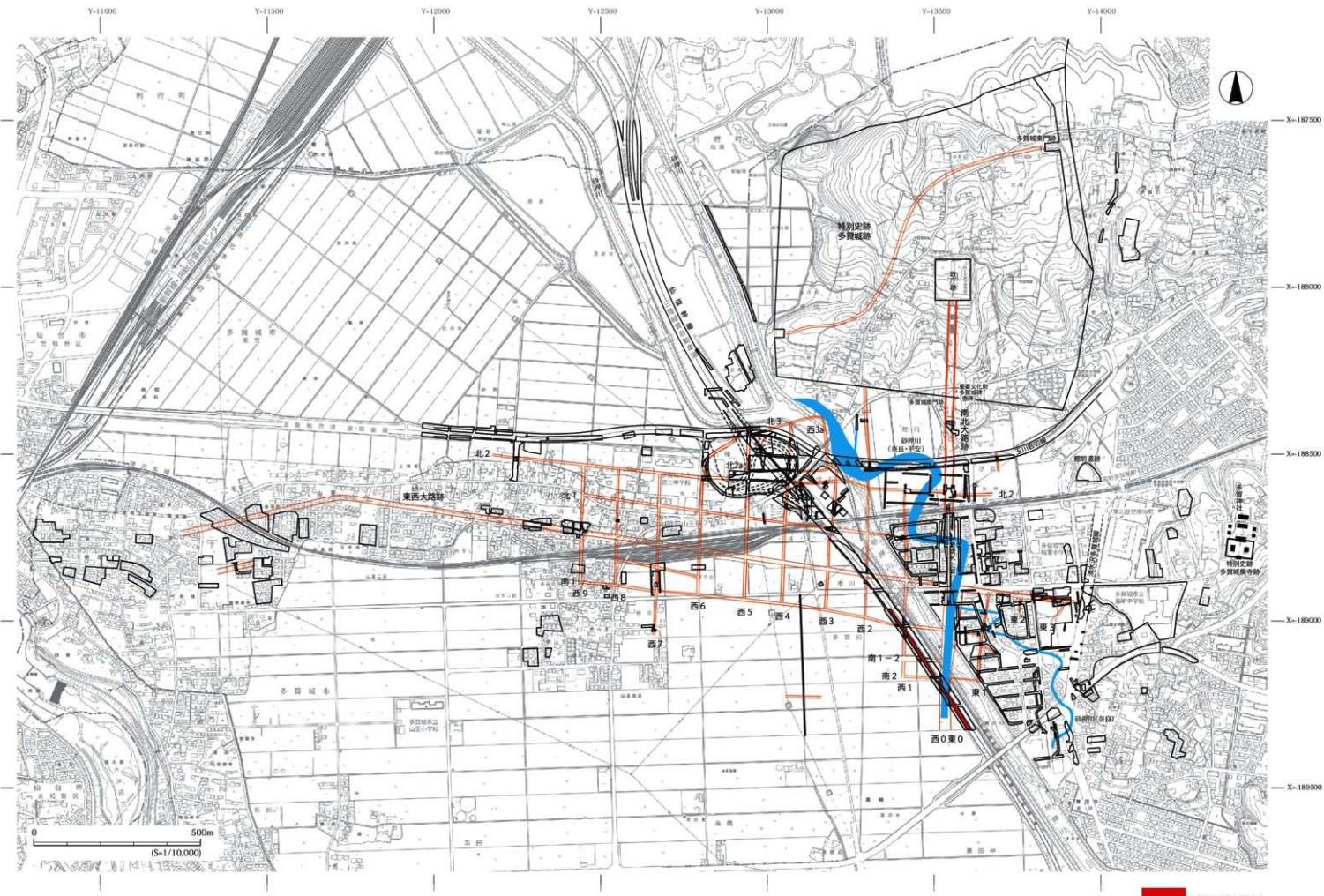
新田遺跡寿福寺地区で、大溝で区画された東西約 200 m、南北約 300 m の大規模な屋敷跡が発見された。敷地内には大小の建物跡が計画的に配置され、施釉陶器や中国産陶磁器などの高級品が多量に出土したことから、12 世紀から 16 世紀後半頃にかけての上級武士階級の居館跡と推定されている（多賀城市教育委員会、1990）。また、洞ノ口遺跡でも周間に溝を巡らせた屋敷跡があり、山王遺跡八幡・伏石地区でも同様の屋敷跡が発見されていることから、七北田川左岸の自然堤防上に多くの屋敷跡が隣接して存在したものと考えられている（宮城県教育委員会 1997）。

こうした屋敷跡は洞ノ口遺跡から市川橋遺跡まで連続的に連なる様子が古地図などから知られる。これらの屋敷跡の居住者については、中世のこの付近一帯が留守氏の支配する「高用名」と「南宮庄」に含まれる地域であることから、留守氏に関わりのある武士層が想定されている（宮城県教育委員会、1990）。

なお、多賀城廃絶後の 12 世紀半ば以降、文献上に「多賀国府」の名がみられるようになる。その中枢部の比定地としては、市川橋遺跡の西約 2 km にある洞ノ口遺跡が有力視されており、周辺には新田遺跡、鴻ノ巣遺跡、東光寺遺跡、岩切城跡など中世の遺跡が密集して認められ、近辺には武士の屋敷群や寺院、市場などが配されていたとみられている（千葉孝弥 1997）。しかし、発掘調査を通じて中世の多賀国府の中核であることを示す確証はまだ得られていない。

（6）近世

16 世紀末、山王遺跡が所在する山王・南宮一帯は伊達家の組頭である成田氏の采邑となった。塩釜街道沿いには成田氏配下の足軽達の屋敷をはじめとする住宅が建ち並び、現在に通じる町並みが形成されていったとみられる。山王遺跡西町浦地区では、酒造業を営んだ記録が残る賀川家の宅地が調査



第2図 多賀城跡の方格地割と既調査区・今年度調査区の位置

No	遺跡名	区名	小区	調査面積	調査原因	調査年度	調査主体	報告書	備考	
1	山王遺跡	八幡地区	A～D区	13,000 m ²	多賀城インター建設事業	平成元年～3・6年度	宮城県教育委員会	県第161・174集	砂押川以西、東北本源以北。鉄道皇室御苑以北。	
2	山王遺跡	八幡地区	E・F・I・J・N区	14,400 m ²	多賀城インター建設事業	平成2～5年度	多賀城市教育委員会	市第27・30・45集		
3	山王遺跡	伏石地区	G区	800 m ²	多賀城インター建設事業	平成5・6年	宮城県教育委員会	県第161・174集		
4	山王遺跡	伏石地区		1,000 m ²	多賀城インター建設事業	平成24年度	宮城県教育委員会	未報告		
5	山王遺跡	八幡地区	A・J・L・M・N区	12,000 m ²	多賀城インター建設事業	平成25年度	宮城県教育委員会	未報告		
6	市川橋遺跡	八幡地区	L区	9,000 m ²	多賀城インター建設事業	平成24・25年度	宮城県教育委員会	未報告		
7	山王遺跡	多賀前地区		17,500 m ²	三陸鐵道自動車道（仙台道路）建設事業	平成4～6年度	宮城県教育委員会	県第167・170・171集		東北本源以南・以北。砂押川右岸堤防西側約4m。
8	山王遺跡	多賀前地区		6,060 m ²	三陸沿岸道路仙台道4車線化事業	平成24年度	宮城県教育委員会	本書		
9	山王遺跡	八幡地区	I～N区	5,000 m ²	郡山計画道路玉川町切削建設事業	平成4～5年度	宮城県教育委員会	県第162集	砂押川以西、東北本源以北。鉄道皇室御苑以北。	
10	山王遺跡	八幡地区	I～N区		郡山計画道路玉川町切削4車線化事業	平成25年度	宮城県教育委員会	未報告		
11	山王遺跡	町地区		7,100 m ²	郡山計画道路玉川町切削建設事業	平成7・8年度	宮城県教育委員会	県第175集		
12	山王遺跡	伊賀地区		5,900 m ²	郡山計画道路玉川町切削建設事業	平成14・15年度	宮城県教育委員会	県第198集		
13	市川橋遺跡	郡山地区	六ヶ所地区	7,505 m ²	郡山計画道路玉川町切削建設事業	平成7～10年度	宮城県教育委員会	県第184集		砂押川以東。東北本源以北。鉄道皇室御苑以東。
14	市川橋遺跡	郡山北地区	伏山地区	294 m ²	郡山計画道路玉川町切削建設事業	平成16・17年度	宮城県教育委員会	県第209集		
15	市川橋遺跡	伏石地区		3,616 m ²	郡山計画道路玉川町切削建設事業	平成18年度	宮城県教育委員会	県第218集		砂押川以西。東北本源以北。鉄道皇室御苑以西。
16	市川橋遺跡	八幡地区	A区	620 m ²	郡山計画道路玉川町切削建設事業	平成19年度	宮城県教育委員会	県第218集		砂押川以西。東北本源以北。鉄道皇室御苑以西。
17	市川橋遺跡	伏石地区	B区	240 m ²	郡山計画道路玉川町切削建設事業	平成19年度	宮城県教育委員会	県第218集	砂押川以西。東北本源以北。鉄道皇室御苑以西。	
18	市川橋遺跡	砂押川地区	C1～C3区	285 m ²	郡山計画道路玉川町切削建設事業	平成19年度	宮城県教育委員会	県第218集	砂押川右岸堤防上。東北本源以北。鉄道皇室御苑以北。	
19	市川橋遺跡	中谷地区		7,500 m ²	砂押川流域基幹河川改修事業（若吉川濱水造工事）	平成12～14年度	宮城県教育委員会	県第193集	東北本源以北。郡山市役所・砂押川中州。	
20	市川橋遺跡	高寺地区	B区	2,500 m ²	城南土地地区画整理事業	平成10年度	多賀城市教育委員会	市第60集	砂押川以東。東北本源以南。鉄道皇室御苑以東。	
21	市川橋遺跡	高寺地区	C区	16,841 m ²	城南土地地区画整理事業	平成11～14年度	多賀城市教育委員会	市第70集		
22	市川橋遺跡	中川・高崎・浮島地区	A・D区	33,630 m ²	城南土地地区画整理事業	平成10～14年度	多賀城市教育委員会	市第75集		
多賀城市教育委員会（千葉孝介・石本敬編）	1991	「山王遺跡－第12次調査概要（仙塩道路建設に伴う八幡地区調査）」	（多賀城市文化財調査報告書第27集）							
多賀城市教育委員会（千葉孝介編）	1992	「山王遺跡－第12次調査概要（仙塩道路建設に伴う八幡地区調査）」	（多賀城市文化財調査報告書第30集）							
多賀城市教育委員会（千葉孝介・跨木孝一編）	1997	「山王遺跡－1仙塩道路建設に伴う八幡地区調査報告書」	（多賀城市文化財調査報告書第45集）							
多賀城市教育委員会（千葉孝介編）	2001	「市川橋遺跡－城南土地地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅰ」	（多賀城市文化財調査報告書第60集）							
多賀城市教育委員会（千葉孝介・跨木孝一編）	2003	「市川橋遺跡－城南土地地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ」	（多賀城市文化財調査報告書第70集）							
多賀城市教育委員会（千葉孝介・跨木孝一編）	2004	「市川橋遺跡－城南土地地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅲ」	（多賀城市文化財調査報告書第75集）							
宮城県教育委員会（原原弘樹ほか）	1992	「山王遺跡－第一堀田道路認定問題の遺跡 平成3年度発掘調査概要」	（宮城県文化財調査報告書第147集）							
宮城県教育委員会（原原弘樹・丹波義典ほか）	1994a	「山王遺跡－第一堀田時代の崩落地帯に係る発掘調査概要」	（宮城県文化財調査報告書第161集）							
宮城県教育委員会（後藤秀一・村山昇一編）	1994b	「山王遺跡八幡地区の調査－猿道基盤層に係る発掘調査報告書Ⅰ」	（宮城県文化財調査報告書第162集）							
宮城県教育委員会（原原弘樹ほか）	1995	「山王遺跡II・多賀前地区遺跡調査」	（宮城県文化財調査報告書第167集）							
宮城県教育委員会（原原弘樹ほか）	1996a	「山王遺跡Ⅰ・多賀前地区遺物編」	（宮城県文化財調査報告書第170集）							
宮城県教育委員会（原原弘樹・佐藤憲幸ほか）	1996b	「山王遺跡Ⅰ・多賀前地区考察編」	（宮城県文化財調査報告書第171集）							
宮城県教育委員会（原原弘樹ほか）	1997	「山王遺跡Ⅱ」	（宮城県文化財調査報告書第174集）							
宮城県教育委員会（村田晃一編）	1998	「山王遺跡町地区の調査－猿道基盤層に係る発掘調査報告書Ⅰ」	（宮城県文化財調査報告書第175集）							
宮城県教育委員会（古野武編）	2004	「山王遺跡Ⅰ・整地Ⅱの調査－猿道・塙塗・塙塗塙塗に係る発掘調査報告書Ⅳ」	（宮城県文化財調査報告書第198集）							
宮城県教育委員会（佐久間光平・古川一明ほか）	2001a	「市川橋遺跡の調査－猿道・塙塙塙塙に係る発掘調査報告書Ⅴ」	（宮城県文化財調査報告書第184集）							
宮城県教育委員会（村田晃一編）	2001b	「山王遺跡八幡地区的調査－猿道・塙塙塙塙に係る発掘調査報告書VI－古墳時代後期SD0505B印伝編」	（宮城県文化財調査報告書第186集）							
宮城県教育委員会（大和幸生・佐藤貴史編）	2007	「市川橋遺跡の調査－猿道・塙塙塙塙に係る発掘調査報告書VII」	（宮城県文化財調査報告書第209集）							
宮城県教育委員会（柳澤和明・青木幸弘編）	2009	「市川橋遺跡の調査－伏石・八幡地区－猿道・塙塙塙塙に係る発掘調査報告書VIII」	（宮城県文化財調査報告書第218集）							

表2 山王遺跡・市川橋遺跡における大規模な本発掘調査一覧

されている（多賀城市史編纂委員会、1991）。また、山王遺跡町地区の調査でも18世紀後半～19世紀頃の屋敷地の様子が明らかとなっている（宮城県教育委員会、1998；多賀城市教育委員会、2006）。その内部は南北に敷地割りされ、街道に面した南の敷地が建物群と素掘りの井戸跡などで構成された居住域、北の敷地が素掘りの井戸跡や溝、土壌により疎らに構成されていた。また、山王遺跡伊勢地区でも溝で仕切られた屋敷地の一部が調査され（宮城県教育委員会、2004）、山王遺跡八幡地区では墓跡がみつかっている（宮城県教育委員会 1997）。

また、本遺跡周辺の丘陵上には、多賀城跡作貫地区で発見された塩釜神社神官の屋敷跡、高崎丘陵上の留ヶ谷遺跡や高崎遺跡で発見された屋敷跡などがある（桑原滋郎・高野芳宏・千葉孝弥 1993）。

3. 本遺跡周辺におけるこれまでの調査

本遺跡の周辺において、平成元年度（1989）より大規模な本発掘調査・確認調査が毎年継続的に行われてきた。その調査原因をみると、①多賀城インター建設事業、②三陸沿岸道路仙塩道路建設事業、③都市計画道路泉一塩釜線建設事業、④砂押川広域基幹河川改修事業（名古曾川遊水池造成工事）、⑤城南土地区画整理事業、⑥三陸沿岸道路 仙塩道路4車線化事業、⑦三陸沿岸道路仙塩道路4車線化事業、の5つがある。このうち①は宮城県教育委員会・多賀城市教育委員会、②・③・④は宮城県教育委員会、⑤は多賀城市教育委員会が本発掘調査を担当し、それぞれ発掘調査報告書を刊行してきている（表2）。この他、個人住宅や商店など民間開発事業によるものも多い。これらは多賀城市教育委員会が対応している。

その結果、前節のように本地域における弥生時代から近世にわたる様相とその変遷が次第に明らかとなってきてきた。その成果は、これら大規模な発掘調査が行われるようになった平成元年（1989）以前と比べ、多大なものがある。しかし、その反面、大規模な発掘調査によって遺跡の多くが失われてきたことも事実である。

また、平成23年3月11日の東日本大震災の発生を契機に、事業凍結されてきた多賀城インター建設事業、三陸沿岸道路仙塩道路4車線化事業、都市計画道路4車線化事業もそれぞれ復活し、平成24年度より宮城県教育委員会が復興関連事業に伴う発掘調査を実施してきている。今回報告する山王遺跡多賀前地区の発掘調査もその一つである。

第3章 調査の方法と経過

1. 調査の方法

三陸沿岸道路仙塩道路は、暫定2車線で平成9年に供用開始されたものの、4車線化事業は多賀城インターチェンジ建設事業、都市計画道路泉一塩釜線4車線化事業（県事業）とともに凍結されていた。ところが東日本大震災の発生を受け、東日本の太平洋沿岸部を縱貫する高速道路が大災害の復旧・復興需要に対応する最重要幹線道路に改めて位置付けられるようになった。この動きを受け、凍結されていた三陸沿岸道路仙塩道路4車線化事業も、多賀城インターチェンジ建設事業、都市計画道路泉一塩釜線4車線化事業とともに復興関連事業として復活し、既存の仙塩道路の西側に2車線分を早急に拡幅することになった。

今回の発掘調査は、多賀前地区で拡幅される仙塩道路2車線部分のうち、未調査の長さ約440m、幅約10mを対象に、18基の橋脚箇所（P 54～71）を本発掘調査、橋脚間を確認調査したものである（第3図）。

東側の仙塩道路本線2車線部分は、第1～3次発掘調査（以下、「旧調査」と略称する）で橋脚箇所を本発掘調査、橋脚間を確認調査し、西側の側道箇所は第3次調査で本発掘調査し、遺構編、遺物編、考察編の発掘調査報告書3冊を刊行している（宮城県教育委員会 1995・1996a・1996b）。旧調査ですでに両側を発掘調査していたため、今回の発掘調査はその間の幅狭い2車線部分を発掘調査することとなった。そのため、今回の発掘調査の遂行、報告書の事実記載及び考察は、旧調査の成果を受けた形で行うこととした。

旧調査は、宮城県教育厅文化財保護課で電子データでの遺構実測、報告書図面作成を実施する以前の発掘調査であり、今回の第4次発掘調査に係る平面図作成、報告書図面作成は電子データで実施した。旧調査と今回の発掘調査平面図を合成して全体平面図を作成するためには、旧調査に係る平面図をスキャナーで読み込んで張り合わせて全体図を作成し、これを再トレースする必要があった。再トレースは、（株）Adobe 製の Illustrator CS 5.0 で行った。また、旧調査の平面図測量は、山王遺跡測地系（日本測地系第X系の X = -188880.000, Y = 13230.000 を座標原点とした東西・南北基準線をもとに、3m方眼を設定して行った測地系）で行い、この座標原点からの東西・南北方向の距離により行っていた（たとえば山王遺跡座標原点 SOEO から南へ450m、東に486m離れた点は S450E486 と表記）。

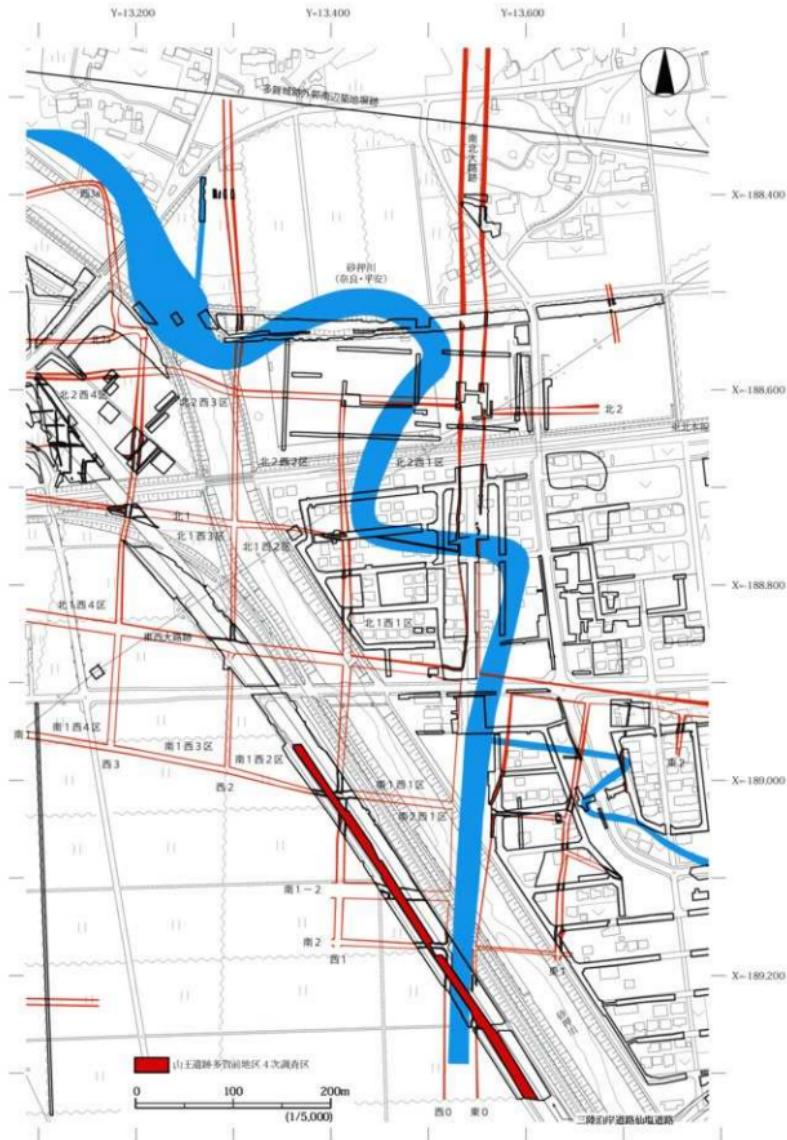
今回の山王遺跡多賀前地区第4次発掘調査で検出した遺構の平面図測量には、以下の東日本大震災後の世界測地系第X系基準点3点（施工工事使用）を測量原点とし、（株）CUBIC 製の発掘調査関連測量専用ソフト「電子平板 遺構くん」と（株）ソキア・トブコン製の自動追尾トータルステーションを用いて実施した。

① 1級基準点 No. 1-3 X = -188925.580 m, Y=13297.443 m, H=3.302 m

② 2級基準点 No. 2-2 X = -189550.245 m, Y=13497.737 m, H= 3.855 m

③ 3級基準点 No. 3-5 X = -189252.387 m, Y=13497.892 m, H=2.775 m

旧調査と今回の調査の全体平面図を合成するためには、旧調査の全体平面図の山王遺跡測地系をま



第3図 調査区の位置

ず東日本大震災前の世界測地系に座標変換し、その後にこれを東日本大震災後の世界測地系に座標変換する必要があった。山王遺跡測地系から日本測地系への変換には表計算ソフトExcel2010を用い、さらに日本測地系から東日本大震災前の世界測地系への座標変換は、国土地理院がWeb公開している世界測地系移行用座標変換プログラム「TKY2JGD」を用いて行った。

東日本大震災前の世界測地系の平面図を震災後の世界測地系の平面図と合成するには、大きくみて二つの方法がある。一つは震災前に世界測地系の座標値が判明している任意の測量点を震災後の世界測地系で再測量し、これを基準に震災前の平面図を震災後の世界測地系にすらす方法である。もう一つは震災前の平面図における任意の点について、国土地理院Web公開の震災前世界測地系を震災後世界測地系に変換するプログラム「PatchJGD」を用いて座標変換し、これをもとに震災前の図面を全体的にすらす方法である。

今回、発掘調査を実施するにあたり、本線部分の旧調査区西側を幅3m前後重ねて調査区を設定し、旧調査区内で調査終了時に抜き忘れていた3m方眼の測量釘が残されていた場合には、残らず電子平板でその位置を実測するようにした。旧調査の終了時には基本的には測量釘を抜いていたため、地面上に打ち込まれて残っていた旧測量釘は、①S453E486（山王遺跡座標原点SOEOより、南に453m、東に486mの測量釘）、②S450E486（山王遺跡座標原点より南に450m、東に486mの測量釘）、③S450E483（山王遺跡座標原点より南に450m、東に483mの測量釘）、④S447E483（山王遺跡座標原点より南に447m、東に483mの測量釘）の4つであった。いずれも南1西1道路交差点南隣のSX1350西1道路跡路面内に位置し、近接している。

この4つの旧調査測量釘について、前述の世界測地系移行用座標変換プログラム「TKY2JGD」を用いて震災前の世界測地系に座標変換した値と、この測量釘を震災後の世界測地系を用いて電子平板で再実測した値との差をみると、山王遺跡多賀前地区では東西方向では東に3.289～3.309m、南北方向では南に0.993～1.022m、南東に3.444～3.455m地殻変動したことが知られる（表3）。

国土地理院Web公開プログラム「PatchJGD」を用いて、世界測地系移行用座標変換プログラム「TKY2JGD」を用いて座標変換した値を震災後の世界測地系に座標変換すると、「電子平板 遺構くん」で再実測した値よりも南に0.2～3.1cm、東に20.4～22.4cmずれた値を示す（表3）。これは1/100全体平面図で示すと無視できる値なので、「電子平板 遺構くん」で再実測した座標値を基準にして、震災前の測量データを用いた旧調査の平面図を合成することにした。そこで、（株）Adobe製の

	a.日本測地系		b.震災前の世界測地系 TKY2JGDで変換		c.震災後の世界測地系 「遺構くん」再実測		d.震災後の世界測地系 PatchJGDで変換		震災前後の (c-b)差		震災前後の (d-b)差	
	X(南北)	Y	X	Y	X	Y	X	Y	X	Y	X	Y
S 0 E 0	-188880.000	13230.000	-188571.152	12929.902	—	—	-188572.178	12933.402	—	—	1.026	3.500
S453 E486	-189333.000	13716.000	-189024.140	13415.910	-189025.142	13419.209	-189025.164	13419.423	1.002	3.299	1.024	3.513
S450 E486	-189330.000	13716.000	-189021.140	13415.910	-189022.132	13419.219	-189022.163	13419.423	0.993	3.309	1.024	3.513
S450 E483	-189330.000	13713.000	-189021.140	13412.909	-189022.142	13416.209	-189022.164	13416.422	1.003	3.299	1.024	3.512
S447 E483	-189327.000	13713.000	-189018.140	13412.909	-189019.162	13416.199	-189019.164	13416.423	1.022	3.289	1.024	3.513

表3 山王遺跡多賀前地区における3.11超巨大地震後の地殻変動量

Illustrator CS 5.0 を用いて、旧調査区の平面図と今回の発掘調査平面図を合成するにあたり、震災後の世界測地系を用いて再実測した上記 4 つの旧調査測量釘の位置に、旧調査平面図に落としたこの測量釘のポイントを合わせて両者を合成し、山王遺跡多賀前地区における全体平面図を震災後の世界測地系で提示することにした。この合成はほとんど大きな矛盾がなく、行うことができた^(註1)。そして、この合成した全体図をもとに、必要な範囲を切り取って各平面図を作成した。

発掘調査に際しては、随時 1/20 の遺構断面図を手実測で作成した。遺構の写真撮影には 1,200 万画素のデジタルカメラ (Canon EOS 60D) を用い、6 × 7 版カメラも一部用いた。また、無線操縦のラジコン・ヘリコプターによる航空写真撮影 (デジタルカメラ、6 × 7 版カメラ) を委託業務で行った。

2. 調査の経過

今回行った発掘調査は、当初 4 車線で計画されたが建設を凍結していた 2 車線分を発掘調査するものであり、調査着手時には 1 m 前後と分厚い盛土をまず除去する必要があった。このため、平成 24 年 3 月 26 日より南端より北に向けて約 480 m、幅約 10 m 分、計約 4,800m³ の盛土除去を事業者の国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所が開始し、排土を遺跡外に搬出した。盛土除去には調査員が毎日随時立ち合い、5 月 17 日までに終えた。

さらに、盛土除去作業の途中の 4 月 20 日より表土除去を当課が担当して盛土除去と平行して行った。基本的にはこの表土も遺跡外に搬出し、厚さ 50cm 前後ある表土除去を 6 月 5 日までに終えた。

表土除去を終えた南より北に向けて、遺構検出作業を 4 月 24 日より順番に開始した。この作業には 1 日平均すると調査員 5 ~ 6 名、臨時職員 30 名前後があたった。遺構検出は古代（奈良・平安時代）の地山面である IV 層上面で行った。遺構検出の過程で、随時ブロック写真撮影と電子平板による平面実測を行った。

発掘調査は 12 月末までの予定で、8 月の段階では掘立柱建物跡の配置等はまだ不明確な点が多かつたが、道路跡（南 1 道路跡、西 1 道路跡、南 1 ~ 2 間道路跡、南 2 道路跡）、遣り水関連遺構（SD1020 溝、SD1661 連結溝、SK2298 大土壤）、竪穴住居跡、土壤、水田跡、河川跡など主要遺構の検出を 8 月下旬までには一通り終え、調査区での概要をおおよそ判明した。そこで、8 月 29 日に報道発表、9 月 1 日には一般を対象にした現地説明会を行い、175 名の参加があった。そして、これに合わせて、無人ラジコン・ヘリコプターによる空中写真撮影を業務委託し、8 月 29 日に実施した。

その後、各橋脚間の確認調査箇所での遺構検出作業をさらに進め、事業者が設置した各橋脚部での本発掘調査にも着手し、12 月 12 日に調査を終了した。

また、調査の過程で、西 1 道路跡東側溝で検出した保存のよい 1 号馬と橋脚 P 71・68・56 の 3 箇所で検出した砂層（SX10233・10114・10223）については、下記の調査協力、御指導をいただいた。

1 号馬については、10 月 4・5 日に平面実測・写真撮影を行い、その後、頭部を除く骨を 10 月 12 日までに平面図に加筆・修正しながら取り上げ、頭部は樹脂で固めて 10 月 14 日に東北歴史博物館学芸部の保存科学担当の及川規氏が取り上げた後に保存処理した。

3 箇所の砂層については、10 世紀前葉の灰白色火山灰より層位的に古い 9 世紀後半代のものとみられ、貞觀地震に伴う堆積物の可能性も考えられたため、東北大学大学院理学研究科の箕浦幸治教授、

山田努力教に5月17日、6月8日、7月9日に、東北学院大学教育学部地域構想学科の松本秀明教授に5月10・17日、6月8・28日、7月9・10日、10月16・31日に、発掘調査現場にてご指導いただいた。そして、箕浦教授、平野助教授、山田助教にはこれら砂層に関する堆積学的検討と珪藻分析、松本教授には粒径分析と周辺の地形環境の変遷についての分析を依頼し、第7章と付章にその成果を掲載した。

また、6月8日には箕浦教授、平野助教授、山田助教がSX10234 砂層の剥ぎ取りを行い、その一部を当課で保存している。

第4章 基本層序

今回行った調査区は、砂押川右岸（上流から下流に向かう右側が「右岸」）に沿った標高3～3.5 mほどの自然堤防上に位置する。三陸沿岸道路仙塩道路の建設前は、全域水田として利用されていた。第3章で述べたように、宮城県教育委員会と多賀城市教育委員会では、三陸沿岸道路や都市計画道路の建設、土地区画整理事業など、大規模開発に伴う山王・市川橋遺跡の発掘調査を行ってきた。これら山王・市川橋遺跡発掘調査では、弥生時代中期から現代にいたる多くの堆積層が認められ、奈良・平安時代を中心に数多くの遺構、遺物が検出してきた。

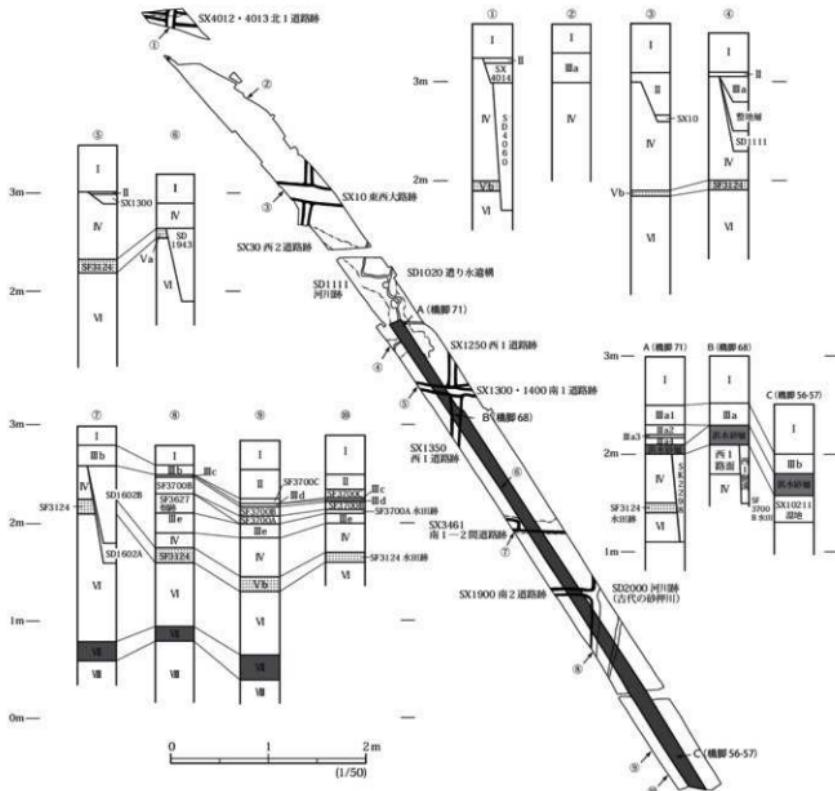
今回行った山王遺跡多賀前地区第4次発掘調査区は、同第1～3次調査（以下、「旧調査」と略称する）で発掘調査した三陸沿岸道路本線2車線部分の発掘調査区と、2車線分の間を置いて西側に並行する側道部分の発掘調査区との間に位置する（第3図）。旧調査区と今回の調査区は三陸沿岸道路に沿うことから、この箇所での三陸沿岸道路の方向と同じく、北西から南東に向けて2車線分の路線敷幅で440 mと細長く延びている。東西両側すでに発掘調査を行っているため、これまでの旧調査で確認し、報告した基本層序に従い、発掘調査を行った。このことから、旧調査で提示した基本層序柱状図（宮城県教育委員会 1995『山王遺跡II－多賀前地区遺構編－』第7図）を再掲し、これと異なる層序の認められた箇所の基本層序柱状図を提示することにした（第4図）。

なお、『山王遺跡II』第7図柱状図⑦～⑩は、両側スケール（比高）の縮尺が間違っていたため、第4図ではこれを訂正した。また、同図柱状図⑦ではSF3627 小溝状遺構群（畑跡）の下位に、ここでは検出されていないSF3700A 水田跡存在するように図示されていた。同図柱状図⑨・⑩では、SF3700B 水田跡の直上に位置するⅢ d層が最下層のSF3700A 水田跡を覆うように図示されていたが、今回の調査では確認できなかったことから、今回示した第4図ではこれまでの見解を修正した。

以下、『山王遺跡II』で提示した基本層序の説明に加筆・修正するとともに、今回の調査区で重要なA～C地点の基本層序の説明を加え、今回の調査で再確認した基本層序の説明に換えることにする（第4図）。基本層序はいずれも自然堆積土で、整地土は含まない。

- I層 表土。現在の水田耕作土と床土。層序は20～50cm。調査区全体に分布している。
- II層 黒色（10YR1.7/1）～黒褐色（10 YR 3/1）シルト～粘土の自然堆積層。旧調査区の南半部や道路跡、河川跡埋没後の上面などの標高の低い部分にのみに存在し、I層直下で認められた平安時代以降の自然堆積層で、平安時代の遺構を覆っている。旧調査での層位的な証拠は、たとえば灰白色火山灰の入るF期の東西大路側溝の上を覆う路面IVの直上にあることから、基本層Ⅲ c層の灰白色火山灰よりも層位的に新しいことなどに示されている。旧調査では、残りの良い東西大路・西2道路交差点付近のSX10東西大路跡、SX20・30西2道路跡の上面で約45cmあり、3層（Ⅱ a層、Ⅱ b層、Ⅱ c層）に分層されている。しかし、それ以外の場所では概して残りが悪く、5～15cm程であると報告されている。
- III層 平安時代の自然堆積層。Ⅲ a～Ⅲ e層の5層に細分されるが、Ⅲ a層は南1道路跡以北

の南1西2区（橋脚P68北側以北）、Ⅲb～e層は標高が低くなるSX3461南1—2間道路跡以南（橋脚P64北側以南）に分布し、Ⅲa層とⅢb～e層とて分布域が大きく異なる。炭化物や焼土を含む黒褐色（10YR3/1）シルト土の自然堆積層。SX1300・1400南1道路跡以北の南1西2区などのうち、SD1020造り水遺構の下位にあるSD1111旧河川跡上面やその直上のSX2121整地層上面の他、自然の窪地などの低い場所にのみ残存する。SD1020造り水遺構造営時のSX2121整地層上面では、25～30cm程の厚さがある（宮城県教育委員会1995、第160図）。Ⅲa層からは9～10世紀前半頃（9世紀代主体）の遺物が比較的多く出土した。



※ 宮城県教育委員会(1995)「山王道路II—多賀前地区遺構編」第7回を一部修正(⑧～⑩)・加筆(A～C)。

第4図 基本層序柱状図

なお、旧調査での遺構の検出は、一部を除きⅢ a 層掘り下げ後に行っているため、Ⅲ a 層との関係が不明のものが多く、灰白色火山灰層（Ⅲ c 層）とⅢ a 層との関係について不明であった。

また今回の調査では、SX10233 洪水砂層に覆われた SK2298 大土壌と SD10161 連結溝上面の窪みに堆積した基本層Ⅲ a 層について、さらに以下のⅢ a 1 層、Ⅲ a2 層、Ⅲ a3 層、Ⅲ a4 層の4層に細分した（第18図）。灰白色火山灰の分布が限定的であることから、今回の調査でもⅢ a 層とⅢ c 層の関係は不明瞭だったが、この箇所ではⅢ a1 層とⅢ a2 層の間に灰白色火山灰の降灰が推定された。詳細は第5章1（9）を参照されたい。

- Ⅲ a 1 層 黒褐色（10YR3/2）シルト土。φ 2mm 前後の炭片、白色凝灰岩粒をやや多く含む。
- Ⅲ a 2 層 黒褐色（10YR3/1）粘質シルト土。φ 2 ~ 1cm の炭片を多く含み、土器片をやや多く含む。
- Ⅲ a 3 層 黒褐色（7.5YR2/2）粘質シルト土。鉄分が沈着、やや赤みがあり硬い。遺物をほとんど含まない。
- Ⅲ a 4 層 黒色（7.5YR2/1）粘質シルト土。
- Ⅲ b 層 発泡した φ 2 ~ 4mm 程の白色凝灰岩粒を多く含む褐灰色砂質土（10YR4/1）で、旧調査では SX3461 南1—2間道路跡から SD2000 河川跡にかけてのほぼ全面に分布していた。今回の調査では SX3461 南1—2間道路跡の北側、橋脚P 65周辺で特に顯著に認められた。10 ~ 20cm 程の厚さがあり、旧調査では灰白色火山灰降灰後のもので、「洪水等の短期間に大量の土砂が供給されるような自然災害によって堆積したもの」と推定している。そして、SX3461 南1—2間道路跡のB期とC期の間にこの基本層Ⅲ b 層が当初の路面 I の上に自然堆積し、C南側溝がこのⅢ b 層を掘り込み面とすることを示す断面図を掲載している（宮城県教育委員会 1995、第38図；「基本層位Ⅲ d 層」と図示している箇所だが、「Ⅲ b 層」の誤植）。南1—2間道路跡は埋没した SD1602B 旧河川跡に造営され、周囲より低い位置にあることから、この低い箇所に流入した洪水砂層が周辺にオーバーフローしたものと考えられる。
- Ⅲ c 層 10世紀前葉に降下したとみられる灰白色火山灰層で、層厚は 5cm 前後である。
- Ⅲ d 層 オリーブ褐色（2.5 Y 4/3）細砂。S F 3700B 水田跡を覆うしまりのない水成堆積層で、SX3461 南1—2間道路跡以南に分布する。層厚は最大で 10cm 程ある。旧調査で検出して基本層としたこの層は、今回の調査で SF3700B 水田跡の上面で検出した SX10234 洪水砂層に相当する。
- Ⅲ e 層 未分解の植物遺体を多く含む黒色（10YR2/1）粘質シルト。SD2000 河川跡以南の湿地に堆積したスクモ層で、層厚は 10cm 程である。

なお、旧調査報告書にはこの他に本文中に「Ⅲ f 層」と記した記述も 1箇所のみにあり、南3区以南について4時期の遺構変遷を設定し、この変遷にもとづいた図面を提示している（宮城県教育委員会 1995、p.290、第234 ~ 237図）。しかし、基本層序を記載した第IV章にはこのⅢ f 層自体についての記載はなく、今回の調査でも事実関係を確認できなかったため、訂正する。

- IV層 奈良・平安時代の均質な自然堆積層（地山）で、調査区全体に分布する。黄褐色（2.5 Y 5/3）砂質シルト、黄灰色（2.5Y4/1）粘質シルト、オリーブ褐色（2.5 Y 4/3）砂などが互層をなしている。層厚は、調査区北半部では厚く1m前後、南半部では20～50cm程である。遺物は出土していない。
- V層 古墳時代前期の塩釜式期の土器を含む層で、調査区のほぼ全体に分布する。
- V a層 褐灰色（10YR4/1）シルト～黒褐色（10YR2/3）粘質シルト。調査区中央部（SX1300・1400南1道路跡からSX3461南1—2間道路跡にかけての下層の微高地上）に分布する。層厚は約10cmである。
- V b層 未分解の植物遺体を多く含む黒色（10YR2/1）～オリーブ黒色（5 Y 3/1）シルト質粘土。調査区南半（SD2000 河川跡以南）の湿地に堆積したスクモ層で、層序は10～15cm程である。
- VI層 均質な自然堆積層からなり、調査区全体に分布する。地点によって層の堆積状況は異なるが、灰オリーブ色（5Y5/3）砂質シルト、暗緑灰色（7.5GY4/1）～オリーブ黒色（7.5Y3/1）粗砂、暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘土～灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト質粘土などが互層をなしている。層厚は、南半部で60～120cm程である。遺物は出土していない。
- VII層 調査区の南半部で検出したスクモ層で、黒色（10YR2/1～N 2/0）シルト質粘土からなる。層厚いは15～25cm程である。北半部については、図示していないが、部分的な断ち割り調査では確認できず、VII層が調査区全体には分布していなかった可能性が高い。なお、同様の堆積状況にある八幡地区的調査（後藤・村田他 1994、相沢 1993）では、弥生時代中期の桥形圜式期の遺物が比較的まとまって出土している。
- VIII層 均質な自然堆積層で、暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）細砂～中砂からなる。遺物は出土していない。

第5章 第IV層遺構面（奈良・平安時代）の確認調査・本調査

今回行った第4次発掘調査は、暫定2車線で供用されている本線と2車線分の間隔を置いた西側の側道の間の幅狭い2車線部分にあたる幅約13m、長さ約440m、計5,720m²である。

多賀城跡南前面に展開する南北大路跡西側の方格地割の地区名称については、東西大路跡より北側の区画は区画北西隅の道路交差点の名称、南側の区画は区画南西隅の道路交差点の名称を付けて呼び習わしてきている（宮城県教育委員会1995）。この名称に従うと、今回の調査区はこれまで明らかとなっている陸奥国府多賀城跡の方格地割の中では、①南1西2区（区画南西隅に南1西2道路交差点があり、東西大路跡、南1道路跡、西1道路跡、西2道路跡で区画された東西大路跡のすぐ南側、西1道路跡西側の区画）、②南2西1区（区画南西隅に南2西1道路交差点があり、南1道路跡、南2道路跡、西0道路跡、西1道路跡で区画された南1道路跡の南側、西0道路跡西側の区画）、③方格地割外にあたる南2道路跡以南に位置している（第3図）²²。

調査区が北西から南東に向けて細長く幅狭いため、掘立柱建物跡など主要遺構の全体像もつかみにくいものであった。東・西両側を旧調査で発掘調査していたため、これらの調査平面図と今回の調査平面図を合成し、図上で検討した掘立柱建物跡などの主要遺構も多い。そのため、旧調査で明らかになつた方格地割の区画を単位として、以下、上記①・②・③の順に主要遺構を中心に概観することにしたい。

また、出土遺物の年代的位置付けについては、これまで多賀城跡の城内・城外の発掘調査を通じて蓄積されてきた基準土器群²³と対比することにより行った。

今回の第4次発掘調査では、古墳時代から近世にいたる多数の遺構が発見され、奈良・平安時代を中心には多数の遺構と多量の遺物が出土した。検出した古代の主要遺構は、道路跡6条（南1道路跡、西1道路跡、南2道路跡、南1—2間道路跡、西0道路跡、東0道路跡）、掘立柱建物跡44棟、竪穴住居跡15軒、井戸跡2基、土器埋設遺構2基、土壤46基、区画溝跡1条、溝跡多数、小溝状遺構群（烟跡）3箇所、水田跡2面、整地層1箇所などである。検出面は重複遺構を除いていざれも古代の地山面（IV層上面）である。この他、河川跡2、特異な砂層（イベント堆積物²⁴）3箇所を検出した。

出土した遺物は整理用テン箱で104箱におよび、土師器、須恵器、須惠系土器²⁵、灰釉陶器、綠釉陶器、製塩土器、瓦、石製品、土製品、木製品、鉄滓、種子、骨・歯などがある。

1. 南1西2区

南1西2区では、南辺を区画するSX1300南1道路跡、東辺を区画するSX1350西1道路跡、SD1020造り水遺構跡とこれに関連したSK2298大土壤跡、SD10061連結溝の他、掘立柱建物跡13棟、竪穴住居跡4軒、横位合口土師器壺棺墓1基、土壤25基、小溝状遺構群（烟跡）2箇所などを検出した。以下、これら主要遺構の概要をこの順番に記載する。

なお、南1西2区の縮尺1/1,000の主要遺構全体図は第5図に、縮尺1/500の分割平面図は第6図～第8図に示した。

（1）SX1300南1道路跡（平面図：第9・10図、断面図：第10図、写真図版：図版8）

南1西1道路跡交差点は、本調査区東側本線部分の旧調査区に位置する。今回、南1道路跡は交差

点西側（西1－西2道路跡間）のSX1300南1道路跡を長さ約12m検出した。この道路跡は西側側道部分の旧調査区でも検出している。

【遺構期】旧調査では、SX1300南1道路跡の北・南側溝でそれぞれ6時期（A期→B期→C期→D期→E期→F期）、路面で4時期（路面I→路面II→路面III→路面IV）の変遷を確認していた（宮城県教育委員会1995、pp.47～52）。D期側溝には、10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰（十和田a火山灰）^{註6}のブロックが含まれ、年代の一点を示す。今回の調査でもSX1300南1道路跡の北・南側溝で6時期の変遷を確認したが、路面は残りが悪いためか明確な変遷は確認できなかった（第9・10図）。

【側溝の規模】北側溝の規模は、B期が上幅1.2m以上、下幅約0.8m、深さ約50cm、C期が上幅1.0m以上、下幅約0.7m、深さ40～50cm、D期が上幅1.5m以上、下幅約0.6m、深さ約55cm、E期が上幅約1.8～2.4m、下幅0.6～0.7m、深さ約50cm、F期が上幅約1.2m、下幅約0.7m、深さ約30cmで、A期が不明である。

南側溝の規模は、D期が上幅1.7m以上、下幅約1.3m、深さ約55cm、E期が上幅約1.3m、下幅約1.0m、深さ約45cm、F期が上幅約1.2m、下幅約0.6m、深さ約30cmで、A・B・C期が不明である。

【路幅】SX1300南1道路跡の路幅は、北・南両側溝の心々でみると、D期が約6.0m、E期が約3.7m、F期が約3.8mで、A～C期が計測不能であった。なお、旧調査での路幅は、路面Iで検出したA・B期のうちB期が約6.5m、路面IIで検出したC期が約6.5m、路面IIIで検出したD期が約4.5m、路面IVで検出したE～F期のうちE期が約5m、F期が約4.0mであった。両者を合わせてみると、順次路幅が縮小する傾向がうかがえる。F期側溝心々でみると、方向は東で南に約8°偏る。

【路面上の土壤群】南1道路跡路面上にはSK10185土壤群が連続的に掘削されている。旧調査区で検出したSK3131土壤と一連の土壤群とみられる。このSK3131・10185土壤群は、E南側溝と重複して古く、堆積土にD期に特徴的な10世紀前葉降灰の灰白色火山灰ブロックや地山ブロックを含み、人为的に埋め戻されていることから、D期に掘削された土取り穴とみられる。この土取り穴は、南1道路跡路面上及びこれに近い南側の南2西2区内に多数連続的に掘られた土壤群（第8図）と一連のものとみられる。

出土遺物にはロクロ土師器内黒環（第29図34）、須恵器環（第29図37）・甕、須恵系土器環、製塩土器などの破片がある。このうち34と37の底部はいずれも回転糸切り無調整である。

【SX1300南1道路跡道路側溝の出土遺物】（土器：第32・33図、瓦：第35・36図、土製品：第37図、写真図版：図版28・30～34・38・40）

〔A期〕 A期北側溝より非ロクロ土師器甕などの破片が出土した。

〔B期〕 B期北側溝より須恵器蓋の破片が出土した。

〔C期〕 C期北側溝より非ロクロ土師器平底内黒環、ロクロ土師器内黒環、須恵器環・長頸壺、平瓦などの破片が出土した。須恵器環には9世紀前半頃のヘラ切りのもの、平瓦には多賀城跡政府第2期〔天平宝字6年（762）～宝亀11年（780）、以下年代幅省略〕の平瓦II B類（3）などがある。

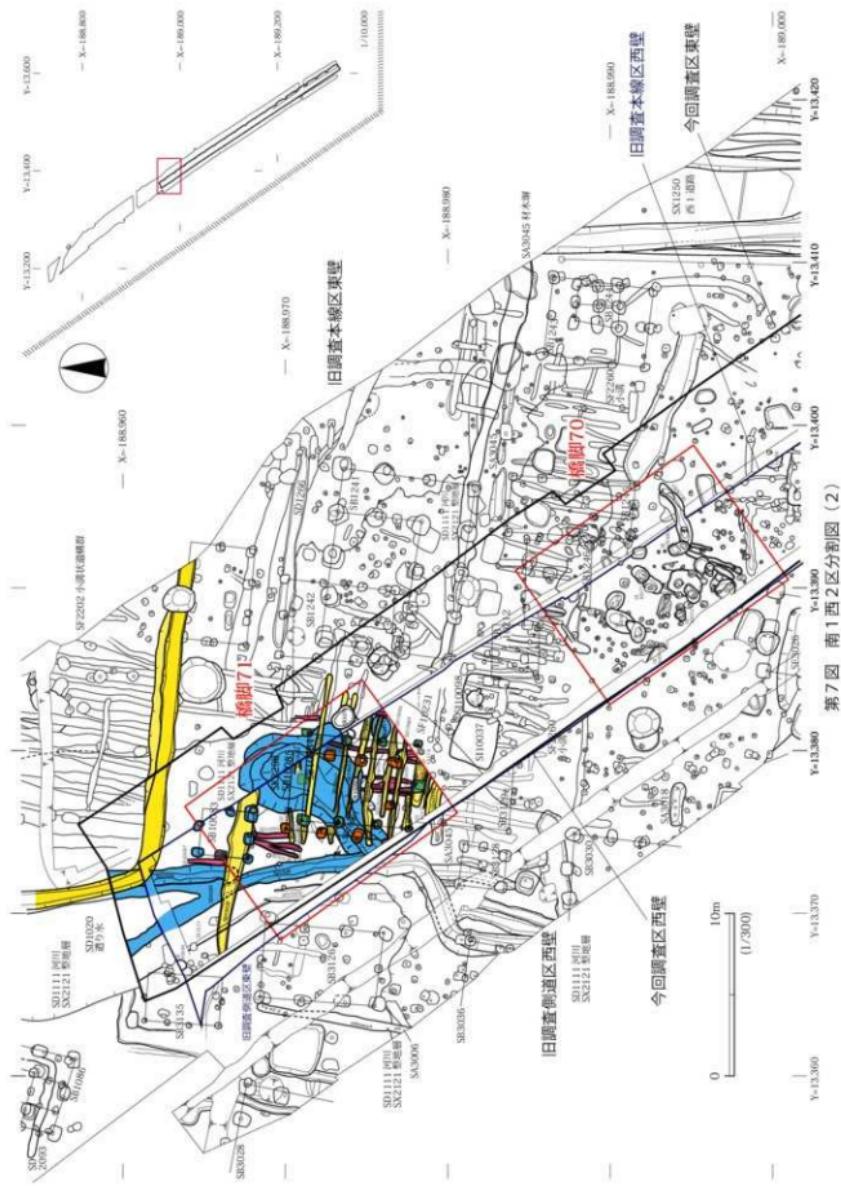
なお、遺物取り上げがA期～C期の南1道路跡北側溝より、ロクロ土師器内黒環（67）、須恵器環・



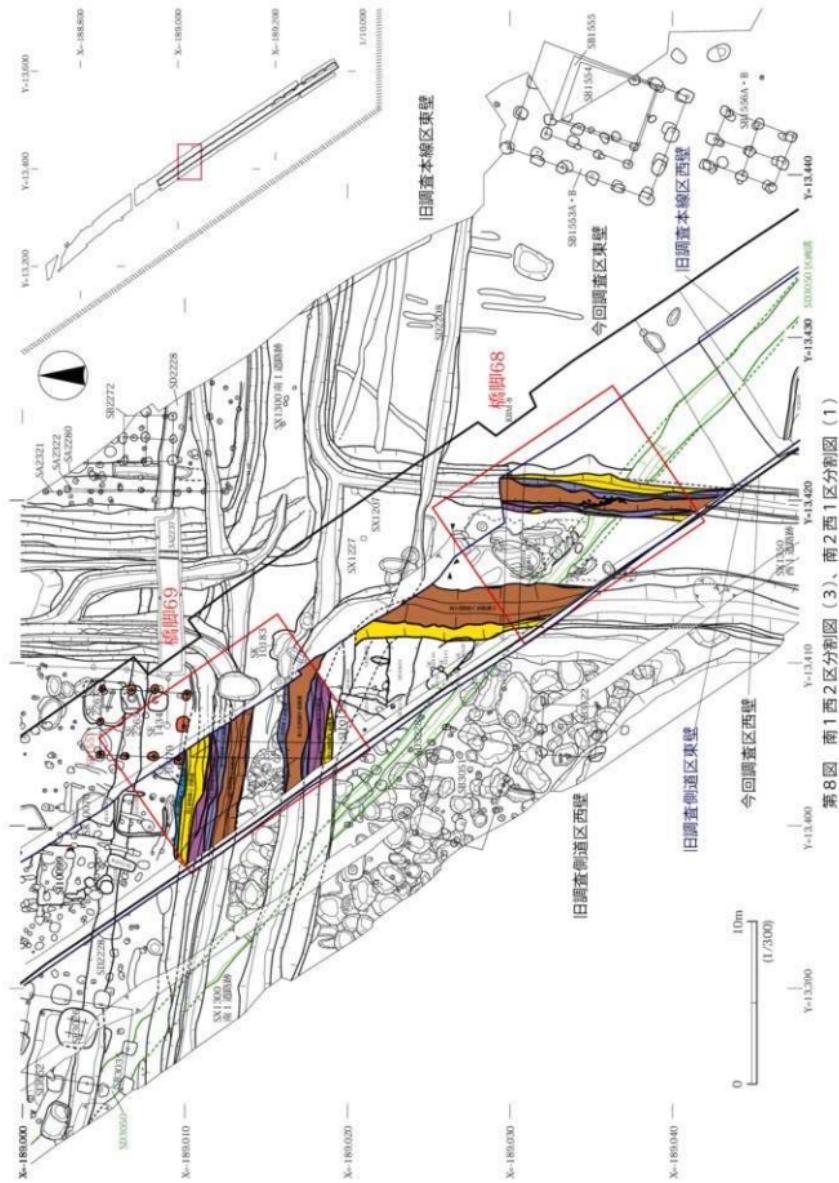
第5図 南1西2区主要遺構全体図



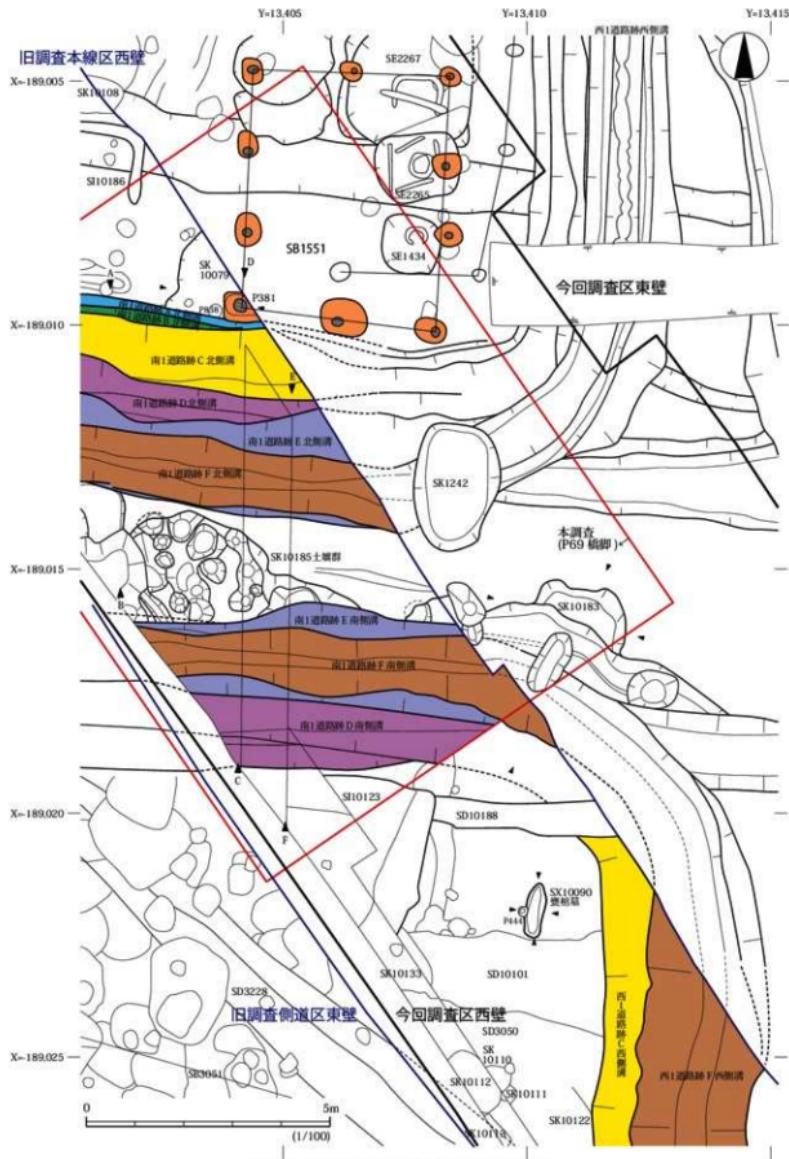
第6図 南1西2区分割図(1)



第7圖 南1西2區分割圖 (2)

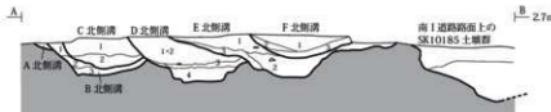


第8图 南1西2区分割图(3)、南2西1区分割图(1)

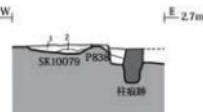


第9図 南1西1道路跡交差点付近平面図

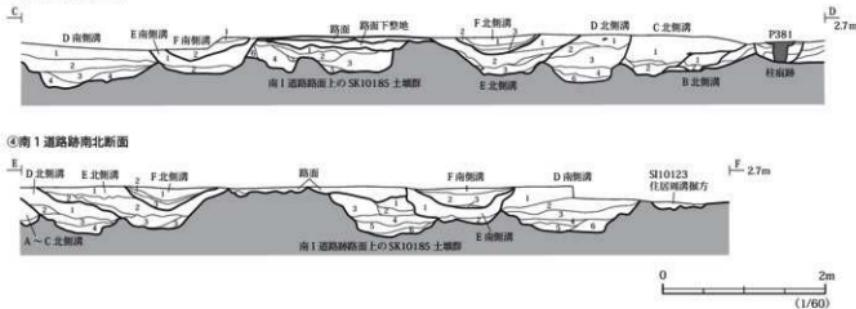
①南1道路跡南北断面



②SB1551 南西隅柱穴



③南1道路跡南北断面



④南1道路跡南北断面

透視・部位	土色	土性	その他の特徴
南1道路跡A北側溝	1層 黒褐色 (10YR3/1)	砂質シルト	地山ブロックを少額含む。
	1層 黑褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	白色微粒子を多く含む。地山ブロックを含む。
南1道路跡B北側溝 (①斬面)	2層 黑褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	白色微粒子を多く含む。砂をブロック状に含む。
	3層 黄褐色 (2.5Y5/3)	砂	黒褐色ブロックを多く含む。
南1道路跡C北側溝 (①斬面)	1層 黄褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	マングン・炭化鉄をまばらに含む。白色微粒子を多く含む。
	1層 黑褐色 (10YR2/3)	シルト	地山ブロックを少額含む。粘性の強い土。
	2層 黑褐色 (10YR3/2)	粘質シルト	土器類・陶片をまばらに含む。
	3層 黑褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	地山小ブロックを少額含む。
	4層 黑色 (10YR2/1)	粘質土	地山化鉄が沈着。
	5層 黑褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	下方地山小ブロックが混じる。
南1道路跡E北側溝 (①斬面)	1層 黑褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	道物・炭化鉄をまばらに含む。
	2層 黑褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	土器類・炭化鉄を含む。
	3層 黑褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	骨格・地山小ブロックを含む。
南1道路跡F北側溝 (①斬面)	1層 黑褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	土器小片を多く含む。
	2層 黑褐色 (10YR3/1)	砂質シルト	土器・炭化鉄を少額含む。
	3層 黑色 (10YR2/1)	粘質土	均一な粘土質。
	4層 黑褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	炭化鉄粒子・土器等小片を多く含む。
	5層 黑褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	炭化鉄・土器等小片を多く含む。
南1道路跡D南側溝 (①斬面)	1層 黑褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	2層より薄く、やや風化あり。地山化鉄が多く沈着。
	2層 黑褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	地山化鉄・地山小片を少額含む。
	3層 黑褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	地山・粘質シルトを含む。
	4層 黑褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	灰白土色(山小片)@1cm未満)を多く含む。
	5層 黑褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	灰白土色(山小片)@2-3cm)を少額含む。
	6層 黑褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	灰白土色(山小片)@2-3cm)を少額含む。
南1道路跡E南側溝 (①・②・③・④斬面)	1層 黑褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	灰白土色(山小片)@2-3cm)を少額含む。
	2層 にじいろ褐色 (10YR5/3)	砂質シルト	にじいろ褐色 (10YR5/3)粘質シルトと黒褐色 (10YR2/2)粘質シルトの混合土。
南1道路跡F南側溝 (④斬面)	1層 黄褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	土器等小片を含む。
	2層 黑褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	きめの細かいかわ一層。
	3層 黑褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	2層の下底面に分布する砂質シルト。
路面(③斬面)	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	地山シルト・カットブロックを部分的に含む。
路面下地盤(③斬面)	黒褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	地山・土器等を多く含む。
	1層 にじいろ褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	地山小ブロック・灰白土色(山小片)を多く含む。
	2層 にじいろ褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	黄褐色細砂を多く含む。灰白土色(山小片)もまばらに含む。
路面上の土壌層	3層 黑褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	東側の落込部に灰白土色(山小片)@2-3cm)がまとめて分布。
SK10185土壌 (⑤斬面)	4層 灰黃褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	灰白土色(山小片)ブロック・地山ブロックを多く含む。
	5層 黄褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	灰白土色(山小片)@2cm未満)が混じる。
SK10079土壌 (⑥斬面)	6層 黑褐色 (10YR3/2)	粘質シルト	地山黒褐色(山小片)ブロックを多く含む。
	1層 黄褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	マンガン・砂を少量含む。地山ブロック・暗褐色シルトブロックを多く含む。
	2層 灰黃褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	地山ワッカを少額含む。マンガン粒・砂を含む。
SB1551建物跡 (⑦斬面)	擬方 黑褐色 (2.5Y5/2) -	砂質シルト	地山ブロック・黒褐色砂質シルトを多く含む。しまりあり。
	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	地山ブロック・炭化物を多く含む。土器片を少額含む。
切羽穴 黄褐色 (10YR4/2)	擬方	砂質シルト	地山シルト小ブロック(1cm未満)を多く含む。
SI10123住居跡	擬方 黑褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	地山シルト小ブロック(1cm未満)を多く含む。

第10図 南1西1道路跡交差点付近断面図

高台坏・甕などの破片が出土した。67は底部手持ちヘラケズリ、内面平行ヘラミガキとなる9世紀前半頃のものである。須恵器坏にもこれと同時期のヘラ切りのものがある。

〔D期〕 D期北側溝よりロクロ土師器内黒坏（69・70）・甕、非ロクロ土師器甕、須恵器坏・鉢・甕、須恵系土器坏（76・81）・高台坏（83）、製塙土器、平瓦、D期南側溝よりロクロ土師器内黒坏（72・73）、須恵器坏（75）・鉢、須恵系土器坏（77～80）・高台皿（82）・大型台付鉢、製塙土器、平瓦などの破片が出土した。

このうちロクロ土師器内黒坏には底部が回転糸切り後に体下部を手持ちヘラケズリしたもの（69）や回転ヘラケズリしたものも含まれるもの、調整のわかるものは底部回転糸切り無調整で内面放射状ヘラミガキ（70・72・73）である。須恵器坏（75）は底部回転糸切り無調整である。須恵系土器には坏・高台坏・高台皿・台付鉢があり、小型坏が含まれていない。平瓦には多賀城跡政府第Ⅱ期の平瓦ⅡB類、政府第Ⅳ期〔貞觀11年（869）～11世紀中頃、以下年代幅省略〕の平瓦ⅡC類（15）などがある。

D期側溝に含まれる10世紀前葉の灰白色火山灰の降灰以前に掘削されたこと、須恵系土器が含まれることから、9世紀前半頃の遺物も一部含まれるもの、9世紀後葉頃～10世紀前葉頃までの遺物が主体を占めるとみられる。

〔E期〕 E期北側溝よりロクロ土師器内黒坏、須恵器坏・壺・小型壺、須恵系土器坏、灰釉陶器塊（猿投窯製品）、手捏ね土器小型鉢、製塙土器、平瓦、E期南側溝より須恵系土器小皿（88・89）・坏・高台坏、ロクロ土師器内黒坏・甕、猿投窯製品の灰釉陶器塊・壺、E期南1道路連結構より須恵系土器小型坏（96）などの破片が出土した。平瓦には多賀城跡政府第Ⅲ期〔宝亀11年（780）～貞觀11年（869）、以下年代幅省略〕の平瓦ⅡB類がある。

〔F期〕 F期北側溝よりロクロ土師器内黒坏・甕、須恵器坏・小型壺、須恵系土器坏（97）・小型坏・高台坏・大型台付鉢、灰釉陶器塊・壺、製塙土器、平瓦、土鍤（16）、F期南側溝より須恵系土器坏・高台坏、製塙土器、白磁、平瓦などの破片が出土した。平瓦には多賀城跡政府第Ⅱ期と政府第Ⅲ期の平瓦ⅡB類、政府第Ⅳ期の平瓦ⅡC類（13）がある。

なお、D期～F期の間としてしか捉えられない遺物に、ロクロ土師器壺小破片（87）などの破片がある。壺は陸奥国府多賀城跡での出土は少ない遺物の一つである。

（2）SX1350西1道路跡（平面図：第9・11・12図、断面図：第13図、写真：図版8～10）

検出したSX1350西1道路跡は、東側の本線部分旧調査区に位置する南1西1交差点の南側（南1～南2道路跡間）にあたり、長さ約21m検出した。この道路跡は東側本線部分の旧調査区でも検出している。

【遺構期】 旧調査では、SX1350西1道路跡の東・西側溝でそれぞれ6時期（A期→B期→C期→D期→E期→F期）、路面で4時期（路面I→路面II→路面III→路面IV）の変遷を確認していた（宮城県教育委員会1995, pp.47～52）。今回検出したSX1350西1道路跡では、東側溝で6時期（A期→B期→C期→D期→E期→F期）、西側溝で5時期（B期→C期→D期→E期→F期）、路面で3時期（路面I→路面II→路面III）の変遷を確認した（第9～13図、表4）。

【側溝の規模】西1道路跡東側溝の規模は、A期が上幅1.3m以上、下幅約1.0m、深さ70~75cm、B期が上幅1.3m以上、下幅約0.8m、深さ約60cm、C期が上幅2.1~2.7m、下幅約1.4m、深さ40~50cm、D期が上幅1.5m以上、下幅60~70m、深さ50cm、E期が上幅1.2m、下幅約0.9m、深さ30~40cm、F期が上幅1.0~1.3m、下幅約0.8m、深さ約20cmである。

西側溝の規模は、A期は規模不明、B期が上幅0.6m以上、深さ約45cm、C期が上幅1.0m以上、深さ30~40cm、D期が上幅2.0m以上、下幅0.8~1.8m、深さ約65cm、E期が上幅1.4m以上、下幅0.4~0.8m、深さ約55cm、F期が上幅1.9~2.4m、下幅1.6~2.0m、深さ約20cmである。

【路幅・方向】東・西両側溝の心々でみると、SX1350西1道路跡の路幅はB期が約8.4m、C期が約8.0m、D・E期がそれぞれ約7.2m、F期が約7.0mで、A期がB期とほぼ同様と推定された。なお、旧調査での路幅は、路面Iで検出したA・B期のうちB期が約6m、路面IIで検出したC期が約7m、路面IIIで検出したD期が約6.5m、路面IVで検出したE~F期のうちE期が約6.5m、F期が約6.0mであった。両者を合わせてみると、路幅が順次縮小する傾向がうかがえる。特に、貞觀地震後の復興期に位置付けられるD期は、東・西両側溝を内側に移動させて掘り直し、路幅を縮小させている。また、側溝心々でみると、方向は北で約2°東に偏る。

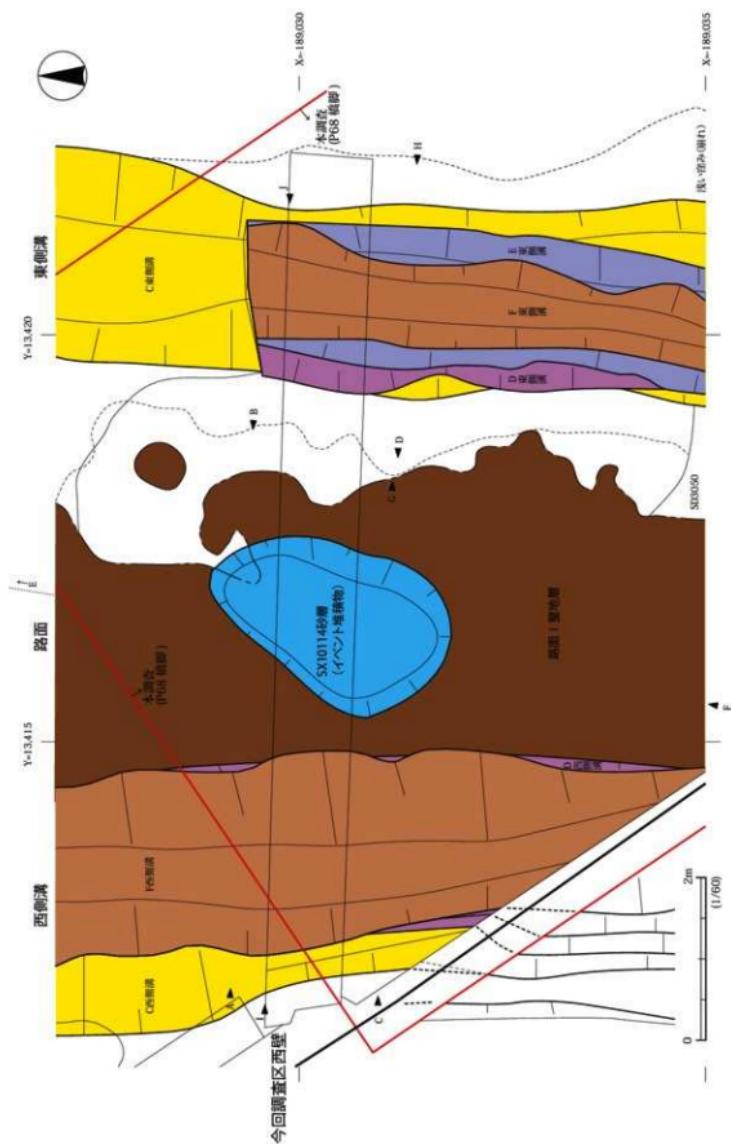
【SX1350西1道路跡道路側溝の出土遺物】(土器:第32・33図、瓦:第35・36図、土製品:第37図、写真図版:図版28~34・37~39・40)

〔A期〕A期東側溝よりロクロ土師器内黒環(55・190)・小型鉢(56)、須恵器壺・小型壺などの破片が出土した。このうち55のロクロ土師器内黒環は、底部切り離し不明で、体下部~底部が手持ちヘラケズリ、内面が平行ヘラミガキされている。多賀城跡周辺の基準土器群からみて9世紀前半頃に位置付けられる。後述のように、第14図190は回転糸切無調整の9世紀中葉頃のもので、これが年代決定資料となる。

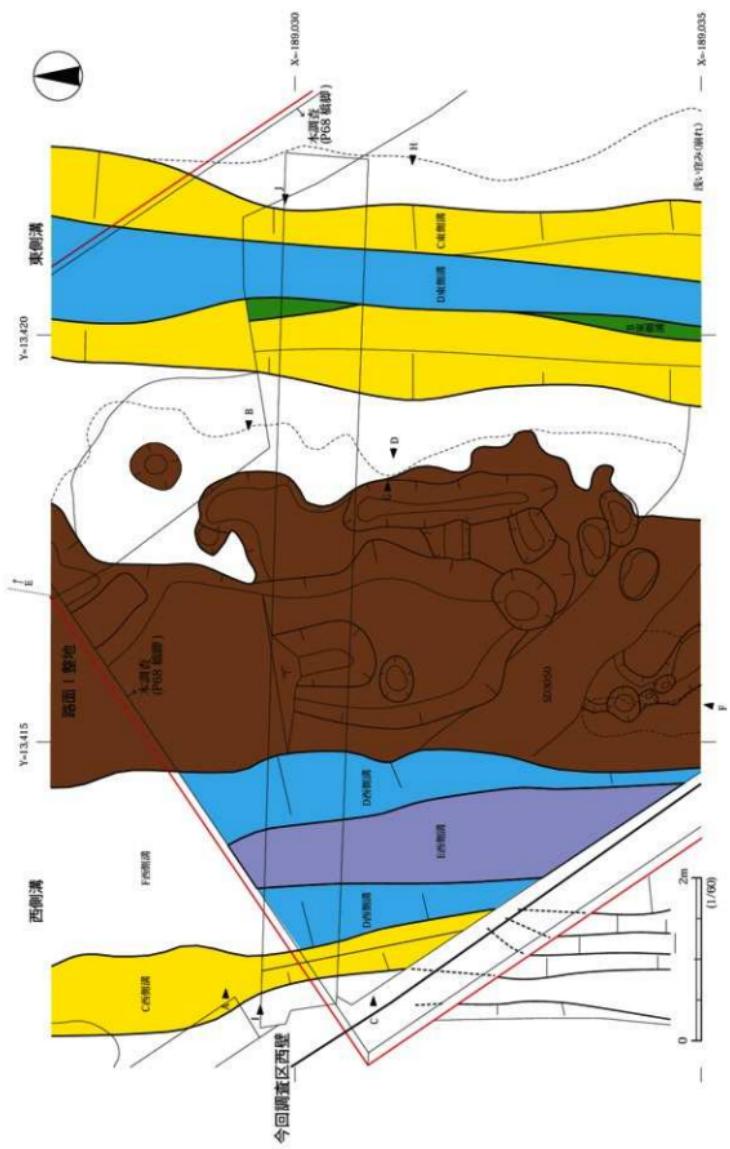
〔B期〕B期東側溝よりロクロ土師器内黒環・小型壺・須恵器壺(59・61)・高台環・高环・長頸壺、灰釉陶器皿(58)、平瓦などの破片が出土した。このうちロクロ土師器内黒環には、回転糸切り後に底部手持ちヘラケズリしたもの、回転糸切り後に底部周縁手持ちヘラケズリしたものなどがある。須恵器壺では59は底部回転糸切り後に底部周縁を手持ちヘラケズリし、61は回転糸切り無調整だが底径は5.8cmと大きい。いずれも9世紀前半~中頃のものとみられる。また、平瓦には多賀城跡政府第Ⅱ期と政府第Ⅲ期の平瓦ⅡB類がある。

〔C期〕C期東側溝よりロクロ土師器内黒環(60)・高台環・壺・須恵器壺・高台環・壺、製塩土器、C期西側溝より須恵器壺など、C期西側溝より平瓦などの破片が出土した。ロクロ土師器内黒環で調整のわかるものの多くは、底部回転糸切り無調整で内面放射状ヘラミガキ(60)されている。須恵器壺も底部回転糸切り無調整のものが主体を占める。60は体部外面に「大万」(合わせ文字)と吉祥句が正位で墨書きされている。平瓦には多賀城跡政府第Ⅰ期〔神亀元年(724)~天平宝字6年(762)、以下年代幅省略〕の平瓦ⅠA類、政府第Ⅱ期の平瓦ⅡB類がある。

〔D期〕D期東側溝よりロクロ土師器内黒環(71・74・84)・壺・須恵器壺・高台環・灰釉陶器高台環(68)、製塩土器、多賀城跡政府第Ⅱ期の平瓦ⅡB類、輪羽口(18)など、D期西側溝よりロク



第11図 西1道路跡のD～F側溝と路面上のSX10114砂層（イベント砂層）



第12図 西1道路跡の側溝下部と路面 | 整地

口土師器裏などの破片が出土した。口クロ土師器内黒杯で調整のわかるものの多くは、底部回転糸切り無調整で内面放射状ヘラミガキ（71・74・84）である。

また、84 の体部外面に横位右向きで「宇多（郡）」と墨書されている。宇多郡は陸奥国南部諸郡の一つで、陸奥国府多賀城跡の城内・城外の郡名墨書土器や郡名に由来する人名墨書土器の多くは、陸奥国南部諸郡のものである（宮城県教育委員会 1996 b）。特に山王遺跡多賀前地区では、宇多郡に関連する人名とみられる「宇多東丸」が 1 点、「宇多利」が 1 点、同じく人名の可能性が高い「宇多+α」が 21 点出土しており、宇多郡に関連する墨書土器が多い傾向にあった（宮城県教育委員会 1996b）。

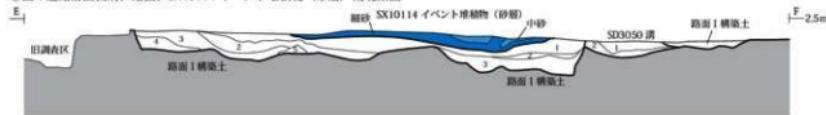
①西 1 道路跡西側溝、路面、SX10114 イベント堆積物（砂層）東西断面



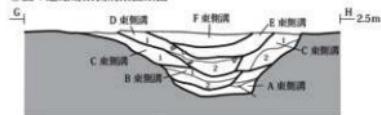
②西 1 道路跡西側溝、路面、SX10114 イベント堆積物（砂層）東西断面



③西 1 道路跡西側溝、路面、SX10114 イベント堆積物（砂層）南北断面



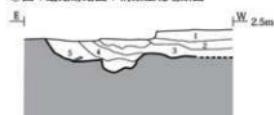
④西 1 道路跡東側溝東西断面



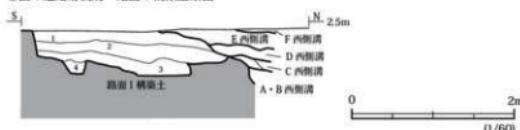
⑤西 1 道路跡西・東側溝東西断面



⑥西 1 道路跡路面・構築土堆積面断面



⑦西 1 道路跡側溝～路面・構築土断面



第 13 図 西 1 道路跡断面図

その中にあって本例が「宇多郡」であるならば、陸奥国の大河原町支配に関連して、名取以南諸郡が陸奥国多賀城の経営を負担していたこと（平川南 1982・2012）を裏付ける資料の一つとなる。

また、68 の灰釉陶器高台环は東濃窯跡群虎渓山1号窯式の製品で、白色の灰釉が浸け掛けされ、内面底部に「中」、外面底部に「賀々」、「冊」と墨書きされている。10世紀後半頃に年代的に位置付けられ、国府多賀城跡ではあまり流通しなくなる希少な時期の灰釉陶器である。

平瓦には多賀城跡政府第II期の平瓦II B類、政府第IV期の平瓦II C類（14・17）などがある。

〔E期〕 E期東側溝よりロクロ土師器内黒環・内黒高台环・内黒塊・内黒深塊（86）・甕、須恵器环・鉢・広口壺・壺・長頸壺（大戸産）、須恵系土器环（93～95）・小型环・高台环・足高高台环・高台皿、製塙土器、平瓦、E期西側溝からロクロ土師器内黒环・内黒塊、須恵器环・甕、須恵系土器小型环（92）・环、「前将」墨書き風字硯（99）など、E期西側溝より平瓦などの破片が出土した。このうちロクロ土師器内黒环には底部回転糸切り無調整で、内面放射状ヘラミガキのもの、平瓦には多賀城跡政府第II期の平瓦II B類、政府第IV期の平瓦II C類などがある。

この99の「前将」墨書き風字硯は、手持ちヘラケズリで整形され、その手法は9世紀前半頃の須恵器の製作技法に共通すること、風字硯の出現年代は8世紀末頃（平城京末期～長岡京期）であることなどから、8世紀末～9世紀前半頃に作られたものとみられる。

「前将」墨書きは、故今泉隆雄東北歴史博物館館長（当時）・東北大名誉教授（古代史）と宮城県多賀城跡調査研究所の吉野武氏が検討し、吉野氏が墨書き部分を実測したものである。延暦8年（789）、紀古佐美の胆沢蝦夷征討に際して、前・中・後軍の3軍に分かれて進軍したが、大墓阿豆流為率いる

遺跡・層位	土色	土性	その他の特徴
西I道跡B・西側溝	黒褐色（2.5Y3/2）	シルト質粘土	地山ブロック・磨化鉄を多く含む。
西I道跡C・西側溝	1層 黒褐色（7.5Y4/1） 2層 黒褐色（7.5Y4/1）	シルト	細砂を含む。
西I道跡D・西側溝	1層 黒褐色（2.5Y3/2） 2層 黒褐色（2.5Y3/2） 3層 黒褐色（2.5Y3/2）	シルト 粘土質シルト 粘土	地山粘土を含む。
西I道跡E・西側溝	1層 黒色（5Y2/1） 2層 オリーブ黒色（5Y3/1）	粘土質シルト	炭化物を少量含む。
西I道跡F・西側溝	1層 黒色（2.5Y3/1） 2層 黑褐色（2.5Y3/1）	シルト 粘土質シルト	炭化物・植物を多く含む。
西I道跡G・東側溝	オリーブ黒色（5Y2/2）	粘土	炭化物を含む。
西I道跡H・東側溝	1層 黒色（5Y2/1） 2層 黑褐色（2.5Y3/1）	粘土質シルト	炭化物を含む。
西I道跡I・東側溝	1層 黒褐色（2.5Y3/1） 2層 黑褐色（2.5Y3/2） 3層 黑褐色（2.5Y4/1）	砂質シルト 砂質シルト 砂質シルト	地山粘土を多く含む。
西I道跡J・東側溝	1層 オリーブ黒色（5Y3/1） 2層 黑褐色（7.5Y3/1）	粘土質シルト 粘土質シルト	炭化物・地山ブロックを多く含む。
西I道跡K・東側溝	1層 オリーブ黒色（5Y2/2） 2層 黑褐色（2.5Y3/2）	シルト シルト	炭化物を含む。
西I道跡L・東側溝	1層 黑褐色（2.5Y3/1） 2層 黑褐色（2.5Y4/1） 3層 黑褐色（2.5Y4/1） 4層 黑褐色（2.5Y4/1） 5層 黑褐色（5Y8/2）	シルト シルト シルト シルト シルト	炭化物を含む。
路面I構造土 （3断面）	1層 黑褐色（2.5Y4/1） 2層 黑褐色（2.5Y4/1） 3層 黑褐色（2.5Y4/1） 4層 黑褐色（2.5Y4/1） 5層 黑褐色（5Y8/2）	シルト シルト シルト シルト シルト	炭化物を含む。
路面II構造土	1層 黑褐色（2.5Y4/1） 2層 黑褐色（2.5Y4/1）	シルト シルト	白色細砂を含む。人為堆積。
路面III構造土	1層 埋灰土（2.5Y4/2）	砂質シルト	炭化物を含む。
SX10114	1層 黄褐色（5Y7/2）	中砂	黄褐色を5Y4/1シルトと5Y8/1黄褐色シルト土の混積。人為堆積。
イベント堆植物（砂礫）	2層 灰白色（5Y7/2）	細砂	自然堆積。
SD3050溝	1層 黑褐色（7.5Y4/1） 2層 黑褐色（7.5Y4/1）	シルト シルト	細砂を5Y4/1シルトブロックと灰白色（5Y8/2）シルト地山ブロックとの混積。

表4 第13図掲載西1道路跡断面図土層観察表

蝦夷軍に敗北した記事の中に「前軍別將外從五位下安倍猿嶋臣墨繩」がみえる〔『続日本紀』延暦8年（789）6月甲戌条〕。「前將」墨書については、この記事にみえる「前軍別將」を省略した可能性の他、「前鎮守將軍」を省略した可能性もある、とのご教示をお二人にいただいた。いずれにしても、国府多賀城と関わりの深いかなり身分の高い人物の所持品が長いこと大事に使用され、保管された後、灰白色火山灰降灰後の10世紀前半頃になってから、破損したので西1道路E期東側溝に廃棄されたことになる。貴重な出土例となった。

【F期】F期西側溝よりロクロ土師器内黒環・甕、須恵系土器小皿（90・91）・环（98）、平瓦などの破片が出土した。平瓦には多賀城跡政府第III期の平瓦II B類（6）、政府第IV期の平瓦II C類（15）などがある。

なお、D期～F期の間としてしか捉えられない遺物に、ロクロ土師器环、須恵系土器环などの破片がある。

【SX1350 西1道路跡路面I構築土（整地層I）】（第12・13図、表4、図版11）

路面I構築土（整地層I）は、今回の調査区内で検出した西1道路跡路面のほぼ全面にわたって検出したものである。新旧関係は路面を斜めに横断する奈良時代集落跡のSD3050西辺区画溝より新しく、路面I、西1道路跡D西側溝、西1道路跡C東側溝、SX10114砂層よりも古い（第13図）。北限は南1西1道路跡交差点近く、南限はSD3050区画溝の南約1mまで、南北約12m、東西約3mに及ぶと推定される。深さは路面上面より50cm前後で、底面は凸凹している。堆積土は3層に分かれ、下層より黒褐色シルト土、オリーブ黒色シルト土、暗灰黄色シルト質砂で、いずれも地山大～小ブロックを多量に含む。土壤を連続的に掘削した後に人為的に埋め戻されていることから、交差点近くの路面を改良したものとみられる。

出土遺物は少数で、ロクロ土師器内黒環・内黒甕・甕、須恵器环・蓋・甕、製塙土器などの破片の他、円盤状土製品（第37図5）がある。このうち須恵器环にはヘラ切り無調整で底径8.0cmと大きいもの（第32図57）や底径6cm前後のもの、須恵器蓋には切り離し不明で天井部回転～ラケズリのものがある。後者のヘラ切りの須恵器环や蓋は多賀城跡基準資料からみて、9世紀前半頃に位置付けられ、ロクロ土師器内黒環・甕は多賀城跡周辺では8世紀末以降に普及する。

新旧関係からみて道路C期以前のものであること、今回の調査で確認した路面Iが旧調査の路面Iに相当し、旧調査の路面Iが9世紀前半頃の道路A・B期に対比されること、出土遺物が9世紀前半頃までに限定されることから、路面I構築土（整地層I）は道路A・B期の造営と判断される。

【SX1350 西1道路跡路面II構築土（整地層II）】（第12・13図、表4）

西1道路路面上で部分的に検出した整地層である。新旧関係は路面I構築土（整地層I）よりも新しく、SX10114砂層、路面III構築土（整地層III）よりも古い。黄灰色シルト～細粒砂で、灰白色シルト、地山ブロックの混層で、人為的に整地されている。

出土遺物は少数で、ロクロ土師器（甕）、須恵器（甕・环）などの破片がある。このうち須恵器环にはヘラ切り無調整のものがある。

【SX1350 西1道路跡路面III構築土（整地層III）】（第12・13図、表4）

西1道路路面上、路面Ⅰ構築土（整地層Ⅰ）の上に部分的に盛土した整地層である。SX10114 砂層よりも新しく、西1道路跡F西側溝よりも古い。暗灰黄砂質シルトで、地山粒を多く含み、人為的に整地されている。

出土遺物は少数で、ロクロ土師器（壺・甕）、須恵器（壺・甕・壺）、須恵系土器（大型台付鉢）などの破片がある。このうちロクロ土師器内黒環には底部回転糸切り無調整で、内面放射状ミガキのもの（第34図85）、須恵器壺には底部回転糸切り無調整のもの、底部手持ちヘラケズリのもの、ヘラ切り無調整のものがある。85のロクロ土師器内黒環や回転糸切り無調整の須恵器壺は、多賀城跡基準資料からみて、9世紀後半頃に位置付けられる。須恵系土器大型台付鉢も9世紀第4四半期頃に出現するので、10世紀代には入らない9世紀後葉頃やそれ以前の9世紀前半頃の土器片とみられる。

【SX10114 砂層（イベント堆積物）】（平面図：第11図、断面図：第13図、表4、写真図版：図版11）

南1西1道路跡交差点より南側約10mの位置で、平面形が南北に長い不整楕円形（約3.1m×2.0m）、深さ約25cmの浅い皿状の窪みに自然堆積した砂層を検出した。底面は凸凹で、堆積土は下層が細粒砂、上層が粗砂の逆級化構造をなす。層中には黒褐色泥質の偽礫が散見される。下位が整地層Ⅰ・Ⅱ、上位が整地層Ⅲに挟まれた自然堆積砂層であることから、河川から溢れ出した洪水などにより路面が抉られ、砂層が自然堆積したものとみられる。この砂層については第7章で検討する。

新旧関係は、路面Ⅰ構築土（整地層Ⅰ）、路面Ⅱ構築土（整地層Ⅱ）よりも新しく、路面Ⅱ、路面Ⅲ構築土（整地層Ⅲ）よりも古い。

遺物は出土していないが、9世紀前半頃の路面Ⅰ構築土（整地層Ⅰ）・路面Ⅱ構築土（整地層Ⅱ）よりも新しく、9世紀後葉頃の路面Ⅲ構築土（整地層Ⅲ）よりも古いくことから、9世紀中頃～後葉頃のものとみられる。

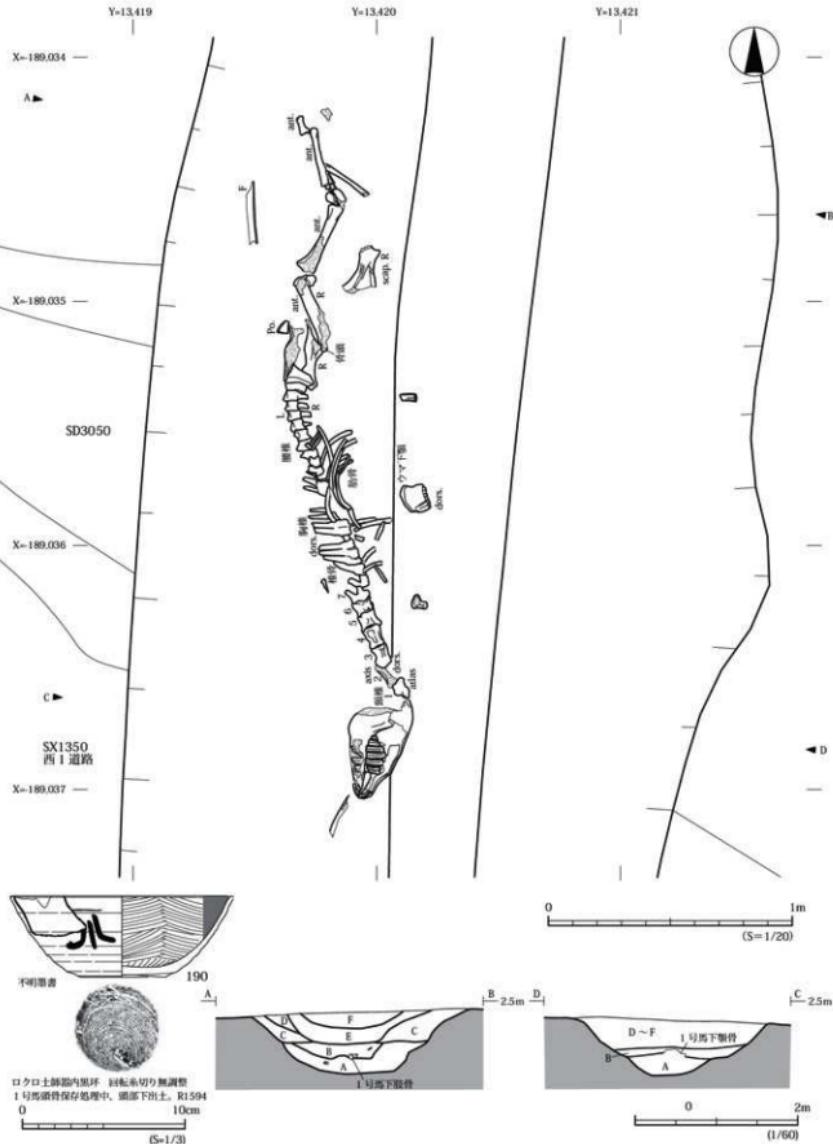
【SX1350 西1道路跡A東側溝上面出土の1号馬】（平面図：第14図、写真図版：図版9）

南1西1道路跡交差点の南東コーナーより南に約15m（第8図）、西1道路跡A東側溝上面より前両足、後右足、多くの肋骨などを欠くものの、それ以外の骨の大部分をほぼ原位置で残した状態で、馬1頭が出土した（第14図、図版9）。

M3犬歯萌出完了、C犬歯萌出開始の段階と見られることから、4歳前後のオスで、大腿骨最大骨長320mmから体高約110cmと推定される。

頭を北、足を南にし、頭骨は第2頸椎でねじれて頭を後ろにそらし、胸部は側溝長軸と平行に、後ろ左足も胴体とほぼ平行になるよう後ろにそらした不自然な状態である。遺存していない前両足、後右足、多くの肋骨などは確認されず、骨化した後で流出したものと考えられる。各部位は比較的大きなブロック単位でみると揃っている。頭部は打ち欠き痕跡が認められず、革鞣しに使う脳漿を取り出されていなかった。また、各部位では解体を示すカットマークも見当たらない。死後、解体されず、皮も剥がされていなかったものと推定される。この状況から、この馬は解体されずに西1道路A東側溝に投げ込まれたか、不慮の事故などによって側溝内に落ち込んだものとみられる。

ただし、通常とは異なる不自然な姿勢の出土状態であることから、西1道路A東側溝の中に納まる



第14図 西1道路跡A 東側溝出土1号馬平面・断面図

ようするため、死亡してから死後硬直が始まる前に前足・後脚・首を胴体と平行になるように伸ばしてこの側溝に投げ込まれたか、肉・筋肉が腐ってから動いた可能性も考えられる。

頭骨・歯・四肢骨は残りが比較的よいものの、他の骨の残りは悪い。そのため東北歴史博物館に依頼し、保存科学担当学芸員の及川規氏が頭部を土ごと仮に保存処理しながら取り上げ、他の部位の骨は平面図・写真で記録して取り上げた。取り上げた1号馬頭骨は及川氏と同担当の芳賀文絵氏がその後にクリーニングして保存処理した。

クリーニングの最中に頭骨の下から出土したのが、第14図190に図示したロクロ土師器内黒坏である。回転糸切り無調整だが、一度回転糸切りによる切り離しに失敗して作り直した「底部円柱作り」で、2度目に成功している。口径14.9cm、底径5.4cm、器厚5.0cm、底径／口径比0.362だが、最初に切り離した際は底径5.8cm、底径／口径比0.389とさらに大きい。内面底部は粗い放射状ミガキで、9世紀後葉～10世紀前半頃の放射状ミガキに比べて幅広で粗い。回転糸切り無調整のロクロ土師器内黒坏は、貞觀11年(869)陸奥国大地震後に陸奥国内で主体を占めるようになるが、この前の9世紀中葉頃にも少數含まれる。この土器は底部の大きさとミガキのあり方からみて、その直前の9世紀中葉頃のものとみられる。これが1号馬とSX1350西1道路A西側溝の年代決定資料となる。

【SX1350西1道路跡の時期】

これまでの多賀前地区発掘調査では、西1道路跡については、A・B期を9世紀前半、C期を9世紀後半、D期を10世紀前半～中頃、E・F期を10世紀後半頃と年代的位置付けしている(宮城県教育委員会1996b)。

今回の発掘調査でもC期の道路側溝などから回転糸切り無調整の須恵器坏、回転糸切り無調整で内面放射状ヘラミガキされたロクロ土師器内黒坏が出土し、これらが多賀城跡基準土器群からみて9世紀後葉頃に位置付けられることから、C期は貞觀11年(869)陸奥国大地震の復興期のものとみてよいだろう。E・F期に須恵系土器小皿が含まれることから、E・F期についてもこれまでと同様に10世紀後半頃とみてよい。A～C期のいずれかが貞觀地震発生時に機能していた時期となるが、1号馬直下の回転糸切り無調整のロクロ土師器内黒坏(第14図190)からみて、A期とB期の境に貞觀地震が発生し、1号馬が含まれるB期側溝がその頃の堆積物である可能性もある。1号馬の不自然な出土状況と付章3の珪藻分析結果は、これに関連した犠牲馬の可能性を示唆している。

(3) SD1020 遺り水遺構、SD10061 連結溝、SK2298 大土壙

旧調査で検出してSD1020 遺り水遺構、SK2298 大土壙の延長箇所を検出し、両者を連結するSD10061 連結溝を新たに検出した。この他、埋没したSD1111 旧河川跡上面を遺り水関連遺構の造営直前に整地したSX2121 整地層、SD1020A 遺り水遺構を覆うSX10233 砂層も検出した。

【SD1111 旧河川跡】(平面図:第17図、断面図:第18図)

北西から南東に向けて蛇行しながら南流する河川跡で、その下位でさらに古いSD2112 河川跡を検出している。上端幅最大20m以上、底面幅6m以上と幅広い河川だが、深さは最大35cmと浅い。堆積土は黒・黄褐色粘土で、流れの少ない淀んだ状況下で堆積したものと旧調査では推定している。旧調査では遺物は出土しなかったが、今回の調査でも出土していない。

SD1111 河川跡は、流域内で検出された古代の遺構のいずれよりも古く、古代の地山面となっている。古代の遺構の検出状況からみて、南1西2区の区画が成立した当初にはほとんど水が流れない埋没河川跡となっていたとみられ、上面の窪みは湿地状になっていたものと考えられる。

【SX2121 整地層】（平面図：第17図、断面図：第18図）

SD1020 造り水遺構を造営するための整地で、SD1111 河川跡の流域範囲とほぼ重複する。層厚は河川跡中央部で最も厚く、約10cm 程残存する。地山ブロックが多く混入する黒・黒褐色土で埋め戻しており、上面には基本層位Ⅲ a 層の黒褐色土が堆積している。遺物は、旧調査でロクロ土師器・須恵器破片が少数出土した。今回の調査ではロクロ土師器内黒坏、土師器甕、須恵器坏・甕などの破片が少数出土した。このうちロクロ土師器内黒坏には底部手持ちヘラケズリで内面底部平行ミガキのもの、須恵器坏にはヘラ切り無調整のものがある。いずれも9世紀前半頃のものであり、SD1020A 造り水遺構の造営年代を示す。

【SD1020 造り水遺構】（平面図：第5～7・15～17図、断面図：第18図、写真図版：図版5・15・16）

●旧調査の見解

旧調査では鉤手状に屈曲して南流するSD1020溝を総長約110mの検出し、北半部ではほぼ同位置で3時期（SD1020A→SD120B→SD1020C）の変遷を確認した。旧調査でのSD1020 造り水遺構の調査成果（宮城県教育委員会1995・1996b）を整理すると、以下のようになる。

なお、各期の年代的位置付けは、考察編の『山王遺跡IV』（宮城県教育委員会1996b）の第2章第2節の中で、SD1020溝の変遷を記した箇所と南1西2区の時期区分をした箇所で多少のずれがある。（ ）内が前者の年代観で、異なる点はSD1020A溝の終末（SD1020B溝の開始）年代とSD1020C溝の存続年代である。南1西2区全体の遺構期を検討した後者の見解が今回の調査結果からみても妥当とみられるため、ここでは後者の見解に沿ってまとめた。

《SD1020A 造り水遺構》 9世紀初頭頃～9世紀前葉（9世紀初頭頃～9世紀前半頃）。南1西2区画のB1期（9世紀前葉）に相当する。屈曲を6回繰り返しながら南流するSD1020A溝、及び水量調整施設とみられるSK2051・2298 大土壙からなる。南1西2区の区画が成立した9世紀初頭頃に、埋没したSD1111 旧河川跡流域内を整地（SX2121）した後に造営された。南1西2区の区画北端中央やや西よりから南に向け、東方向に屈曲を繰り返しながら南に流れ、区画内南半部では逆に西に屈曲してからさらに南に向けて流れ、SX1300 南1道路跡方向に向かっている。南延長は未調査で状況不明である。屈曲部は6箇所あり、2番目の屈曲部の近くにSK2051 大土壙、5番目の屈曲部の近くにSK2298 大土壙がある。

《SD1020B 造り水遺構》 9世紀中葉～10世紀前半代（9世紀前半～10世紀前半代）。南1西2区画のB2期（9世紀中葉）、B3期（9世紀後葉）に相当する。屈曲を5回繰り返しながら南流するSD1020B溝からなり、伴う大土壙の有無は不明である。北半部ではSD1020A溝がほぼ同位置で改修され、中央南寄りでそれまでのSD1020A溝の方向を大きく変えて東に屈曲し、SX1250 西1道路跡方向に向かっている。東延長は未調査で状況不明である。屈曲部は5箇所ある。これに伴う大土壙は検

出されていない。SD1020B 溝の中位には 10 世紀前葉に陥没した灰白色火山灰の一次堆積層やそのブロックが認められ、この溝の機能時の年代の一点を示す。

《SD1020C 遺り水遺構》 10 世紀前半代（10 世紀中頃～10 世紀後半代）。南 1 西 2 区画の B 4 期（10 世紀前半代）に相当する。屈曲を 5 回繰り返しながら南流する SD1020C 溝、及び水量調整施設とみられる 4 番目の屈曲部近くの SK1021 大土壙からなる。SD1020B 溝をほぼ同位置で改修したものだが、2 番目の屈曲部には南北方向の溝が新たに掘削され、接続している。

●今回調査の見解

今回の調査では、調査区北端部にあたる橋脚 P 71 北側の確認調査区から橋脚 P 71 の本発掘調査区にかけて、SD1020A 溝の南半部を検出し、これに伴う SK2298 大土壙の西半分、及び両者を連結する SD10061 連結溝を新たに検出し、橋脚 P 71 の本発掘調査区を精査した。その概要は以下のとおりである。

【SD1020A 遺り水遺構】（平面図：第 17 図、断面図：第 18 図、写真図版：図版 15・16）

SD1020A 溝、SK2298 大土壙、両者を繋ぐ東西方向の SD10061 連結溝からなる。また、SK2298 土壙と SD10061 連結溝の上面では、SX10233 砂層を新たに検出し、さらにその産んだ上部に基本層 III a 層が厚く堆積し、III a 層が III a1 層、III a2 層、III a3 層、III a4 層に細分された。

【SD1020A 溝】（平面図：第 17 図、断面図：第 18 図、写真図版：図版 15・16）

旧調査の仙塩道路本線部分で検出した北側の SD1020A 溝と、南側の旧調査の側道部分で検出した SD1020A 溝の間を今回調査したものだが、検出箇所の北半部では新旧 2 時期あることを新たに確認し、SD1020B・C 溝の 5 番目の屈曲部から南に 3.5 m の位置で、北北西から南流して Y 字形に合流する SD1020A（古）溝を新たに検出した。旧調査ではここで合流した西側の溝は検出していない。

なお、今回の調査の南延長にあたる旧調査の側道部分の調査では、図示された平面図（宮城県教育委員会 1995、第 165 図）を検討すると、ほぼ同位置で重複する古い段階の溝があり、ここでも新旧 2 時期ある可能性が高い。また、南東に向かう屈曲部から東に向かう箇所にあたる SD1020B・C 溝の延長も検出した。

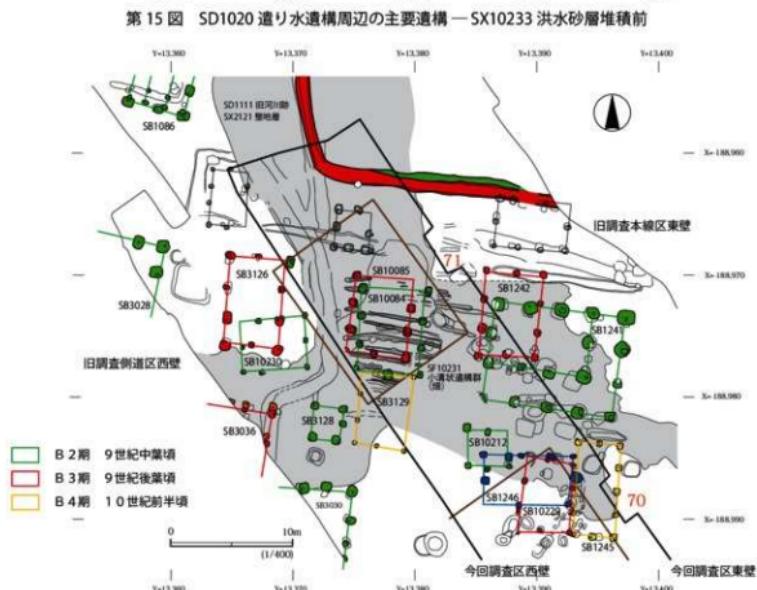
【SD1020A（古）溝】上幅 0.8～1.2 m、下幅 0.7～0.8 m、深さ 40cm 前後で、断面形は逆台形状を呈する。上部にしまりのあまりない黒褐色粘質シルト土、下部に壁際崩壊土が自然堆積している。

【SD1020A（新）溝】上幅 1.0～1.3 m、下幅 0.5～0.7 m、深さ 40cm 前後で、断面形は逆台形または「U」字状を呈する。しまりのあまりない黒褐色粘質シルト土が自然堆積している。

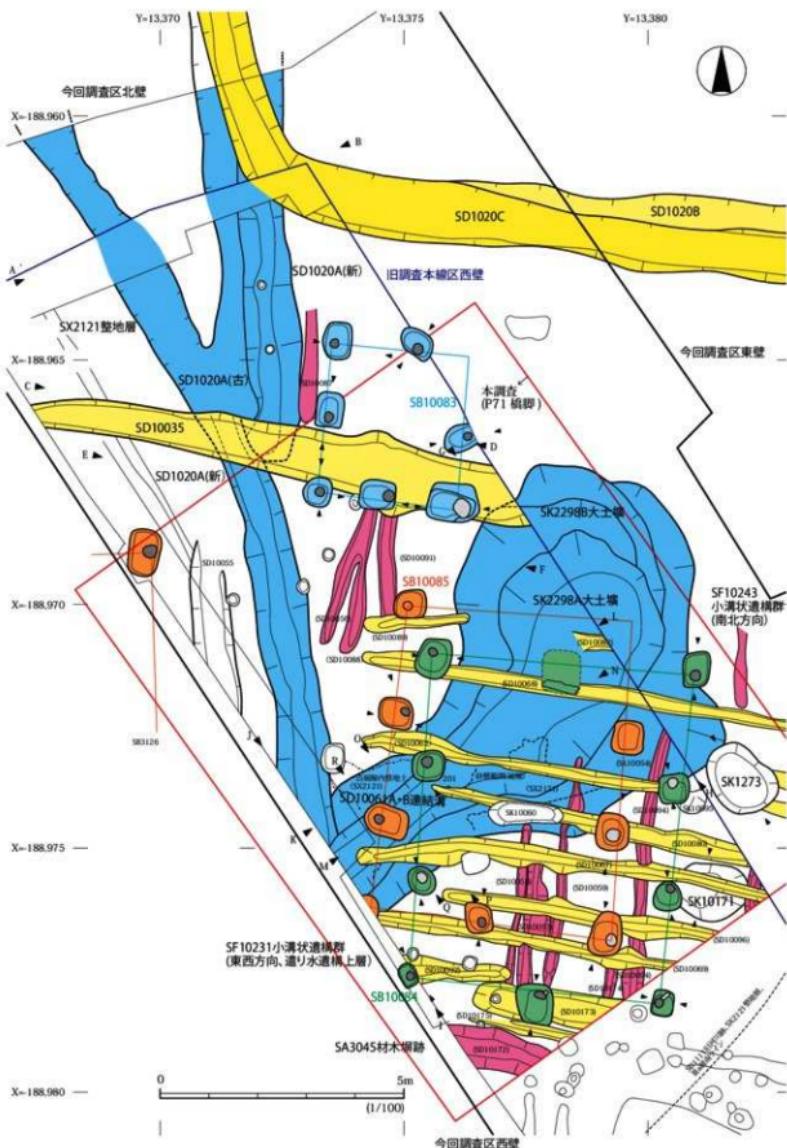
今回の調査では、SD1020A 溝から非ロクロ土師器内黒有段壺・壺・甕、ロクロ土師器内黒壺・甕、須恵器壺・高台壺・蓋・鉢・壺・広口壺・甕などの破片が出土した（第 27 図 1～6）。このうちロクロ土師器内黒壺にはヘラ切り後に体下部～底部回転ヘラケズリのもの（1）、体下部～底部手持ちヘラケズリのもの、須恵器壺にはヘラ切り後に体下部回転ヘラケズリのもの（2）、ヘラ切り無調整のもの（3・4・6）などがあり、いずれも底径が大きく、9 世紀前葉頃のものである。

今回の調査では、調査区北端部において SD1020B・C 溝も一部検出した。

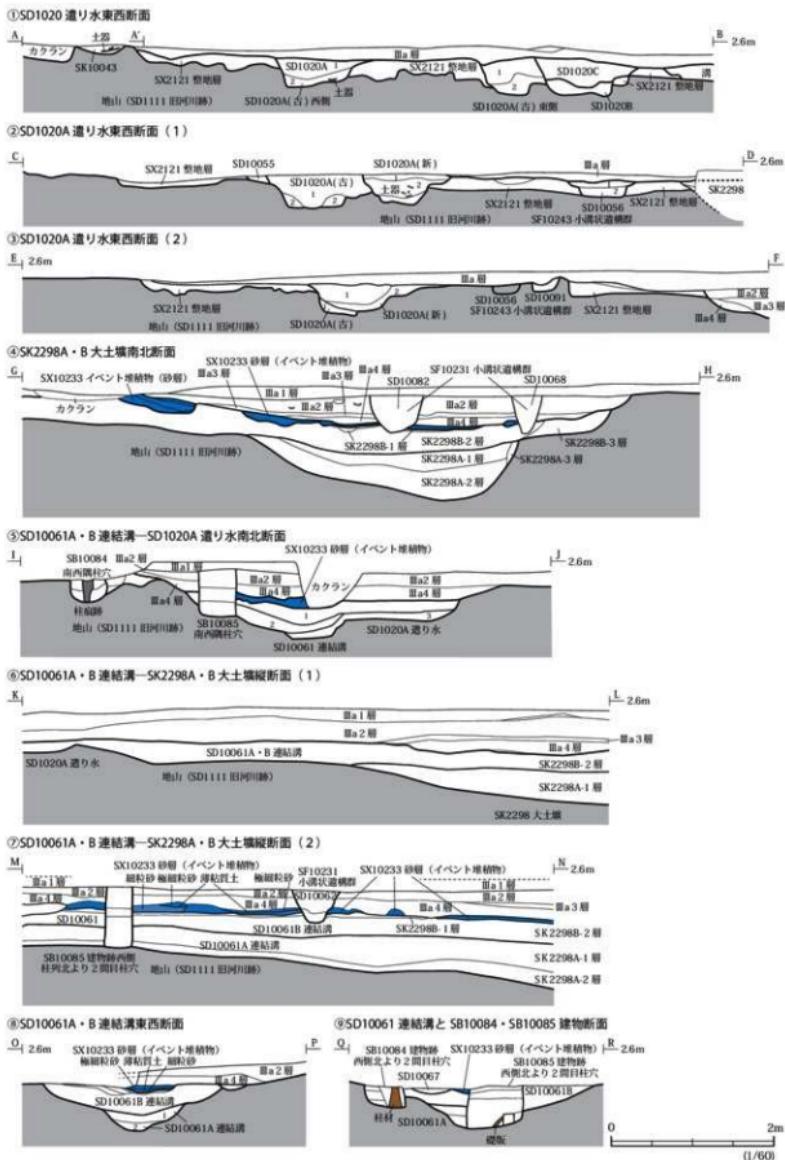
【SD1020 B 溝】



第15図 SD1020 造り水遺構周辺の主要遺構 — SX10233 洪水砂層堆積前



第17図 SD1020 造り水、SK2298 大土壤、SD10061 連結溝、SB10083・10084・10085 挖立柱建物跡平面図



第 18 図 SD1020 違り水、SK2298A・B 大土壤、SD10061A・B 連結溝断面図

遺構・層位	土色	土性	その他の特徴
基本層	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	炭(φ 2mm前後)、白色炭灰粒を多く含む。9世紀の土器跡・須恵器部を含み、須恵系土器を含まない。基本層とa層に対応。
	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	土塊(φ 0.2~0.5cm)、土片混を多く含む。洪水砂堆积後、SK2298大土壌の伴みに自然堆積。
	黒褐色 (7.5YR2/2)	粘質シルト	遺物はほとんど含まれない。鉄分が比較的したまかや赤みがあり、硬い。洪水砂堆积後、SK2298 大土壌の伴みに自然堆積。
	黒色 (7.5YR2/1)	粘質シルト	洪水砂堆积後、SK2298大土壌の伴みに自然堆積。
SX10233砂層 (イベント堆積物)	灰褐色 (10YR5/2)	砂質	厚さ5~10cm、下部が灰褐色(10YR5/2)細砂粒、中層が灰色(5mm)灰褐色(10YR5/1)粘質土。上部が灰褐色(10YR5/2)細砂粒層。下部から上部に向かって細かくなる細化構造をなす。
SD1020A (新溝)	黒色 (7.5YR2/- ~7.5YR2/1)	粘質シルト	粘性ややあり。しまりあまりない。
	黒色 (7.5YR2/2- ~7.5YR2/1)	粘質シルト	地山起源の灰褐色 (7.5YR5/2) 粘質シルトブロック(φ 1~6cm)を多く含む。
	黒色 (7.5YR3/1)	シルト	地山起源の灰褐色 (7.5YR5/1) 細砂ブロック(φ 2~5cm)を多く、灰褐色 (7.5YR4/2) 粘土ブロック (φ 0.5~4cm)を含む。
SD1020A (古溝)	黒色 (7.5YR2/1)	シルト	粘性ややあり。しまりあまりない。
	黒褐色 (7.5YR3/1)	シルト	灰褐色 (10YR5/1) 細砂ブロック (φ 2~5cm)を多く含む。
SD1020B溝	黒褐色 (7.5YR3/1)	シルト	灰褐色 (10YR5/1) 細砂ブロック (φ 2~5cm)を多く含む。
SD1020C溝	黒色 (7.5YR2/1)	シルト	粘性ややあり。しまりあまりない。
SK2298A土壌	黒褐色 (10YR3/2)	粘土	下部に早成期の根など肥料を多く含む。SD10061-3層と共通。
	黒褐色 (10YR3/2)	粘土	1層と同様だが、スクエ化。SD10061-4層と共通。
	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	堅軟の土壌層。地山(φ 0.5~1cm)、灰褐色 (10YR5/3) 細砂シロッパ(φ 1~4cm)・砂質(φ 1~2mm)を多く含む。
SK2298B土壌層	黒色 (10YR2/1)	粘土	洪水砂層の分布範囲で分布し、その直下にある厚さ1cmの黑色粘土薄層。SD10061-1層と共通。
	黒褐色 (7.5YR3/1)	粘土	SD10061-2層と共通。
	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	堅軟の土壌層。地山(φ 0.5~1cm)、灰褐色 (10YR5/3) 細砂シロッパ(φ 1~4cm)・砂質(φ 1~2mm)を多く含む。
SD10061A連続溝	黒褐色 (10YR3/2)	粘土	下部に堅軟な根などの肥料を多く含む。SK2298A-1層と共通。
	黒褐色 (10YR3/2)	粘土	上層と同様だが、スクエ化。SK2298A-2層と共通。
SD10061B連続溝	黒色 (10YR2/1)	粘土	SD1022洪水砂層の分布範囲に分布し、その直下にある厚さ1cmの黑色粘土薄層。SK2298B-1層と共通。
	黒褐色 (7.5YR3/1)	粘土	SD1022洪水砂層と共通。
SD10055溝	黒褐色 (7.5YR2/2)	粘質シルト	地山(φ 1cm)、風化度度まではに変化。しまりあまりない。
SD10056溝	黒褐色 (10YR3/2)	粘質シルト	堅軟岩盤を軽く叩くと簡単に剥落する。
SD10062溝	黒褐色 (10YR3/1)	粘土	地山(φ 1cm)、風化度度まではに変化。しまりややあり。
	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	地山(φ 1cm)、風化度度まではに変化。しまりややあり。
SD10067溝	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	地山(φ 1cm)、風化度度まではに変化。しまりあまりない。
	黒褐色 (7.5YR3/1)	粘質シルト	地山(φ 1cm)、風化度度まではに変化。しまりややあり。
SD10082溝	黒褐色 (7.5YR3/1)	粘質シルト	地山(φ 1cm)、風化度度まではに変化。しまりややあり。
	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山(φ 1cm)、風化度度まではに変化。しまりややあり。
SK10043土壌	黒褐色 (7.5YR3/1)	シルト	地山(10YR4/6)シルトブロック(φ 2~6cm)を含む。
SX2121整地層	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山(φ 1cm)、風化度度まではに変化。SD1020A 酒匂川堆積物と重複する。SD11101田町の土を含む。

表5 第18図掲載SD1020遭り水道機関連断面図土層観察表

上幅 1.0 m 前後、下幅約 0.7 m、深さ 40cm 前後で、断面形は逆台形または「U」字状を呈する。灰褐色細砂ブロックを含む黒褐色粘質シルト土が自然堆積している。

旧調査では「堆積土は黒褐色粘質土の自然堆積土からなり、堆積土の中位には灰白色火山灰の1次堆積層が認められる」と記載されている。

【SD1020 C溝】上幅 1.0 ~ 1.2 m、下幅 0.8 m、深さ 30cm で、断面形は逆台形または「U」字状を呈する。しまりのあまりない黒色粘質シルト土が自然堆積している。旧調査では、「上層が溝廃絶後に堆積した黒・黒褐色粘質土（基本層位Ⅱ層）、下層が灰白色火山灰粒を少量含む黒褐色粘質土の自然堆積土からなる」と記載されている。

今回の調査では、非クロコ土師器壺、ロクロ土師器内黒环・内黒鉢・鉢・小型壺・甕、須恵器環・小型壺・甕・甕、須恵系土器環（第27図8・9）・高台環・鉢などの破片や非クロコ土師器环転用の漆バレットが出土した。このうち須恵器環にはヘラ切り無調整のもの、回転糸切り無調整のもの（第27図4）がある。この世紀後半からこの世紀前半までの土器群は現在までのところ見つかっていない。

【SK2208 十十據】(平面圖：第 13 圖、斷面圖：第 18 圖、寫真圖點：圖版 15 - 16)

旧調査の仙塩道路本線部分の本発掘調査で、東半分をすでに調査していた大土壌で、今回、その西半分を橋脚P-71の本発掘調査にて検出し、掘れしきを。

SB10084-10085 素物路 SK1272-10060 土塘 SD10035 满 SE10231-10243 小满江嘴横群 (细)

跡)、SD1111 河川跡、SX2121 整地層、SX10233 イベント堆積物(砂層)、基本層Ⅲ a4 層と重複し、SF10231 小溝状遺構群(烟跡)、SD1111 河川跡、SX2121 整地層よりも新しく、SB10084・10085 建物跡、SK1273・10060 土壌、SD10035 溝、SF10243 小溝状遺構群(烟跡)、SX10233 イベント堆積物(砂層)、基本層Ⅲ a4 層よりも古い。

平面形は北東から南西に向けて長い不整な楕円形状である。新旧2時期(SK2298A 大土壌→SK2298B 大土壌)あり、古いSK2298A 大土壌に暗緑灰色粘土層が自然堆積して埋没した後に、周囲を全体的に浅く拡幅して新しいSK2298B 大土壌を構築している。SD1020A 溝との間をSD10061 連結溝で連結し、連結箇所に向けて撥状にすばまる。SD1020A 溝に新旧2時期[SD1020A(古)溝→SD1020A(新)溝]、SD10061 連結溝に新旧2時期(SD10061A 連結溝→SD10061B 連結溝)であることから、

SD1020A(古)溝=SD10061A 連結溝=SK2298A 大土壌

SD1020A(新)溝=SD10061B 連結溝=SK2298B 大土壌

が対応することになる。

《SK2298A 大土壌》

当初の大土壌で、規模は長さ約5.5m、幅約3.5mで、深さは最大1.2mある。堆積土は自然堆積層で、3層に細分される。1・2層は最大層厚35~40cmの暗緑灰色粘土層で、下層はスクモ化している。南壁際の3層は、黒褐色粘質シルト土に地山砂ブロックを多く含む壁際崩壊土である。

《SK2298B 大土壌》

SK2298A 大土壌が埋没した後、周囲を全体的に浅く掘って拡張した大土壌である。規模は長さ約7.5m、幅約6.5mと規模が大きくなるが、深さは最大35cmと浅くなる。堆積土は自然堆積土で、3層に細分される。下層が層厚30cm前後の黒褐色粘土層、上層が層厚2cmと薄い黒色粘土層で、南壁際には黒褐色粘質シルト土に地山砂ブロックを多く含む壁際崩壊土が堆積している。

SK2298A・B 大土壌の出土遺物(第27図10~13)は以下のとおりである。ロクロ土師器内黒坏、須恵器坏の特徴からみて、9世紀前半頃のものと判断される。

〔SK2298A 大土壌〕ロクロ土師器内黒坏、須恵器坏・壺・甌などの破片や円盤状土製品(第37図3)が出土した。このうちロクロ土師器内黒坏には底部手持ちヘラケズリで内面平行ミガキのもの、須恵器坏にはヘラ切り無調整のもの(第27図11・13)がある。

〔SK2298B 大土壌〕ロクロ土師器内黒坏・鉢、須恵器坏などの破片が出土した。このうちロクロ土師器内黒坏には体下部~底部手持ちヘラケズリで内面平行ミガキのもの(第27図10)、須恵器坏にはヘラ切りのもの(第27図12)がある。

【SD10061 連結溝】(平面図: 第17図、断面図: 第18図、写真図版: 図版15・16)

西側のSD1020A 溝と北東側のSK2298 大土壌とを連結し、北東側のSK2298 大土壌から南西側のSD1020A 溝に向けて流れる溝である。

新旧2時期(SD10061A 連結溝→SD10061B 連結溝)あり、新旧2時期のSK2298 大土壌(SK2298A 大土壌→SK2298B 大土壌)、SD1020A 溝[SD1020A(古)溝→SD1020A(新)溝]にそれぞれ対応

する。埋没したSK2298B 大土壌・SD10061B 連結溝上面がSX10233 イベント堆積物（砂層）に覆われている。

規模は、古いSD10061A 溝が上幅1.0m以上、深さ50cm、新しいSD10061B 溝が上幅2.5m、深さ35cmで、新しいSD10061B 溝が幅広く、浅くなっている。このことは、SK2298B 大土壌がSK2298A 大土壌を浅く拡幅して改修していることに対応している。堆積土もSK2298A・B 大土壌とそれぞれ共通している。

SD10061B 溝1層からは、ロクロ土師器内黒環・甕、須恵器环・壺・甕などの破片が少数出土した。このうち須恵器环には、ヘラ切り無調整のもの、静止糸切り後に体下部～底部を持ちヘラケズリしたものがある。いずれも9世紀前半頃のものである。

【SX10233 砂層（イベント堆積物）】（平面図：第17図、断面図：第18図、写真図版：図版15・16）

SK2298B 大土壌、SD10061B 連結溝に最上層の黒褐色粘質土が自然堆積し、SK2298B 大土壌、SD10061B 連結溝が埋没した時点で、中央は周囲より10～40cm 窪んでいた状況がうかがえた。そして、この窪んだ上面にSX10233 砂層が長さ約6m、幅約3mの範囲に層厚10cm前後で自然堆積している。下面是凹凸した不整合面で、直下の黒褐色粘質土層との境は明瞭で、急激な堆積環境の変化を示す。このSX10233 砂層は、残りのよい箇所では0.5～1cm程の薄い褐灰色粘質土（暗色帶）を挟んで3層に細分される。下部砂層は灰黄褐色細粒砂で、上部砂層は灰黄褐色極細粒砂で、全体として上層に向かって細粒化する正級化構造を示す。この級化構造は複数ユニットではなく、単一のユニットからなる。中部の褐灰色粘質土薄層は、この一連の砂層が堆積する短い時間幅の中での堆積環境の変化、すなわち比較的の静穏な小休止期の存在を示唆している。

この層からは遺物は出土していない。

SX10233 砂層の上位には、基本層Ⅲa層が4層（Ⅲa4層、Ⅲa3層、Ⅲa2層、Ⅲa1層）に細分されながら自然堆積している。灰白色火山灰の降灰は、Ⅲa1層とⅢa2層の間とみられ、Ⅲa4層からの出土土器は9世紀後半頃までのものに限定される。

こうした一連の堆積状況からみて、SX10233 砂層が自然堆積した前には、SD1020A 遺り水遺構〔SD1020A（新）溝、SD10061B 連結溝、SK2298B 大土壌〕はほとんど機能していなかったこと、つまりSD1020B 遺り水遺構の時期にこの砂層が短期間のうちに自然堆積した可能性のあることがうかがえる（第15・16図）。

そして、SX10233 砂層はSK2298A 大土壌、SD1020A（新）溝、SD10061 連結溝が埋没した9世紀前半よりも新しく、基本層Ⅲa4層の年代（9世紀後半）よりも古いくことになる。したがって、SX10233 砂層は9世紀後半の中でも古い頃、すなわち9世紀中葉～後葉にかけて位置付けられることになる。このSX10233 砂層については、第7章で検討する。

（4）掘立柱建物跡

南1西1区では旧調査ですでに検出していた掘立柱建物跡7棟を構成する柱穴を再検出または新たに検出した他、新たに掘立柱建物跡5棟を検出した。検出した掘立柱建物跡は計12棟となる。

以下の事実記載は、旧調査で検出していた建物跡を先に、その後に今回の調査で検出した建物跡を

記し、それぞれ遺構登録番号順に記すこととする。

●旧調査で検出していた掘立柱建物跡7棟 (SB1241・1242・1245・1551・3126・3129・3135)

【SB1241 掘立柱建物跡】(平面図:第7・16・20図、出土遺物:第28図)

南1西2区の南東部に位置する。東西4間、南北3間の南・東廂付の東西棟で、同位置で一度建て替えられている(SB1241A→B)。橋脚P70と橋脚P71の間の今回の確認調査区内に身舎の南西隅柱穴、南側廂の南西隅柱穴、西より1間目・2間目柱穴が位置する。これらの柱穴は旧調査ですでに検出しており(宮城県教育委員会1996a、p.178、第141図)、確認調査箇所なのでそれ以上の調査は行わなかった。

今回の調査では柱穴より回転糸切り無調整のロクロ土師器内黒環・甕、ヘラ切り無調整の須恵器环(第28図24)、多賀城跡第II期の平瓦ⅡB類などの破片が出土した。

【SB1242 掘立柱建物跡】(平面図:第7・16図)

南1西2区の南東部に位置する。今回の調査区内に、南西隅柱穴、西側柱列の北より2間目・3間目柱穴、南妻棟通り下柱穴が位置するが、これらの柱穴は旧調査ですでに検出していた。これらは今回の調査で橋脚P71と橋脚P70の間の確認調査の対象範囲なので、それ以上の調査を行わなかった。

【SB1245 掘立柱建物跡】(平面図:第7・16・20図、断面図:第20図)

南1西2区の南東部に位置する。旧調査ですべての柱穴を検出していた桁行4間、梁行2間の南北棟である(宮城県教育委員会1996a、p.179、第141図)。今回の調査で橋脚P70の本発掘調査区などにかかる南西部の柱穴4箇所(南西隅柱穴、西側柱列北より1・2間目柱穴、南妻棟通り下柱穴)を再検出した。

今回の調査では、掘方からロクロ土師器内黒環・甕、須恵器环・甕などの破片が出土した。土師器环は静止糸切後に体下部～底部が手持ちヘラケズリ、内面が平行ミガキされたもので、9世紀前半頃のものである。須恵器环には9世紀後半頃の回転糸切り無調整のものがある。

【SB1246 掘立柱建物跡】(平面図:第7・16・20図)

南1西2区の南東部に位置する。橋脚P70の本発掘調査区とその周囲の確認調査区に位置する。旧調査で東妻と北側柱列の一部、計6箇所の柱穴を検出していたが、今回の調査区で南西隅柱穴以外の南西部の柱穴を検出したことにより、桁行3間、梁行2間の東西棟建物跡と判明した。

SB10229 建物跡、南北方向のSF2260 小溝状遺構群(畑跡)と重複し、SF2260 小溝状遺構群よりも新しく、SB10229 建物跡よりも古い。東に近接するSB1245 建物跡は、これがSB10229 建物跡よりも新しいため、SB1245 建物跡よりも古いことが明らかである。また、SB10212 建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

これまでの調査を併せると、平面規模は桁行が北側柱列で総長7.2m、柱間寸法が西より3.0m、4.2m(2間分、平均2.1m)、梁行が東妻で4.0m、柱間寸法が北より1.7m、2.3mである。方向は東妻でみると北で東に約3°偏する。柱穴は短辺34～60cm、長辺50～80cmの隅丸長方形または一辺50～60cmの隅丸方形を基調とし、残存する深さは20cm前後で、掘方埋土は地山の細砂・シルト土ブロックを多く含む黒褐色粘質シルト土である。柱痕跡は径16cm前後の円形で、堆積土は黒褐

色粘質シルトである。

今回の調査では、柱穴より回転糸切り無調整のロクロ土師器内黒環・甕、ヘラ切り無調整の須恵器环、須恵系土器环などの破片が出土した。

【SB1551 掘立柱建物跡】(平面図:第8・9図)

南1西2区の南東部に位置する。橋脚P 69の本発掘調査区とその周囲の確認調査区内、西1南1道路交差点の北西コーナー近くに位置する。旧調査で南西隅柱穴を除くすべての柱穴を検出していた(宮城県教育委員会 1996a, p.180、第170図)。今回の調査で新たに南西隅柱穴を検出し、西側柱列と南妻の柱穴5箇所を再検出した。その結果、桁行3間、梁行2間の南北棟建物跡であることが確定した。

今回の調査では、南西隅柱穴の掘方から非ロクロ土師器甕、ロクロ土師器内黒環・甕、須恵器环・甕など、柱痕跡からロクロ土師器内黒環・甕、須恵器环などの破片が出土した。掘方出土土器片のうち、土師器环には体下部～底部手持ちヘラケズリのもの、須恵器环にはヘラ切り無調整のもの、回転糸切り後に底部手持ちヘラケズリされたもの、回転糸切り無調整のものがある。回転糸切り無調整の須恵器环は9世紀後半頃のもので、その他の土師器・須恵器环は9世紀前半頃のものである。

【SB3126 掘立柱建物跡】(平面図:第7・16・17図、断面図:第19図)

南1西2区の南東部にあり、橋脚P 71北側の確認調査区内、SD1020A遺り水屈曲部西側に位置する。桁行3間、梁行2間の南北棟で、旧調査ですべての柱穴を検出していた(宮城県教育委員会 1996a, p.174・176、第165図)、今回の調査で北東隅柱穴を再検出した。

今回の調査では北東隅柱穴から非ロクロ土師器有段环、ロクロ土師器内黒環・甕、ヘラ切り無調整の須恵器环など、柱痕跡からロクロ土師器甕、須恵器环などの破片が出土した。

【SB3129 掘立柱建物跡】(平面図:第7・16・20図)

南1西2区の南東部にあり、橋脚P 71の本発掘調査区とその南側の確認調査区内、SD1020A遺り水屈曲部東側に位置する。旧調査で南妻と西側柱列を検出していた建物跡だが、旧調査報告書では事実記載ではなく、平面図のみ断片的に図示されている(宮城県教育委員会 1996a、平面図p.218第168図)。東側柱列1・2間目柱穴、北西隅柱穴、北妻棟通り下柱穴を検出してないものの、今回の調査で北東隅柱穴を検出し、桁行3間、梁行2間の南北棟建物跡とみられる。

SB10084 建物跡南妻棟通り下柱穴と本建物跡北妻棟通り下柱穴が重複し、本建物跡の柱穴が検出できなかったため、SB10084 建物跡よりも古いと推定される。SI10037 竪穴住居跡と重複し、新旧関係を明確にしえなかつたが、他の住居跡と建物跡との関係を考慮すると、この住居跡よりも新しいと推定される。

平面規模は、桁行が西側柱列で総長推定 5.7 m、柱間寸法が北より 1.7 m (推定)、2.0 m、2.0 m、梁行が南妻で 4.2 m、柱間寸法が西より 1.8 m、2.4 m と推定される。方向は西側柱列でみると北で東に約 5°偏する。柱穴は一辺 40cm 前後の隅丸方形または短辺 30cm 前後、長辺 40cm 前後の隅丸長方形を基調とし、掘方埋土は地山灰オーリーブ砂質土ブロックを含む黒褐色・黒色シルト土の互層である。柱痕跡は径 16cm 前後の円形で、堆積土は黒褐色粘質シルトである。

【SB3135 掘立柱建物跡】(平面図:第7・15図)

橋脚 P 71 北側の確認調査区内、SD1020A 遺り水西側に位置する。旧調査で検出していた桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟建物跡で（宮城県教育委員会 1996a,p.174,p.215）、今回の調査区北端に一部かかる。

●今回の調査で新たに検出した掘立柱建物跡 5 棟（SB10083・10084・10085・10212・10229）

【SB10083 掘立柱建物跡】（平面図：第 7・15・17 図、断面図：第 19 図、出土遺物：第 37・38 図、写真図版：図版 21）

南 1 西 2 区の南東部にあり、橋脚 P 71 の本発掘調査区内とその北側の確認調査区に位置する。SD1020 遺り水と SK2298 大土壙の間の空闊地に位置する桁行 2 間、梁行 2 間の南北棟建物跡である。新旧関係は、SX1221 整地層より新しく、SD10035 東西溝よりも古い。

北東隅柱穴と北妻棟通り下柱穴は旧調査区内で検出し、この他の柱穴を新たに検出した。旧調査区内の排水溝で掘削され、遺存していない北東隅柱穴を除くすべての柱穴を検出したことになる。柱穴の検出面は SX1221 整地層上面である。南東隅柱穴で柱抜取穴、その他の柱穴で柱痕跡を検出した。

平面規模は、桁行が西側柱列で総長 3.0 m、柱間寸法が北より 1.5 m、1.5 m、梁行が南妻で 2.9 m、柱間寸法が西より 1.4 m、1.5 m である。方向は西側柱列でみると北で東に約 6° 傾する。柱穴は短辺 50 ~ 60cm、長辺 70 ~ 80cm の隅丸長方形を基調とし、残存する深さは 35 ~ 55cm である。埋土は地山の細砂・シルト土ブロックを多く含む黒褐色粘質シルト土である。柱痕跡は径 16cm 前後の円形で、堆積土は黒褐色粘質シルトである。東側柱列中央柱穴で柱材と礎板、南妻棟通り下柱穴で柱材の一部と柱痕跡の脇に縦に添えられていた竹を検出した。

遺物は掘方埋土から非ロクロ土師器甕、ロクロ土師器内黒坏・甕・鉢、須恵器坏・甕・壺などの破片、方形容器蓋板ないし底板（第 19 図 19）、提げ砥石（第 19 図 3）が出土した。このうち須恵器坏には 9 世紀前半頃のヘラ切り無調整のものがある。

【SB10084 掘立柱建物跡】（平面図：第 7・16・17 図、断面図：第 18・19 図、出土遺物：第 28・35 図、写真図版：図版 21）

南 1 西 2 区の南東部にあり、橋脚 P 71 の本発掘調査区内に位置する。SD1020A 遺り水の東側、SK2298 大土壙と重複して検出した桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟建物跡である。SX1221 整地層、SK2298 大土壙上面ですべての柱穴を検出した。

北妻棟通り下柱穴は SK2298 大土壙の調査途中で気が付いたため、掘方底面近くで礎板を検出したのみであった。東側柱列の北より 1 間目柱穴で柱抜取穴、西側柱列の北より 2 間目柱穴で柱柱切取穴と柱材を検出し、残り柱穴すべて柱痕跡を確認した。また、西側柱列の北より 1 間目柱穴と同 2 間目柱穴、北西隅柱穴、南東隅柱穴では柱材が一部遺存していた。

新旧関係は、SX1221 整地層、SK2298 大土壙、SX10233 砂層、SD10062・10068・10173・10092 東西溝、基本層Ⅲ a2 層・Ⅲ a3 層・Ⅲ a4 層よりも新しく、基本層Ⅲ a1 層よりも古い。また、SB10085 南北棟建物跡と重複し、どちらかが位置をずらした建て替えとみられるが新旧関係は不明である。

平面規模は、桁行が西側柱列で総長 6.7 m、柱間寸法が北より 2.3 m、2.3 m、2.1 m、梁行が南妻で 5.2 m、柱間寸法が西より 2.7 m、2.5 m である。方向は西側柱列でみると北で東に約 4° 傾する。柱穴は

短辺 40 ~ 70cm、長辺 50 ~ 80cm の隅丸長方形を基調とし、残存する深さは 25 ~ 55cm で、掘方埋土は地山の細砂・シルト土ブロックを多く含む黒褐色粘質シルト土である。柱痕跡は径 18cm 前後の円形で、堆積土は黒褐色粘質シルトである。東側柱列北より 2 間目柱穴、南東隅柱穴、西側柱列北より 1・2 間目柱穴、北西隅柱穴には柱材が一部残り、南西隅柱穴、南東隅柱穴、西側柱列北より 2 間目柱穴には礎板が敷かれていた。

遺物は掘方からロクロ土師器内黒坏・甕、須恵器坏・甕・壺、須恵系土器大型台付鉢、製塙土器、多賀城跡政府第IV期の平瓦II C類（第35図9）など、柱痕跡からロクロ土師器坏・甕・壺（第28図25）、須恵器坏・甕など、柱抜取穴から須恵器蓋、柱穴からロクロ土師器甕、須恵器坏、須恵系土器坏などの破片が出土した。

掘方出土の土師器坏には9世紀後半～10世紀前半頃の回転糸切り無調整のもの、9世紀前半頃の底部回転ヘラケズリのもの、体下部～底部回転ヘラケズリのもの、体下部～底部手持ちヘラケズリのもの、須恵器坏には9世紀前半頃のヘラ切り無調整のもの、9世紀後半頃の回転糸切り無調整のものがある。

甕（25）は陸奥国府多賀城跡の城内・城外では少ない器種で、これは底部が「ハ」字状に外に開き、受け口状となる無底式の体下部～底部破片である。

【SB10085 挖立柱建物跡】（平面図：第7・16・17図、断面図：第18・19図、出土遺物：第35・37図、写真図版：図版21）

南1西2区の南東部にあり、橋脚P71の本発掘調査区内に位置する。SD1020A造り水の東側、SK2298大土壤、SX10223砂層と重複して検出した桁行3間、梁行2間の南北棟建物跡である。SX1221整地層、SK2298大土壤上面ですべての柱穴を検出した。SK2298大土壤の掘り下げ途中で存在に気が付いたため、北東隅柱穴と北妻棟通り下柱穴は検出できなかった。その他の柱穴はすべて検出し、北西隅柱穴、西側柱列の北より1間目柱穴、南妻棟通り下柱穴で柱痕跡、西側柱列の北より2間目柱穴、南東隅柱穴で柱抜取穴を検出した。また、西側柱列の北より2間目柱穴で礎板を検出した。

新旧関係は、SX1221整地層、SK2298大土壤、SD10061連結溝、SX10233砂層、SD10080・10094東西溝、基本層IIIa2層・IIIa3層・IIIa4層よりも新しく、基本層IIIa1層よりも古い。また、SB10084南北棟建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平面規模は、桁行が西側柱列で総長 6.2m、柱間寸法が北より 2.2m、2.3m、1.7m、梁行が南妻で 5.0m、柱間寸法が西より 2.3m、2.7m である。方向は西側柱列でみると北で東に約 7° 傾する。柱穴は短辺 50 ~ 70cm、長辺 70 ~ 100cm の隅丸長方形または一辺 60cm の隅丸正方形で、残存する深さは 30 ~ 70cm で、掘方埋土は地山の細砂・シルト土ブロックを多く含む黒褐色粘質シルト土である。柱痕跡は径 18cm 前後の円形で、堆積土は黒褐色粘質シルトである。

遺物は掘方からロクロ土師器内黒坏・高台坏・甕、須恵器坏・甕、須恵系土器大型台付鉢、製塙土器、多賀城跡政府第IV期の平瓦II C類（第35図10）などの破片、柱抜取穴からロクロ土師器内黒坏、円盤状土製品（第38図2）、柱痕跡からロクロ土師器坏・甕、須恵器甕、製塙土器、柱穴からロクロ土師器内黒坏・甕、須恵器坏・甕・壺などの破片が出土した。このうち掘方出土のロクロ土師器内黒坏には底部手持ちヘラケズリのもの、須恵器坏にはヘラ切り無調整のもの、回転糸切り無調整のものが

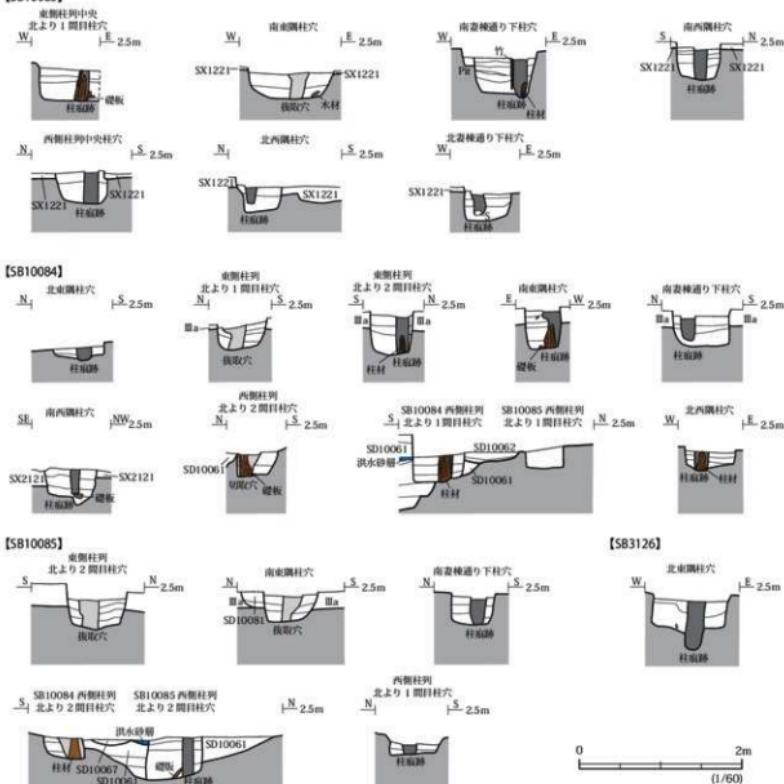
ある。調整のわかる壺のうち、回転糸切り無調整の須恵器壺が9世紀後半頃のもの、それ以外のロケ口土師器内里壺、須恵器壺は9世紀前半頃のものである。

【SB10212 掘立柱建物跡】(平面図: 第7・16・20図)

南1西2区の南東部にあり、橋脚P 71と橋脚P 70の間の確認調査区内に位置する。桁行2間、梁行1間の東西棟建物跡である。旧調査区の排水溝内に位置する北東隅柱穴以外の5箇所の柱穴を検出し、うち2箇所（南東隅・南西隅柱穴）で柱痕跡を確認した。

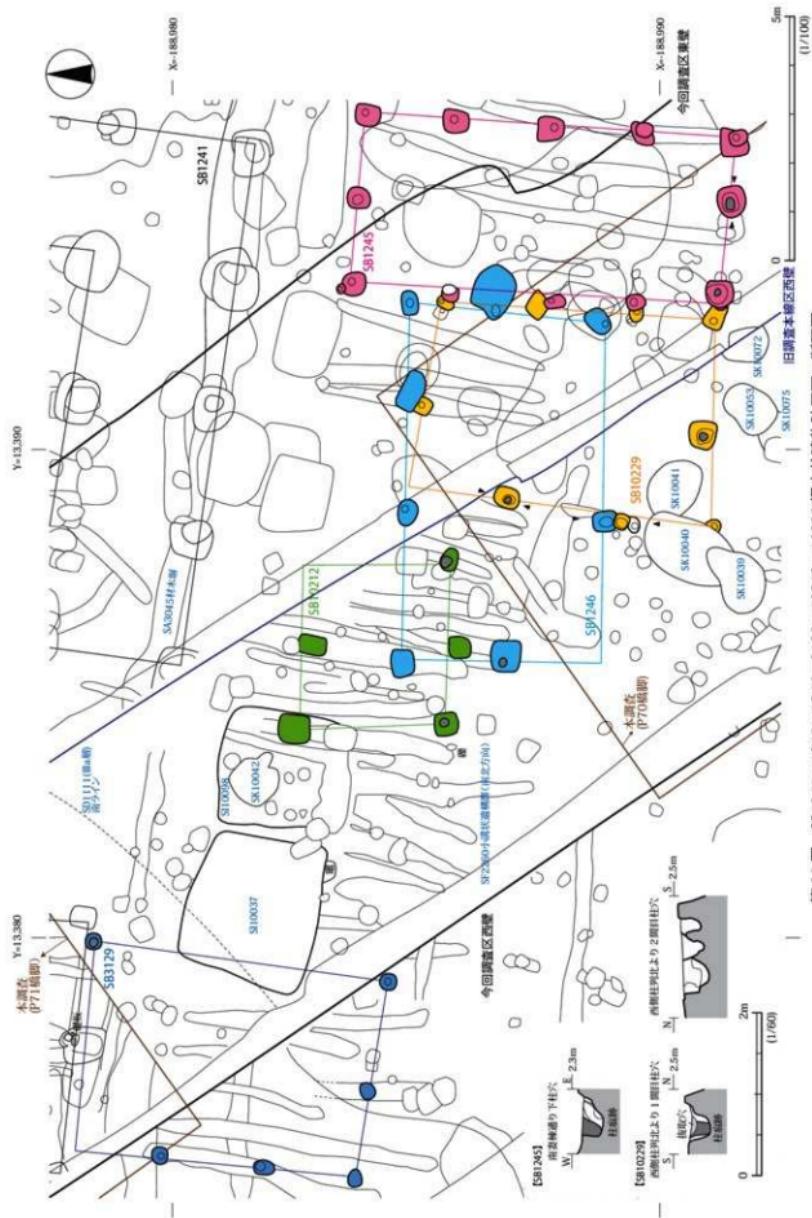
SI10098 穫穴住居跡、南北方向の SF2260 小溝状遺構群(畝跡)と重複し、これらよりも新しい。また、SB1246 建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平面規模は、桁行が南側柱列で総長 3.2 m、柱間寸法は 1.6 m 等間（推定）、梁行が西妻で約 3.0 m である。方向は西側柱列でみると北で西に約 2° 傾する。柱穴は一辺 40～60cm の隅丸正方形、また



第19図 SB3126・10083・10084・10085 据立柱建物跡断面図

第20図 SB1241・1245・1246・3129・10212・10229根立柱遺物坑平面・断面図



は短辺40cm前後、長辺50～60cmの隅丸長方形で、掘方埋土は地山細砂・シルト土ブロックを多く含む黒褐色粘質シルト土である。柱痕跡は径18cm前後の円形で、堆積土は黒褐色粘質シルトである。掘方よりロクロ土師器甕、9世紀前半頃のヘラ切り無調整の須恵器環・甕などの破片が出土した。

【SB10229 堀立柱建物跡】(平面図: 第7・16・20図、断面図: 第20図)

南1西2区の南東部にあり、橋脚P70の本発掘調査区とその周囲の確認調査区に位置する桁行3間、梁行2間の南北棟建物跡である。旧調査区内、土壤で壊された北西隅柱穴を除く9箇所すべての柱穴を検出した。

SB1245・1246 建物跡、SK10040 土壤と重複して、SB1246 建物跡よりも新しく、SB1245 建物跡、SK10040 土壤よりも古い。

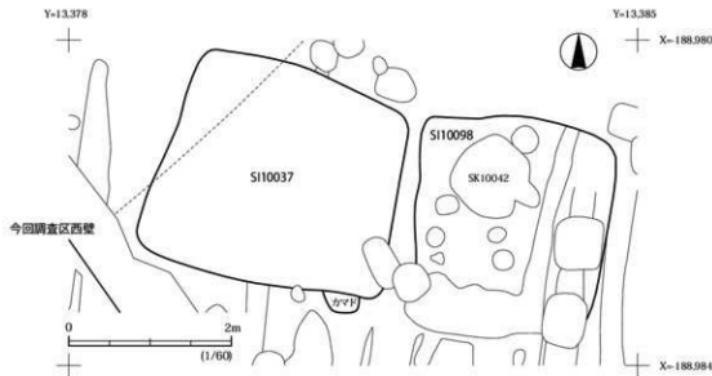
平面規模は、桁行が東側柱列で総長5.6m、柱間寸法は北より4.0m(2間分)、1.6mで、梁行が南妻で総長4.1m、柱間寸法は西より1.8m、2.3mである。方向は東側柱列でみると北で東に約4度偏する。柱穴は一辺40～60cmの隅丸正方形、または短辺40cm前後、長辺50～60cmの隅丸長方形で、掘方埋土は地山灰オリーブシルト土ブロックを含む黒褐色シルト土である。柱痕跡は径18cm前後の円形で、堆積土は黒褐色粘質シルトである。

柱穴からロクロ土師器内黒環・甕、須恵器環・甕・壺、須恵系土器環などの破片が出土した。これには体下部～底部手持ちヘラケズリのもの、回転糸切り無調整のものがある。前者は9世紀前半頃、後者は9世紀後半～10世紀前半頃のものである。

(5) 竪穴住居跡

南1西2区では竪穴住居跡4軒(SI10037・10098・10099・10186)を新たに検出した。このうち、橋脚箇所にかかるSI10186竪穴住居跡の一部のみを本発掘調査し、残りは確認調査箇所なので掘り下げなかったので、詳細は不明である。

【SI10037 竪穴住居跡】(平面図: 第7・20・21図、出土遺物: 第28図)



第21図 SI10037・10098 竪穴住居跡平面図

橋脚 P 71 と橋脚 P 70 の間の確認調査区に位置する。東に近接する SI10098 竪穴住居跡と同時に存在しないが、重複がないため新旧関係は不明である。また、SB3129 建物跡と重複するが、この箇所での遺構検出作業が不十分であり、新旧関係を明確にできなかった。他箇所での竪穴住居跡はいずれも掘立柱建物跡よりも古いため、本住居跡も SB3129 建物跡よりも古い可能性が高い。

平面規模は東西が南辺で 3.1 m、南北が西辺で 2.6 m の隅丸長方形である。カマドは南に付設されている。

住居内堆積土上面（検出面）より回転糸切り後に底部周縁を持ちヘラケズリされたロクロ土師器内黒坏（第 28 図 21）、ヘラ切り無調整の須恵器坏（第 28 図 22）が出土している。いずれも多賀城跡及び城外の出土例からみて 9 世紀前半頃に位置付けられ、本住居跡が 9 世紀前半以前であることが知られる。南 2 西 1 区の旧調査で検出した唯一の竪穴住居（SI3052）も 8 世紀代に位置付けられており、本住居も 8 世紀代である可能性が高い。

【SI10098 竪穴住居跡】（平面図：第 7・20・21 図）

橋脚 P 71 と橋脚 P 70 の間の確認調査区に位置する。西に近接する SI10037 竪穴住居跡と同時に存在しないが、重複がないため新旧関係は不明である。SK10042 土壌と重複し、これよりも古い。平面規模は東西が北辺で 2.4 m、南北が東辺で 2.3 m 以上の隅丸長方形である。カマドは南に付設されているとみられるが、確認調査のため平面検出のみに留め、新しい土壤などに南辺が壊されていたため、詳細は不明である。遺物は出土していない。

【SI10099 竪穴住居跡】（平面図：第 8・22 図、出土遺物：第 29 図 38）

橋脚 P 70 と橋脚 P 69 の間の確認調査区に位置する。SK10103・10104 土壌と重複し、これらよりも古い。

平面規模は東西が北辺で 3.7 m、南北が東辺で 3.5 m の隅丸長方形である。カマドは東に付設されている。南半部は貼床まで削平を受け残りが悪い。カマド内より非ロクロ土師器小型壺（第 29 図 38）が出土した。

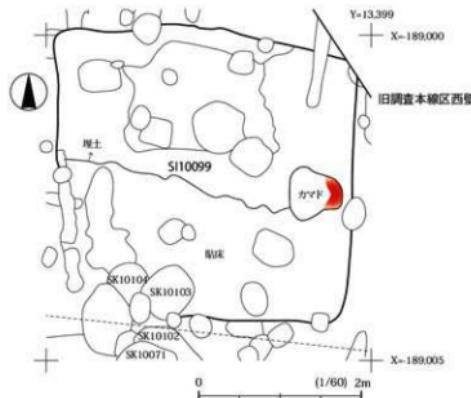
【SI10186 竪穴住居跡】（平面図：第 8・9・23 図、断面図：第 23 図、写真図版：図版 17 上）

橋脚 P 70 と橋脚 P 69 の間の確認調査区、西 1 南 1 道路交差点近くの南 1 道路跡のすぐ北側に位置する。SD2298 溝（西 1 道路跡よりも古い東西方向区画溝）と重複し、これよりも新しい。床面下まで削平を受けていたため残りがきわめて悪く、周溝とカマドの一部などが残存するにすぎない。カマドは東辺中央南よりに付設され、煙出しピットが東側に残ることから、煙道が長く伸びる在地タイプと考えられる。平面規模は東西が北辺で 2.8 m、南北が東辺で 3.1 m の隅丸長方形である。壁際には幅 20cm 前後、深さ 8cm 前後の周溝が巡る。遺物は出土していない。

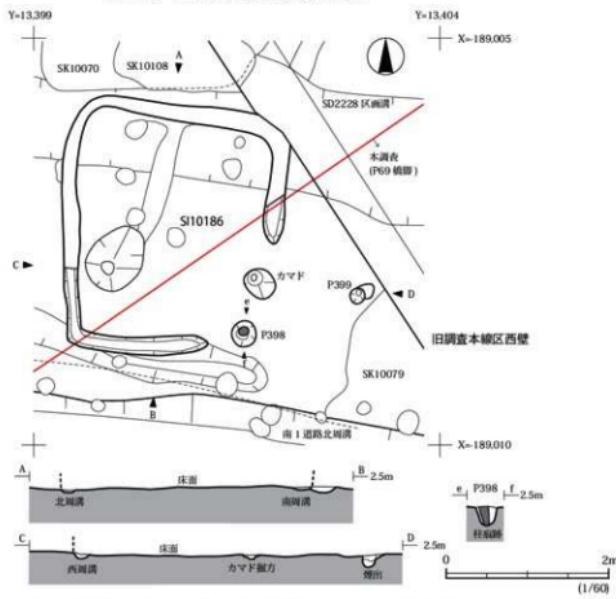
（6）横位合口土師器壺棺墓

【SX10090 横位合口土師器壺棺墓】（平面図：第 9・24 図、断面図：第 24 図、出土遺物：第 31 図、写真図版：図版 20・35）

南 1 西 1 道路跡交差点の南西コーナーから南西約 1.5 m に位置し、南 2 西 2 区の北東隅にあたる。掘方は平面形が南北約 1.1 m、東西約 0.4 m の長楕円形で、上部が削平されていたため、残存する深



第22図 SI10099 穫穴住居跡平面図



第23図 SI10186 穫穴住居跡平面図・断面図

遺構・部位	土色	土性	その他の特徴
SI10186	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	鉄分・地山ブロックを多く含む。炭化物・鉄土粒子を少量含む。
	褐色	砂質シルト	地山粒子・焼土粒子少くなく、炭化物(△ 10cm)を含む。
	1層 暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	地山ブロックを多く含む。炭化物を少額含む。
P398	2層 暗褐色(10YR4/4)	砂質シルト	地山ブロックを多く含む。
	3層 黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	地山ブロックを多く含む。
	柱洞跡	暗褐色(10YR3/3)	地山灰・マンゴーを少量含む。
柱洞跡	柱洞跡	暗褐色(10YR3/3)	地山ブロックを多く含む。
	掘方埋土	暗褐色(10YR3/3)	地山ブロックを多く含む。

さは 28cm であった。方位は長軸でみると北で東に約 4° 傾する。ロクロ土師器長胴甕と非ロクロ土師器長胴甕を底部が外側になるように対向させ、その間に焼成前に底部と水平方向に体下部を切り落としたロクロ土師器長胴甕の 3 点を横位に連結させた甕棺墓である。

長胴甕 3 点を 3 連結した甕棺の外側長は 91cm、内側長は 88cm、頭部や胸部にあたる位置にあたると思われる合口にした箇所の内径（長胴甕の口頸部内径）は 17.6cm である（第 31 図 52 の口頸部内径）。

甕棺墓に用いられた土師器長胴甕は、非ロクロ土師器が 1 点（第 31 図 54）、ロクロ土師器が 2 点（第 31 図 52・53）である。

このうち非ロクロ土師器長胴甕（54）は甕棺墓の南端部に用いられたもので、外面体上部～体下部が縦方向に手持ちヘラケズリされてから口縁部がヨコナデされ、内面は体上部～体下部が縦方向にナデされてから口縁部がヨコナデされている。口径 18.1cm、底径 9.6cm、高さ 29.6cm で、最大径は体上部にあり（19.8cm）、口頸部内径は 14.6cm である。

また、甕棺墓の北端部に用いられたロクロ土師器長胴甕（52）は、外面体上部が平行叩きされた後、体上部がロクロ調整され、その後に体下半部が縦方向に手持ちヘラケズリされ、内面はロクロナデされている。口径 23.8cm、底径 6.4cm、高さ 32.9cm で、最大径は口縁部にあり、口頸部内径は 17.6cm である。

甕棺墓中央に用いられたロクロ土師器長胴甕（53）は、外面体上部が平行叩きされた後、口頸部がロクロナデ、体上部～中央部が回転カキメされ、その後に体下半部が縦方向に手持ちヘラケズリされ、内面は体下半部が斜め縦方向に刷毛目されてから、横方向に回転カキメされている。その後、体下部を水平方向に切り落として整形してから、焼成されている。口径 23.4cm、体下部径 17.0cm、高さ 28.7cm で、最大径は口縁部にあり、口頸部内径は 18.0cm である。

非ロクロ土師器長胴甕とロクロ土師器長胴甕が共存し、ロクロ土師器長胴甕のロクロ調整前の叩き成形痕跡が残るという特徴から、8 世紀末～9 世紀前葉頃のものとみることができる。

中央部の長胴甕は焼成前に体下部～底部を水平に切り落としており、煮沸された痕跡はない。したがって、これは甕棺墓専用に製作されたものと判断される。両端の長胴甕も煮沸された痕跡はないので、甕棺墓専用に製作された可能性が高い。

横位合口土師器甕棺墓は長胴甕を 2 連結したものが主体を占める。その中にあって、この甕棺墓は長胴甕を 2 連結ではなく、3 連結することを当初より意図し、3 連結の甕棺墓中央部の部材として、底部を欠いたこの長胴甕を製作したものといえよう。その意味では、3 連結した全長 91cm という長さが甕棺墓の大きさとして必要とされたのかもしれない。一次埋葬、再葬の区別を考える上で重要な要件となる。

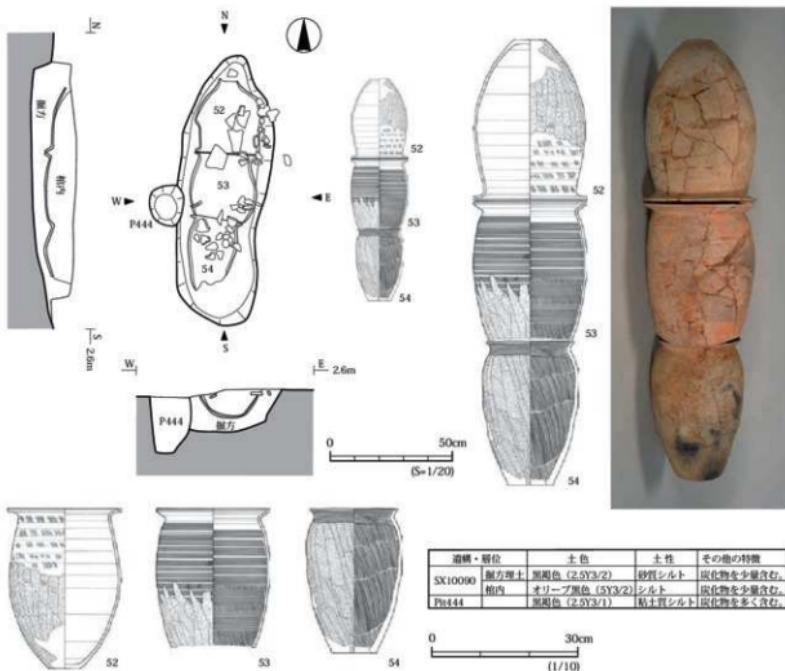
甕棺墓内部の土壤はすべて持ち帰り、4 mm、2 mm、1 mm の篩を用いながら水洗した後、肉眼で選別したところ、ヒトの幼児の乳歯小破片 156 点（うち乳白歯 17 点）、骨小破片 46 点を検出した。内訳は堆積土下部の 4 mm 篩で乳歯小破片 3 点（うち乳白歯 2 点）、堆積土の 2 mm 篩で乳歯小破片 67 点（うち乳白歯 11 点）、骨小破片 2 点、堆積土の 1 mm 篩で乳歯小破片 86 点（うち乳白歯 4 点）、骨小破片 44 点である。

付章2「山王遺跡多賀前地区 SX10090 横位合口土師器甕棺墓出土の乳歯」で詳細は記すが、東北大学歴学部鈴木敏彦准教授に乳歯小破片を同定・分析していただいたところ、4点を接合することができ、下顎右側第二乳臼歯、下顎左側第一乳臼歯、上顎左側第一大臼歯、下顎左側第一大臼歯と同定された。検討の結果、「本被葬者の死亡時年齢は、上限・下限ともに2歳(24か月)かそれよりもやや前に収束すると考えるのが妥当」で、この年齢ならば甕棺墓の中に一次埋葬されたものとみられる、と推定された。古代の横位合口土師器甕棺墓内からヒトの乳臼歯が検出されたのは初めてであり、貴重な出土例となった。

(7) 土壙

南西2区からはSK2298大土壙を除いて土壙25基を検出した。その多くは橋脚P70の本発掘調査区周辺で検出したものである。断面図を第26図に、検出位置、調査の区別(本発掘調査・確認調査)、平面図、断面図、新旧関係、規模(長径・短径・深さ)、形状、堆積土の区別(人為・自然)、出土遺物、年代を記した一覧表を表7に示し、事実記載に換える。

なお、これらの土壙のうちSK10063土壙からは黒漆塗りの頭巾が出土した(写真図版38下段)。



第24図 SX10090 横位合口土師器甕棺墓平面図・断面図

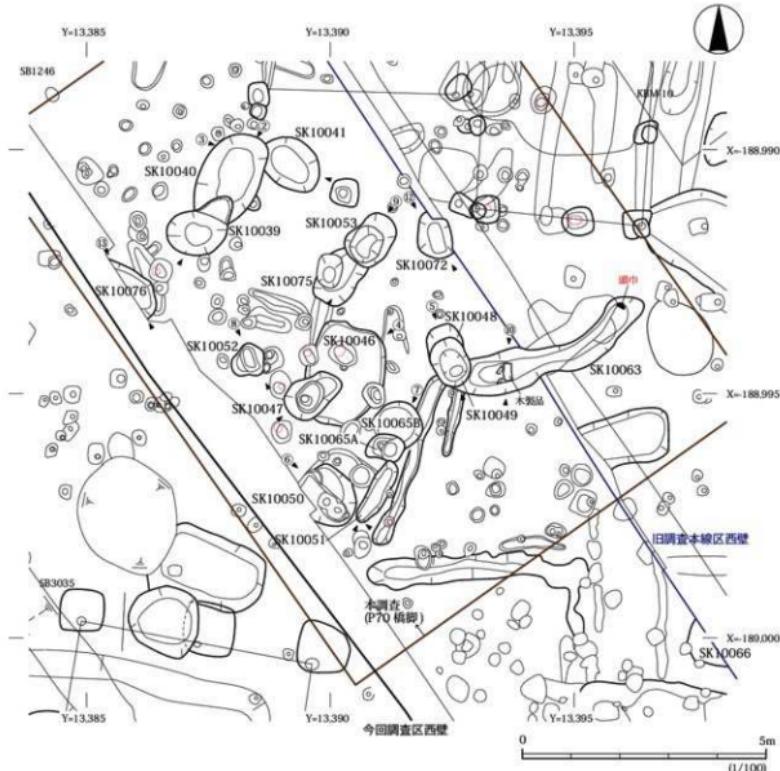
希少な出土例であり、注目される。残存幅 15.2cm、高さ 6.0cm で、半分程が残存し、頂部と裏半分程を欠いている。写真左下の上が黒漆塗りの表面、左下の下が内面で、それぞれ最下部が端部に近い。他に接合しない破片と縁部の断片が数点ある。内面は細布で漆塗りされていない。縁部は幅 5mm で、折り返されていたようであり、表面下部に幅 5mm の剥落痕跡が平行して残る。写真右下が底面での出土状況写真である。

(8) 小溝状遺構群（畝跡）

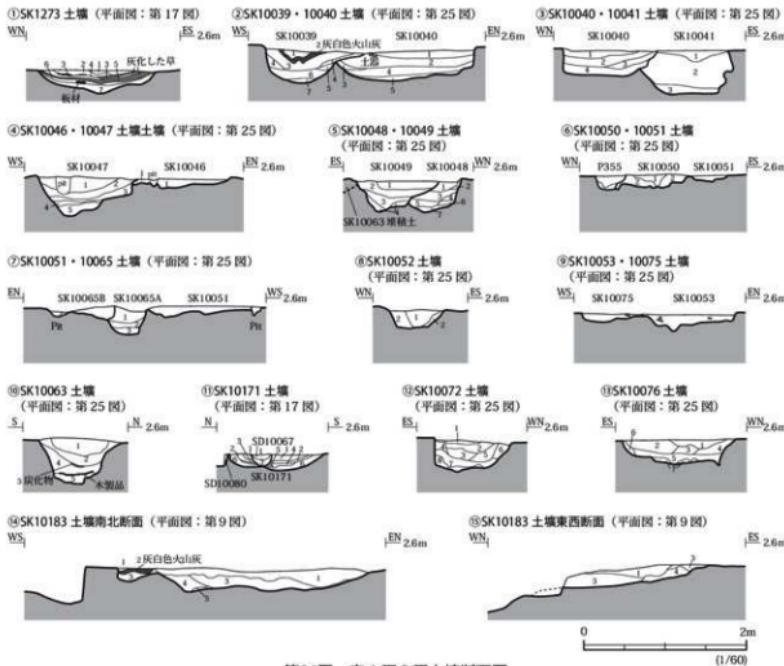
【SF2260 小溝状遺構群（畝跡）】（平面図：第 7・20 図）

旧調査側道部分と仙塩道路本線部分、今回の調査の橋脚 P 70 北側の確認調査箇所に位置し、古代の地山地山面や埋没した SD1111 河川跡上面で検出した。10 ~ 100cm 間隔で南北方向に平行する小溝状遺構群で、旧調査で 24 条、今回の調査で 20 条、計 44 条検出した。畝の歛跡とみられる。

SB1243・1245・1246・3128・3129・102124 建物跡と重複し、これらよりも古い。SI10037・



第 25 図 南 1 西 2 区 土壌平面図



第26図 南1西2区土壤断面図

通構・剖位	土色	土性	その他の特徴
① SK1273土壤	1層 始赤褐色 (SYR3/2)	シルト	第2面積。炭片 ($\phi 2mm$) を多く含む。
	2層 始赤褐色 (SYR3/2)	シルト	第2面積。地山粗鈍輪・ガス筋 ($\phi 1\sim 2mm$) に、赤褐色 (7 SYR5/3) 地山粘土ブロック ($\phi 2\sim 6mm$)・焼土ブロックを多く含む。
	3層 黒色 (10YR1.7/1)	粘質シルト	第2面積。鐵錆な炭粉末層 (炭化した草の茎・葉) 炭片を多く含む。層中に位に灰白色火山灰ブロックを帯状に含む。東部部分で際に $30\times 15cm$ の広さで深さ2cmの炭ブロックあり。
	4層 黑褐色 (7.5YR3/1)	粘質シルト	第1面積。
	5層 黑色 (10YR1.7/1)	粘質シルト	第1面積。3層と同じ。5層上部に灰白色に炭化した草木類あり。中に炭化した草の茎・葉を多く含む。
	6層 黑褐色 (7.5YR3/1)	粘質シルト	側方土上。4層と類似。細砂 ($\phi 1\sim 2mm$) に、赤褐色 (7 SYR5/3) 地山粘土ブロック ($\phi 2\sim 6mm$)を含む。黒褐色 (9.5YR3/1) 地山土ブロックを多く含む。
	7層 黑褐色 (7.5YR3/1)	粘質シルト	側方土上。6層と類似。地山粗研 ($\phi 1\sim 2mm$) を土体ににびい間隙 (7 SYR5/3) 地山土ブロック ($\phi 2\sim 4cm$)を多く含む。
② SK10039土壤	1層 暗褐色 (10YR4/1)	シルト	炭化物層 ($\phi 5mm$) と灰白色火山灰ブロック ($\phi 5mm$) を全体的にまばらに含む。しまりあり。自然堆積。
	2層 暗褐色 (10YR4/1)	火山灰	灰白色火山灰の堆積層。厚さ約5cm。
	3層 暗褐色 (10YR4/1)	シルト	やや粘りあり。全体に炭化物 ($\phi 5mm$)、灰白色火山灰ブロック ($\phi 5mm$) を全体的に多く含む。自然堆積。
	4層 暗褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	地山土ブロックが斜面に傾斜して流れ込もうように堆積する。自然堆積。
	5層 暗褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	粘土質シルト。粘性あり。炭酸・火山灰和・地山砂を多く含む。しまりややなし。自然堆積。
	6層 暗褐色 (10YR2/1)	粘土	しまりややない。地山土ブロックをわずかに含む。自然堆積。
	7層 暗褐色 (10YR2/2)	粘土	やや砂っぽい。自然堆積。
③ SK10040土壤	1層 灰褐色 (10YR4/2)	シルト	しまりあり。炭粉まばらに含む。白自然堆積。
	2層 暗褐色 (10YR4/1)	シルト	しまりあり。炭粉や地山土ブロックを地山 ($\phi 2\sim 3mm$) に含む。自然堆積。
	3層 暗褐色 (10YR2/1)	シルト	暗褐色地土と地山砂が混れ込もうにござる。しまりややなし。自然堆積。
	4層 黑色 (10YR2/1)	粘土質シルト	地山土ブロックや地山砂が薄削削にござる。しまりややなし。自然堆積。
	5層 黑色 (10YR2/1)	粘土質シルト	やや砂っぽい。地山砂が水平に堆積状にござる。しまりややなし。自然堆積。
④ SK10041土壤	1層 暗褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物層ばかり。地山土ブロック ($\phi 5mm\sim 3cm$) を全体的にまばらに含む。しまりややなし。自然堆積。
	2層 暗褐色 (10YR2/1)	粘土	地山土全體にマーブル状に多く含む。しまりややなし。自然堆積。
	3層 黑色 (10YR2/2)	シルト	炭粉まばら。しまりややなし。
⑤ SK10046土壤	1層 暗褐色 (10YR3/2)	シルト	にふる褐色 (10YR7/2) 地山土ブロックや炭化物層を全体的に多く含む。しまりあり。地山砂を多く含む。

表 6-1 第26図掲載土壤断面図観察表

10098 穫穴住居跡と重複するが、竪穴住居跡の上面が大きく削平されているため、新旧関係は不明確である。

検出長は最長約6mで、上幅20~50cm、深さ5~25cmで、断面形は「U」字状を呈する。方向は北東に約8°偏している。堆積土は黒褐色土である。遺物は堆積土中からロクロ土師器、須恵器が旧調査で少量出土している。

	遺構・層位	土性	土性	その他の特徴
④ SK10047土壌	1層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物片(φ5mm~1cm)をまばらに含む。しまりあり。自然堆積。	
	1層 にじ~黒褐色 (10YR4/3)	シルト	しまりあり。自然堆積。	
	2層 黑褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物片や山形層面ブロックを多く含む。しまりあり。斜めに流れ込むように堆積。自然堆積。	
	3層 黑褐色 (10YR3/4)	シルト	粘りあり。地山層ブロックをまばらに含む。しまりややなし。自然堆積。	
	4層 灰黒褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	粘土質シルト地山層ブロックを多く含む。しまりややなし。自然堆積。	
⑤ SK10048土壌	5層 黑褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	粘土質シルト地山層ブロックを多く含む。しまりややなし。自然堆積。	
	1層 黑褐色 (10YR2/3)	シルト	灰褐色山形層面ブロックを多く含む。しまりあり。自然堆積。	
	2層 にじ~黒褐色 (10YR5/3)	砂質シルト	しまりあり。地山地層ブロックがくっ付して入ったもの。自然堆積。	
	3層 黑褐色 (10YR3/3)	シルト	2層と同様。地山地層ブロックがくっ付して入ったもの。自然堆積。	
	4層 にじ~黒褐色 (10YR3/4)	粘土	粘土。地山層ブロック(φ1cm)を多く含む。しまりややなし。自然堆積。	
⑥ SK10049土壌	5層 黑褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	地山層ブロック(φ1cm)を多く含む。しまりややなし。自然堆積。	
	6層 黑褐色 (10YR2/2)	粘土	地山層ブロック(φ1cm)を多く含む。しまりややなし。自然堆積。	
	7層 黑褐色 (10YR3/1)	粘土	少少砂っぽい。しまりややなし。地山層ブロックを多く含む。自然堆積。	
	1層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	しまりあり。炭化物(φ5mm)を全体に多く含む。自然堆積。	
	2層 黑褐色 (10YR2/3)	シルト	しまりあり。地山層ブロックをまばらに多く含む。自然堆積。	
⑦ SK10049土壌	3層 黑褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	しまりあり。部分的に砂っぽい。地山層ブロック(φ5mm)をまばらに含む。自然堆積。	
	4層 黑褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	しまりあり。地山層ブロック(φ2~3cm)を多く含む。自然堆積。	
	1層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	しまり強。粘性あり。炭化物類を多く含む。地山層ブロック含む。	
	2層 黑褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	しまり強。粘性あり。炭化物類を多く含む。地山層ブロック含む。	
	3層 黑褐色 (2.5Y3/1)	砂質シルト	しまりややあり。炭化物類を多く含む。地山層ブロック含む。	
⑧ SK10051土壌	黑褐色 (10YR3/1)	シルト	地山層ブロック(φ1~2cm)・燒土ブロック(φ1~2cm)・炭化物片(φ5mm)をとても多く含む。	
	1層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	少少砂っぽい。炭化物・地山層ブロックを多く含む。しまりあり。	
	2層 黑褐色 (2.5Y3/1)	砂質シルト	黄褐色(10YR5/6)地山層ブロックを全体にまばらに含む。しまりややなし。	
	3層 黑褐色 (2.5Y3/1)	砂質シルト	少少砂っぽい。炭化物・地山層ブロックを多く含む。しまりややなし。	
	1層 黑褐色 (10YR3/2)	シルト	しまりあり。粘性あり。炭化物類若干含む。地山層含む。	
⑨ SK10065A土壌	2層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	しまりあり。粘性あり。炭化物類若干含む。地山層含む。	
	3層 黑褐色 (2.5Y3/1)	砂質シルト	しまりあり。粘性あり。炭化物類を1層より多く含む。地山層含む。	
	4層 黑褐色 (2.5Y3/1)	砂質シルト	しまりあり。粘性あり。炭化物類を1層より多く含む。地山層含む。	
	5層 黑褐色 (2.5Y3/1)	砂質シルト	しまりあり。粘性あり。炭化物類を1層より多く含む。地山層含む。	
	6層 黑褐色 (2.5Y3/1)	砂質シルト	しまりあり。粘性あり。炭化物類を1層より多く含む。地山層含む。	
⑩ SK10065B土壌	1層 黑褐色 (10YR3/2)	シルト	少少砂っぽい。炭化物・地山層ブロックを多く含む。しまりあり。上面に暗オリーブ色(7.5Y4/3)の膜が多くまじる。	
	2層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	しまりあり。粘性あり。炭化物類若干含む。地山層含む。	
	3層 黑褐色 (10YR2/3)	砂	しまりあり。粘性あり。炭化物類を1層より多く含む。地山層含む。	
	4層 黑褐色 (10YR2/3)	シルト	しまりあり。粘性あり。炭化物類を1層より多く含む。地山層含む。	
	5層 黑褐色 (10YR2/3)	シルト	しまりあり。粘性あり。炭化物類を1層より多く含む。地山層含む。	
⑪ SK10052土壌	1層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	しまりあり。粘性あり。炭化物類若干含む。地山層含む。	
	2層 黑褐色 (10YR2/3)	砂	しまりあり。粘性あり。炭化物類を1層より多く含む。地山層含む。	
	3層 黑褐色 (10YR2/3)	シルト	アンガラ・地・地山・炭化物類を全く含む。しまりあり。SK10046の理土に類似。自然堆積。	
	4層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	地山層ブロックを多く含む。上面に炭化物類をまばらに含む。しまりあり。地山の凹凸にも見える。自然堆積。	
	5層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	しまり強。粘性あり。炭化物類を若干含む。地山層含む。	
⑫ SK10063土壌	1層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	少少砂っぽい。炭化物・地山層ブロックを多く含む。地山層含む。	
	2層 黑褐色 (10YR2/3)	シルト	しまりあり。粘性あり。炭化物類若干含む。地山層含む。	
	3層 黑褐色 (10YR2/1)	シルト	しまりあり。粘性あり。炭化物類若干含む。地山層含む。	
	4層 黑褐色 (10YR2/2)	砂	しまりあり。粘性あり。炭化物類若干含む。地山層含む。	
	5層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	しまりあり。粘性あり。炭化物類を多く含む。炭化物類を若干含む。地山層含む。	
⑬ SD10067溝	1層 灰黒褐色 (10YR5/2)	シルト	少少砂っぽい。炭化物・地山層ブロックを多く含む。しまりあり。上面に暗オリーブ色(7.5Y4/3)の膜が多くまじる。	
	2層 黑褐色 (10YR3/1)	シルト	少少砂っぽい。炭化物・地山層ブロックを多く含む。しまりあり。	
	3層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	少少砂っぽい。炭化物・地山層ブロックを多く含む。しまりあり。	
	4層 黑褐色 (10YR2/1)	シルト	少少砂っぽい。炭化物・地山層ブロックを多く含む。しまりあり。	
	5層 黑褐色 (10YR3/2)	シルト	少少砂っぽい。炭化物・地山層ブロックを多く含む。しまりあり。	
⑭ SK10171土壌	1層 黑褐色 (10YR2/3)	シルト	少少砂っぽい。炭化物・地山層ブロックを多く含む。炭化物類により認められる。底の範囲。	
	2層 黑褐色 (10YR2/1)	シルト	少少砂っぽい。炭化物・地山層ブロックを多く含む。炭化物類により認められる。底の範囲。	
	3層 黑褐色 (10YR3/2)	シルト	少少砂っぽい。炭化物・地山層ブロックを多く含む。炭化物類により認められる。底の範囲。	
	4層 灰黒褐色 (2.5Y3/6)	粘土	少少砂っぽい。炭化物・地山層ブロックを多く含む。炭化物類により認められる。底の範囲。	
	5層 明赤褐色 (5YR5/6)	粘土	6層が鍛錬により変化したもののブロック状を嵌入している。	
⑮ SK10063土壌	6層 黑褐色 (10YR4/1)	シルト	少少砂っぽい。炭化物・地山層ブロック(φ1cm~3cm)を多く含む。粘性あり。人為堆積物。	
	1層 黑褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを多く含む。	
	2層 黑褐色 (10YR2/3)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを含む。	
	3層 黑褐色 (10YR3/3)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。炭化物類を若干含む。	
	4層 黑褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
⑯ SK10072土壌	5層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
	6層 黑褐色 (10YR2/3)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
	7層 黑褐色 (10YR2/3)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
	8層 灰黒褐色 (10YR4/2)	砂	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを含む。地山層含む。	
	9層 黑褐色 (10YR2/1)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを含む。地山層含む。	
⑰ SK10072土壌	1層 黑褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを含む。	
	2層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを含む。	
	3層 黑褐色 (10YR3/1)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
	4層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
	5層 黑褐色 (10YR3/2)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
⑱ SK10076土壌	6層 黑褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
	7層 黑褐色 (10YR2/3)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
	8層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
	9層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
	10層 黑褐色 (10YR2/1)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
⑲ SK10077土壌	1層 黑褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
	2層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
	3層 黑褐色 (10YR3/1)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
	4層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
	5層 黑褐色 (10YR3/2)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
⑳ SK10078土壌	6層 黑褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
	7層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
	8層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
	9層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
	10層 黑褐色 (10YR2/1)	シルト	少少砂っぽい。粘性あり。炭化物・地山層ブロックを2層より多く含む。地山層含む。	
㉑ SK10183土壌	1層 灰白色 (10YR8/1)	灰層	灰褐色山形層面(一)断面積。	
	2層 にじ~黒褐色 (10YR5/3)	シルト	地山層ブロック・粘土多い。マンガンが鉄分を含む。	
	3層 にじ~黒褐色 (10YR3/3)	シルト	地山層子母多まない。地山層シルト多く含む。地山層鉄酸根あり。	
	4層 黑褐色 (10YR3/2)	シルト	地山層シルト多く含む。地山層粘土含む。地山層多く含む。	
	5層 にじ~黒褐色 (10YR4/3)	シルト	地山層白粒子わずか。シルトブロック・地山層を含む。	

表6-2 第26図掲載土壤断面図観察表

耕作地名	株出位置	調査年	平野地	斜面地	耕種地(田・圃)	長径	短径	深さ	耕種地	出土地	年代
SK1273土壤	橋御71	トコ調食	第17回 第268回①	SK1298人土堆→SK10231小磯状造遺構→SK1273		1.6m	1.2m	30cm	不整縁円形	人海	ロクロ土壌層内底盤・甕、須恵器 甕・瓶、木片
SK1280土壤	橋御71	確認	第7回		SK1280→SB1242植物跡	1.5m	1.2m		圓丸長方形	自然	ロクロ土壌層内底盤・ヘラ切りの底盤 器皿(第296回③)、須恵系土壌層 甕・瓶
SK10039土壤	橋御70	トコ調食	第25回 第268回②	SK10041土壤→SK10040土壤→ SK10039土壤→灰色丸山灰	1.5m	1.1m	40cm	不整縁円形	自然	ロクロ土壌層内底盤(手掘み切削 調整)・甕、須恵器底盤(ヘラ切り) 甕・瓶、須恵系土壌層	
SK10040土壤	橋御70	トコ調食	第25回 第268回②-3	SK10041土壤→SK10040土壤→ SK10039土壤→灰白色丸山灰	1.9m	1.2m	35cm	梅円形	自然	ロクロ土壌層内底盤(手掘み切削 調整)・甕、須恵器底盤(ヘラ切り) 甕・瓶、須恵系土壌層	
SK10041土壤	橋御70	トコ調食	第25回 第268回③	SK10041土壤→SK10040土壤→ SK10039土壤→灰色丸山灰	1.3m	1.0m	1.0m	不整縁円形	自然	ロクロ土壌層内底盤(手掘み切削 調整)・甕、須恵器底盤(ヘラ切り) 甕・瓶、須恵系土壌層	
SK10042土壤	橋御70- 71回	確認	第21回		SK10098人土堆→SK10042土壤	0.9m	0.9m		圓丸方形	自然	ロクロ土壌層内底盤(手掘み切削 調整)・甕、須恵器底盤(ヘラ切り) 甕・瓶、須恵系土壌層
SK10046土壤	橋御70	トコ調食	第25回 第268回④	SK10046土壤→SK10047土壤	2.1m	1.6m	10cm	圓丸長方形	自然	ロクロ土壌層内底盤(手掘み切削 調整)・甕、須恵器底盤(ヘラ切り) 甕・瓶、須恵系土壌層	
SK10047土壤	橋御70	トコ調食	第25回 第268回⑤	SK10046土壤→SK10047土壤	1.2m	0.8m	1.0m	不整縁円形	自然	ロクロ土壌層内底盤(手掘み切削 調整)・甕、須恵器底盤(ヘラ切り) 甕・瓶、須恵系土壌層	
SK10048土壤	橋御70	トコ調食	第25回 第268回⑥	SK10048土壤→SK10049土壤	0.6m	0.8m	45cm	梅円形	自然	ロクロ土壌層内底盤(手掘み切削 調整)・甕、須恵器底盤(ヘラ切り) 甕・瓶、須恵系土壌層	
SK10049土壤	橋御70	トコ調食	第25回 第268回⑦	SK10048土壤→SK10049土壤 SK10063土壤→SK10049土壤	1.0m	0.7m	40cm	梅円形	自然	ロクロ土壌層内底盤・甕、須恵器 甕・瓶、多賀城輪廻御行第4回(貞 元11年(865)~11世紀中頃)の平 丘瓦立式	
SK10050土壤	橋御70	トコ調食	第25回 第268回⑧		1.2m	1.1m	15cm	不整縁円形	自然	ロクロ土壌層内底盤(手掘み切削 調整)・甕(第296回④)、須恵器 甕・瓶(ヘラ切り)・甕・瓶、須恵系 土壌	
SK10051土壤	橋御70	トコ調食	第25回 第268回⑨-7		1.2m	1.1m	15cm	不整縁円形	自然	ロクロ土壌層内底盤・甕	
SK10052土壤	橋御70	トコ調食	第25回 第268回⑩		0.7m	0.7m	25cm	不整縁円形	自然	9世紀後葉	
SK10053土壤	橋御70	トコ調食	第25回 第268回⑪	SK10075土壤→SK10053土壤	1.1m	0.8m	20cm	不整縁円形	自然	9世紀後葉	
SK10063土壤	橋御70	トコ調食	第25回 第268回⑫	SK10063土壤→SK10049土壤	4.3m	0.8m	90cm	長縁円形	人海?	9世紀以降	
SK10065土壤	橋御70	トコ調食	第25回 第268回⑬	SK10065B土壤→SK10065A土壤	1.0m	0.9m	35cm	不整縁円形	自然	手引(第296回⑩)、ロクロ土壌層 内底盤・甕、須恵器底盤(ヘラ切り) 甕・瓶、須恵器底盤(ヘラ切り)、須 恵系土壌層	
SK10071土壤	橋御69- 70回	確認	第22回			0.8m	0.8m		不整縁円形	自然	9世紀以降
SK10072土壤	橋御70	トコ調食	第25回 第268回⑭			0.9m	0.7m	40cm	不整縁円形	自然	9世紀後葉
SK10075土壤	橋御70	トコ調食	第25回 第268回⑮	SK10075土壤→SK10053土壤	1.2m	0.8m	10cm	不整縁円形	自然	9世紀以降	
SK10076土壤	橋御70	トコ調食	第25回 第268回⑯		1.3m	1.0m	30cm	不整縁円形	自然	9世紀後葉	
SK10103土壤	橋御70- 71回	確認	第21回	SI10099人土堆→SK10104土壤 →SK10103土壤	0.5m 以上	0.5m 以上		梅円形	自然	9世紀以降	
SK10104土壤	橋御70- 71回	確認	第21回	SI10099人土堆→SK10104土壤 →SK10103土壤	0.6m	0.5m		圓丸長方形	自然	9世紀以降	
SK10171土壤	橋御70	トコ調食	第17回 第268回⑰	SK1298人土堆→SK10084建物跡 →SF10231小磯状造遺構→SK 10171土壤	1.6m	1.2m	20cm	不整縁円形	自然	9世紀後葉	
SK10183土壤	橋御69	トコ調食	第9回 第268回⑱-3	SK13000人1道路跡→SK10183 土壤(SX13000人1道路跡)→ SX13000人1道路跡	30cm	不整縁円形	人海		ロクロ土壌層内底盤・甕、須 恵器底盤(第37回④)	10世紀前半	
SK10185土壤	橋御69	トコ調食	第9回 第10回	SK13000人1道路跡→SK10185 土壤(SX13000人1道路跡)→ SX13000人1道路跡	50cm 70cm	不整縁円形	人海 の土壌の邊		ロクロ土壌層内底盤(手掘み切削 調整)・甕、圓筒状土器皿(第37回④) →(第286回③)・甕、須恵器底盤 (ヘラ切り)・甕・瓶、須恵系土 壌層	10世紀前半	

表7 南1西2区検出の土壤一覧

①北に位置する東西方向の SA3045 材木壙跡の南に 1 ~ 1.5 m 離れてこれとほぼ平行し、SF2260 小溝状遺構群の方向が SA3045 材木壙跡の方向と直交すること、② SA3045 材木壙跡が SB1241 建物跡よりも古いことから、SF2260 小溝状遺構群と SA3045 材木壙跡は同時期に存在し、南 1 西 2 区画成立前の奈良時代のものと考えられる。

【SF10231 小溝状遺構群（烟跡）】（平面図：第 7・17 図、断面図：第 18 図）

橋脚 P 71 の本発掘調査区の地山面で検出した東西方向の小溝状遺構群（SD10062・10067・10068・10080・10082・10089・10092・10096・10173・10175）で、烟の歯跡とみられる。30 ~ 100cm 間隔で東西方向に平行し、10 条検出した。基本層Ⅲ a2 層を掘り込み面とし、基本層Ⅲ a1 層に覆われる。

SB10084・10085 建物跡、SK2298 大土壙、SD10061 連結溝、SF10243 小溝状遺構群と重複し、SK2298 大土壙、SD10061 連結溝、SF10243 小溝状遺構群よりも新く、SB10084・10085 建物跡よりも古い。

検出長は最長 10.8 m で、上幅 20 ~ 70cm、深さ 20 ~ 40cm、断面形は「U」字状を呈する。方向は東で南に約 9° 傾している。堆積土は黒褐色土である。ロクロ土師器内黒坏・甕、ヘラ切り無調整の須恵器坏・甕など破片が少数出土した。

【SF10243 小溝状遺構群（烟跡）】（平面図：第 7・17 図、断面図：第 18 図）

橋脚 P 71 の本発掘調査区の地山面で検出した南北方向の小溝状遺構群（SD10056・10058・10059・10088・10091・10093・10094・10174）で、基本層Ⅲ a 層に覆われる。烟の歯跡とみられ、10 ~ 100cm 間隔で南北方向に平行する小溝を 9 条検出した。

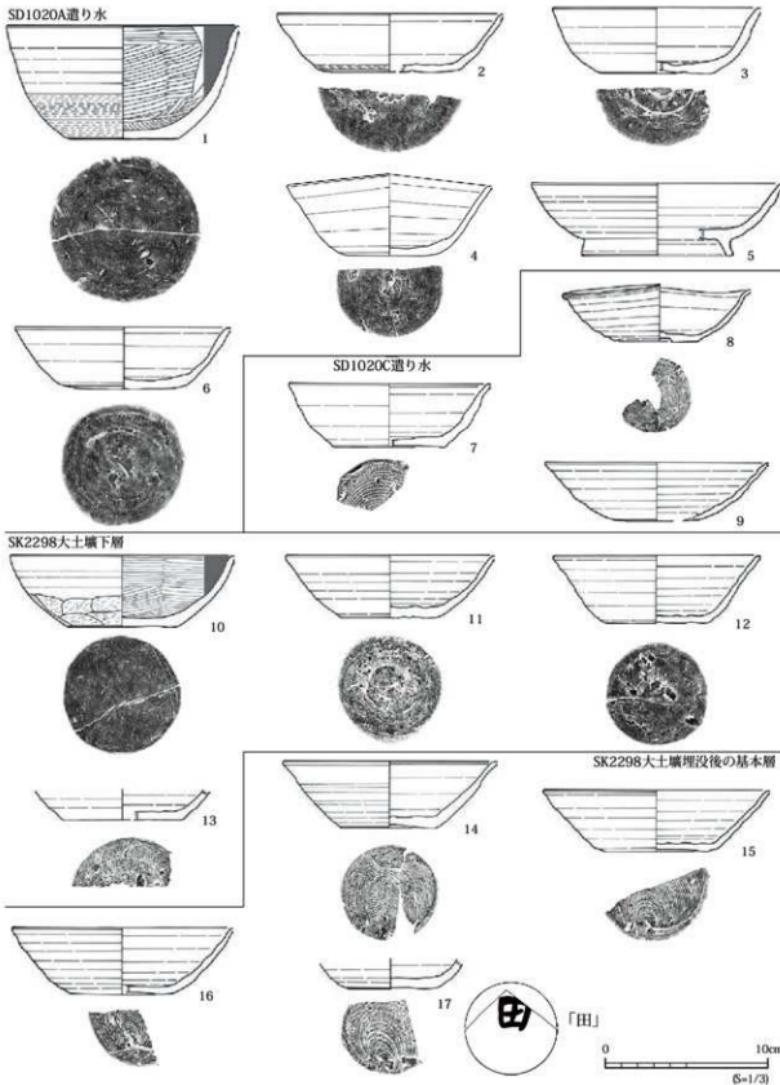
SB10084 建物跡、SF10231 小溝状遺構群、SK2298 大土壙、SD10061 連結溝と重複し、いずれよりも古い。SF2202 小溝状遺構群（SD1020C 溝の北にあり、これよりも古い烟跡）の南側に位置し、方向も同じであることから、SA3025 材木壙跡の北側に展開する一連の烟跡の可能性がある。

検出長は最長 5.6 m で、上幅 15 ~ 40cm、深さ 10 ~ 20cm、断面形は「U」字状を呈する。方向は北で東に約 6° 傾している。堆積土は黒褐色土で、ヘラ切り無調整の須恵器坏・甕破片が少数出土した。

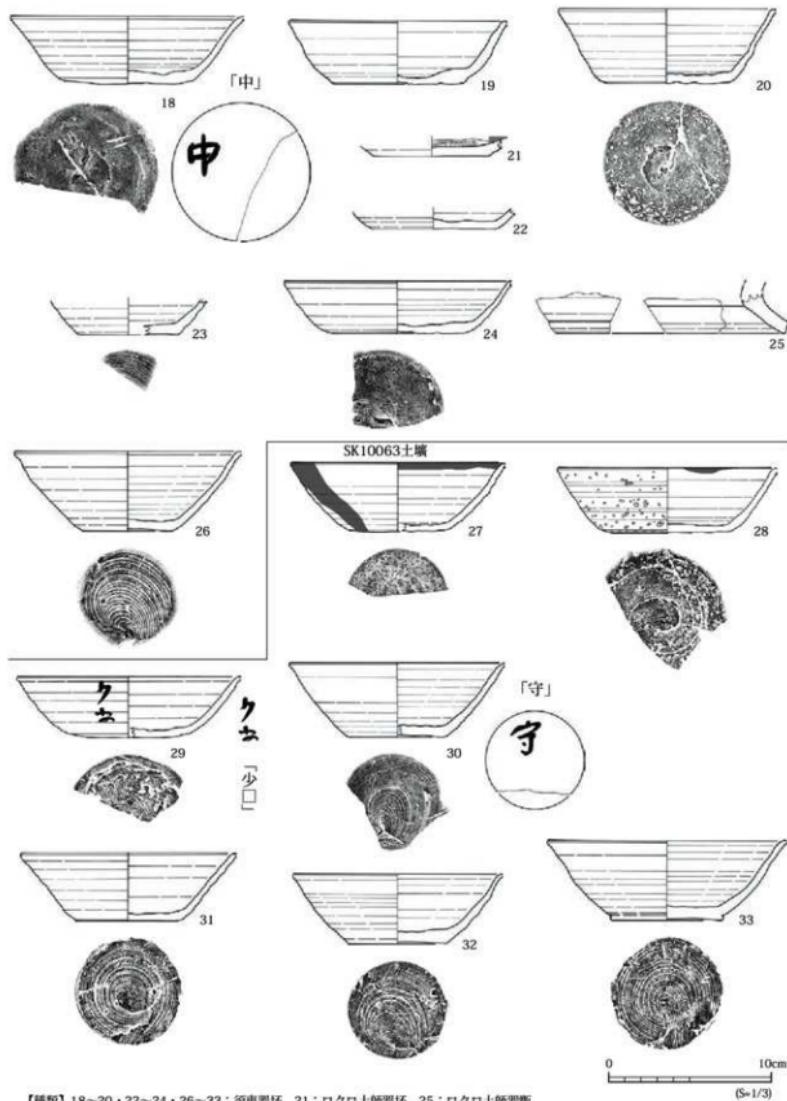
（9）基本層Ⅲ a 層（断面図：第 18 図、出土遺物：第 27・30・35・37・38 図）

炭化物や焼土を含む黒褐色シルトの自然堆積層で、南 1 西 1 道路交差点以北の調査区ほぼ全面に分布する。橋脚の位置で示すと、橋脚 P 69 から北へ橋脚 P 71 北側までの調査区にあたる。旧調査では 10 世紀前葉に降灰した灰白色火山灰との新旧関係は不明であると記載されている。

今回、橋脚 P 71 の本発掘調査区では、SK2298 大土壙、SD10261 連結溝が埋没後、その窪みに SX10233 砂層が自然堆積したが、それでもこの上面は周間に比べて低く窪んでいた。そして、この窪みに堆積したⅢ a 層はⅢ a1 層、Ⅲ a2 層、Ⅲ a3 層、Ⅲ a4 層の 4 層に細分された。この断面図箇所では灰白色火山灰は介在していないが、周辺でⅢ a 層を掘り下げる途中で、灰白色火山灰ブロックを部分的に検出した。このことと下記の出土状況からみて、Ⅲ a1 層とⅢ a2 層の間に灰白色火山灰の降灰があったものと推定される。これら細分された各層の特徴は表 5 を参照されたい。出土遺物は下記のとおりである。



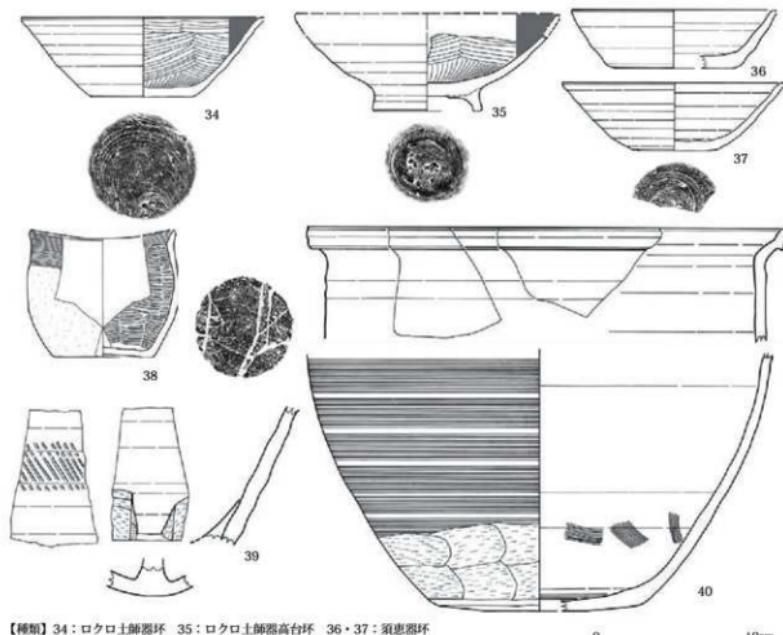
第27図 南1西2区出土の主な土器（1）



【種類】18~20・22~24・26~33：須恵器環 21：ロクロ上飾器環 25：ロクロ上飾器盤

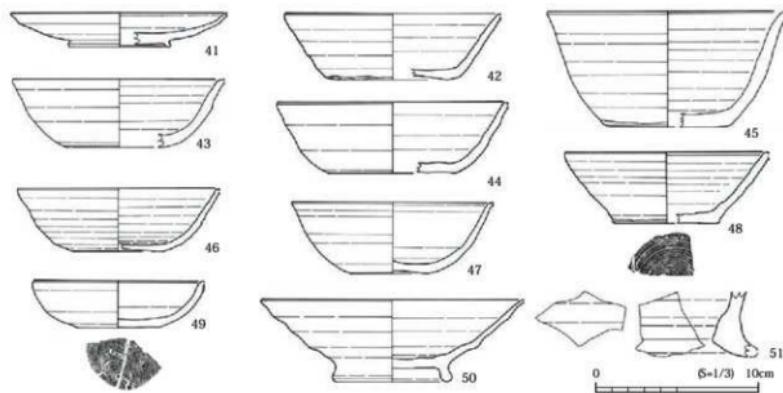
【出土遺構等】18: SD10061溝 19・20: SD10038溝 21・22: SI10037住居跡検出面 23: SB10085建物跡 24: SB1241建物跡
25: SB10084建物跡 26: SK10047土壤 27~33: SK10063土壤

第28図 南1西2区出土の主な土器（2）



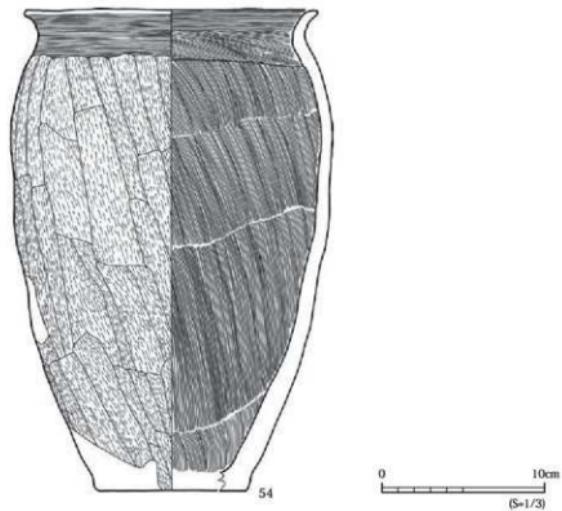
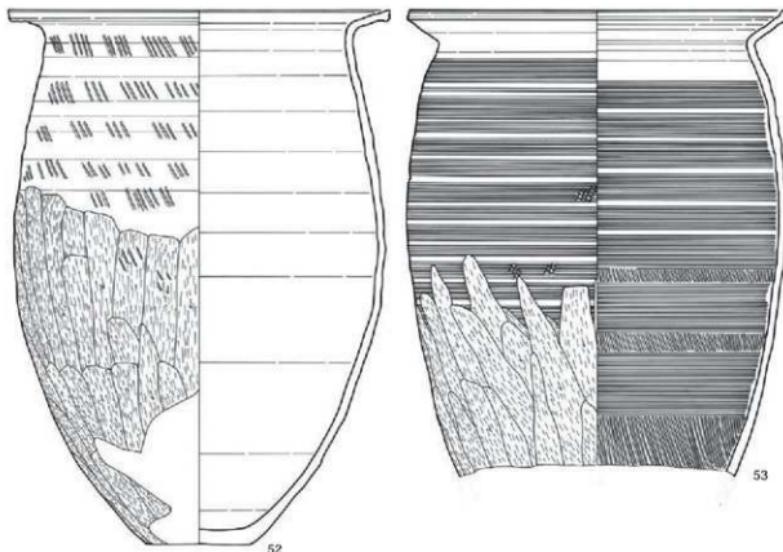
【種類】34：ロクロ土師器環 35：ロクロ土師器高台環 36・37：須恵器環
 38：非ロクロ土師器小型甕 39：ロクロ土師器甕 40：ロクロ土師器甕
 【出土遺構等】34・37：SK10185土壤 35・39：SK10071土壤 36：SK1280土壤
 38：SI10099住居跡カマド内 40：SK10050土壤

第29図 南1西2区出土の主な土器（3）



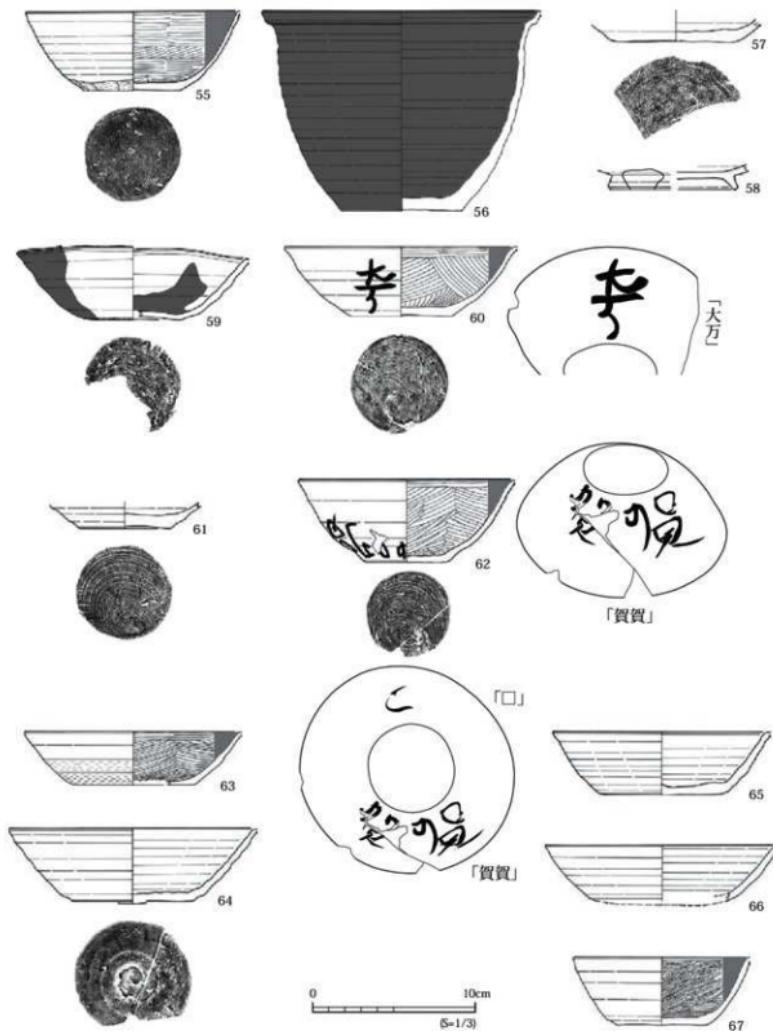
【種類】41：灰釉陶器段面 42～48：須恵器環 49：須恵系上器環 50：須恵系土器高台環 51：ロクロ土師器甕
 【出土遺構等】41～51：基本層IIIa層

第30図 南1西2区出土の主な土器（4）—基本層IIIa層



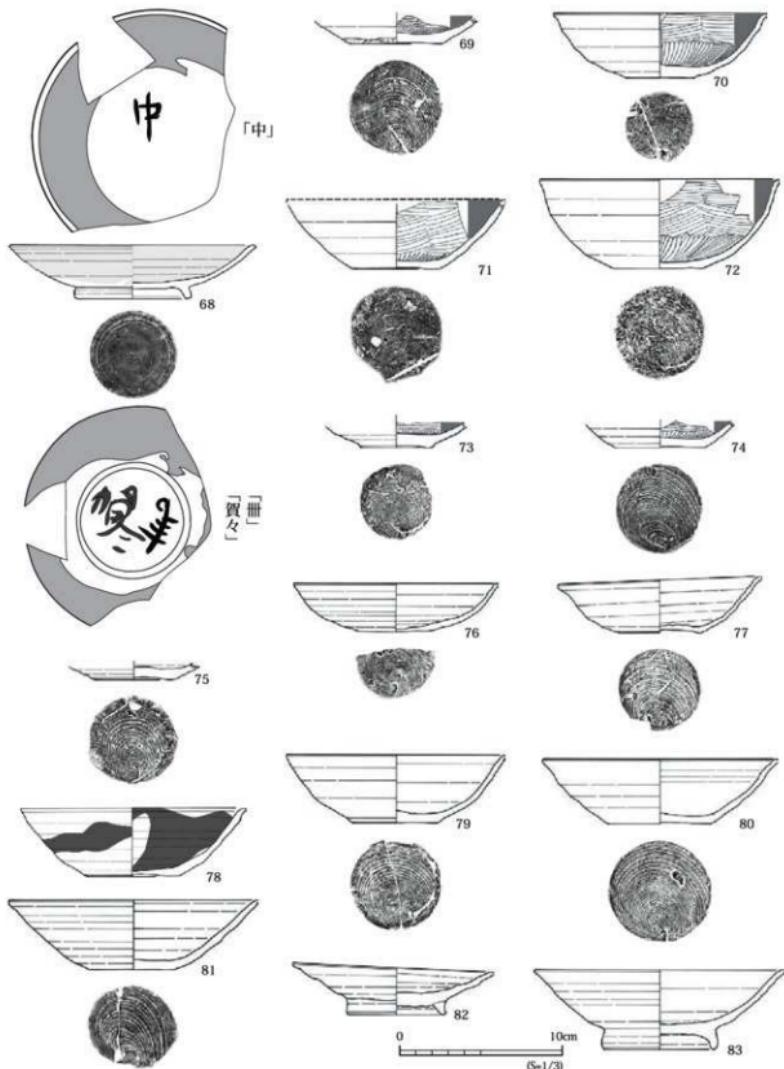
【種類】 52・53：ロクロ土師器長胴甕 54：非ロクロ土師器長胴甕
【出土遺構等】 52～54：SX10090横位合口土師器甕棺墓

第31図 南1・西1 道路跡関係の主な出土土器（1）—SX10090横位合口土師器甕棺墓



【種類】55・60・62・63・67：ロクロ土師器环 56：ロクロ土師器小型鉢 57・59・61・64～66：須恵器环 58：灰釉陶器皿
【出土遺構等】55・56：西1道路跡A東側溝 57：西1道路跡路面I 58・59・61：西1道路跡B東側溝
60・62：西1道路跡C東側溝 63～66：南1道路跡C北側溝 67：南1道路跡A～C北側溝

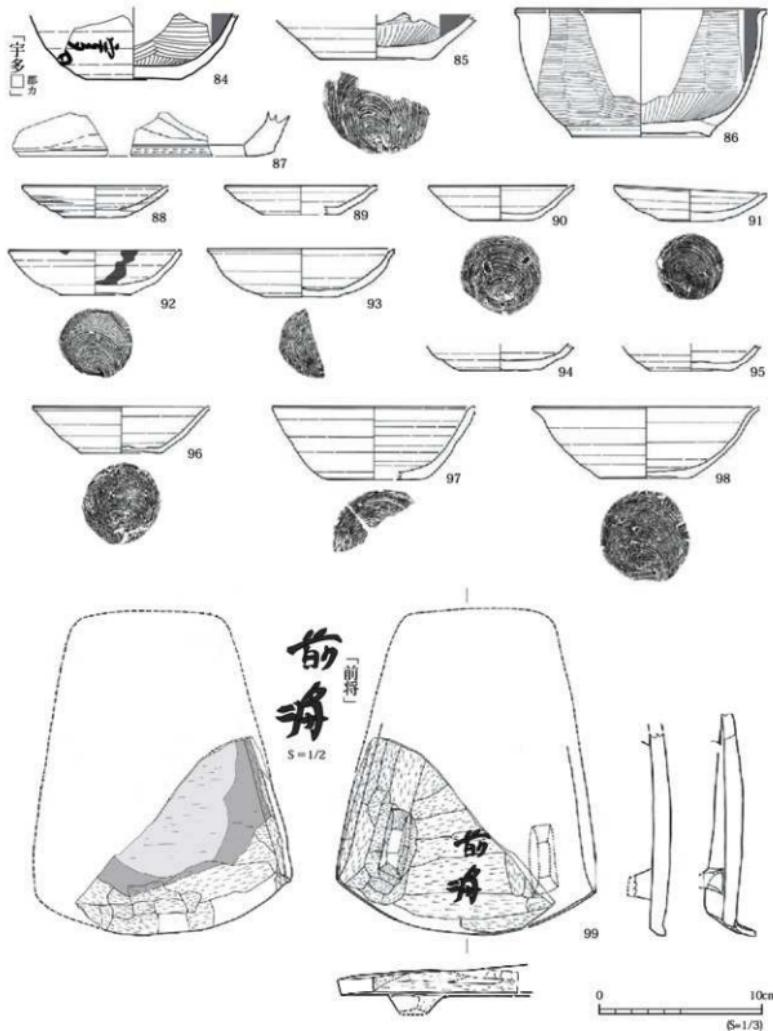
第32図 南1・西1道路跡関係の主な出土土器（2）—南1・西1道路跡A～C期



【種類】68: 灰釉陶器高台坏 69~74: ロクロ上師器坏 75: 須恵器坏 76~81: 須恵系土器坏 82: 須恵系上器高台皿
83: 須恵系上器高台坏

【出土遺構等】68・71・74: 西1道路跡D東側溝 69・70・76・81・83: 南1道路跡D北側溝
72・73・75・77~80・82: 南1道路跡D南側溝

第33図 南1・西1道路跡関係の主な出土土器（3）—南1・西1道路跡D期



【種類】84・85：ロクロ土師器環 86：ロクロ土師器深塊 87：ロクロ土師器底 88～91：須恵系上器小皿 92・96：須恵系上器小型環
 93・94・95・97・98：須恵系上器環 99：風字鏡
 【出土遺構等】84：西1道路跡D東側溝 86・93～95：西1道路跡E東側溝 85：西1道路跡路面Ⅲ 87：南1道路跡D～F北側溝
 88・89：南1道路跡E南側溝 90・91・98：西1道路跡F西側溝 92・99：西1道路跡E西側溝 96：南1道路跡E北述結溝
 97：南1道路跡F北側溝

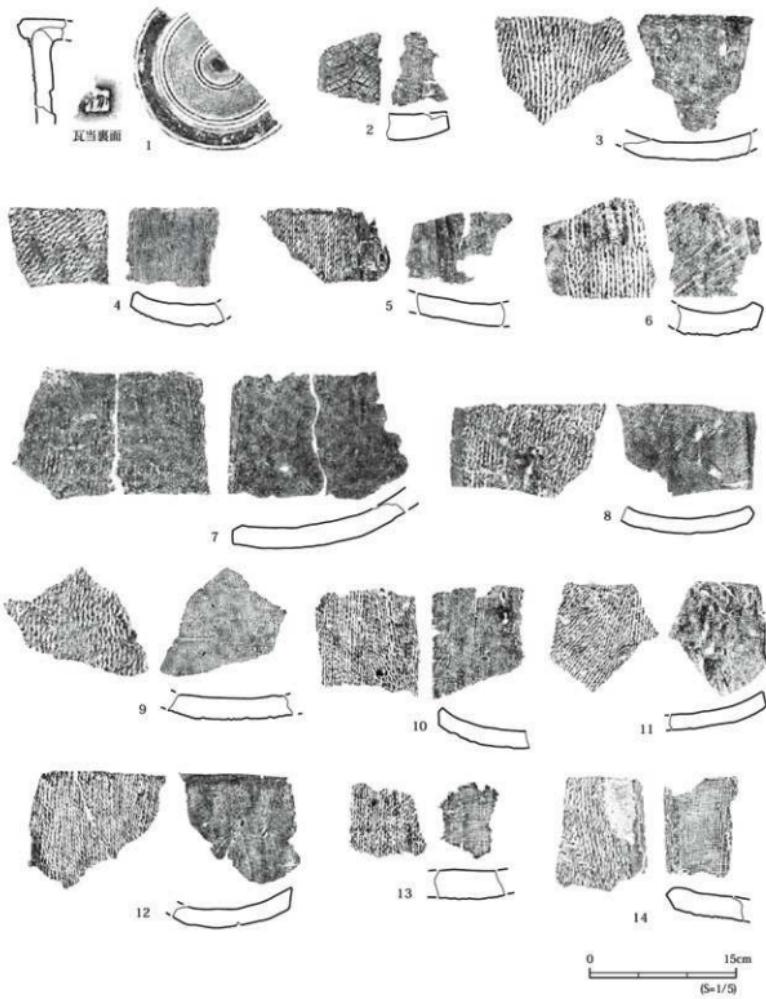
第34図 南1・西1道路跡関係の主な出土土器（4）—南1・西1道路跡D～F期

図面	No.	種類	出土遺構等	特徴	口径 cm	底径 cm	高さ cm	残存率		登録	写真回数
								口径 cm	底径 cm		
第 27 図	1	ロクロ土師器	SD1020A迺り水	外縁：底部へラ切り→体下部→底部周縁へケズリ。 内縁：平行ミガキ→黑色處理。	14.4	9.2	7.0	<1/6	完形	R72	29
	2	須恵器	SD1020A迺り水	外縁：底部へラ切り→体下部手持ちケズリ。	14.0	8.8	3.6	1/4	<1/2	R71	30
	3	須恵器	SD1020A迺り水	外縁：底部へラ切り。	12.8	7.0	4.1	1/4	<1/2	R80	30
	4	須恵器	SD1020A迺り水	外縁：底部へラ切り。	12.6	6.4	4.3~ 5.0	<1/2	1/2	R73	30
	5	須恵器高台	SD1020A迺り水	外縁：底部へラ切り→付高台。	15.5	9.4	4.5	<1/2	<1/3	R67	31
	6	須恵器	SD1020A迺り水	外縁：底部へラ切り→解いたナデ。	13.4	7.6	3.8	3/4	完形	R604	30
	7	須恵器	SD1020C迺り水	外縁：底部周縁系切り。	12.4	6.8	3.9	わざか	1/4	R96	
	8	須恵器系縫	SD1020C迺り水	外縁：底部周縁系切り。内縁：コチナデ。	11.5~ 12.0	4.6	2.7~ 3.5	ほぼ完形	3/4	R88	32
	9	須恵器系縫	SD1020C迺り水	外縁：底部周縁系切り。	13.8	5.0	3.6	1/6	<1/4	R93	
	10	ロクロ土師器	SK2298A土器皿2層	体下部へ底部手持ちケズリ。内縁：平行ミガキ→黑色處理。	13.9	7.1	4.4	2/3	完形	R780	28
	11	須恵器	SK2298A土器皿2層	外縁：底部へラ切り。	12.9	6.0	3.9	1/4	完形	R29	30
	12	須恵器	SK2298A土器皿2層	外縁：底部へラ切り。	12.8	6.3	4.2	1/3	完形	R754	30
	13	須恵器	SK2298A土器皿3~4層	外縁：底部へラ切り。	-	-	7.4	-	1/3	R30	
	14	須恵器	皿4種	外縁：底部周縁系切り。	13.2	5.8	4.1	1/12	ほぼ完形	R31	30
	15	須恵器	皿2種	外縁：底部周縁系切り。やや生焼け。	14.0	6.2	3.8	1/4	1/2	R36	
	16	須恵器	皿2種	外縁：底部周縁系切り。	13.6	6.4	4.1	1/6	1/4	R40	
	17	須恵器	皿2種	外縁：底部周縁系切り。底部墨書き「田」。	-	5.6	-	-	<1/2	R35	39
	18	須恵器	SD10061溝	外縁：底部へラ切り。底部墨書き「中」。	14.4	8.5	4.2	1/8	<1/2	R735	30,39
	19	須恵器	SD10038溝	外縁：底部へラ切り。	13.4	8.0	3.9	1/6	<1/2	R3	
	20	須恵器	SD10038溝	外縁：底部へラ切り。	13.4	7.7	4.6	<1/2	完形	R11	30
	21	ロクロ土師器	SI10037付脚縁突出	外縁：底部周縁系切り→底部周縁手持ちケズリ。 内縁：放射状ミガキ→黑色處理。	-	7.2	-	-	1/4	R806	
	22	須恵器	SI10037付脚縁突出	外縁：底部へラ切り。生焼け。	-	7.6	-	-	1/4	R805	
	23	須恵器	SB10085建物跡柱頭部	外縁：底部周縁系切り。	-	3.0	-	-	<1/4	R757	
	24	須恵器	SB1241建物跡柱頭部	外縁：底部へラ切り。	14.0	8.0	3.3	1/6	<1/4	R875	
	25	ロクロ土師器	柱頭部	無式底。底部「八」字状に外に開き、受け口状となる。	-	-	-	-	わずか	R778	
	26	須恵器	SK10047土壇	外縁：底部周縁系切り。	14.0	5.5	4.9	1/2	完形	R982	30
	27	須恵器	SK10065土壇	外縁：底部へラ切り。外縁：口縁→体下部に多量の油煙。 内縁：口縁→油煙付。	13.2	6.2	4.2	1/2	1/2	R903	30
	28	須恵器	SK10065土壇	外縁：底部へラ切り。外縁：口縁→底部全周に油煙。 内縁：口縁と底部中央に油煙。	13.4	8.2	4.0	1/4	1/3	R904	30
	29	須恵器	SK10063土壇	外縁：底部へラ切り。体外面部正墨書き「少口」。	13.8	7.6	3.8	1/3	1/4	R902	30,39
	30	須恵器	SK10063土壇	外縁：底部周縁系切り。底部墨書き「少」。	13.3	6.0	4.6	1/4	3/4	R899	30,39
	31	須恵器	SK10063土壇	外縁：底部周縁系切り。	13.3	6.5	4.2	1/4	完形	R900	30
	32	須恵器	SK10063土壇	外縁：底部周縁系切り。	13.0	6.0	4.3	1/8	完形	R901	
	33	須恵器	SK10063土壇	外縁：底部周縁系切り。	14.9	6.9	4.9	1/8	完形	R905	30
	34	ロクロ土師器	SK10185土壇	外縁：底部周縁系切り。内縁：放射状ミガキ→黑色處理。	15.0	6.4	4.9	1/4	完形	R309	28
	35	ロクロ土師器	SK10071土壇	外縁：底部周縁系切り→付高台。 内縁：放射状ミガキ→黑色處理。高台高1.0cm。	(16.3)	6.8	(6.0)	-	完形	R884	
	36	須恵器	SK1280A土壇	外縁：底部へラ切り。	12.6	7.6	3.6	1/6	1/4	R794	
	37	須恵器	SK10185土壇	外縁：底部周縁系切り。底部木蓋腐。内面：ハケメ、底土サオサウ。底土に細かくガラス粒、砂混じる含む。	13.8	5.0	4.2	1/4	1/2	R310	30
	38	非ロクロ土師器	SI100991付脚縁カマド内小甌	外縁：口縁ヨコナメ。底部木蓋腐。底部木蓋腐。内面：ハケメ、底土サオサウ。底土に細かくガラス粒、砂混じる含む。	9.0	6.1	7.8	<1/4	完形	R887	
	39	白ロクロ土師器	SK10071土壇	体下部破片。底面ヨコナメか底なるが、透しの数・形差不規則。通話付手持ちカラメアズリ。	-	-	-	-	わずか	R783	
	40	ロクロ土師器	SK10050土壇	外縁：体外側カラメ→体下部手持ちヘラメアズリ。底部ナメ。オナメ。内面：底部内側カラメアズリ。体ハバキメ→ロクロナメ。	(29.5)	12.6	-	1/4	1/4	R996	
	41	灰陶胸輪設置	基本基盤A層	角直輪。内面：全部やくんで灰陶→灰陶・厚底のある緑色灰陶。二重ナメ。	13.4	6.4	2.1	<1/6	1/4	R786	33
	42	須恵器	基本基盤A層	外縁：底部周縁系切り→体下部手持ちケズリ。	13.3	6.6	4.1	1/2	1/3	R661	
	43	須恵器	基本基盤A層	外縁：底部へラ切り。生焼け。	13.1	7.2	4.2	1/4	1/6	R688	
	44	須恵器	基本基盤A層	外縁：底部へラ切り。	14.2	7.8	4.4	1/4	2/3	R660	30
	45	須恵器	基本基盤A層	外縁：底部へラ切り。	14.8	8.0	7.1	1/6	1/2	R790	
	46	須恵器	基本基盤A層	外縁：底部周縁系切り。	12.5	5.4	3.9	1/2	<1/2	R792	
	47	須恵器	基本基盤A層	外縁：底部周縁系切り。	12.4	5.2	4.4	1/8	完形	R618	30
	48	須恵器	基本基盤A層	外縁：底部周縁系切り。	12.6	6.6	4.4	1/3	1/4	R832	
	49	須恵器	基本基盤A層	外縁：底部周縁系切り。内面：コチナデ。	10.6	4.9	2.9	1/4	<1/2	R692	33
	50	須恵器	基本基盤A層	外縁：底部周縁系切り→付高台。 内面：コチナデ。淡黄灰色土器圓盤な品。	16.2	7.3	5.1	1/4	完形	R619	33
	51	ロクロ土師器	基本基盤A層	体下部→底底小破。底底灰。底底「八」字状に外に開く。粗面は分離か、内面が接着となる。	-	-	-	-	-	R715	
	52	ロクロ土師器	SI10090横段合口土師器設置	口圓筒外縁。突帶縁。外縁：明き成形→ロクロナメ→体下部タテ持手カラメ→底底ケズリ。底部ケズリ。 内面：ロクロナメ。煮沸具として未使用。	23.8	6.4	32.9	>1/2	<1/4	R331	35
	53	ロクロ土師器	SI10090横段合口土師器設置	体下部→底底を水平に切らし直し。煮沸具中央に使用。口圓筒外縁。突帶縁。外縁：明き成形→ロクロナメ→体下部タテ持手カラメ→底底ケズリ。内面：ロクロナメ→口圓筒ヨコナメ→体下部タテ持手カラメ→底底ケズリ。	23.4	-	28.7 以上	<2/3	-	R332	35
	54	非ロクロ土師器	SI10090横段合口土師器設置	煮沸具底部に使用。口圓筒外縁。突帶縁。外縁：口圓筒ヨコナメ→体下部タテ持手カラメ→底底ケズリ。内面：ロクロナメ→口圓筒ヨコナメ→体下部タテ持手カラメ→底底ケズリ。煮沸具として未使用。	18.1	9.6	29.6	1/2	わずか	R333	35

表8-1 南1西2区、西1道路跡出土土器観察表

回数	No.	種類	出土遺構等	特徴	口径 cm	底径 cm	高さ cm	残存率		登録	写真回数
								口径 cm	底径 cm		
第32回	55	ロクロ土師器	西 I 道路跡 A 東側溝	外縁：体下部～底部手持ちケズリ。内縁：底部平行ミガキ→それと角度をなすまばらな平行模ミガキ→黒色處理。	13.2	6.0	4.9	3/4	完形	R388	28
56	ロクロ土師器	西 I 道路跡 A 東側溝	口縁部受け口型。外縁：底部オサエ。	17.2	7.5	18.3	2/3	完形	R384	34	
57	須恵器環	西 I 道路跡路面上	外縁：底部へ軽く切り、直角。	-	8.0	-	-	1/4	R506		
58	灰釉陶器皿	西 I 道路跡 B 東側溝	蓋投棄品。部分の自然壊。底部がやや丸みのある高台。先述見る緑色模ハッパ便り。重ね燒き。	-	-	-	-	小	R1592		
59	須恵器環	西 I 道路跡 B 東側溝	外縁：底部斜面切り～底部模様持ちケズリ。内縁：口縁～底面に油焼。底部肩部に印文有り。傾き芯。	14.2	6.0	3.8～4.5	ほぼ完形	ほぼ完形	R389	30.39	
60	ロクロ土師器	西 I 道路跡 C 東側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：放射状ミガキ→黒色處理。	14.4	6.1	4.3	1/4	完形	R391	28.39	
61	須恵器環	内 I 道路跡 B 東側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：底部斜面「太」（わざわせ）。	-	5.8	-	-	完形	R392		
62	ロクロ土師器	西 I 道路跡 C 東側溝	外縁：体下部～底部持込へテケズリ。 内縁：井桁状ミガキ→黒色處理。	13.4～14.0	5.4	4.6～5.2	完形	完形	R411	28.39	
63	ロクロ土師器	南 I 道路跡 C 北側溝	外縁：体下部～底部持込へテケズリ。	13.4	7.6	3.3	>1/3	>1/3	R176	28	
64	須恵器環	南 I 道路跡 C 北側溝	外縁：底部へ軽く切り。	15.3	7.2	4.6	<1/4	3/4	R174	30	
65	須恵器環	南 I 道路跡 C 北側溝	外縁：底部斜面切り。	13.2	7.5	3.9	1/4	1/2	R171	31	
66	須恵器環	南 I 道路跡 C 北側溝	外縁：底部へ軽く切り。	14.4	8.8	3.5	1/3	わずか	R170		
67	ロクロ土師圓盤	南 I 道路跡 A～C 東側溝	外縁：底部手持ちへテケズリ。内縁：平行ミガキ→黒色處理。	10.9	5.6	4.2	1/2	完形	R287	28	
68	灰釉陶器高台	西 I 道路跡 D 東側溝	東側溝品。虎済山号窯。付高台。底部灰色焼成面。外縁：底部に墨書き。「賀賣」、「賀」。内縁：墨書き「中」。高台高3cm。	15.2	7.2	3.3	1/3	完形	R440	33.39	
69	ロクロ土師圓盤	南 I 道路跡 D 東側溝	外縁：底部斜面切り～体下部手持ちケズリ。 内縁：放射状ミガキ→黒色處理。	-	5.7	-	-	完形	R179		
70	ロクロ土師圓盤	南 I 道路跡 D 北側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：放射状ミガキ→黒色處理。	13.2	4.2	4.0	1/4	完形	R217	28	
71	ロクロ土師圓盤	内 I 道路跡 D 北側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：放射状ミガキ→黒色處理。	13.4	5.6	4.3	-	完形	R421		
72	ロクロ土師圓盤	南 I 道路跡 D 北側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：やや斜め放射状ミガキ→黒色處理。	14.8	5.4	5.5	わずか	完形	R350	28	
73	ロクロ土師圓盤	南 I 道路跡 D 北側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：放射状ミガキ→黒色處理。	-	4.6	-	-	完形	R103		
74	ロクロ土師圓盤	内 I 道路跡 D 北側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：放射状ミガキ→黒色處理。	-	5.5	-	-	完形	R422		
75	須恵器環	南 I 道路跡 D 北側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：放射状ミガキ→黒色處理。	-	5.3	-	-	完形	R126		
76	須恵器環	南 I 道路跡 D 北側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：コチナデ。	12.6	4.6	3.0	1/4	1/2	R232	32	
77	須恵器環	南 I 道路跡 D 東側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：コチナデ。	12.7	5.0	3.0～3.5	3/4	完形	R121	32	
78	須恵器環	南 I 道路跡 D 南側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：コチナデ。西面に油焼付帯。	13.8	5.9	4.2	完形	完形	R349	32	
79	須恵器環	南 I 道路跡 D 南側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：コチナデ。	13.4	5.6	4.2	1/6	完形	R111	32	
80	須恵器環	南 I 道路跡 D 南側溝	外縁：底部斜面切り。	14.6	6.2	4.0	3/4	完形	R114	32	
81	須恵器環	南 I 道路跡 D 北側溝	外縁：底部斜面切り。	15.4	5.2	4.3	1/4	完形	R203	32	
82	須恵器土器	高台	外縁：底部斜面切り。内縁：コチナデ。	-	-	-	-	ほぼ完形	R115	32	
83	須恵器土器	南 I 道路跡 D 北側溝	外縁：底部斜面切り～付高台。内縁：コチナデ。	12.2	6.2	3.2	ほぼ完形	ほぼ完形	R115	32	
84	ロクロ土師圓盤	南 I 道路跡 D 北側溝	外縁：底部斜面切り～付高台。内縁：コチナデ。淡黄褐色土微顯な良品。	15.6	6.9	4.9	<1/4	完形	R196	33	
85	ロクロ土師圓盤	西 I 道路跡 E 東側溝	外縁：底部斜面切り～部分のそぎ取り～横状平行直筋（乾燥時）。断面墨書き「宇田口（馬力）」。内縁：放射状ミガキ→黒色處理。	-	5.6	-	-	完形	R469		
86	ロクロ土師器	西 I 道路跡 E 東側溝 深堀	外縁：底部斜面切り。内縁：放射状ミガキ→黒色處理。	-	7.0	-	-	1/2	R541		
87	ロクロ土師圓盤	南 I 道路跡 E～F 北側溝	内縁：下部斜面持ち～底部小片。無底式？西面に棟を持つ。手持ちヘラケズリ。	-	-	-	-	-	R285	34	
88	須恵器土器小皿	南 I 道路跡 E 南側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：コチナデ。	9.0	3.8	2.0	1/4	3/4	R151	32	
89	須恵器土器小皿	南 I 道路跡 E 南側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：コチナデ。	9.4	4.4	1.8	1/4	1/4	R152	32	
90	須恵器土器小皿	西 I 道路跡 F 西側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：コチナデ。	9.0	4.2	2.2	1/3	完形	R556	32	
91	須恵器土器小皿	南 I 道路跡 F 西側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：コチナデ。傾き芯。	9.4	4.0	1.7～2.2	2/3	完形	R1530	32	
92	須恵器土器 小型环	西 I 道路跡 E～F 西側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：コチナデ。	10.6	4.4	2.7	1/3	完形	R1534	32	
93	須恵器土器环	西 I 道路跡 E 東側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：コチナデ。	11.6	4.5	3.0	1/6	1/2	R489	32	
94	須恵器土器环	西 I 道路跡 E 東側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：コチナデ。	-	4.8	-	-	完形	R451		
95	須恵器土器环	西 I 道路跡 E 東側溝	断面墨書きサンゴドット状(灰白色～灰色～灰白色)の崩落崩环。	-	-	-	-	-	R444		
96	須恵器土器	西 I 道路跡 E 附 北通路溝	外縁：底部斜面切り。内縁：コチナデ。油焼。	10.9	4.9	2.9	完形	完形	R300	32	
97	須恵器土器环	南 I 道路跡 F 西側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：コチナデ。	12.3	6.4	4.5	1/4	1/3	R278	32	
98	須恵器土器环	内 I 道路跡 F 西側溝	外縁：底部斜面切り。内縁：コチナデ。	14.0	5.6	4.4	1/6	完形	R1531	32	
99	紙写真	西 I 道路跡 E 西側溝	地表堅硬無大凹凸。表面：手持ちヘラケズリ。海面がよく研磨され、墨痕消失に見える。裏面：足三指所、端縁欠損。手持ちヘラケズリ。2つの足の間に墨書き「前界」。	-	-	-	-	-	R563	33.39	

表8-2 南1西2区、西1道路跡出土土器観察表



【種類】 1：重輪文軒丸瓦241(政序第Ⅱ期) 2：平瓦Ⅰ C類(政序第Ⅰ期) 3～5・7：平瓦Ⅱ B類(政序第Ⅱ期)

6・8：平瓦Ⅱ B類(政序第Ⅲ期) 9～14：平瓦Ⅱ C類(政序第Ⅳ期)

【出土遺構等】 1：基本層Ⅲa2層 2：SK10129上塙 3：南1道路跡C北側溝1層 4・5：SI3206住居跡東側溝カマド左脇

6：西1道路跡F西側溝 7：SK10129上塙 8：SD10131溝 9：SB10084建物跡南西隅柱穴掘方

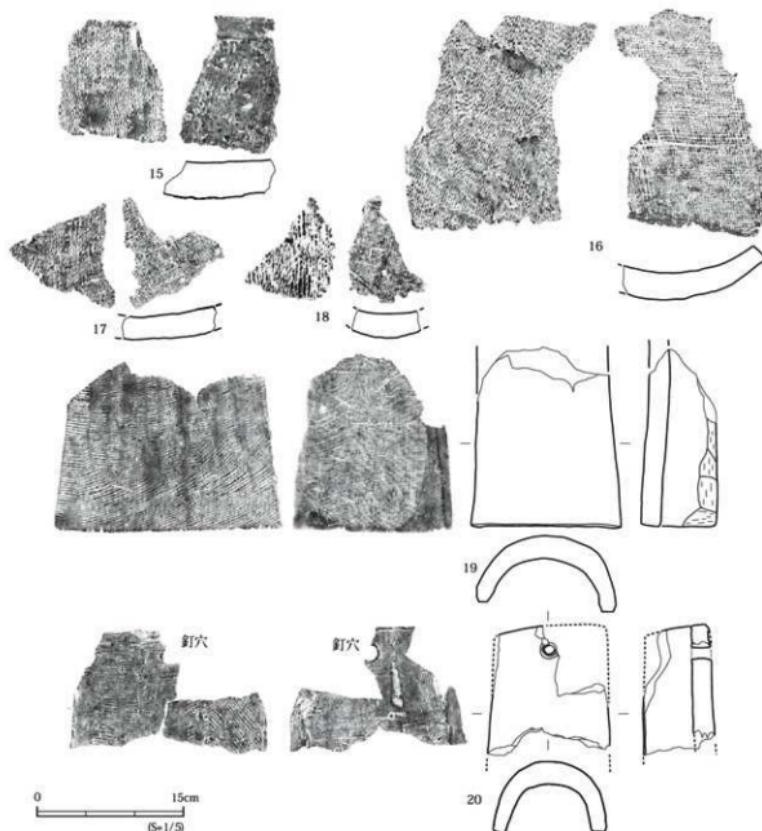
10：SB10085建物跡東側柱列北より2間目柱穴掘方 11：SK10063上塙 12：基本層Ⅲa層 13：南1道路跡F南側溝

14：西1道路跡D東側溝

第35図 出土した主な瓦（1）

《Ⅲ a層》非クロコロ土師器内黒有段丸底坏・鉢・甕、クロコロ土師器内黒坏・内黒高台坏・両黒塊・内黒鉢・小型甕・甕・瓶（第30図51）、須恵器坏・高台坏・双耳坏・蓋・壺・甕、須恵系土器坏（第30図49）・高台坏（第30図50）・大型台付鉢、灰釉陶器段皿（第30図41）・塊、綠釉陶器塊、製塩土器などの破片や漆バレット（非クロコロ土師器丸底坏、クロコロ土師器甕破片利用）、円板状土製品（第37図6・7）、平瓦、丸瓦、石帶（第38図1）など、多種多様な遺物がやや多く出土した。

このうちクロコロ土師器内黒坏には、体下部～底部回転ヘラケズリのもの、回転糸切り後に底部回転ヘラケズリのもの、回転糸切り後に体下部～底部周縁手持ちヘラケズリのもの、体下部～底部手持ち



【種類】15～18：平瓦Ⅱ C類（政府第IV期） 19・20：丸瓦Ⅰ A類（政府第I期）
【出土遺構等】15：南1道路跡D南側溝3層 16：西1道路跡F西側溝 17：西1道路跡D東側溝 18：南1～2間道路跡南側溝
19：SI10018住居跡カマド支脚 20：SI10013住居跡床面

第36図 出土した主な瓦（2）

ヘラケズリのもの、底部手持ちヘラケズリのもの、回転糸切り無調整のものがあり、須恵器壺にはヘラ切り無調整のもの（第30図43・44）、回転糸切り後に体下端手持ちヘラケズリのもの（第30図42）、回転糸切り無調整のもの（第30図48）がある。平瓦には多賀城跡政府第Ⅰ期の平瓦ⅠC類、政府第Ⅱ期の平瓦ⅡB類、政府第Ⅳ期の平瓦ⅡC類（第35図12）がある。年代幅は9世紀～10世紀前半までのものを含み、10世紀前半のものは少なく、9世紀代のものが主体を占め、9世紀前半のものと後半のものが混在している。

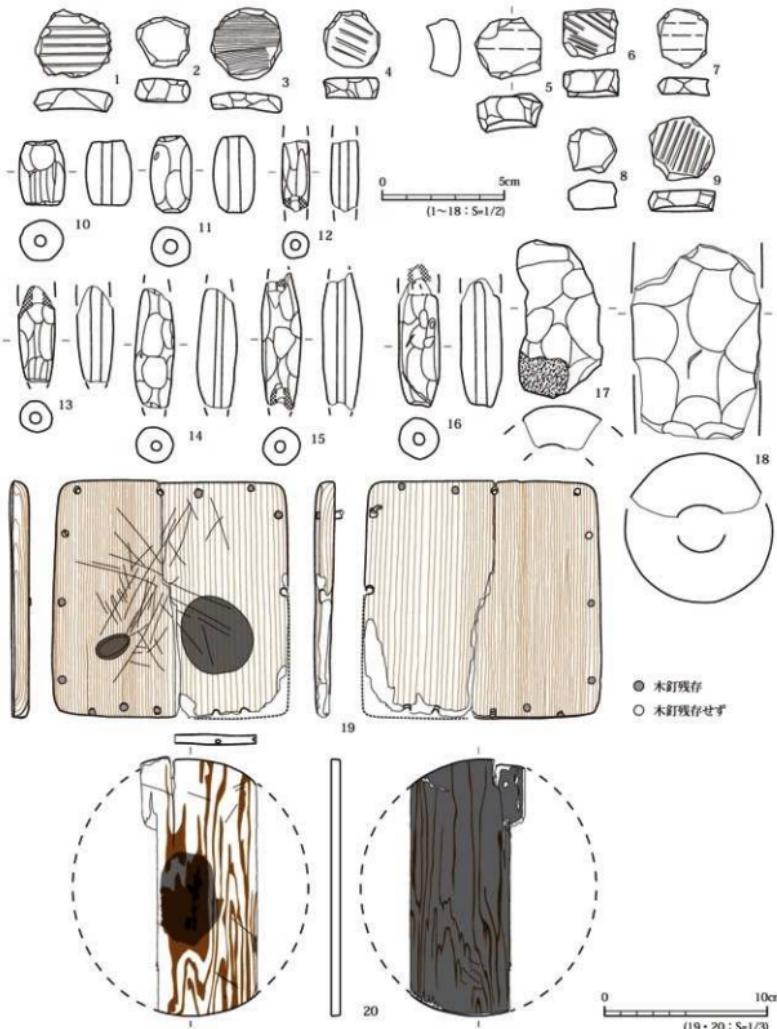
《Ⅲ a2層》非クロコ土師器壺、ロクロ土師器内黒壺・両黒塊・内黒小型壺・甕、須恵器壺・高台壺・盤・折線高台皿・蓋・鉢・壺蓋・壺・甕、須恵系土器壺・大型台付鉢・縁釉陶器壺・製塙土器、多賀城跡政府第Ⅱ期の重圓文軒丸瓦（第35図1）、同期の平瓦ⅡB類などの破片がやや多く出土した。

このうち、ロクロ土師器内黒壺には体下部～底部回転ヘラケズリのもの、体下部～底部手持ちヘラケズリのもの、回転糸切り無調整のもの、須恵器壺には、静止糸切後に底部手持ちヘラケズリのもの、底部回転ヘラケズリのもの、ヘラ切り無調整のもの、回転糸切り無調整のもの（第27図15～17）がある。これらは、9世紀後半のものを中心に9世紀前半のものが多く含み、10世紀前葉頃のものもほんのわずか含まれる。

《Ⅲ a4層》非クロコ土師器壺、ロクロ土師器内黒壺・甕、須恵器壺・甕、製塙土器、多賀城跡政府第Ⅱ期の平瓦ⅡB類などの破片が少数出土した。このうち須恵器壺にはヘラ切り無調整のもの、回転糸切り無調整のもの（第27図14）があり、9世紀前半～後半までの土器が含まれている。

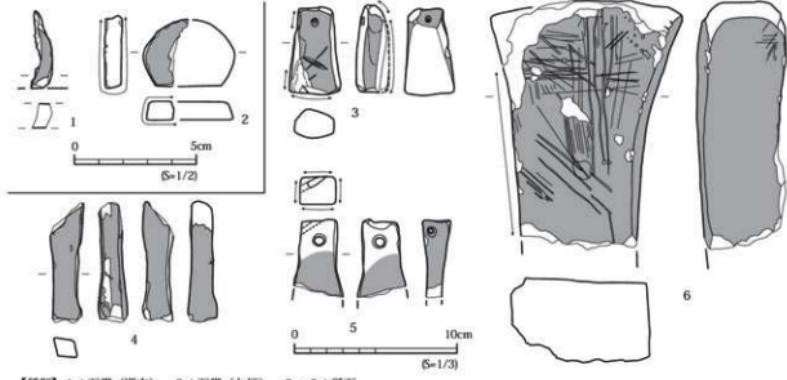
図面	No.	種類	分類	時期	出土遺構	特徴	登録	写真圖版
第35図	1	軒丸瓦	唐圓文軒丸瓦	政府第Ⅰ期	基本縦目a2層	重圓文軒丸瓦241。裏面に朝印「物」A、焼瓦。	K23	37
	2	平瓦	I C類	政府第Ⅰ期	SK10129土壇	穂巻を作り、凸面：斜行手焼き。凹面：布目。	K20	
	3	平瓦	II B類	政府第Ⅰ期	南1 造跡跡C北側溝 1層	一枚作り。凸面：縱走焼印き目。凹面：布目→ナデ。	K7	
	4	平瓦	II B類	政府第Ⅰ期	SK3206往住跡 東側カマド左脇	一枚作り。凸面：斜行人焼印き目。凹面：布目→ナデ。	K13	
	5	平瓦	II B類	政府第Ⅰ期	SK3206往住跡 東側カマド左脇	一枚作り。凸面：縱走焼印き目。凹面：布目→ナデ。	K14	
	6	平瓦	II B類	政府第Ⅰ期	西1 造跡跡F北側溝	一枚作り。凸面：縱走焼印き目。	K10	
	7	平瓦	II B類	政府第Ⅰ期	SK10129土壇	一枚作り。凸面：縱走焼印き目。凹面：布目→ナデ。接着19。	K18	
	8	平瓦	II B類	政府第Ⅰ期	SD10131溝	一枚作り。凸面：焼印き。凹面：布目→ナデ。地成良好。	K22	
	9	平瓦	III C類	政府第Ⅰ期	SB100841建物跡南内隅穴隙方	一枚作り。凸面：縱走焼印き目。凹面：布目。	K1	37
	10	平瓦	III C類	政府第Ⅰ期	SB100851建物跡東側柱列北より 2号柱右六幅方	一枚作り。凸面：縱走焼印き目。凹面：布目。	K2	37
	11	平瓦	III C類	政府第Ⅰ期	SK10063土壇	一枚作り。凸面：縱走焼印き目。凹面：布目。	K4	37
	12	平瓦	III C類	政府第Ⅰ期	基本縦目a層	一枚作り。凸面：縱走焼印き目。凹面：布目。	K3	
	13	平瓦	III C類	政府第Ⅰ期	南1 造跡跡F南側溝	凸面：縱走焼印き目。凹面：布目。	K8	
	14	平瓦	III C類	政府第Ⅰ期	西1 造跡跡D南側溝	一枚作り。凸面：縱走焼印き目。凹面：布目。	K11	
	15	平瓦	III C類	政府第Ⅰ期	南1 造跡跡D南側溝3層	凹面に化粧土。皮側面に付着。	K6	
	16	平瓦	III C類	政府第Ⅰ期	西1 造跡跡F西側溝	一枚作り。凸面：縱走焼印き目。凹面：布目。	K5	37
	17	平瓦	III C類	政府第Ⅰ期	南1 造跡跡D東側溝	灰白より上層。凸面：縱走焼印き目。凹面：布目。	K9	
	18	平瓦	II C類	政府第Ⅱ期	西1-2道跡跡南側溝	一枚作り。凸面：縱走焼印き目。凹面：布目→ナデ文字（不明）。	K21	
	19	丸瓦	I A類	政府第Ⅰ期	SD10018往住跡 カマド支脚	行基式。粘土板巻き作り。凸面：平行印き目。底土に海藻骨付合む。 下伊勢野常製品。	K12	37
	20	丸瓦	I A類	政府第Ⅰ期	SD10013往住跡 床面	行基式。粘土板巻き作り。狭端部側に斜六貫道。凸面：平行印き。 下伊勢野常製品。	K15	37

表9 瓦（第35・36図）観察表



【種類】 1～9：円盤状土製品 10～16：土舗 17・18：輪羽口 19：方形容器蓋(底) 20：円形曲物底板
 【出土遺構等】 1：SD1020B・C道り水 2：SB10085建物跡東側柱列北より2間目柱穴抜取穴 3：SK2298大土塼下層
 4：SK10183土壤 5：西1道路跡路面I構築上 6・7：基本層IIIa層 8：基本層IIIc2層 9：南2道路跡F北側溝
 10：南1道路跡A～C南側溝 11：南1道路跡北側溝 12：西1道路跡路面I 13：SK10065土壤
 14：西1道路跡B東側溝 15：南1・西1道路跡南西部道構面 16：南1道路跡F北側溝 17：SB3439建物跡南東隅柱穴掘方 18：西1道路跡D東側溝
 19：SB10083建物跡東側柱列北より1間目柱穴掘方 20：西1道路跡D西側溝

第37図 出土した主な土製品・木製品



【種類】1: 石帶（造方） 2: 石帶（丸柄） 3～6: 砥石
 【出土構造】1: 基本層Ⅲa層 2: Pt316 3: SB10083孤立柱建物跡南西隅柱穴掘方 4: SI10182住居跡埋土 5: SK10140土壤
 6: SK10063土壤

第38図 出土した主な石製品

回数	No.	種類	出土遺構	特徴	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g	登録	写真図版
37回	1	円板状土器製品	SD1020B-C透水	須恵器底部破片転用。周縁部を打ち欠き、略円形に整形。	27.0	32.0	8.0	9.0	D1	38
	2	円板状土器製品	SB10085建物跡東側柱列	須恵器底部破片転用。周縁部を打ち欠き、略円形に整形。 此より2回柱斜柱接続穴	21.0	22.0	9.0	5.5	D2	38
	3	円板状土器製品	SK2298大土下層	滑石クロマット滑石底面破片転用。周縁部を打ち欠き、略円形に整形。	29.0	28.0	6.0	6.4	D3	38
	4	円板状土器製品	SK10183土壤	須恵器底部破片転用。周縁部を打ち欠き、略円形に整形。	23.0	22.0	8.0	6.1	D4	38
	5	円板状土器製品	西I道跡跡路Ⅰ構造土	須恵器底部破片転用。周縁部を打ち欠き、略円形に整形。	24.0	27.0	12.0	10.1	D5	38
	6	円板状土器製品	基本層Ⅲa層	須恵器底部破片転用。周縁部を打ち欠き、略円形に整形。	21.0	22.0	10.0	6.9	D6	38
	7	円板状土器製品	基本層Ⅲa層	須恵器底部破片転用。周縁部を打ち欠き、略円形に整形。	23.0	20.0	7.0	4.5	D7	38
	8	円板状土器製品	基本層Ⅲc層	須恵器底部破片転用。周縁部を打ち欠き、略円形に整形。	18.0	20.0	12.0	3.7	D8	38
	9	円板状土器製品	西I道跡跡路Ⅱ側溝	須恵器底部破片転用。周縁部を打ち欠き、略円形に整形。	15.0	25.0	9.0	7.7	D9	38
	10	土器	南I道跡跡A-C南側溝	陶器が平面となるとる防護石。完全品。長軸中央に貫通孔。孔径4mm。	22.0	17.0	-	8.6	D13	38
	11	土器	南I道跡跡北側溝	陶器が丸みを帯びる防護石。完全品。長軸中央に貫通孔。孔径6mm。	31.0	16.0	-	7.0	D12	38
	12	土器	西O道跡跡路Ⅰ	防護石。陶器欠損。長軸中央に貫通孔。孔径4mm。	24.0	11.0	-	3.8	D16	38
	13	土器	SI10065-1	防護石。陶器欠損。長軸中央に貫通孔。孔径5mm。	40.0	15.0	-	7.6	D10	38
	14	土器	西I道跡跡東側溝	防護石。陶器欠損。長軸中央に貫通孔。孔径4mm。	49.0	17.0	-	11.4	D15	38
	15	土器	南I-C西I道跡跡南側溝	防護石。陶器欠損。長軸中央に貫通孔。孔径4mm。	56.0	15.0	-	12.7	D14	38
	16	土器	南I道跡跡F土側溝	防護石。陶器欠損。長軸中央に貫通孔。孔径5mm。	52.0	16.0	-	13.4	D11	38
	17	繩引口	南面柱斜柱接続	長軸方向に4分割で削られた破片。一面に滑石付着。	65.0	30.0	-	26.2	D19	38
	18	繩引口	西I道跡跡D東側溝	長軸方向に3分割で削られた破片。孔径約2cm。	80.0	52.0	(62.0)	107.4	D18	38
	19	方形容器蓋(底)	西I道跡跡D東側溝	縫合部に沿って木釘頭の跡。他に木釘頭の跡。表面に鋸刃的な金属製物の跡。滑石付着。	146.5	145.0	12.0	215.1	K4	-
	20	円板状物体	SB10083建物跡東側柱列	表面に焼けこげ斑。側辺に木釘頭の跡。広葉樹質。	158.0	70	5.5	55.0	K44	-
38回	1	石帶（造方）	基本層Ⅲa層	黒色。粘土質。3面の一部残存。	33.0	5.0	11.0	2.6	S5	38
	2	石帶（丸柄）	Pt316	黒色。粘土質。鉛半分。4面の一部残存。	27.0	12.0	8.0	4.2	S6	38
	3	砥石	SB10083孤立柱建物跡南西隅柱穴掘方	滑り砥石。長軸にV字形角柱状。後端部を近く中央に幅4×3.5mmの貫通孔。裏面約3/4と前面一部分。滑石質。	54.0	26.0	18.0	23.3	S1	38
	4	砥石	SI10182住居跡埋土	手打砥石。楕円柱状。V字形角柱状。両端欠損。4面研磨。粘土質。	75.0	15.0	12.0	29.2	S3	38
	5	砥石	SK10140土壤	滑り砥石。椭円柱状。後端部を近く中央に幅4mmの貫通孔。裏面から上面に約3mmの貫通孔。下面欠損。4面研磨。凝灰岩質。	57.0	30.0	17.0	25.5	S4	38
	6	砥石	SK10063土壤	椭円柱状。下面にV字形角柱状。裏面は自然面。四方側の表面は研磨面による擦痕多數残存。右側側の側面はよく使ったんだよ。	154.0	90.0	48.0	1130.0	S2	38
	-	雲母片	SI10013住居跡	薄い断面に無精した断片。	1.6	0.8	0.1	-	S7	38
	-	琥珀	SK10129土壤	表面に一部自然面残存。Dひび割れから破損。	2.9	1.8	1.8	4.9	S8	38

土製品・木製品（第37図）・石製品（第38図）観察表

2. 南2西1区

南2西1区は貞觀地震後に成立した区画で、区画南西隅に南2西1道路跡交差点が位置し、北側をSX1400南1道路跡、南側をSX1900南2道路跡、西側をSX1350西1道路跡、東側をSX1850西0道路跡で区画する。南1—2間道路によって約2：1の面積比で南北に二分されている（第39図）。南2西2区の縮尺1/1,000の全体図を第39図、縮尺1/500の分割図を第40～44図に図示した。

南2西1区では、道路跡2条（SX3461南1—2間道路跡、SX1900南2道路跡）、掘立柱建物跡27棟、竪穴住居跡11軒、横位合口土器器窓柏墓1基、井戸跡1基、土壤14基、区画溝3条、小溝状遺構群（畑跡）3箇所などの主要遺構の他、河川跡1を検出した。

なお、西1道路跡を挟んで本区の西側に位置する南2西2区は、今回の発掘調査ではその北東隅がわずかかかるのみである。ここで検出した竪穴住居跡1軒は、便宜的に本区に含めて記載した。

（1）SX3461南1—2間道路跡（平面図：第9・41・42・45図、断面図：第46図、写真図版：図版12）

SX3461南1—2間道路跡は、南2西1区の区画を南側1/3（面積比2：1）で区画する区画内東西道路跡である。これまでの旧調査ではこの道路跡の中央部の両側を調査している。今回の調査は、旧調査で調査したこの道路跡の間を調査したもので、併せて長さ40m調査したことになる（第42図）。この東西道路跡は、東西方向のSD1602B河川跡埋没後に、東側の低い箇所の上面を整地してから造営している。造営時期は貞觀地震の直後とみられる。

SD1602B河川跡、SD1538溝、南北方向のSF1625小溝状遺構群（畑跡）と重複し、SD1602B河川跡、SD1538溝より新しく、SF1625小溝状遺構群よりも古い。

【遺構期】

第1～第3次調査では、南側溝で4時期（A期→B期→C期→D期）、北側溝で2時期（A期→B期）の変遷、路面で2時期（路面I→路面II）を確認し、A・B期には部分的な北側溝を伴っていたが、C・D期には南側溝のみになる、としていた（宮城県教育委員会1995、pp.52～54）。今回の調査では南側溝で3時期（B期→C期→D期）の変遷を確認し、北側溝は単発で作り変えを確認できず、路面は残りが悪いためか変遷を確認できなかった（第46図）。旧調査で検出したB期南側溝に10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰を含み、今回検出した最も古い南側溝に灰白色火山灰を含むことから、今回の調査では当初のA南側溝とB南側溝とが完全に重複し、B南側溝より検出したことになる。

なお、南側溝の北7～10mの位置に、これとほぼ並行する幅30cm、深さ15cmのSD1618溝があり、検出した南側溝と同じく、東西に40m続いている（第42図）。区域内道路の路幅として規模が大きくなりすぎるが、路面IIの段階の北側溝の可能性もあるのかもしれない。

【側溝の規模】

旧調査と今回の調査を併せてみると、A南側溝は上幅不明、深さ50cm、B南側溝は上幅約1.2m、深さ50～70cm、C南側溝は上幅1.8m、深さ60cm、D南側溝は上幅1.5m、深さ60cm、A南側溝は上幅約1.2m、深さ50cm、B北側溝は上幅1.3m、深さ60cmである。

【路幅・方向】

旧調査によると、南北両側溝のあるA・B期では、側溝心々でA期は約7.5m、B期で約6.6mであり、方向はB南側溝心々で、東で南に2~3°偏る。

【路面】

旧調査によると、路面には大きくみると新旧2時期（路面I→路面II）の変遷があり、路面IにはA・B南側溝、A・B北側溝、路面IIにはC・D南側溝が伴う。路面Iは、SD1602B河川跡埋没後に、東側の低い箇所の上を厚さ10cm程、白色凝灰岩粒を多く含む黒褐色土（路面3層）で整地した路面で、この箇所の上には自然堆積した路面2層が5~10cmの厚さで堆積していた。また、B期の灰白色火山灰降灰以降に堆積した基本層III b層（路面1層）が5~10cmの厚さで路面Iの上を覆う。この上面が路面IIである。

今回の調査では路面I、路面2層を検出していないが、上部には基本層III b層（路面1層）が堆積し、この基本層III b層はさらに北側約20m（橋脚P 65とP 66の間）までの広範囲に分布していた。SX3461南1~2間道路跡は、北側よりも低いので、道路の上に洪水などにより堆積した自然堆積層が北側までオーバーフローして堆積したものと考えられる。

【SX3461南1~2間道路側溝の出土遺物】（第36・71図）

旧調査では、側溝から土師器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器、瓦などが出土した。环では土師器の占める割合が高く、底部の調整は回転糸切無調整のものが圧倒的に多い。須恵系土器はB期以降に定量的に含まれるようになる。また、A・B期側溝では墨書き土器も目立った。

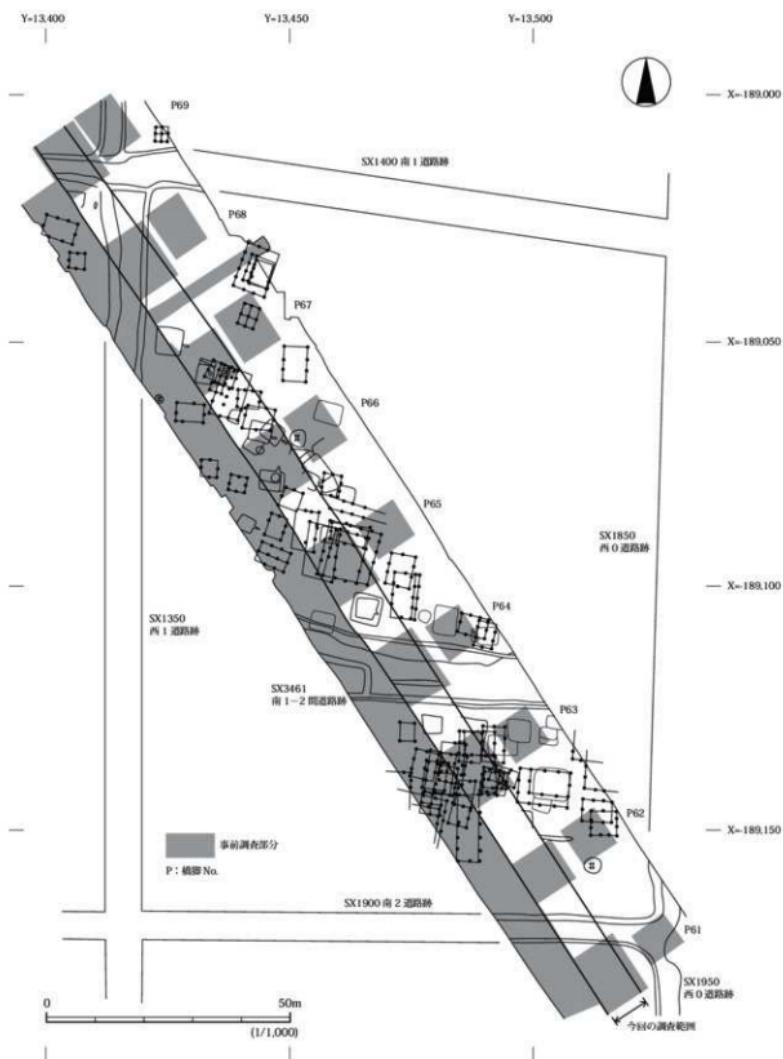
今回の調査では、D南側溝よりロクロ土師器内黒環・内黒高台環・両黒塊・甕、須恵器環・壺・甕、須恵系土器環（第71図100・101）、綠釉陶器壺皿類（猿投窯製品黒管14号窯式または黒管90号窯式期）、平瓦、丸瓦II B類などの破片が出土した。このうち、ロクロ土師器内黒環には体下部～底部手持ちヘラケズリまたは体下部手持ちヘラケズリで内面平行ミガキのもの、回転糸切り無調整で内面放射状ミガキのもの、須恵器環にはヘラ切りのもの、体下部～底部回転ヘラケズリのもの、回転糸切り無調整のものがあり、ロクロ土師器内黒環、須恵器環とも回転糸切り無調整のものが多い。平瓦には多賀城跡政庁第II期の平瓦II B類、政庁第IV期の平瓦II C類（第36図18）がある。土器・瓦には9世紀前半頃のものもあるが、9世紀後葉～10世紀前葉頃のものが多く含まれている。

（2）SX1900南2道路跡

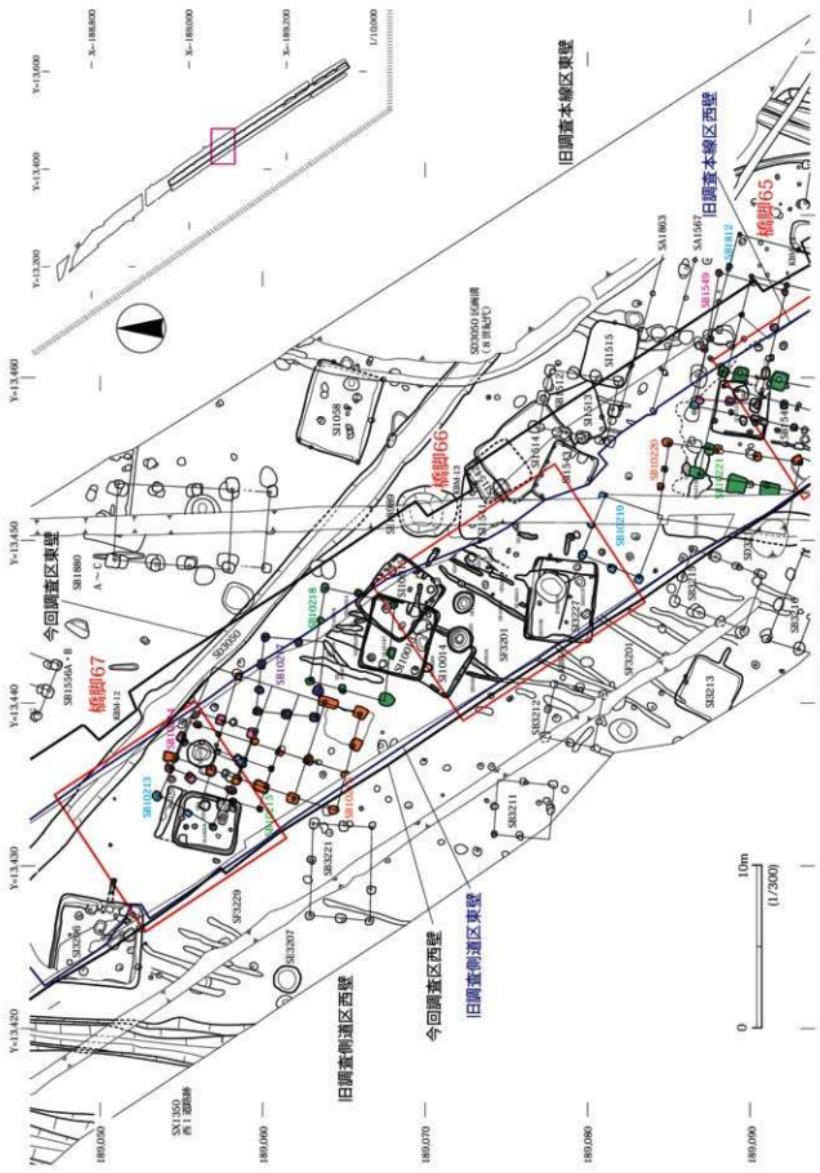
（平面図：第39・44・47図、断面図：第48図、出土遺物：写真図版：図版13上・中）

SX1900南2間道路跡は、SX1350西1道路跡とSX1850西0道路跡の間にあり、東西大路から南に2町離れた東西道路跡で、南2西1区の南側を区画している。これまでの旧調査では、仙塩道路の本線部分の調査で南2西0道路交差点付近、側道部分の調査でその西側約22~32mの範囲を調査していた。そして、仙塩道路の本線部分の旧調査では、南2西0道路交差点を完全に検出するため、西に大きく張り出して拡張し、今回の調査区の多くまで調査していた。今回の調査は、旧調査で調査していない未調査箇所と旧調査で調査済の箇所を再調査したものである（第39図）。

SX1900南2道路跡は、SF3627A・B小溝状遺構群（南北方向のSF3627A→東西方向のSF3627B）、これよりも新しいSF3700B水田跡と重複し、これらよりも新しい。この付近では当初は新旧2時期の



第39図 南2西1区主要遺構全体図



第40図 南2西1区分割図(2)



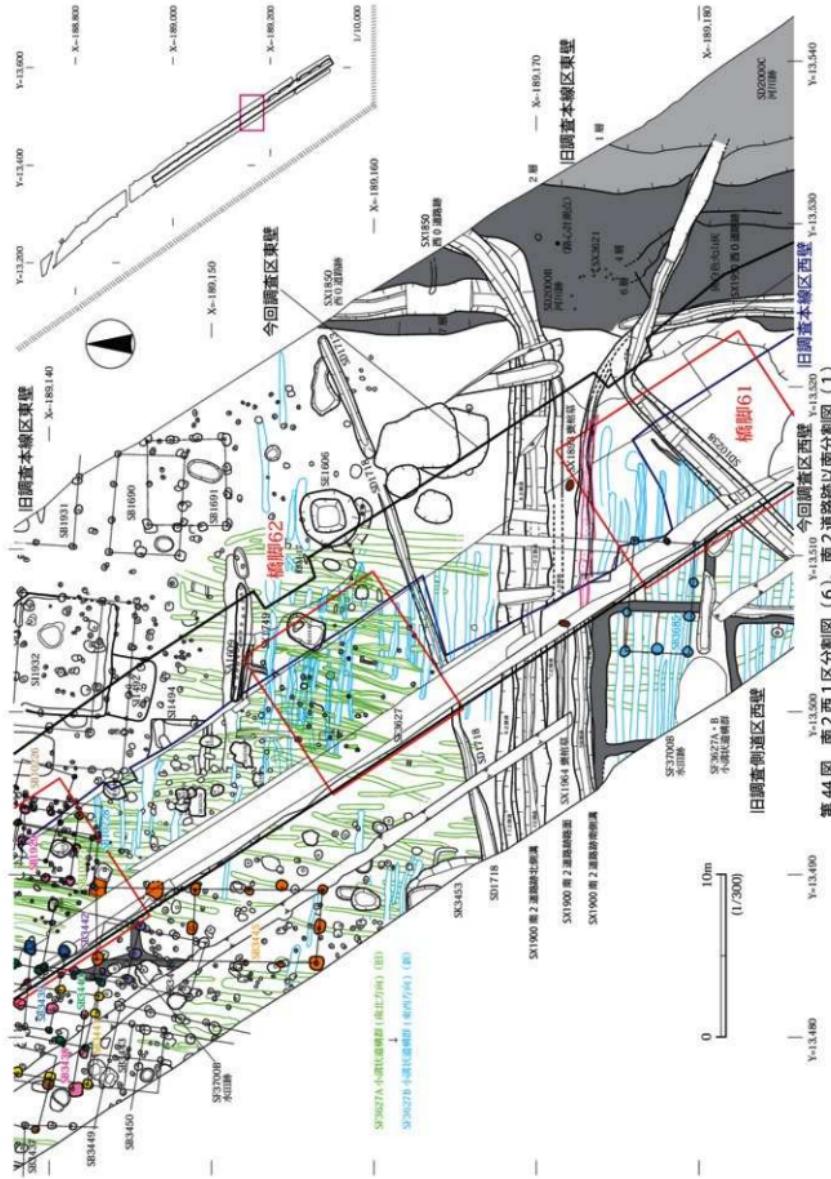
第41圖 南2西1區分割圖 (3)



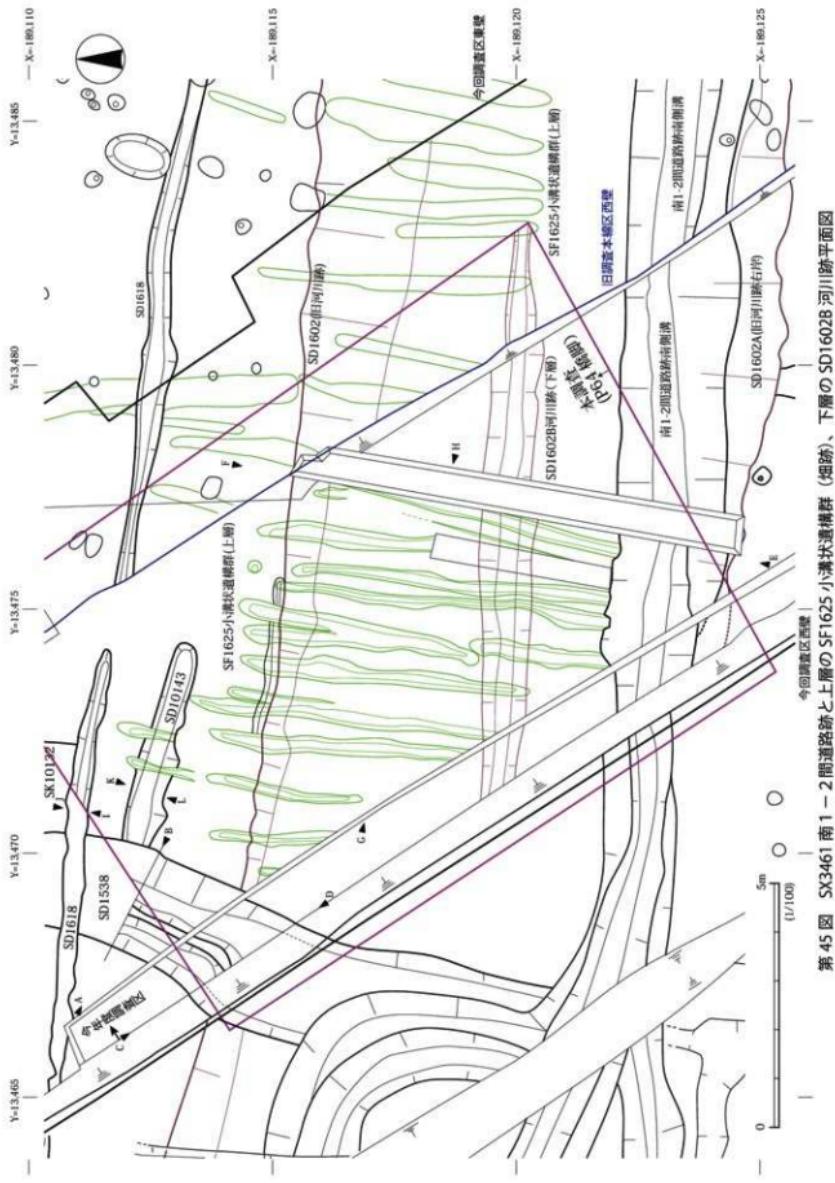
第42回 南2西1区分割図 (4)



第43図 南西1区分図(5)



第44图 南2西1区分割图(6)、南2道路迹以南分割图(1)



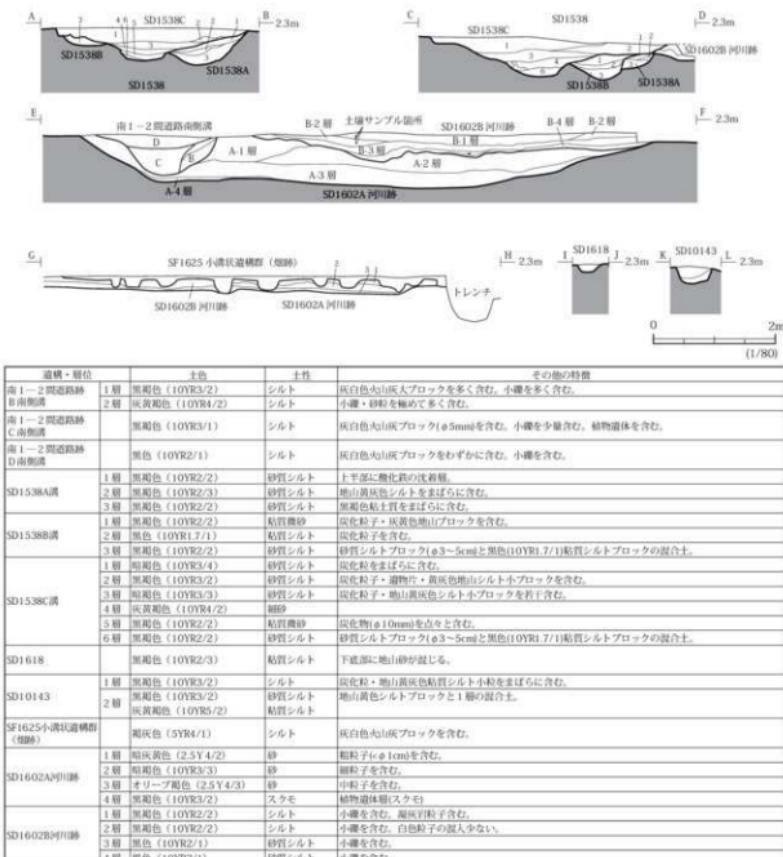
第45図 SX3461南1-2間道路跡と上層のSF1625小溝状遺構群(烟防)、下層のSD1602B河川跡平面図

畠→水田域→南2道路と大きな遺構変遷があったことが知られる。

この南2道路跡の造営時期は貞觀地震の直後とみられ、耕作域から新たに道路造営による方格地割・居住域の拡大（南2西1区の成立）へと、貞觀地震を挟んで土地利用のあり方が大きく変化している。なお、SX1900 南2道路跡については、SF3700B 水田跡の大畦畔上に造営されたと指摘されている（宮城県教育委員会 1996b, p.108）。

【遺構期】

旧調査では、北・南側溝でそれぞれ6時期（A期→B期→C期→D期→E期→F期）、路面で2時期（路面I→路面II）の変遷を確認し、A期の路面を路面I、B～F期の路面を路面IIに位置付けた（宮



第46図 SX3461 南1-2間道路跡、SF1625 小溝状遺構群（細跡）、SD1602B 河川跡断面図

城県教育委員会 1995、pp.55～61)。

旧調査で 6 時期あるとした見解と、E・F 南側溝が南 2 西 0 道路交差点内から「へ」字状に南西に向けて施工され、6 時期ともほぼ同じ位置にある北側溝と平行していないとした見解は、注意が必要である。

今回の調査では旧調査で 4 時期とみた北側溝に 3 時期が確認され、これと平行する位置にある南側溝では 4 時期とみた旧調査とは異なり、2 時期の変遷が認められた。A 北側溝は旧調査と同様に整地層の路面 II で覆われ、このほぼ同じ位置で重複する北側溝よりも内側で再検出した。平行する北・南側溝は最大 4 時期となることから、4 時期の変遷とみてよいだろう。そして、旧調査の B 期北・南側溝と今回の調査の B 期北側溝には、10 世紀前葉に降灰した灰白色火山灰が含まれている。10 世紀前葉の B 期以降、10 世紀中頃の道路廃絶までの 40 年程の短期間に北側溝に 4 時期 (C 期→D 期→E 期→F 期) の変遷をみるのは、9 世紀初頭からあって 6 時期変遷する南 1 道路跡と比べ、遺構期の数が多いすぎるし、遺構期の間隔も半分程と短くなりすぎる。貞觀 11 年 (869) 陸奥国大地震後の A 期から 10 世紀中頃の D 期までの 4 時期だと、遺構期の間隔も南 1 道路跡と近似する。旧調査で 2 時期の変遷をみて E・F 南側溝と位置付けた「へ」字状に曲がる SD10238 溝については、南 2 道路跡の廃絶以降に位置付けられる可能性が高いと考えられる。

なお、旧調査で①路面に路面 I、路面 II の新旧 2 時期あり、A 北側溝が路面 II の整地土で覆われるとした見解、②A 期～D 期の南側溝の位置は同じだが、A 期、B 期、C・D 期の北側溝の位置は異なるとした見解、③北側溝の位置は路幅が側溝心々 1.6 m と最小となる A 期から、路幅が側溝心々で約 3.8 m と最大となる B 期に北側溝の位置が大きく移して拡幅され、C・D 期に路幅が側溝心々で 3.3 m となるように北側溝が少し内側に移されたとした見解には、変更がない。

【側溝の規模】

旧調査と今回の調査を併せてみると、A 北側溝は上幅不明、深さ 30cm、B 北側溝は上幅 2 m 前後、深さ約 80cm、C 北側溝は上幅約 1 m 前後、深さ約 90cm、D 北側溝は上幅 1.3 m、深さ約 60cm、C 南側溝は上幅 50cm 前後、深さ 45cm、D 南側溝は上幅約 0.8 m、深さ 30cm である。

【路幅・方向】

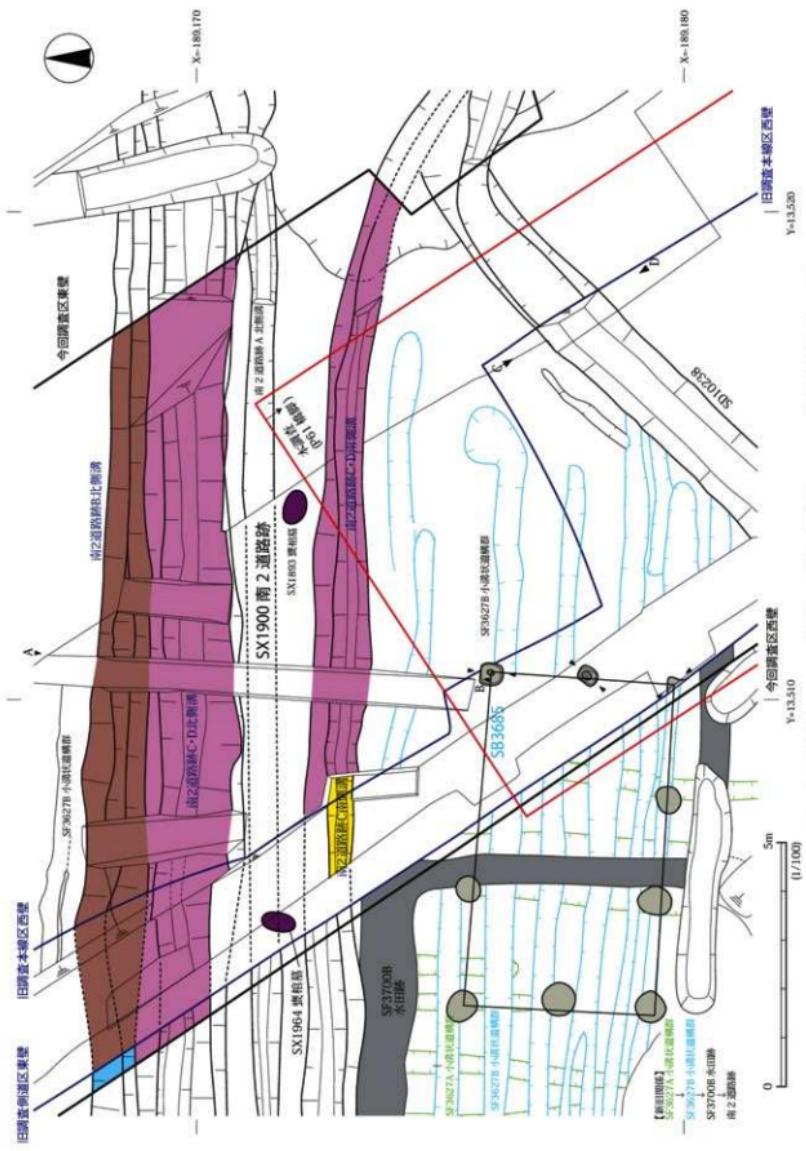
路幅は側溝心々でみると A 期が 1.6 m、B 期が約 3.8 m、C・D 期が 3.3 m である。方向は C・D 期北側溝心々でみると、東で南に 1° 傾む。

【路面】

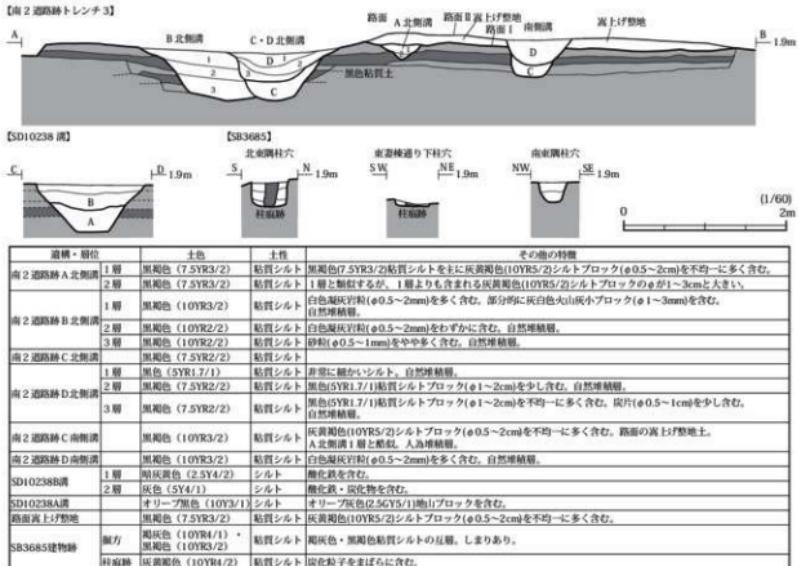
路面には新旧 2 時期あり、A 期の路面 I の上を 10cm 程の厚さの灰黄褐色シルトブロックを多く含む黒褐色土で嵩上げ整地し、C～D 期の路面 II としている。

【道路側溝の出土遺物】

今回の調査では、A 北側溝より非クロコロ土師器内黒平底杯、ロクロ土師器内黒環、須恵器环・甕、B 北側溝よりロクロ土師器内黒环、須恵器环・甕・甕、D 期北側溝より非クロコロ土師器内黒塊、ロクロ土師器内黒环、須恵器高台杯・甕、D 期南側溝より土師器甕、須恵器环・甕・甕などの破片が出土した。D 期北・南側溝出土土器のうち、ロクロ土師器内黒环には体下部～底部回転ヘラケズリで内面



第47图 南2道路段、SX1964 横位合口土师器瓶窖、SB3685 捏立柱建物跡平面图



第48図 南2道路跡、SD10238A・B溝、SB3685掘立柱建物跡断面図

底部粗い放射状ミガキのもの、回転糸切り無調整で内面底部放射状ミガキのもの、須恵器杯にはヘラ切り無調整のもの、須恵器高台环には静止糸切後に体下部～底部周縁を回転ヘラケズリしてから付高台したものがある。

(3) 掘立柱建物跡

南2西1区では、旧調査ですでに検出していた掘立柱建物跡13棟を構成する柱穴を再検出または新たに検出した他、新たに掘立柱建物跡14棟を検出した。検出した掘立柱建物跡は計27棟となる。

●旧調査で検出し、今回の調査区内にかかる掘立柱建物跡13棟 (SB1512・1536・1549・1812・1873・1929・3438・3439・3440・3441・3442・3445・3447)

【SB1512掘立柱建物跡】(平面図: 第39・40図、断面図: 第54図)

南2西1区の北半南部に位置する。旧調査ですべての柱穴を検出していた桁行3間、梁行2間の南北棟である(宮城県教育委員会1996a, p.232)。今回の調査では、橋脚P 66と橋脚P 67の間の確認調査区にかかる位置で、西側柱列と南妻の柱穴6箇所を再検出した。

【SB1536掘立柱建物跡】(平面図: 第39・41図)

南2西1区の北半南部に位置する。旧調査ですべての柱穴を検出していた桁行3間、梁行2間の南北棟である(宮城県教育委員会1996a, p.233)。今回の調査で、橋脚P 65と橋脚P 64の間の確認調査区にかかる位置で、柱穴3箇所(南西隅柱穴、西側柱列の北より2間目柱穴、南妻棟通り下柱穴)を再検出した。

【SB1549 挖立柱建物跡】(平面図: 第 39・41・52 図、断面図: 第 54 図)

南 2 西 1 区の北半南部にあり、橋脚 P 65 の本発掘調査区と周囲の確認調査区、旧調査区に位置する。旧調査では 5 箇所の柱穴（東妻の柱穴 3 箇所、北側柱列の西より 1 間目柱穴、南側柱列の東より 1 間目柱穴）を検出していた。今回の調査で新たに 4 箇所の柱穴（西妻の柱穴 3 箇所、南側柱列の西より 1 間目柱穴）を検出し、桁行 3 間、梁行 2 間の東西棟建物跡と確定した。

SI10132 竪穴住居跡と重複し、これよりも新しい。SB1812・10221 建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。平面規模は、桁行が南側柱列で総長 7.2 m、柱間寸法は西より 3.1 m、1.8 m、2.3 m、梁行は東妻で総長 4.2 m、柱間寸法は北より 2.2 m、2.0 m である。方向は東妻でみると、北で東に約 11° 傾している。柱穴は一辺 40cm 前後の隅丸方形で、深さ 21 ~ 27cm、柱痕跡は径 18cm 前後の円形である。遺物は出土していない。

【SB1812 挖立柱建物跡】(平面図: 第 39・41・52 図、断面図: 第 54 図)

南 2 西 1 区の北半南部に位置する。橋脚 P 65 の本発掘調査区と周囲の確認調査区、旧調査区にかかる身舎が桁行 4 間、梁行 2 間で、3 面廂（北廂 5 間、東・西廂 5 間）の付く南北棟建物跡である。

今回の調査では、身舎西入側柱列、西廂の一部の柱穴を検出できなかったが、残りの柱穴を検出した結果、身舎が桁行 4 間、梁行 2 間で、3 面廂（北廂 5 間、東・西廂 5 間）の付く南北棟建物跡と確定した。

SB1549・10221 建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。SI10125 竪穴住居跡、SK10129・10178 土壙、SK10130 土壙（旧調査の SD1740 溝と一連）と重複してこれらよりも新しい。また、北廂の北 2.1 m の SA1567 柱列跡、北 4.1 m の SA1863 柱列跡とは北廂の方向と一致するので、同時期に存在した可能性が高い。

平面規模は、桁行が身舎東入側柱列でみると総長 9.5 m、柱間寸法は北より 2.2 m、2.5 m、2.5 m、2.4 m、梁行が身舎南妻で総長 7.1 m、柱間寸法は西より 2.4 m、2.3 m、2.3 m である。廂の出は西廂が 1.2 m、北廂が 1.5 m、東廂が 2.2 m である。廂の柱間寸法は東廂でみると総長 10.8 m、柱間寸法は北より 1.4 m、2.3 m、2.3 m、2.4 m、2.3 m で、北廂でみると総長 10.9 m、柱間寸法は西より 3.6 m（2 間分）、2.2 m、2.2 m、2.1 m である。方向は西入側柱列でみると北で東に約 16° 傾する。柱穴は身舎・廂とも径 20 ~ 25cm の円形のものを基調とするが、それよりも規模の大きな隅丸方形のものも一部ある。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色・暗灰黄色シルト土である。柱痕跡は径 15m 前後の円形で、堆積土は黒色粘質シルト土である。

今回の調査では、掘方より回転糸切無調整のロクロ土師器内黒環・甕、須恵系土器破片が出土した。

【SB1873 挖立柱建物跡】(平面図: 第 39・43・56 図、断面図: 第 58 図)

南 2 西 1 区の南半北部にあり、橋脚 P 63 の本発掘調査区と周囲の確認調査区及び旧調査区に位置する。旧調査で南西隅柱穴を除くすべての柱穴を検出し、桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟建物跡とみていた（宮城県教育委員会 1996a、p.238・239）。今回の調査で南西隅柱穴を新たに検出し、桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟建物跡と確定した。

SB1496・10223・10224 掘立柱建物跡や SI1491・1635 竪穴住居跡と重複し、SI1491・1635 竪穴

住居跡より新しい。SB1496・10223・10224 挖立柱建物跡との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が東側柱列で総長 7.5 m、柱間寸法は北より 2.4 m、2.6 m、2.5 m、梁行は北妻で総長 4.6 m、柱間寸法は西より 2.3 m、2.3 m である。方向は東側柱列でみると、北で東に約 4° 傾する。柱穴は一辺 26 ~ 39cm の方形で、深さは 18 ~ 29cm、柱痕跡は径 10 ~ 15cm の円形である。柱穴や柱痕跡には灰白色火山灰粒が混入する。遺物は柱穴からロクロ調整の土師器数片、柱痕跡より須恵系土器坏小片が出土した。

【SB1929 挖立柱建物跡】(平面図: 第 39・43・56 図、断面図: 第 58 図、写真図版: 図版 21)

南 2 西 1 区の南半北部にある。旧調査で 3 箇所の柱穴(北東隅、東妻棟通り下、北側柱列中央)を検出したもので、今回の調査で橋脚 P 63 の本発掘調査区と周囲の確認調査区に位置することから、前回の調査分を含め、全体を検出し、桁行 2 間、梁行 2 間の東西棟建物跡であることが確定した。

SF3627 小溝状遺構群と重複し、これよりも新しい。また、SB10226・10227・10228 建物跡、SK10153 土壌と重複するが、直接的な切り合い関係がないため新旧関係は不明である。

平面規模は、桁行が北側柱列で総長 4.1 m、柱間寸法が西より 2.0 m、2.1 m、梁行が西妻で 3.1 m、柱間寸法が北より 1.5 m、1.6 m である。方向は西妻でみると北で東に約 8° 傾する。柱穴は一辺 50cm 前後の隅丸方形を基調とし、残存する深さは 25 ~ 45cm で、掘方埋土は炭片、地山灰黄褐色シルト土ブロックを含む黒褐色シルト土の互層である。柱痕跡は径 15cm 前後の円形で、堆積土は黒褐色シルト土である。

今回の調査では、掘方からロクロ土師器表、須恵器坏・表、柱穴から 9 世紀前半頃のヘラ切り無調整の須恵器坏片が出土した。

【SB3438 挖立柱建物跡】(平面図: 第 39・43・55 図、断面図: 第 58 図)

南 2 西 1 区の南半北部に位置し、旧調査で北東隅柱穴を除くすべての柱穴を検出していた桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟建物跡である。今回、橋脚 P 63 の本発掘調査区で、北東隅柱穴を新たに検出した。

SB3439・3440・3441・3447・10225 挖立柱建物跡、SF3627 小溝状遺構群と重複し、SB3440・3447 挖立柱建物跡より古く、SB3441 挖立柱建物跡、SF3627 小溝状遺構群より新しい。SB3439・10225 挖立柱建物跡との新旧関係は不明である。柱穴埋土には灰白色火山灰ブロックが含まれている。

【SB3439 挖立柱建物跡】(平面図: 第 39・43・55 図、断面図: 第 58 図、出土遺物: 第 37 図 17、写真図版: 図版 21)

南 2 西 1 区の南半北部に位置し、旧調査で南西部の柱穴 5 箇所を検出していた建物跡である。橋脚 P 63 の本発掘調査区で、東側柱列など柱穴 5 箇所を新たに検出した。東側柱列柱穴は他よりも大きく、組合せにやや疑問が残るが、他に組み合う柱穴がないので、桁行 3 間、梁行 3 間の南北棟建物跡と判断した。

SB10225 建物跡、SF3627 小溝状遺構群と重複し、SB10225 建物跡よりも古く、SF3627 小溝状遺構群よりも新しい。SB3440 建物跡とは直接的な重複がないため新旧不明だったが、SB3440 建物跡が SB10225 建物跡よりも新しいことから、SB3440 建物跡が本建物跡よりも新しいことが判明した。

SB3438・3441・3442・10223・10224 建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。西に隣接するSB3447 建物跡とは同時に存在しないが、新旧関係は不明である。

平面規模は、桁行が東側柱列で総長 6.1 m、柱間寸法が北より 2.2 m、4.0 m（2 間分）、梁行が南妻で総長 4.8 m、柱間寸法が西より 1.9 m、1.5 m、1.3 m である。方向は東側柱列みると北で東に約 13° 偏する。柱穴は一辺 30cm 前後の隅丸方形を基調とするが、東側柱列は長辺 80cm 前後、短辺 60cm 前後の隅丸長方形で他の柱穴よりも大きい。残存する深さは 30 ~ 40cm で、掘方埋土は地山灰白色シルト土ブロックを含む褐灰色シルト土の互層である。柱痕跡は径 14cm 前後の円形で、堆積土は褐灰色シルト土である。

今回の調査では、掘方から非ロクロ土師器両黒坏、回転糸切り無調整のロクロ土師器内黒坏・甕、ヘラ切り無調整の須恵器坏・甕、製塙土器、輪羽口（第 37 図 17）の破片が出土した。

【SB3440 挖立柱建物跡】（平面図：第 39・43・55・57 図、断面図：第 58 図）

南 2 西 1 区の南半北部に位置し、橋脚 P 63 の本発掘調査区と旧調査区に位置する桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟建物跡である。今回、橋脚 P 63 の本発掘調査区で、新たに 3 箇所の柱穴（北東隅柱穴、北妻棟通り下柱穴、東側柱列北より 1 間目柱穴）を検出した。すべての柱穴を検出したことになり、桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟建物跡と確定した。

SB3438・3439・3441・3442・3448・10225 建物跡、SF3627 小溝状遺構群と重複し、SB3438・3441・3442・10225 建物跡、SF3627 小溝状遺構群よりも新しい。SB3439・3448 との新旧関係は不明である。

平面規模は、桁行が西側柱列で総長 5.5 m、柱間寸法が北より 1.8 m、2.3 m、1.4 m、梁行が北妻で総長 3.9 m、柱間寸法が西より 2.0 m、1.9 m である。方向は西側柱列でみると北で東に約 14° 偏する。柱穴は一辺 50cm 前後の隅丸方形または短辺 50cm 前後、長辺 60cm 前後の隅丸長方形を基調とし、残存する深さは 30 ~ 40cm 程度、掘方埋土は地山褐灰色シルト土ブロックを含む灰白色シルト土の互層である。柱痕跡は径 16cm 前後の円形で、堆積土は灰白色シルト土である。

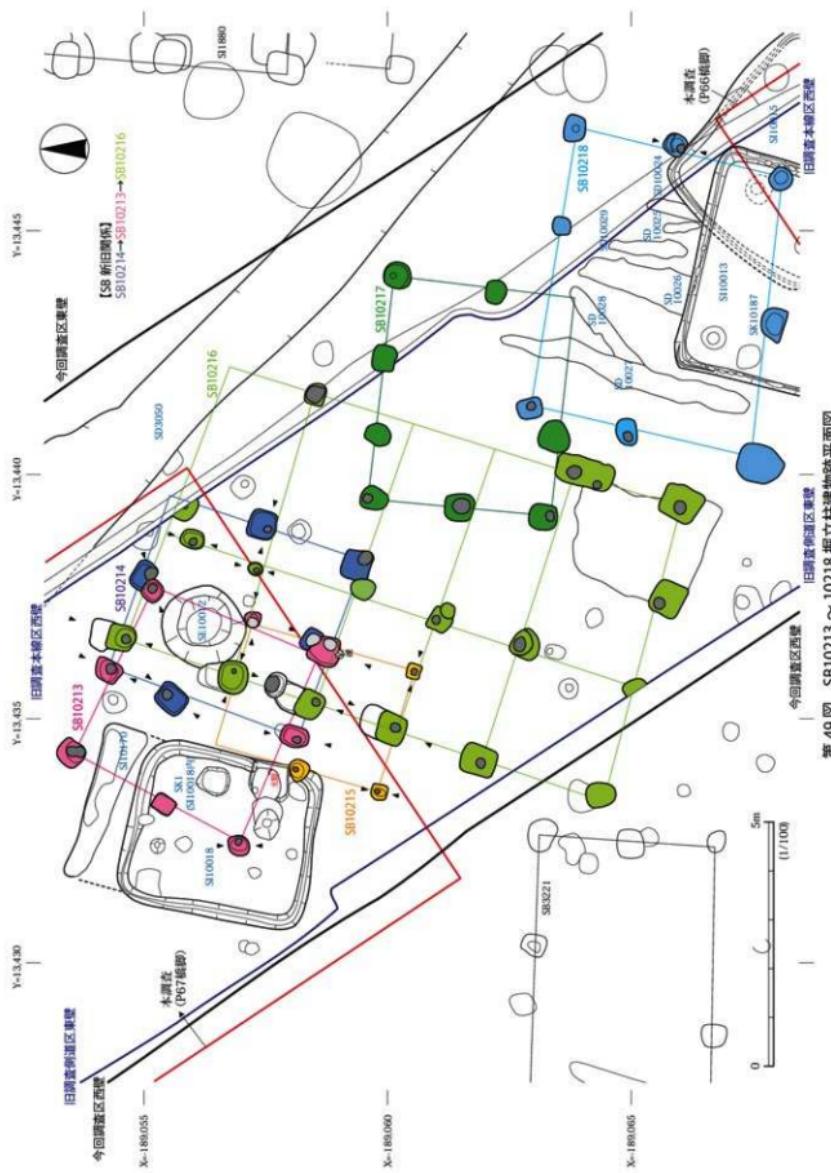
今回の調査では、掘方からロクロ土師器甕、須恵器甕の破片が出土した。

【SB3441 挖立柱建物跡】（平面図：第 39・43・55 図、断面図：第 58 図、出土遺物：第 72 図 126）

南 2 西 1 区の南半北部に位置する。旧調査で 9 箇所の柱穴を検出し、桁行 4 間以上、梁行 2 間の南北棟建物跡とみていた（宮城県教育委員会 1996a, p. 234）。今回、橋脚 P 63 の本発掘調査区で、新たに 3 箇所の柱穴（北東隅柱穴、北妻棟通り下柱穴、東側柱列北より 1 間目柱穴）を検出した。すべての柱穴を検出したことになり、桁行 4 間、梁行 2 間の南北棟建物跡と確定した。

SB3438 ~ 3440・3443・3447・10225 建物跡、SF3627 小溝状遺構群と重複し、SB3438・3440・3447 建物跡よりも古く、SB3443 建物跡、SF3627 小溝状遺構群よりも新しい。SB3439 との新旧関係は不明である。

平面規模は、桁行が西側柱列で総長 8.5 m、柱間寸法が北より 2.0 m、2.2 m、1.9 m、2.4 m、梁行が南妻で総長 5.6 m、柱間寸法が西より 2.6 m、3.0 m である。方向は西側柱列でみると北で東に約 11° 偏する。柱穴は一辺 50cm 前後の隅丸方形または短辺 50cm 前後、長辺 60cm 前後の隅丸長方形



第49图 SB10213~10218掘立柱建物跡平面図
（西壁）

を基調とし、残存する深さは40～60cm程で、掘方埋土は地山灰白色土ブロックを含む褐色シルト土の互層である。柱痕跡は径15cm前後の円形で、堆積土は褐色シルト土である。

旧調査では土師器環・須恵器環などが出土したが、今回の調査では須恵系土器環（第72図126）が柱穴より出土した。これが最も新しい時期の遺物となる。他には柱穴からロクロ土師器内黒环・甕、回転糸切り無調整の須恵器環・甕、須恵系土器環の破片が出土した。

【SB3442 挖立柱建物跡】（平面図：第39・43・56・57図、断面図：第58図）

南2西1区の南半北部に位置する。旧調査で5箇所の柱穴を検出し、桁行2間以上、梁行2間以上の建物跡とみていた。今回、橋脚P63の本発掘調査区で、新たに北東隅柱穴を検出し、桁行3間、梁行2間の南北棟建物跡と確定した。

重複関係からみて、SF3627小溝状遺構群よりも新しく、SB3439・3440・3445・3448掘立柱建物跡よりも古い。SB3439・3445・3448建物跡との新旧関係は不明である。

平面規模は、桁行が西側柱列で総長5.2m、柱間寸法が北より1.8m、1.8m、1.6mm、梁行が南妻で総長3.4m、柱間寸法が西より1.6m、1.8mである。方向は西側柱列でみると北で東に約8°偏する。柱穴は短辺40～50cm前後、長辺50～60cm前後の隅丸長方形を基調とし、残存する深さは30～60cm程で、掘方埋土は地山灰白色シルト土ブロックを含む褐色シルト土の互層である。柱痕跡は径15～21cmの円形で、堆積土は褐色シルト土である。

今回の調査では、掘方からロクロ土師器内黒环の破片が出土した。

【SB3445 挖立柱建物跡】（平面図：第39・43・57図、断面図：第58図）

南2西1区の南半北部に位置する。旧調査で10箇所すべての柱穴を検出し、桁行3間、梁行2間の建物跡とみていた。

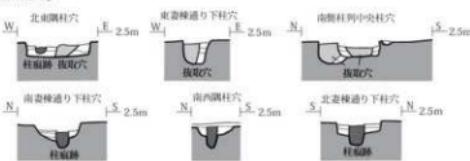
【SB10214】



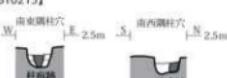
【SB新旧関係】

SB10214→SB10213→SB10216

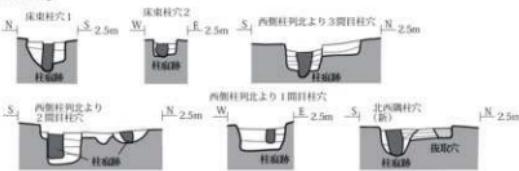
【SB10213】



【SB10215】



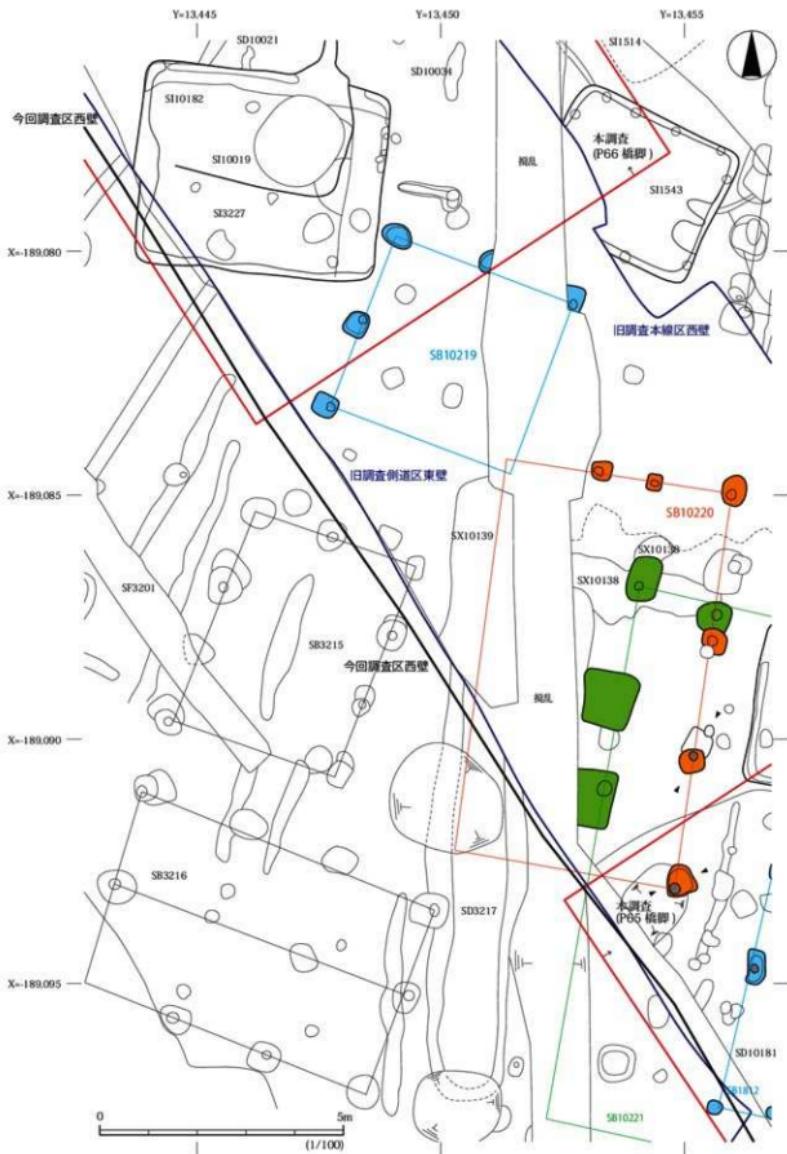
【SB10216】



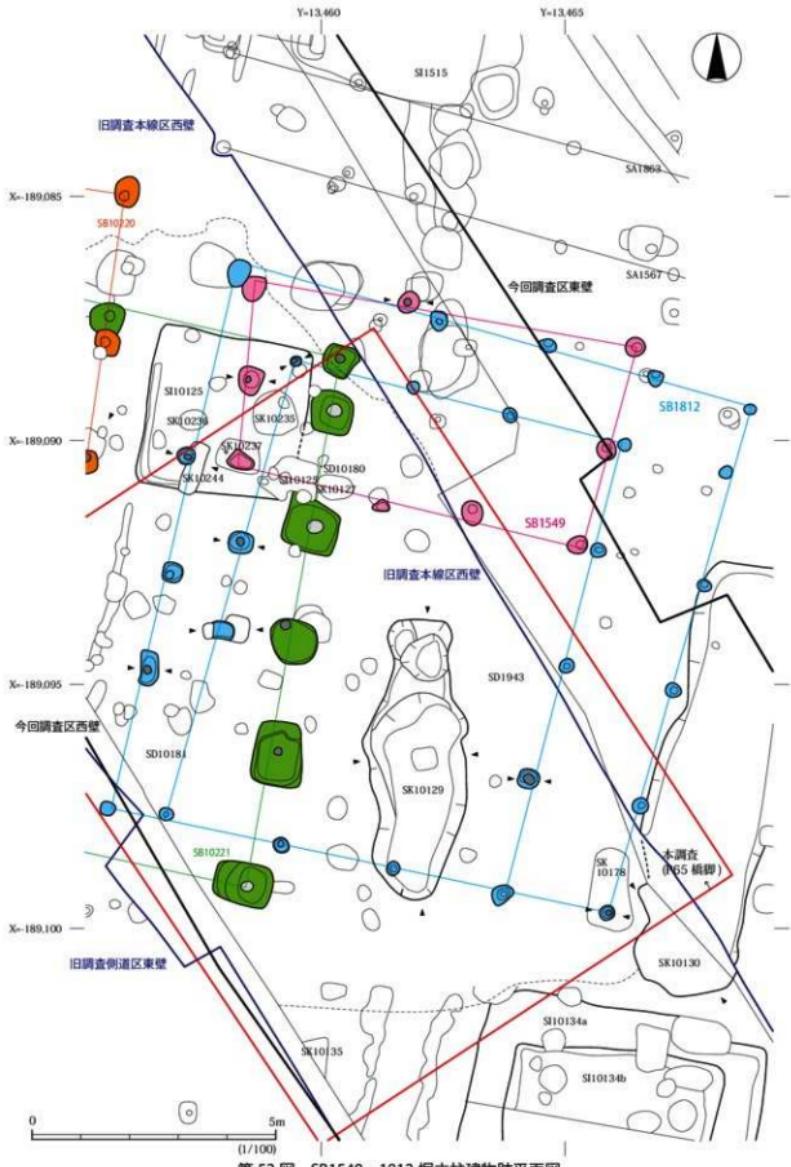
【SB10218】



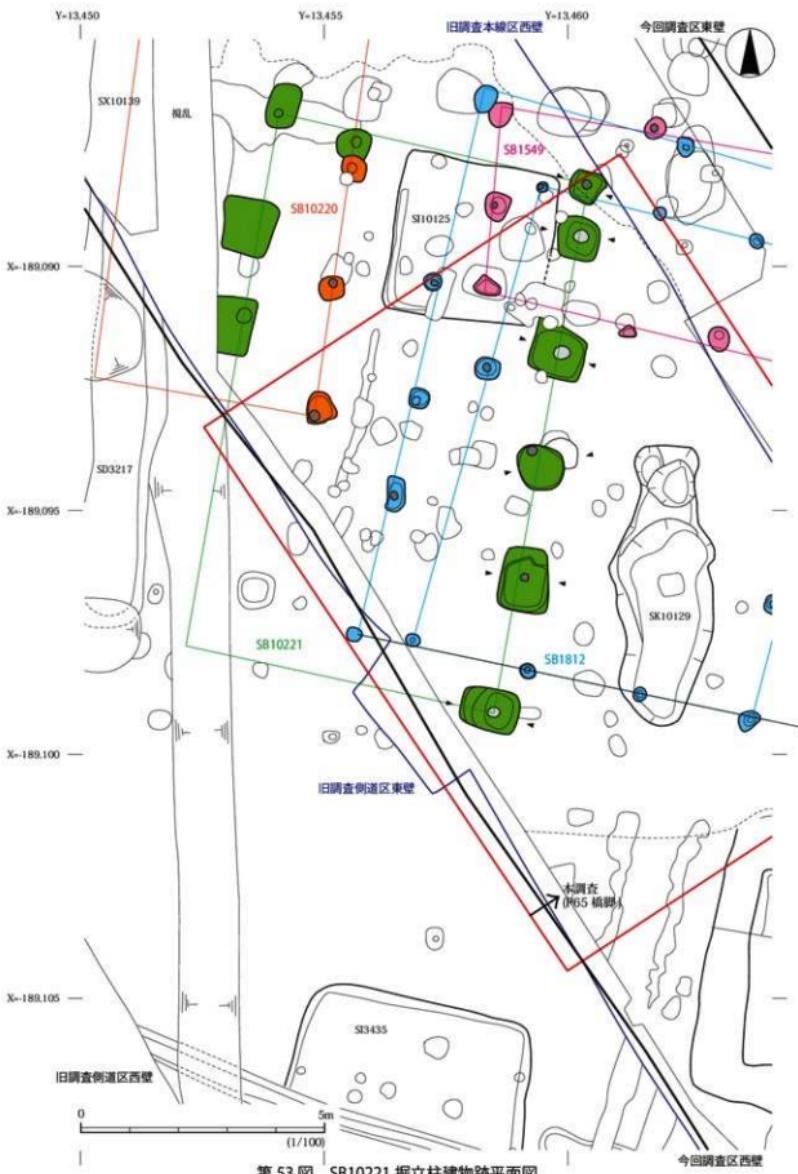
第50図 SB10213～10218 挖立柱建物跡断面図



第51図 SB10219・10220 挖立柱建物跡平面図



第52図 SB1549・1812掘立柱建物跡平面図



今回、橋脚 P 63 の本発掘調査区とその南側で、東側柱列の延長上でこれと組み合う柱穴 2箇所を検出した。この柱穴はこの建物跡の他の柱穴よりも大きいが、組み合う柱穴がない。このことから、桁行 3間、梁行 2間の南北棟建物跡ではなく、北から 2間目に間仕切り柱穴を持つ桁行 5間、梁行 2間の南北棟建物跡とみられる。

今回の調査では掘方からロクロ土師器甕、9世紀前半頃のヘラ切りの須恵器杯、柱痕跡からロクロ土師器内黒坏、猿投窓製品の灰釉陶器壺、柱痕跡から須恵器系土器初源期环の破片が出土した。

【SB3447 挖立柱建物跡】(平面図：第 39・43・55 図)

南 2 西 1 区の北半南部に位置する。旧調査で攪乱のため検出できなかった南東隅柱穴を除く 9 箇所すべての柱穴を検出し、桁行 3 間、梁行 2 間の建物跡とみていた（宮城県教育委員会 1996a, p. 236）。今回、橋脚 P 63 の本発掘調査区にかかる北東隅柱穴を再検出した。

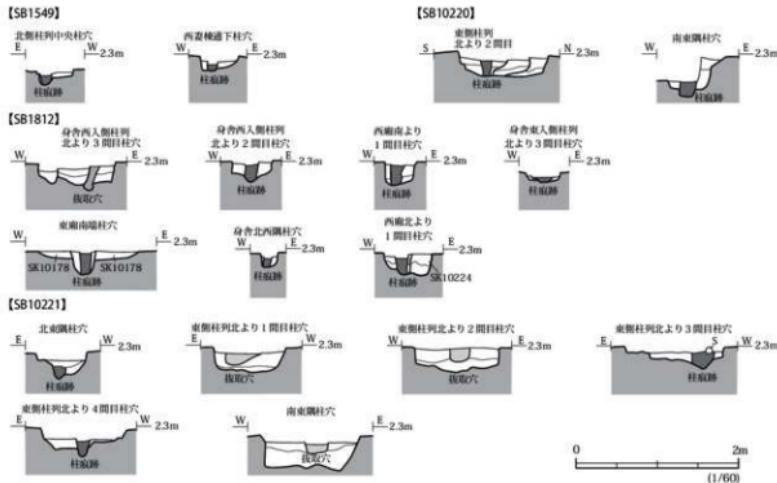
●今回の調査で新たに検出した掘立柱建物跡 14 棟 (SB10213 ~ 10228)

【SB10213 挖立柱建物跡】(平面図：第 39・40・49 図、断面図：第 50 図)

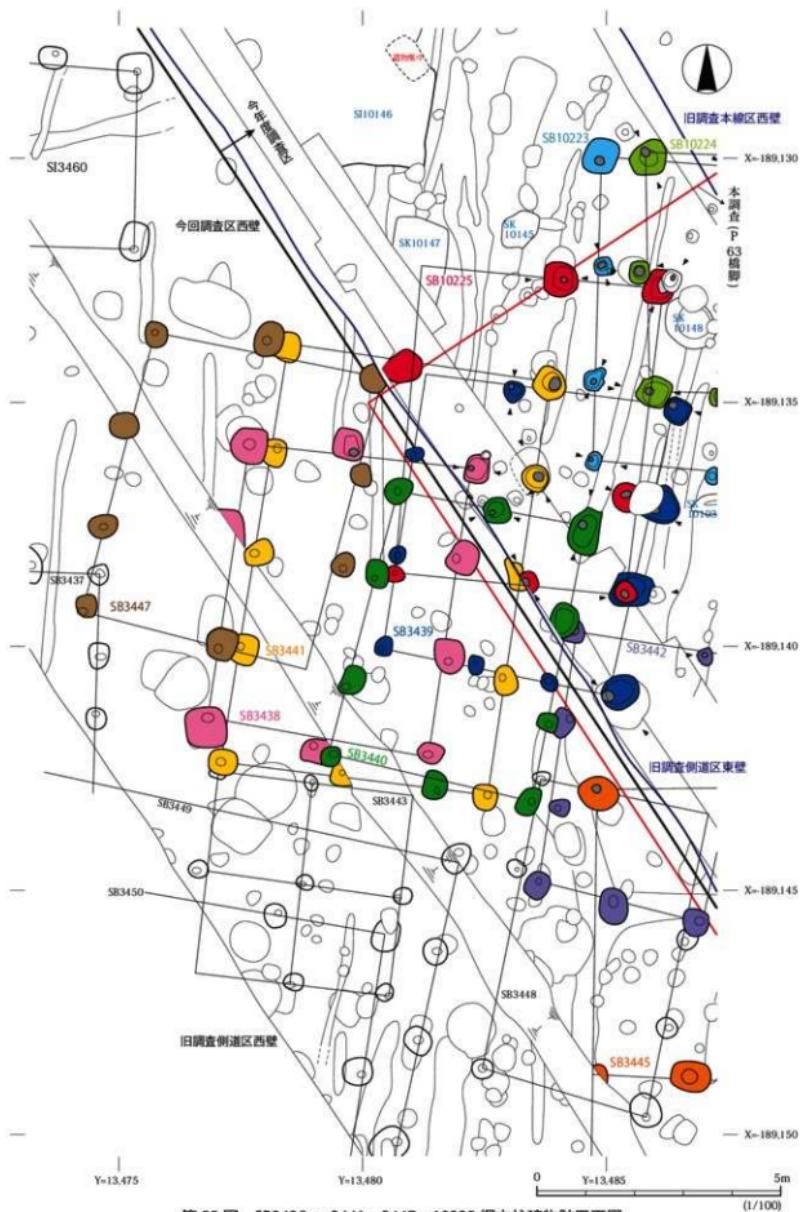
南 2 西 1 区の北半北西部に位置し、橋脚 P 67 の本発掘調査区とその南東隣の確認調査区で検出した桁行 2 間、梁行 2 間の南北棟建物跡である。

SI10018 竪穴住居跡、SB10214・10215・10216 建物跡、SE10012 井戸跡と重複する。SI10018 竪穴住居跡、SB10214 建物跡よりも古く、SB10215 建物跡よりも新しい。SB10216 建物跡、SE10012 井戸跡との新旧関係は不明である。SB10214 建物跡と本建物跡は、位置を変えて重複するもののほぼ同規模である。

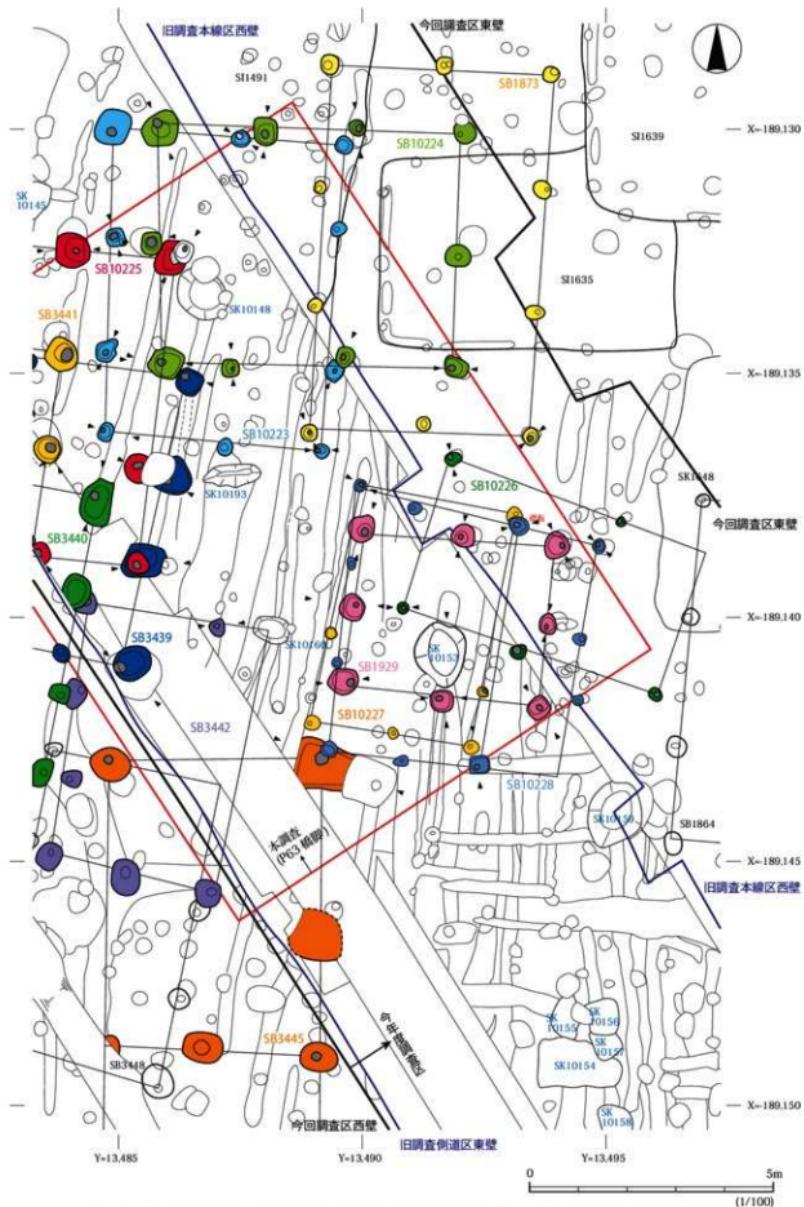
平面規模は、桁行が東妻で総長 3.9 m、柱間寸法は北より 2.2 m、1.7 m、梁行が北妻で総長 3.7 m、



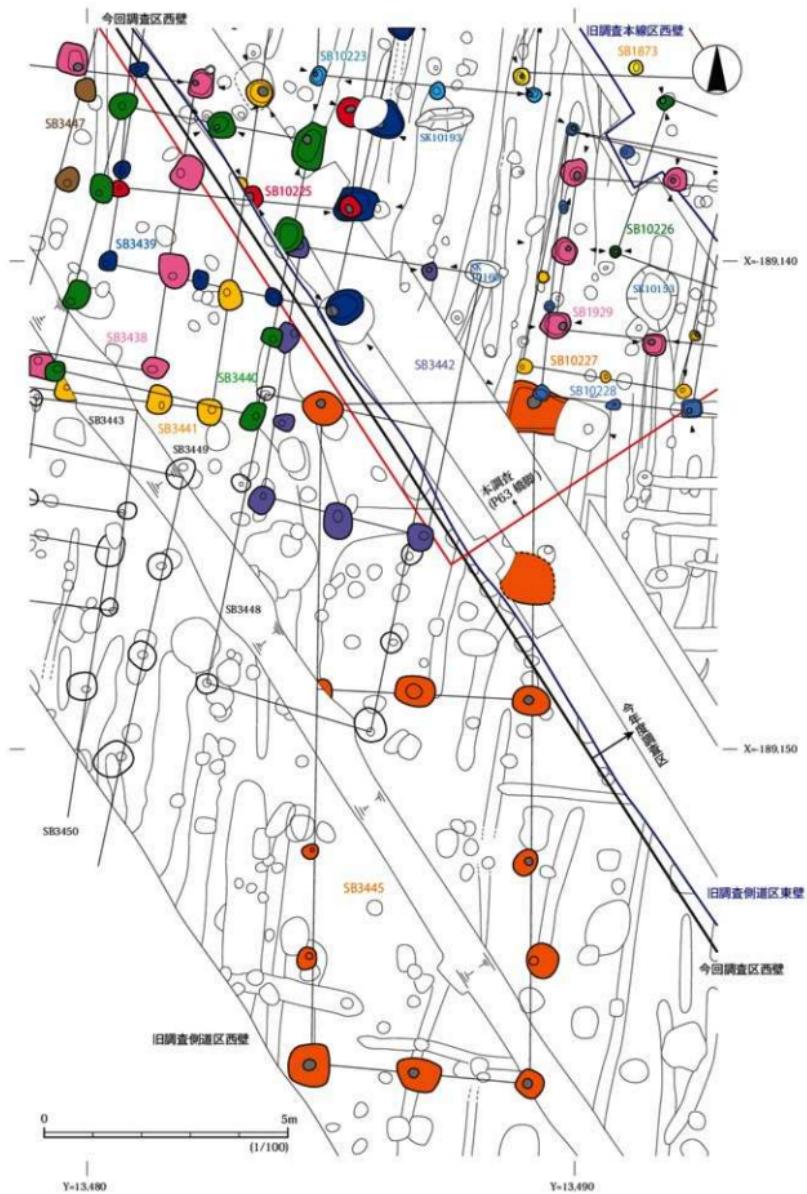
第 54 図 SB1549・1812・10220・10221 挖立柱建物跡断面図



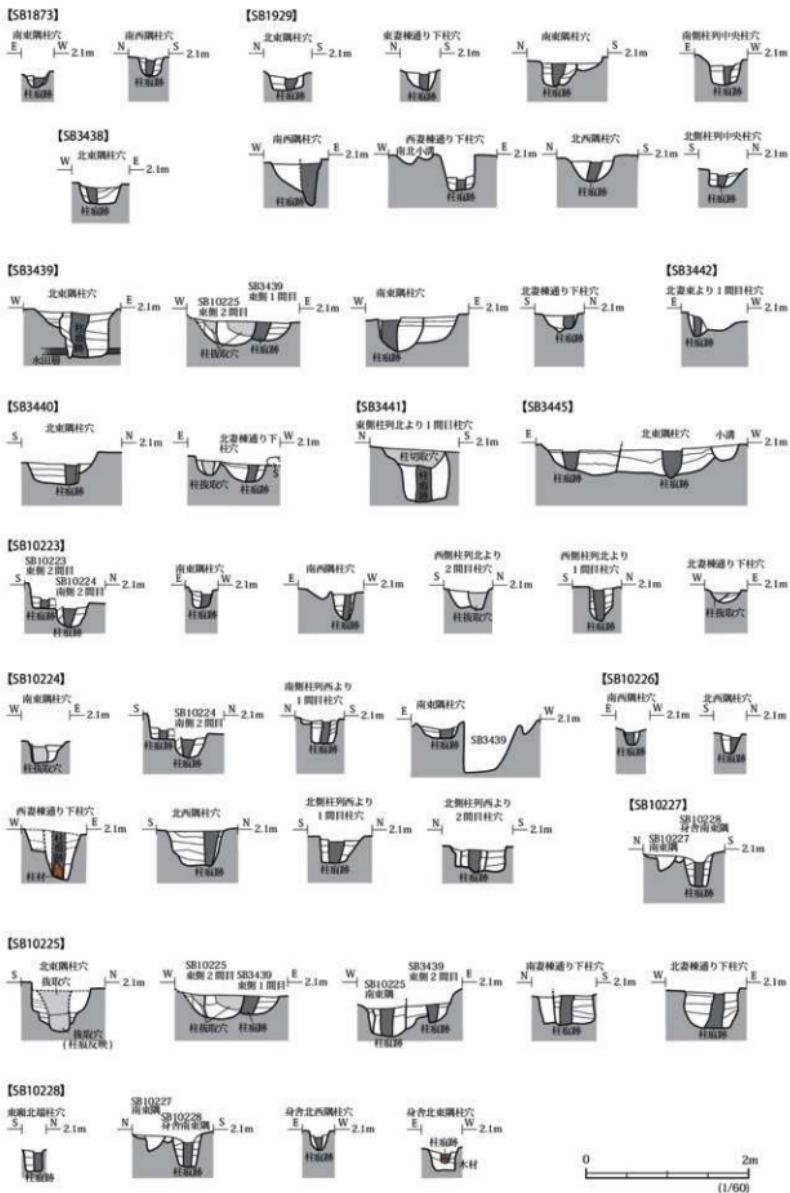
第55図 SB3438～3441・3447・10225掘立柱建物跡平面図



第 56 図 SB1873・1929・3442・10223・10224・10226～10228 掘立柱建物跡平面図



第 57 図 SB3440・3442・3445 挖立柱建物跡平面図



第58図 SB1873・1929・3438～3442・3445・10223～10228 挖立柱建物跡断面図

柱間寸法が西より 1.9 m、1.8 m である。方向は西妻でみると北で東に約 28° 偏する。柱穴は一辺 40 ~ 50cm の隅丸方形または短辺 40cm 前後、長辺 50 ~ 60cm の隅丸長方形で、残存する深さは 20 ~ 30cm 程である。掘方埋土は地山灰黄褐色砂質土ブロックを含む黒褐色細砂質シルト土の互層である。柱痕跡は径 15 ~ 18cm の円形で、堆積土は黒褐色粘質シルト土である。遺物は出土していない。

【SB10214 掘立柱建物跡】(平面図: 第 39・40・49 図、断面図: 第 50 図)

南 2 西 1 区の北半北西部に位置し、橋脚 P 67 の本発掘調査区とその南東隣の確認調査区で検出した桁行 2 間、梁行 2 間の南北棟建物跡である。

SB10213・10215・10216 建物跡、SE10012 井戸跡と重複する。SB10215 建物跡よりも新しく、SB10213 建物跡よりも古い。SB10216 建物跡、SE10012 井戸跡との新旧関係は不明である。北西隅・南西隅柱穴は SB10213 建物跡柱穴と完全に重複しており、検出していない。

平面規模は、桁行が東側柱列で総長推定約 4.2 m、柱間寸法が北より推定 2.1 m、2.1 m、梁行が北妻で推定総長約 3.7 m である。方向は東側柱列でみると北で東に約 18° 偏する。柱穴は一辺 60cm の隅丸方形または短辺 50cm 前後、長辺 60cm 前後の隅丸長方形で、残存する深さは 15 ~ 60cm 程である。掘方埋土は地山灰黄褐色シルト土ブロックを含む黒褐色砂質シルト土の互層である。柱痕跡は径 15 ~ 18cm の円形で、堆積土は黒褐色砂質シルト土である。

柱穴から非ロクロ土器壺、須恵器環の破片が出土した。

【SB10215 掘立柱建物跡】(平面図: 第 39・40・49 図、断面図: 第 50 図)

南 2 西 1 区の北半北西部に位置し、橋脚 P 67 の本発掘調査区とその南東隣の確認調査区で検出した桁行 2 間、梁行 1 間または 2 間の南北棟建物跡である。北西隅柱穴は未検出で、東側柱列中央柱穴は SB10213・10214 建物跡柱穴と完全に重複しており、検出していない。なお、梁行が 2 間の可能性もあり、その場合には北・南棟通り下柱穴は SB10216 建物跡柱穴と完全に重複し、SB10216 建物跡よりも古いことになる。

SI10018 穫穴住居跡、SB10213・10214・10216 建物跡、SE10012 井戸跡と重複する。SI10018 穫穴住居跡、SB10215 建物跡よりも新しく、SB10213 建物跡よりも古い。SB10216 建物跡、SE10012 井戸跡との新旧関係は不明である。

平面規模は、桁行が西側柱列で総長推定約 3.5 m、柱間寸法が北より推定 1.8 m、1.7 m、梁行が南妻で総長 2.6 m である。方向は東側柱列でみると北で東に約 16° 偏する。柱穴は一辺 30cm 前後の隅丸方形で、残存する深さは 30cm 程である。掘方埋土は地山灰黄褐色砂質土ブロックを含む黒褐色細砂質シルト土の互層である。柱痕跡は径 14cm の円形で、堆積土は黒褐色粘質シルト土である。遺物は出土していない。

【SB10216 掘立柱建物跡】(平面図: 第 39・40・49 図、断面図: 第 50 図)

南 2 西 1 区の北半北西部に位置し、橋脚 P 67 の本発掘調査区とその南東隣の確認調査区で検出した。桁行 5 間、梁行 3 間の南北棟建物跡で、西側柱列から 1 間目の位置に床束が 4 個ある。北東隅柱穴と東側柱列の 2・3 間目柱穴は検出していない。

SB10213・10214・10215・10217 建物跡、SE10012 井戸跡と重複する。SB10214 建物跡よりも

新しい。SB10213・10214・10215・10217 建物跡、SE10012 井戸跡との新旧関係は不明である。

平面規模は、桁行が東側柱列で総長約 10.2 m、柱間寸法が北より 2.3 m、1.8 m、1.8 m、1.8 m、推定 2.6 m、梁行が南妻で総長推定 6.2 m、柱間寸法が西より推定 2.4 m、推定 1.8 m、2.0 m である。方向は東側柱列でみると北で東に約 19° 傾する。柱穴は短辺 60cm、長辺 70 ~ 90cm の隅丸長方形または一辺 70cm 前後の隅丸方形で、残存する深さは 50 ~ 80cm 程である。床棟の柱穴はこれよりもやや小さく、浅い。掘方埋土は地山灰褐色砂質土ブロックを含む黒褐色細砂質シルト土の互層である。柱痕跡は径 20cm 前後の円形で、堆積土は黒褐色シルト土である。

掘方から非ロクロ土師器壺・甕、ロクロ土師器壺・甕、柱痕跡からロクロ土師器甕の破片が出土した。

【SB10217 掘立柱建物跡】(平面図: 第 39・40・49 図)

南 2 西 1 区の北半北西部に位置し、橋脚 P 66 と橋脚 P 67 の間の確認調査区で検出した桁行 3 間、梁行 2 間の東西棟建物跡である。

SB10216・10218 建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。また、重複する SD10027・10028 溝よりも古い。

平面規模は、桁行が北側柱列で総長 4.6 m、梁行が西妻で総長 3.8 m、柱間寸法が北より推定 2.0 m、1.8 m である。方向は西妻でみると北で東に約 4° 傾する。柱穴は一辺 50 ~ 60cm の隅丸方形を基調としている。掘方埋土は地山灰褐色砂質土ブロックを含む黒褐色細砂質シルト土である。柱痕跡は径 16cm 前後の円形で、堆積土は黒褐色粘質シルト土である。

掘方よりロクロ土師器内黒環の破片が出土した。これは回転糸切り無調整で、9 世紀後葉～10 世紀前半頃のものである。

【SB10218 掘立柱建物跡】(平面図: 第 39・40・49 図、断面図: 第 50 図)

南 2 西 1 区の北半北西部に位置し、橋脚 P 66 と橋脚 P 67 の間の確認調査区で主に検出した桁行 3 間、梁行 2 間の東西棟建物跡である。

SI10013 穫穴住居跡、SB10217 建物跡、SD10027・10028 溝と重複し、SI10013 穫穴住居跡よりも新しく、SD10027・10028 溝よりも古い。SB10217 建物跡との新旧関係は不明である。

平面規模は、桁行が北側柱列で総長 5.8 m、梁行が東妻で総長 4.3 m、柱間寸法が北より 2.3 m、2.0 m である。方向は西妻でみると北で東に約 14° 傾する。柱穴は一辺 40 ~ 50cm の隅丸長方形または短辺 40cm 前後、長辺 50cm 前後の隅丸長方形を基調としている。南西隅柱穴は他よりも大きく、他の遺構と重複する可能性がある。埋土は地山ブロックを含む褐灰色シルト土である。柱痕跡は径 16cm 前後の円形で、堆積土は褐灰色粘質シルトである。

柱穴からロクロ土師器甕の破片が出土した。

【SB10219 掘立柱建物跡】(平面図: 第 39・40・51 図)

南 2 西 1 区の北半南西部に位置し、橋脚 P 66 の本発掘調査区とその南隣の確認調査区で検出した桁行 2 間、梁行 2 間の東西棟建物跡である。南東隅柱穴と東妻棟通り下柱穴は新しい擾乱溝に壊され、南側柱列中央柱穴も検出できなかった。SB10220 建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平面規模は、桁行が北側柱列で総長 3.8 m、梁行が西妻で総長 3.7 m、柱間寸法が北より推定 1.8 m、

1.9 m である。方向は西妻でみると北で東に約 21° 傾する。柱穴は一辺 50cm 前後の隅丸方形を基調としている。掘方埋土は地山灰黄褐色土ブロックを含む暗灰黄色・黄灰色シルト土の互層である。柱痕跡は径 15 ~ 18cm の円形で、堆積土は黒褐色粘質シルトである。遺物は出土していない。

【SB10220 堀立柱建物跡】(平面図: 第 39・40・41・51 図、断面図: 第 54 図)

南 2 西 1 区の北半南西部に位置し、橋脚 P 65 の本発掘調査区とその北隣の確認調査区で検出した桁行 3 間、梁行 3 間の南北棟建物跡である。南西部は新しい攢乱溝などに大きく壊されている。

SB10221 建物跡と重複し、これよりも新しい。

平面規模は、桁行が東側柱列で総長 8.1 m、柱間寸法が北より 3.0 m、2.4 m、2.7 m で、梁行が北妻で総長推定約 4.7 m、柱間寸法が西より推定 1.6 m、1.2 m、1.6 m である。方向は東側柱列でみると北で東に約 8° 傾する。柱穴は一辺 30 ~ 50cm 前後の隅丸方形を基調としている。掘方埋土は地山灰黄褐色土ブロックを含む暗灰黄色・黄灰色シルト土の互層である。柱痕跡は径 16 ~ 20cm の円形で、堆積土は黒褐色粘質シルト土である。

柱穴から非クロコ土師器甕、ロクロ土師器甕、須恵系土器环の破片が出土した。

【SB10221 堀立柱建物跡】(平面図: 第 39・41・52・53 図、断面図: 第 54 図)

南 2 西 1 区の北半南西部に位置し、橋脚 P 65 の本発掘調査区とその北隣の確認調査区で検出した桁行 5 間、(北妻・南妻で未検出の柱穴があるが) 梁行推定 3 間の南北棟建物跡である。

SB1549・1812・10220 建物跡、SI10125 竪穴住居跡と重複し、SB10220 建物跡よりも古い。

SB1549・1812 建物跡、SI10125 竪穴住居跡との新旧関係は不明である。周辺の建物跡と竪穴住居跡との新旧関係をみると、竪穴住居跡が古いので、SI10125 竪穴住居跡よりも新しいと考えられる。

平面規模は、桁行が東側柱列で総長 11.0 m、柱間寸法が北より 1.1 m、2.4 m、2.1 m、2.5 m、2.8 m とばらつきが大きい。梁行は北妻で総長 6.5 m、柱間寸法が西より 1.7 m、4.8 m (2 間分) である。方向は東側柱列でみると北で東に約 10° 傾する。柱穴は短辺 60 ~ 100cm、長辺 90 ~ 130cm の隅丸長方形または一辺 60 ~ 90cm の隅丸方形を基調とし、掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色・暗オリーブ褐色シルト土の互層である。柱痕跡は径 25cm 前後の円形で、堆積土は黒褐色粘質シルト土である。

掘方から非クロコ土師器内黒環・甕、ロクロ土師器内黒環・甕、須恵器环・甕、柱穴からロクロ土師器甕、須恵系土器环の破片が出土した。

【SB10223 堀立柱建物跡】(平面図: 第 39・43・56 図、断面図: 第 58 図)

南 2 西 1 区の南半北部に位置し、橋脚 P 63 の本発掘調査区とその周囲の確認調査箇所で検出した桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟建物跡である。10 箇所すべての柱穴を検出した。

SB1873・3439・10224・10225 建物跡と重複し、SB10224 建物跡よりも古い。SB1873・3439・10225 建物跡との新旧関係は不明である。

平面規模は、桁行が西側柱列で総長 6.1 m、柱間寸法が北より 2.1 m、2.4 m、1.6 m、梁行は北妻で総長 4.7 m、柱間寸法が西より 2.6 m、2.1 m である。方向は西側柱列でみると北で東に約 2° 傾する。柱穴は一辺 40cm の隅丸方形を基調とするが、北西隅柱穴は一辺 70cm とやや大きく、残存する深さは 25 ~ 40cm で、掘方埋土は地山灰白色シルト土ブロックを含む褐灰色・黒褐色シルト土の互層で

ある。柱痕跡は径 15cm 前後の円形で、堆積土は暗褐色シルト土である。遺物は出土していない。

【SB10224 掘立柱建物跡】(平面図: 第 39・43・56 図、断面図: 第 58 図、写真図版: 図版 21)

南 2 西 1 区の南半北部に位置し、橋脚 P 63 の本発掘調査区とその東側の確認調査箇所で検出した桁行 3 間、梁行 2 間の東西棟建物跡である。10 箇所すべての柱穴を検出した。

SB1873・3439・10223・10225 建物跡、SI1635 竪穴住居跡、SF3627 小溝状遺構群と重複し、SB10223 建物跡、SI1635 竪穴住居跡、SF3627 小溝状遺構群よりも新しく。SB1873・3439・10225 建物跡との新旧関係は不明である。

平面規模は、桁行が北側柱列で総長 6.2 m、柱間寸法が西より 2.2 m、1.9 m、2.1 m、梁行が西妻で 4.9 m、柱間寸法が北より 2.5 m、2.4 m である。方向は西妻でみると北で西に約 1° 偏する。柱穴は一辺 40 ~ 60cm の隅丸方形を基調とし、残存する深さは 25 ~ 60cm で、埋土は地山灰褐色粘土・シルト土ブロックを含む黒褐色・褐灰色・灰黄褐色シルト土の互層である。柱痕跡は径 18cm 前後の円形で、堆積土は黒褐色・灰黄褐色粘質シルト土である。西妻棟通り下柱穴には柱材が一部残存していた。

掘方から須恵器坏、須恵系土器坏、柱穴から非ロクロ土師器平底坏、ロクロ土師器内黒坏・甕、須恵器坏・甕、須恵系土器坏の破片が出土した。柱穴出土の内黒坏には回転糸切り無調整のものがある。

【SB10225 掘立柱建物跡】(平面図: 第 39・43・55 図、断面図: 第 58 図)

南 2 西 1 区の南半北部に位置し、橋脚 P 63 の本発掘調査及び旧調査区で検出した桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟建物跡である。他の建物跡柱穴や土壤と重複する 3 箇所を除く 7 箇所の柱穴を検出した。

SB3439・3438・3441・10223・10224 建物跡、SK10147 土壙、SF3627 小溝状遺構群と重複し、SB3439・3441 建物跡、SF3627 小溝状遺構群よりも新しく、SK10147 土壙よりも古い。SB3438・10223・10224 建物跡との新旧関係は不明である。

平面規模は、桁行が東側柱列で総長 6.3 m、柱間寸法が北より 4.2 m (2 間分)、2.0 m、梁行が南妻で 4.7 m、柱間寸法が西より 2.6 m、2.1 m である。方向は西妻でみると北で東に約 7° 偏する。柱穴は一辺 40 ~ 70cm の隅丸方形を基調とし、残存する深さは 40 ~ 100cm で、掘方埋土は地山灰褐色粘土・明褐灰色シルト土ブロックを含む黒褐色・灰褐色シルト土の互層である。柱痕跡は径 16cm 前後の円形で、堆積土は褐灰色・暗灰黄色シルト土である。

掘方からロクロ土師器内黒坏・甕、回転糸切り無調整の須恵器坏・甕、須恵系土器坏、柱痕跡からロクロ土師器内黒坏、須恵器坏、柱穴から回転糸切り無調整のロクロ土師器内黒坏・甕、須恵器坏、須恵系土器坏の破片が出土した。

【SB10226 掘立柱建物跡】(平面図: 第 39・43・56 図、断面図: 第 58 図)

南 2 西 1 区の南半北部に位置し、橋脚 P 63 の本発掘調査及び旧調査区で検出した桁行 2 間、梁行 1 間の東西棟建物跡である。北東隅柱穴を除く 5 箇所の柱穴を検出した。

SB1864・1929・10227・10228 建物跡、SK1648・10153 土壙、SF3627 小溝状遺構群と重複し、SF3627 小溝状遺構群よりも新しく、SB1864 建物跡、SK1648 土壙よりも古い。SB1929・10227・10228 建物跡、SK10153 土壙との新旧関係は不明である。

平面規模は、桁行が南側柱列で総長 5.4 m、柱間寸法が西より 2.5 m、2.9 m、梁行が西妻で 3.2 m

である。方向は西妻でみると北で東に約17°偏する。柱穴は一辺20~30cmの隅丸方形を基調とし、残存する深さは20~25cmで、掘方埋土は地山灰白色シルト土ブロックを含む褐灰色シルト土、暗灰黄色粘質土の互層である。柱痕跡は径16cm前後の円形で、堆積土は褐灰色シルト土である。

柱痕跡から須恵器壺・甕の破片が出土した。

【SB10227 堀立柱建物跡】(平面図:第39・43・56図、断面図:第58図)

南2西1区の南半北部に位置し、橋脚P63の本発掘調査及び旧調査区で検出した桁行推定3間、梁行2間の南北棟建物跡である。北西隅、北妻棟通り下、西側柱列北より1間目、東側柱列北より1間目柱穴を除く5箇所の柱穴を検出した。

SB1929・10226・10228建物跡、SK10153土壌と重複し、SB10228建物跡より古い。SB11929・10226建物跡、SK10153土壌との新旧関係は不明である。

平面規模は、桁行が東側柱列で総長4.8m、柱間寸法が北より3.7m(2間分)、1.2m、梁行が西妻で3.3m、柱間寸法が西より1.7m、1.6mである。方向は東側柱列でみると北で東に約11°偏する。

柱穴は一辺20~30cmの隅丸方形を基調とし、残存する深さは40cmで、掘方埋土は地山灰褐色シルト土ブロックを含む黒褐色・にぶい黄褐色シルト土の互層である。柱痕跡は径12cm前後の円形で、堆積土は黒褐色粘質シルトである。遺物は出土していない。

【SB10228 堀立柱建物跡】(平面図:第39・43・56図、断面図:第58図)

南2西1区の南半北部に位置し、橋脚P63の本発掘調査及び旧調査区で検出した身舎が桁行3間、梁行2間の東廂付き南北棟建物跡である。身舎東側柱列北より1間目柱穴、南東隅柱穴を除く12箇所の柱穴を検出した。

平面規模は、身舎桁行が西側柱列で総長5.5m、柱間寸法が北より1.7m、2.1m、1.8m、梁行が北妻で総長3.3m、柱間寸法が西より1.2m、2.2m、廂出は1.7mである。総長は桁行では東側柱列、梁行では南妻がやや短く、平面形が少し歪む。方向は西側柱列でみると北で東に約7°偏する。柱穴は一辺20~40cmの隅丸方形を基調とし、残存する深さは25~40cmで、掘方埋土は地山灰褐色シルト土ブロックを含む黒褐色・にぶい黄褐色シルト土の互層である。柱痕跡は径18cm前後の円形で、堆積土は黒褐色粘質シルト土である。身舎北東隅柱穴には柱材が一部残存していた。

掘方から非ロクロ土師器甕、ロクロ土師器甕、体下部・底部回転ヘラケズリの須恵器壺、柱穴から回転糸切り無調整のロクロ土師器内黒壺・甕、須恵器壺、須恵系土器壺の破片が出土した。

(4) 竪穴住居跡

南2西1区では、旧調査で一部検出していた竪穴住居跡2棟(SI3206・3227)の延長箇所を検出した他、新たに9棟の竪穴住居跡(SI10013~10015・10018・10019・10125・10134・10070・10182)を検出した。

なお、今回の調査区にわずかかかる南2西2区の北東隅では、竪穴住居跡1棟(SI10123)を検出した。他に南2西2区北東隅で検出した建物跡や竪穴住居跡はないので、便宜的にこの項の冒頭に記載する。

【SI10123 竪穴住居跡】(平面図:第9・59図、断面図:第59図)

南2西2区の北東隅、南1西1道路交差点の南西コーナー際に位置する。橋脚P69の本調査区とそ

の南東の確認調査箇所で住居跡の北東部を検出した。

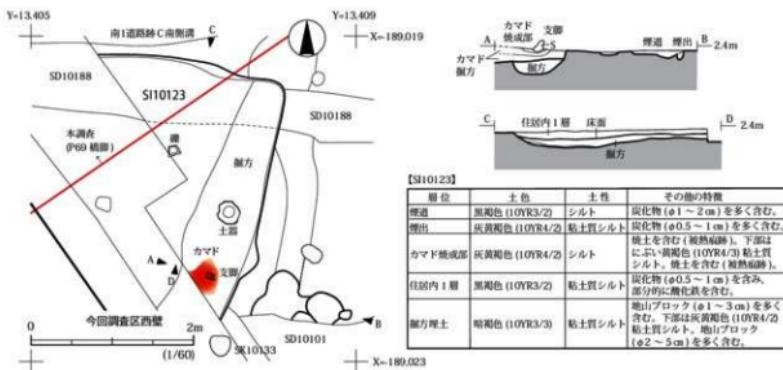
平面規模は東西が北辺で2.4m以上、南北が東辺で3.0m以上あり、方向は東辺でみると北で東に約15°偏る。カマドは東辺に敷設され、東側外に煙道が1.5m延び、先端に径35cmの煙出しピットが付く。カマドの両側壁は基部下まで削平され、遺存していない。燃焼部は奥行45cm、幅40cmで、凝灰岩製支脚が据えられている。床面は平坦で、上部が大きく削平され、5~10cmの人が堆積土が上に堆積している。東辺には幅50~80cm、深さ30cmの掘方が施され、その上にカマドが構築されている。

掘方から非クロト師器内黒壺、須恵器壺、床面から須恵器壺・甕、埋土からロクロト師器甕、多賀城跡政庁第II期の平瓦II B類などの破片が出土した。掘方出土の須恵器壺にはヘラ切り、体下部~底部手持ちヘラケズリのものあり、8世紀末~9世紀前半頃に位置付けられる。

【SI3206 穫穴住居跡】(平面図: 第39・40・60図、断面図: 第60図、出土遺物: 第35図4・5、第71図109・110)

南2西1区の北西部に位置する。旧調査で北西隅と南東隅を結ぶ対角線より南西部を検出していたが、今回、橋脚P 67と橋脚P 68の間の確認調査区で北東部を検出し、全体の平面規模・構造とカマドの位置が判明した。ただし、確認調査のため部分的な調査に留めた。旧調査では新旧2時期あり、同位置で建て替えがあるとしているが、床面上に堆積土もなく、断面図も提示されていないため、今回の調査では建て替えを確認できなかった。1時期とみた方がよいと思われる。

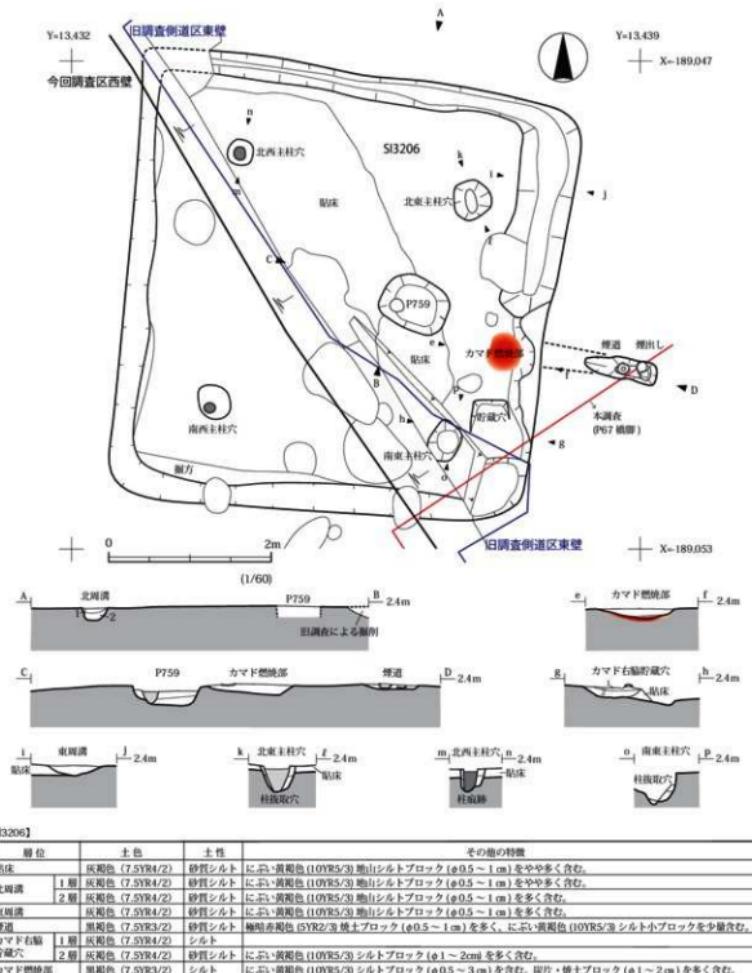
平面規模は東西が北辺で5.4m、南北が東辺で5.3mの隅丸正方形である。方向は東辺でみると北で東に約10°偏る。床面まで削平され、残りはよくない。カマドは東辺中央やや南寄りに付設されている。両側壁は削平され、残存していない。燃焼部は奥行40cm、幅45cmある。煙道は上部が大きく削平され、東辺から50cmは底面まで削平を受けて遺存していないが、東辺より1.4m東まで幅25cmの煙道が延び、先端に径25cm、深さ7cmの煙出しピットが付く。カマド右脇には貯蔵穴と考



第59図 SI10123 穫穴住居跡平面図・断面図

えられる浅い土壌がある。主柱穴は対角線上の位置の4箇所にある。主柱穴は一辺30~50cmの隅丸方形で、20~30cmの深さがある。主柱穴の柱痕跡は径15cm前後の円形で、北東・南東主柱穴は廃絶時に抜き取られていた。床面は平坦で、一部貼床されている。各辺には幅30~70cm、深さ10cmの周溝が巡り、東辺の周溝は40~70cmと他辺よりも幅広である。

旧調査では床面から非クロロ土師器甕、瓦、掘方・貼床・埋土から非クロロ土師器甕・甕、須恵器甕・



第60図 SI3206 穫穴住居跡平面図・断面図

甕、瓦などの破片が出土し、貼床出土の非クロロ土師器壺には無段の平底・丸底壺、有段丸底壺がある。

今回の調査では、煙道より非クロロ土師器甕（第71図109・110）、周溝より非クロロ土師器内黒壺、多賀城跡政府第II期の平瓦II B類（第35図4・5）などが出土した。

【SI10013 竪穴住居跡】（平面図：第39・40・61図、断面図：第61図、出土遺物：第36図20、第71図102～104、図版37-20、遺構写真：図版17下、18上・中）

南2西1区の北西部に位置する。橋脚P 66の本発掘調査区とその北側の確認調査区で検出し、本発掘調査区にかかる南半分を精査した。

SI10014・10015 竪穴住居跡、SD10024・10026 溝と重複し、SI10014・10015 竪穴住居跡よりも新しく、SF3201 小溝状遺構群（烟畠跡）と一連の可能性のある SD10024・10026 溝よりも古い。

平面規模は東西が南辺で4.6m、南北が西辺で4.0mの隅丸長方形である。方向は西辺でみると北で東に14°偏する。

カマドは東辺中央南寄りに付設され、東外側に幅15～20cmの煙道が約1.2m延びている。カマドは上部が削平され、両側壁の下部が高さ15cm残る。燃焼部は奥行80cm、幅60cmで、奥壁に接して凝灰岩製支脚を埋設していた。支脚は角錐台の頂部を切り落とした形で、底面は16×9cmの長方形、上面は5×5cmの方形で、高さは16cmあり、中ほどが被熱で赤変していた。煙道部は残りが良く、天井部が一部残存していた。煙道中程は高さ数cm程と狭くなっていた。床面は平坦で、南に重複して古いSI10014 竪穴住居の床面を約15cm掘り下げ、東に重複して古いSI10015 竪穴住居跡の床面を約6cm掘り下げ、床面としている。各辺には幅10～20cm、深さ10cmの周溝を巡らせ、東辺のカマドは周溝を埋め戻してから付設している。

周溝内各辺には部分的に直径10～15cmの壁柱穴がある。

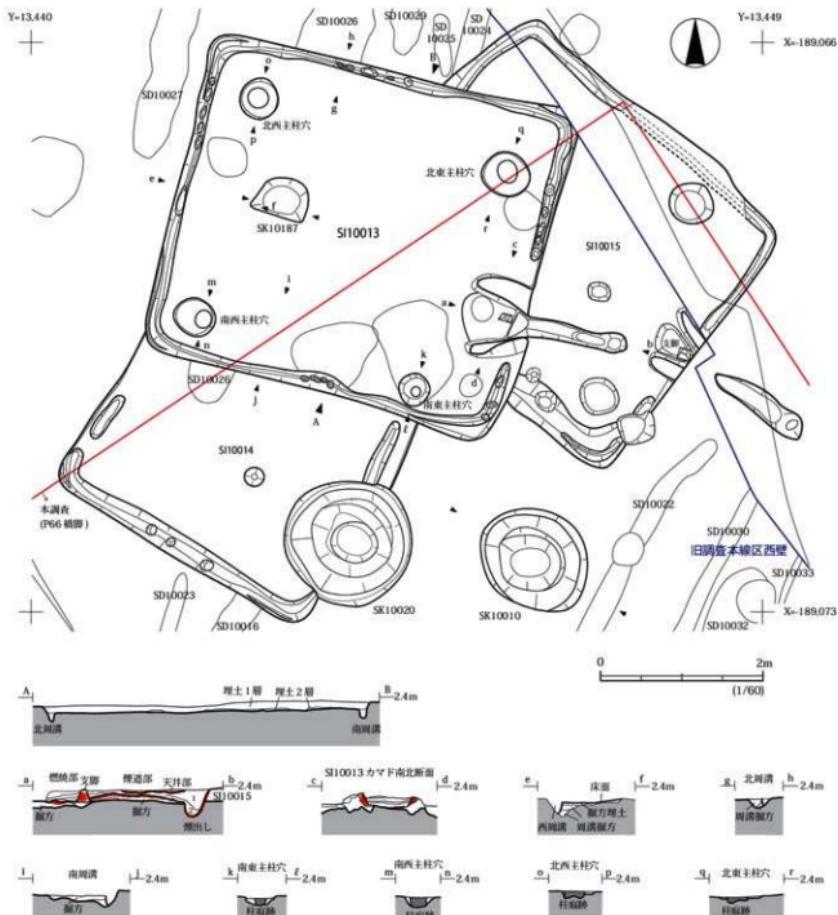
主柱穴は4箇所あり、南東主柱穴を除く北東・北西・南西主柱穴は対角線上の位置にある。南東主柱穴は対角線上よりも西にややずれ、南西主柱穴とともに南辺際に寄っている。主柱穴は長径50～60cm、短径40～50cmの楕円形で、深さは7～12cmある。柱痕跡は径20cm前後の円形である。床面から検出面までの高さは約10cmで、上部は後世に大きく削平されている。床面上の堆積土は人為堆積土で、廃絶にあたり主柱穴を切り取って解体してから人為的に埋め戻している。

掘方から非クロロ土師器甕、ヘラ切り無調整の須恵器壺（第71図104）、カマド脇ピットからヘラ切り無調整の須恵器壺（第71図103）、床面から非クロロ土師器甕、体下部～底部手持ちヘラケズリ、内面平行ミガキのロクロ土師器内黒壺（第71図102）、須恵器壺・甕、多賀城跡政府第I期の丸瓦IA類（第36図20）、カマド内から非クロロ土師器甕、ヘラ切り無調整の須恵器壺、埋土から非クロロ土師器甕、ヘラ切りの須恵器壺などの破片や雲母片（写真図版38）が出土した。

【SI10014 竪穴住居跡】（平面図：第39・40・61・62図、断面図：第62図、写真図版：図版17下）

南2西1区の北西部に位置する。橋脚P 66の本発掘調査区とその北側の確認調査区で検出し、本発掘調査区にかかる範囲を精査した。

SI10013・10015 竪穴住居跡、SD10016・10023・10024・10026 溝、SK10020 土壙と重複し、SI10013 竪穴住居跡、SK10020 土壙、SD10016・10023・10024・10026 溝 [SF3201 小溝状遺構群（烟



第61図 SI10013 穫穴住居跡平面図・断面図

[SH0013]	種別	土色	土性	その他の特徴
理上1層	灰褐色色 (10YR4/2)	砂質シルト	炭化物・地山黄色シルト小ブロックを含む。	
理上2層	にぶく黄褐色 (10YR7/3)	シルト	灰褐色色 (10YR4/2) 灰色シルトを含む。	
理潤	灰褐色色 (10YR4/2)	シルト	地山褐色シルト小ブロック・炭化物をわずかに含む。	
理潤腐方	灰褐色色 (2.5Y5/3)	シルト	下部は灰褐色色 (10YR4/2) 粘土土。	
燃焼部・煙道・煙出し1層	烟褐色色 (10YR3/4)	砂質	炭化物等子点々ある。	
燃焼部2層	にぶく黄褐色色 (10YR6/4)	シルト	カマド構造を示すコック (±10mm内外) が土体となる。	
燃焼部床面	烟褐色色 (10YR3/4)	砂質シルト	炭化物を含む、全く無燃熱。	
燃焼部・煙道腐方	にぶく黄褐色色 (10YR4/3)	砂質シルト	支管下部は烟褐色色 (10YR3/2) 砂質シルト。	
主穴井	烟褐色色 (10YR3/3)	砂質シルト	地山小ブロック・炭化物を多く含む。	

歎跡)と一連の可能性のある小溝】よりも古い。SI10015 竪穴住居跡との新旧関係は不明である。

平面規模は東西が南辺で 3.6 m、南北が東辺で 3.0 m 以上の隅丸長方形とみられる。方向は東辺でみると北で東に 29° 傾する。カマドは南辺にはないが、他辺のどの位置に付くか不明である。後世の削平を大きく受け、床面まで削平されていた。床面は平坦で、深さ 5 ~ 10cm 掘り下げるから埋め戻した面を床面としている。幅 20 ~ 30cm、深さ 10cm の周溝が各辺に巡るが、西辺では周溝が断続的となっている。周溝内には部分的に壁柱穴が遺存する。主柱穴は遺存状況からみてないようである。床面上で検出した小ピットは、床面上に埋土が残存していないため、本住居跡に伴うものか不明である。

また、本住居跡に伴う遺物は出土していない。

【SI10015 竪穴住居跡】(平面図: 第 39・40・61・62 図、断面図: 第 62 図、写真図版: 図版 17 下、18 中)

南 2 西 1 区の北西部に位置する。橋脚 P 66 の本発掘調査区とその北側の確認調査区で検出し、本発掘調査区にかかる範囲を精査した。

SI10013・10014 竪穴住居跡、SD10024 溝と重複し、SI10013 竪穴住居跡、SF3201 小溝状構構群(烟歎跡)と一連の可能性のある SD10024 溝よりも古い。SI10014 竪穴住居跡との新旧関係は不明である。

平面規模は東西が南辺で 4.4 m、南北が西辺で 3.9 m の隅丸長方形である。方向は東辺でみると北で東に 38° 傾する。カマドは東辺中央やや南寄りに付設され、東外側に東辺から 30cm の間隔を置いて、幅 30cm の煙道が 1.3 m 伸びている。カマドは上部が削平され、両側壁の下部が高さ 10cm 残る。燃焼部は奥行 50cm、幅 50cm で、奥壁に接して凝灰岩製支脚を埋設していた。支脚は角錐台の頂部を切り落とした形で、底面は 16 × 12cm の長方形、上面は 6 × 5cm の方形で、高さは 8cm あり、中程が被熱で赤変していた。床面は平坦で、全体的に深さ 5 ~ 10cm、北辺に沿っては幅約 70cm、深さ約 20cm の溝状に掘り下げるから埋め戻した面を床面としている。検出面から床面までの深さは 10cm 前後で、上部は大きく削平されている。各辺には幅 10 ~ 20cm、深さ 10cm の周溝を巡らせるが、南辺東側は幅 30 ~ 45cm と幅広で、東辺カマド下には周溝を巡らせていない。カマド右脇、住居南東隅には径 45cm の浅い土壙があり、貯蔵穴の可能性もある。住居南西と北東にあるピットは主柱穴の可能性もあるが、不明確である。

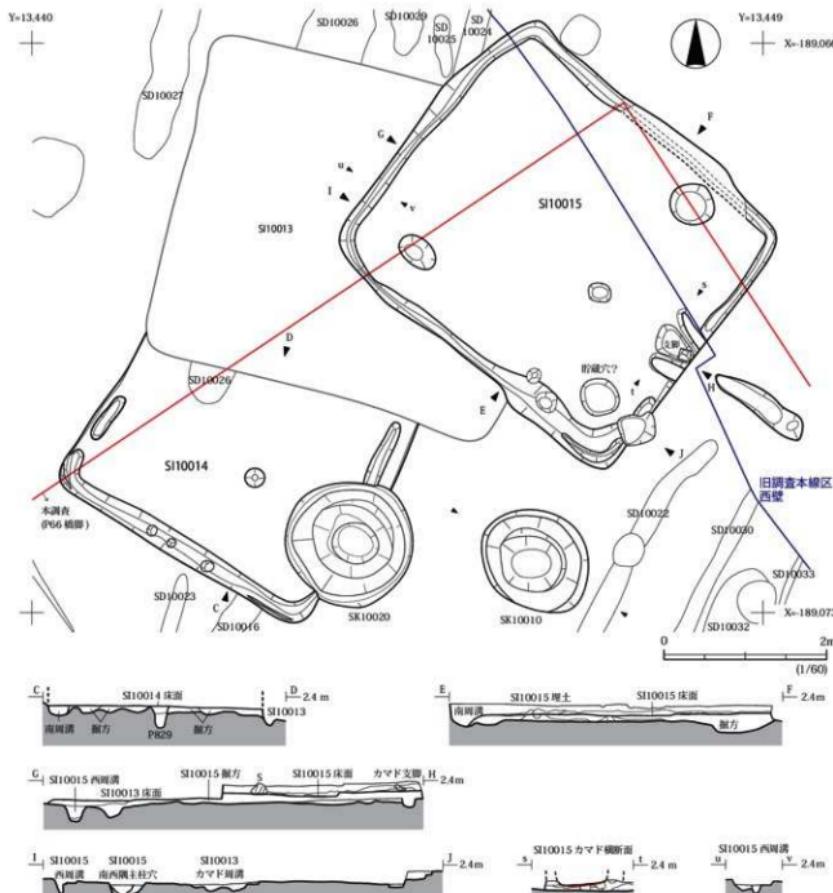
床面から非ロクロ土師器壺、周溝内から非ロクロ土師器壺、埋土から非ロクロ土師器壺・甕、検出面から体下部～底部回転ヘラケズリの須恵器壺、多賀城跡政序第 I 期の平瓦 I A 類などの破片が出土した。

【SI10018 竪穴住居跡】(平面図: 第 39・40・63 図、断面図: 第 63 図、出土遺物: 第 36 図 19、図版 37-19、遺構写真: 図版 17 中)

南 2 西 1 区の北西部に位置する。橋脚 P 67 の本発掘調査区で検出し、精査・完掘した。

SI10170 竪穴住居跡、SB10213 建物跡と重複し、SB10213 建物跡より古い。SI10170 竪穴住居跡との新旧関係は不明であるが、位置関係からみて建て替えの可能性が高い。

平面規模は東西が南辺で 3.4 m、南北が西辺で 3.9 m の隅丸長方形である。方向は南辺でみると西で北に約 10° 傾る。カマドは東辺南端近くに付設されるが、上部が大きく削平され、両側壁は基部下部まで削平され、痕跡がわずかに残る。燃焼部は奥行 50cm、幅 55cm で、燃焼部中央奥壁近くには、



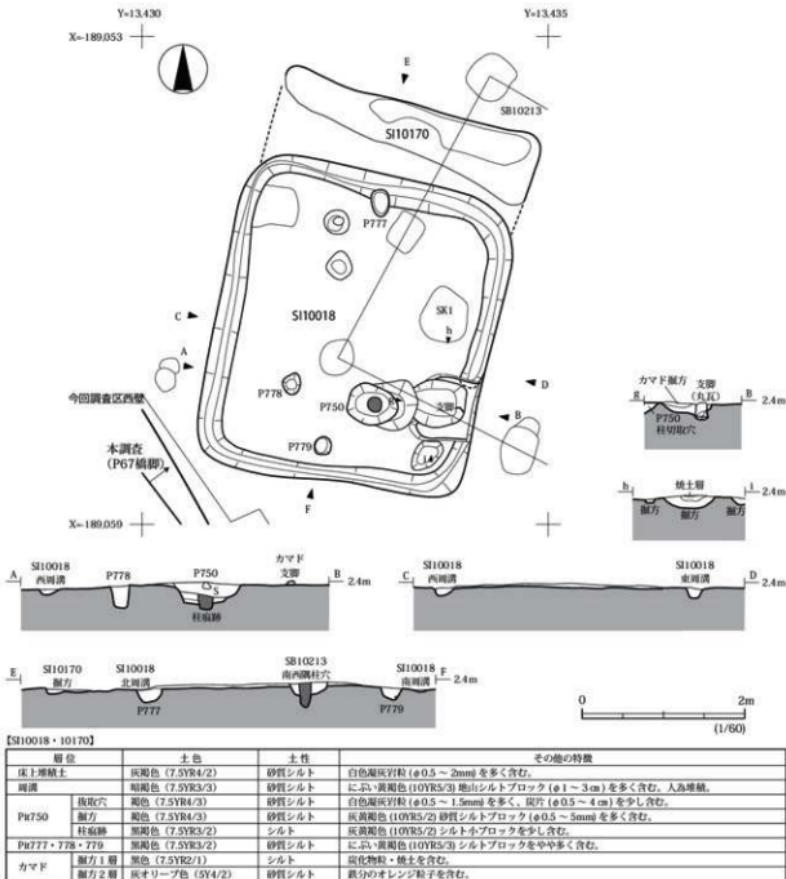
第62図 SI10014・10015竪穴住居跡平面図・断面図

支脚に転用された多賀城跡創建期の丸瓦 I A 類破片（第36図19）が長軸を縦にして据えられていた。各辺には幅20～30cm、深さ7～10cmの周溝が巡る。なお、住居内部にあるピット、柱穴は、位置関係からみて本住居跡に伴うものではないものと考えられる。

埋土よりヘラ切り無調整の須恵器壺・蓋破片が出土した。

【SI10019 穫穴住居跡】（平面図：第39・40・64図、断面図：第65図、出土遺物：第71図106～108、写真図版28-106、29-107、31-108）

南2西1区の北西部に位置し、橋脚P66の本発掘調査区で検出した。旧調査で南西隅のごく一部を検出し、報告書では平面図のみ図示し、事実記載はされていなかった（宮城県教育委員会1996a、平



第63図 SI10018・10170竪穴住居跡平面図・断面図

面図 p.273 第 220 図)。今回、橋脚 P 66 の本発掘調査区で全体を検出し、この箇所で 3 軒の竪穴住居跡の重複があり、SI10182 竪穴住居跡→SI10137 竪穴住居跡→SI10019 竪穴住居跡となる新旧関係を確認した。

SI10137・10182 竪穴住居跡、SK1064 土壙、SF3201 小溝状遺構群と重複し、SI10137・10182 竪穴住居跡、SK1064 土壙より新しく、SF3201 小溝状遺構群より古い。

平面規模は東西が南辺で 4.1 m、南北が西辺で 2.1 m の隅丸長方形である。方向は南辺でみると西で北に約 13° 傾る。カマドは北辺北端に付設され、カマド奥壁が外側に張り出し、幅 30cm の煙道が 60cm 伸びる。カマドは廃絶時に壊され、両側壁、燃焼部とも残っていない。

床面は平坦で重複して古い SI10137 竪穴住居跡をわずかに埋戻した上面を床面としている。検出面から床面までの深さは 10cm 前後で、上部は大きく削平されている。

床面からロクロ土師器内黒坏・塊、須恵器甕、埋土から非ロクロ土師器甕、ロクロ土師器坏・甕、須恵器坏・甕などの破片が出土した。このうち床面出土のロクロ土師器内黒坏には静止系切、体下部～底部回転ヘラケズリ(第 71 図 106)、ロクロ土師器内黒塊にはヘラ切り後に体下部～底部手持ちヘラケズリ(第 71 図 107)、須恵器坏にはヘラ切り無調整(第 71 図 108)がある。

【SI1025 竪穴住居跡】(平面図: 第 39・40・53・66 図、断面図: 第 66 図、出土遺物: 第 72 図 111・112、写真図版: 図版 19 中)

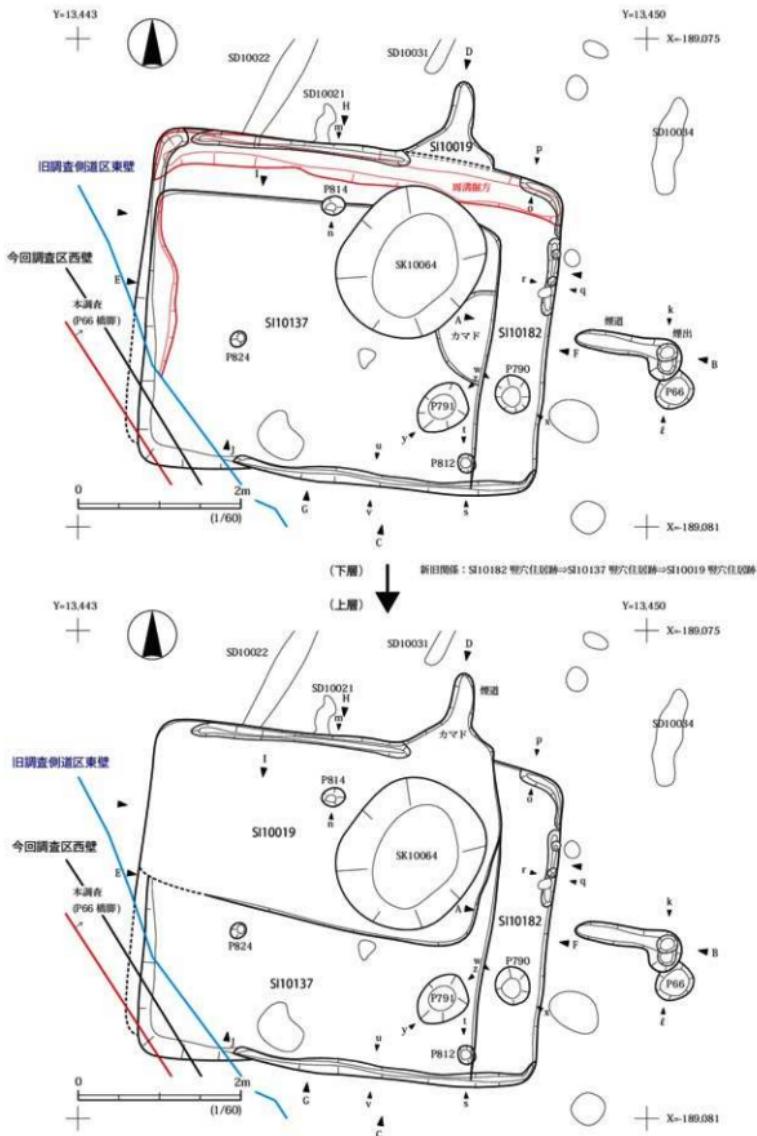
南 2 西 1 区の中央部に位置する。橋脚 P 65 の本発掘調査区とその北側の確認調査区で検出し、本発掘調査区に係る箇所を床面下まで精査した。

重複する SB1549・1812 建物跡よりも古い。また、SB10221 建物跡と重複するが、直接重複する箇所での柱穴検出が不備なため、新旧関係は未確認である。周辺の建物跡と竪穴住居跡との新旧関係をみると、竪穴住居跡が古いので、SB10221 建物跡よりも古いと考えられる。また、床面まで削平を受けていたため、住居内の SK10235・10236・10237・10244 土壙との新旧関係は不明である。

平面規模は東西が北辺で 3.2 m、南北が西辺で 3.3 m の隅丸長方形である。方向は西辺でみると北で東に約 9° 傾る。カマドは未検出だが、各辺の遺存状況からみて東辺に付設されていた可能性がある。床面上に堆積土はほとんどなく、床面まで大きく削平されていた。床面は平坦で深さ 5 ~ 8cm ある掘方を埋め戻して床面としている。西辺の中央～南端、南辺の西側には幅 10cm、深さ 5cm 前後の周溝が巡る。主柱穴が 4 箇所あり、北東隅主柱穴は対角線上にある。他の主柱穴は対角線上ではなく、北西隅・北東隅主柱穴は北辺際、南西隅主柱穴は西辺際に寄る。主柱穴は径 20 ~ 25cm の円形または長径 25 ~ 35cm、短径 20cm 程の橢円形で、深さ 30cm 前後である。柱痕跡は径 10 ~ 15cm の円形である。

掘方からヘラ切り無調整の須恵器坏(第 72 図 112)、重複して新しい SK10235 土壙から体下部～底部手持ちヘラケズリ、内面平行ミガキのロクロ土師器内黒坏(第 72 図 111)、SK10236 土壙からヘラ切り無調整の須恵器坏、SK10237 土壙から体下部～底部手持ちヘラケズリのロクロ土師器内黒坏などの破片が出土した。

【SI10134 竪穴住居跡】(平面図: 第 39・40・67 図、断面図: 第 67 図、出土遺物: 第 72 図 113、写真図版: 図版 19 下)



第 64 図 SI10019・10137・10182 積穴住居跡平面図

南2西1区の中央部、SD1602河川跡、南1—2間道路跡のすぐ北側に位置する。橋脚P65の本発掘調査区に北東隅がかかり、多くはその南西側の確認調査区で検出した。北側約1/3を床面下まで精査した。

SK10141 土壌、南北方向のSF1625 小溝状遺構群と重複し、これらよりも古い。SI10134A 竪穴住居跡を一回り縮小して建て直し、SI10134B 竪穴住居跡としている。いずれも床面上には堆積土がなく、床面まで大きく削平されていた。

①SI10137 住居跡煙道・煙出し縦断面

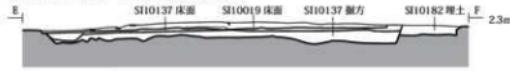


6

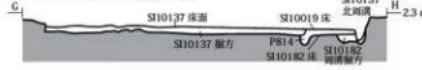
②SI10019・10137 住居跡、SK10064 南北断面



③SI10019・10137・10182 住居跡東西断面



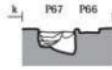
④SI10137・10182 住居跡南北断面



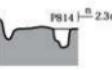
⑤SI10182 住居跡南北断面



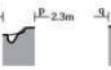
⑥SI10137 住居跡煙出し断面



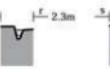
⑦SI10182 北周溝断面



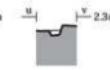
⑧SI10182 北周溝



⑨SI10182 東周溝



⑩SI10182 南周溝



遺構	層位	土色	土性	その他の特徴
SI2227	北周溝	黄灰色 (2.5Y4/1)	シルト	灰白色のブロックを含む。
	南周溝	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	粘り気がある。
	上部	黒褐色 (2.5Y3/2)	シルト	炭化物・焼土粒を多く含む。
	中部	暗灰褐色 (2.5Y5/2)	シルト	炭を含む。
SI10182	下部	黄褐色 (2.5Y5/1)	シルト	硬くしまる。
	煙道	黒褐色 (2.5Y3/2)	シルト	炭化物・焼土粒を多く含む。
	煙出し	灰褐色 (10YR5/2)	シルト	炭を含む。
	下部	灰褐色 (10YR5/3)	シルト	灰灰色ブロックを含む。
SI10019	無方	浅黄色 (5Y7/3)	シルト	灰白色ブロックを含む。
	床上埋土	にぶく黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	炭化物・遺物片を含む。
	無方	褐褐色 (10YR5/1)	シルト	地山ブロックを含む。
SI10019	床上埋土	にぶく黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	炭化物・遺物片を含む。
	Pm	褐色 (10YR5/1)	シルト	
	1層	灰黃褐色 (10YR4/2)	難砂	地山にシルト小プロックを多く含む。
SK10064	2層	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	上半部に地山灰黄色シルトブロックを多く含む。
	3層	黒褐色 (10YR3/2)	筋質シルト	炭化物を含むがその他は目立たないの一層。
	4層	灰黃褐色 (10YR4/2)	シルト	地山シルトと黒色シルトの層合。
	5層	黒褐色 (10YR2/2)	筋質シルト	地山シルトを多く含む。
Pt790	1層	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト	砂質の粘土層。
	2層	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土小プロック・炭化物・地山小プロックの混合。
Pt791	1層	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山プロック・黄色粘土プロックの混合。
	2層	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山プロックを多く含む。

第65図 SI10019・10137・10182 竪穴住居跡断面図

《SI10134A 穴穴住居跡》

平面規模は東西が北辺で 5.9 m、南北が西辺で 5.9 m の隅丸正方形である。方向は西辺でみると北で東に約 10° 傾る。カマドは未検出だが、各辺の遺存状況からみて東辺に付設されていたと考えられる。床面は平坦で深さ 5 ~ 8cm ある掘方を埋め戻して床面としている。北西隅近くの P798 柱穴は位置からみて北西隅主柱穴の可能性もあるが、北東隅にこれと組み合う柱穴がないため、断定できない。

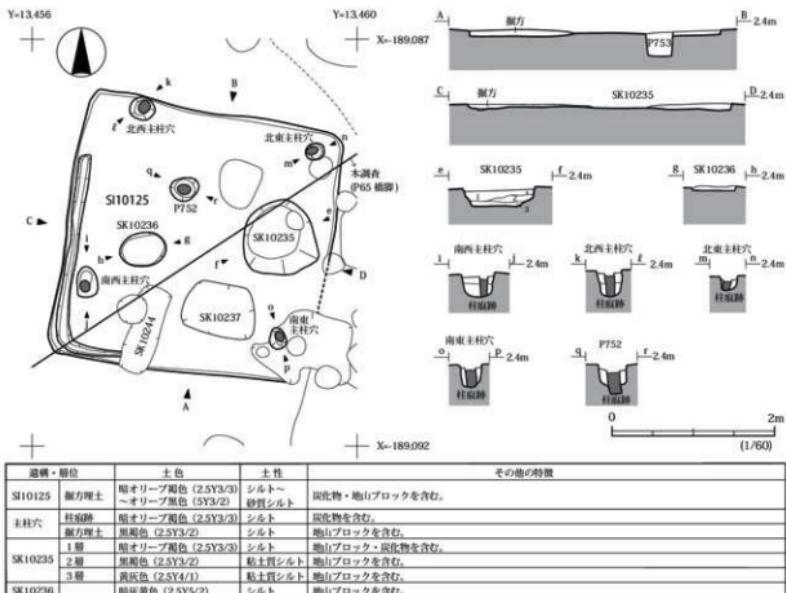
掘方から非クロコ土師器壺、検出面から回転ヘラケズリの須恵器壺などの破片が出土した。

《SI10134B 穴穴住居跡》

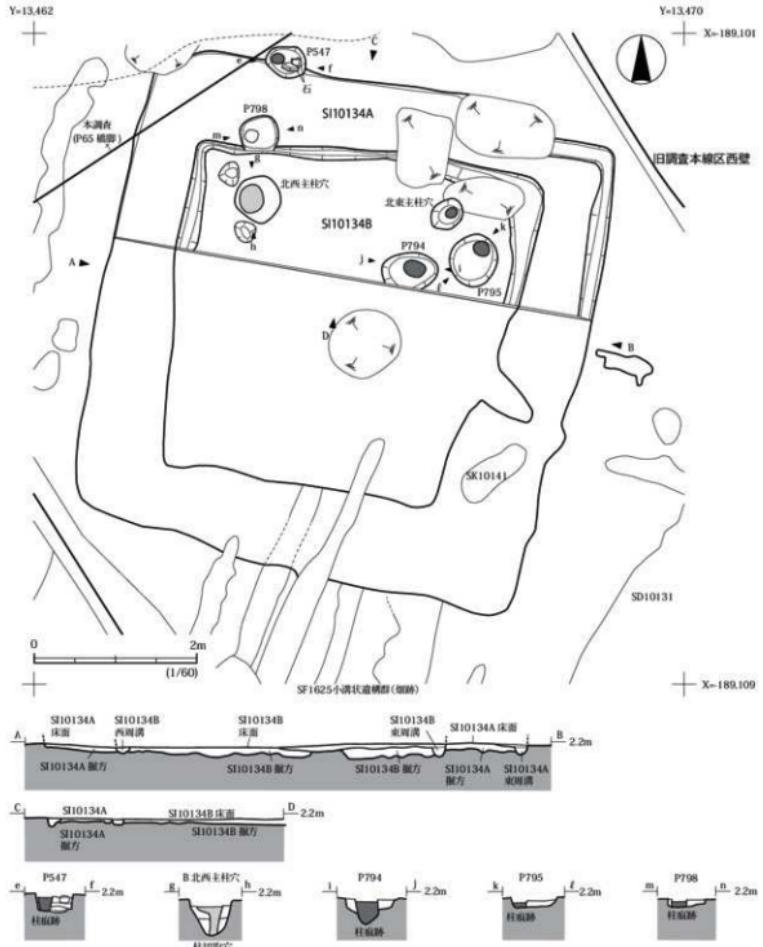
平面規模は東西が北辺で 4.3 m、南北が東辺で 4.2 m のやや歪んだ隅丸正方形である。方向は西辺でみると北で東に約 20° 傾る。カマドは精査していないが、東辺に付設されている。床面は平坦で深さ 5 ~ 10cm ある掘方を埋め戻して床面としている。北辺近くの対角線上の位置に北東隅・北西隅主柱穴があることから、南辺近くの対角線上の位置にも南東隅・南西隅主柱穴があるとみられる。主柱穴の掘方は最大径 40 ~ 50cm の不整円形で深さ 20 ~ 40cm あり、柱痕跡は径 15cm 前後の円形である。カマド検出面より底径が 8.8cm と大きいへら切り無調整の須恵器壺（第 72 図 113）が出土した他、掘方から非クロコ土師器壺などの破片が出土した。

【SI10137 穴穴住居跡】（平面図：第 39・40・64 図、断面図：第 65 図、写真図版：図版 19 上・中）

南 2 西 1 区の北西部に位置し、橋脚 P 66 の本発掘調査区で検出した。



第 66 図 SI10125 穴穴住居跡平面図・断面図



遺構・部位	土色	土性	その他の特徴
SI10134A 床面	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	塊山砂を含む。
	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	塊山砂を少量含む。
掘方壁面	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	塊山ブロック (#5 ~ 10 cm) を多く含む。
	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物 (#0.5 ~ 1cm) + 塊山ブロック (#1 ~ 2cm) を含む。
SI10134B 床面	灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト	塊山ブロック (#4 ~ 5cm) を含む。
	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	塊山ブロック (#5 ~ 10 cm) を多く含む。
柱	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	
柱切跡	褐灰色 (10YR4/1)	粘土質シルト	
掘方壁面	灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト	

第 67 図 SI10134A・B 積穴住居跡平面図・断面図

SI10019・10182 竪穴住居跡、SK1064 土壙、SF3201 小溝状遺構群と重複し、SI10182 竪穴住居跡より新しく、SI10019 竪穴住居跡、SK1064 土壙、SF3201 小溝状遺構群より古い。

平面規模は東西が北辺で 4.2 m、南北が西辺で 3.4 m の隅丸長方形である。方向は東辺でみると北で東に約 7° 傾る。カマドは東辺中央北寄りに付設され、幅 25cm の煙道が東辺際から 2.0 m 東に延び、径 25cm、深さ 20cm の煙出しピットが遺存する。カマドは廃絶時に壊され、両側壁、燃焼部とも残っていない。カマド支脚には非クロ土師器小型甕の下半部（第 71 図 105）が転用されていた。

床面は平坦で、深さ 5 ~ 15cm の掘方を埋め戻して床面としている。検出面から床面までの深さは 10cm 以下で、上部は新しい SI1019 竪穴住居跡により大きく削平されている。

掘方から非クロ土師器鉢、カマド内から支脚に転用された非クロ土師器小型甕、床面から手持ちヘラケズリの須恵器壺、埋土から非クロ土師器甕、多賀城跡政府第 1 期の丸瓦 I A 類などの破片が出土した。

【SI10170 竪穴住居跡】（平面図：第 39・40・61 図、断面図：第 61 図）

南 2 西 1 区の北西部に位置する。橋脚 P 67 の本発掘調査区で検出し、精査・完掘した。SI10018 竪穴住居跡、SB10213 建物跡と重複する。SB10213 建物跡との新旧関係は不明であるが、SI10170 竪穴住居がこれより古く、建て替えの可能性が高いため、本住居跡もこれよりも古いと推定される。

平面規模は東西が北辺で 3.4 m、南北が東辺で 1.3 m 以上の隅丸長方形である。方向は SI10018 竪穴住居跡と同じく北で東に約 10° 傾るとみられる。床面は平坦だが、床面下まで削平を受け、きわめて残りが悪い。北辺際には掘方埋土が一部残る。カマドの位置は不明である。遺物は出土していない。

【SI10182 竪穴住居跡】（平面図：第 39・40・64 図、断面図：第 65 図、出土遺物：第 38 図 4、写真図版：図版 18 下）

南 2 西 1 区の北西部に位置し、橋脚 P 66 の本発掘調査区で検出した。SI10019・10137 竪穴住居跡、SK1064 土壙、SF3201 小溝状遺構群と重複し、いずれよりも古い。

平面規模は東西が北辺で 5.1 m、南北が東辺で 4.0 m の隅丸長方形である。方向は東辺でみると北で東に約 7° 傾る。カマドは新しい SI10137 住居跡に壊されて遺存していないが、煙出しピットの重複状況からみて、東辺中央に付設されていたとみられる。床面は平坦で、溝状に掘方を掘削して埋戻してから周溝を巡らした北辺・西辺の際を除き、地山面を床面としている。北辺・西辺には幅 20cm、深さ 10cm 前後の周溝を巡らし、東辺北半部にも周溝を付設している。

埋土より砥石破片（第 38 図 4）が出土した。

（5）横位合口土師器甕棺墓

【SX1964 横位合口土師器甕棺墓】（平面図：第 44・47・68 図、断面図：第 68 図、出土遺物：第 81 図 170・171）

旧調査で検出し、旧調査報告書では、「土器埋設遺構」として報告されている（宮城県教育委員会 1996a、事実記載 p.65、平面図・断面図 p.65 第 45 図）。

本遺構を構成するロクロ土師器長胴甕 2 点は、本来、旧調査で取り上げるべきであったが、旧調査では調査区壁際に位置していたためか、取り上げずに残されていた。このことに重機による表土除去

時に気付かず、残念ながら第81図170の甕下半部を欠損してしまった。

これまで陸奥国府多賀城跡の道路交差点近くで検出した横位合口土師器甕については、「土器埋設遺構」として報告してきた。今回の調査で西1・南1道路交差点近くのSX10090 横位合口土師器甕棺墓より乳幼児の歯を棺内の土壤水洗選別で検出したことにより、これが甕棺墓であることが明らかになった。そのため、本遺構についても甕棺墓の可能性が高く、甕棺墓として以下のように再報告する。

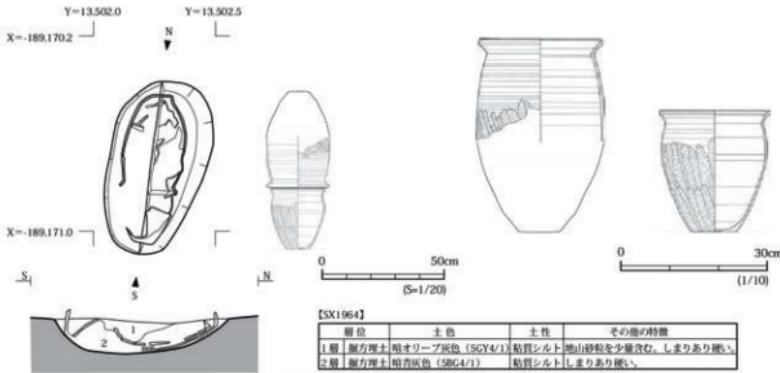
南2西0道路交差点の接続部分から、約20m西側のSX1900南2道路路面の中央に位置する。検出面は路面4層上面で、南2道路跡A北側溝埋没後の上面に位置しており、B期以降の路面に伴うものとみられる。

掘方は、長径約70cm、短径約40cm、深さ20cm以上の長楕円形の小土壤で、断面は浅い皿状である。この中にロクロ調整の土師器長胴甕2点を底部が外側になるよう対向させ、合口にして横位に埋設している。甕棺長軸方向は南で約7°西に偏する。掘方埋土は、地山砂粒を含む暗オリーブ灰色粘質土および暗青灰色粘質土である。

合口にした甕棺の長さは約65cmで、最大幅は23.6cmとなる。合口部の最小内径は18.0cmである。これは長胴甕を3連結させたSX10090横位合口土師器甕棺墓とほぼ同じだが、全長91cmのSX10090横位合口土師器甕棺墓よりも全長は26cm小さい。

内部の土壤はほとんど残存していない状態で検出したため、土壤水洗は行わなかった。また、内部より遺物は出土していない。

甕棺墓に用いられた土師器長胴甕は、器高は170が約40cmと通常サイズだが、171が22.5cmとやや小型である(第81図170・171)。口頸部は受け口状で、口径は170が23.0cm、171が20.4cmと近似する。合わせ口にしても形状・口径ともバランスが取れている。いずれもロクロ土師器で、170は体部中央から体下部にかけて、171は体上部から体下部にかけて、ロクロナデ後に縱方向にヘラケズリされている。こうした特徴のロクロ土師器長胴甕は9世紀前半頃のものに特徴的で、B期以降とみたこととも矛盾しない。



第68図 SX1964 横位合口土師器甕棺墓

なお、南2西0道路交差点の接続部分から、約10m西側のSX1900南2道路路面の中央でも旧調査で同様の「土器埋設遺構」を検出しており、旧調査報告書では、「SX1893土器埋設遺構」として報告している（宮城県教育委員会1996a、事実記載p.63・65、平面図・断面図p.65第45図）。これについても同様の理由から、横位合口土師器葬棺墓である可能性が高い。

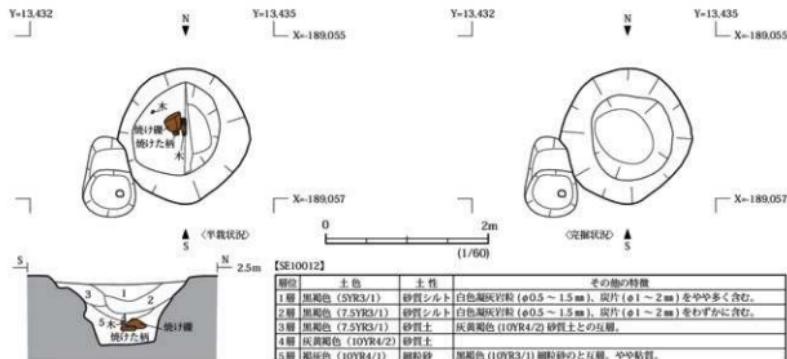
（6）井戸跡

【SE10012 井戸跡】（平面図：第40・49・69図、断面図：第69図、出土遺物：第72図114・115）

南2西1区の北西部、建物跡の集中する箇所に位置する（第39図）。SB10213・10214・10215・10216と重複する。SB10213よりも古いが、他の建物跡との新旧関係は不明である。

掘方は平面がほぼ円形、断面が逆台形で、直径約1.55m、深さ約0.8mある。井戸内部には自然堆積土が堆積していた。井戸枠は抜き取られた可能性もあるものの、掘方埋土がないため、素掘りの井戸跡と考えられる。

井戸内の5層からはロクロ土師器高台壺（114）、焼けた木製柄・礫、2層からは須恵系土器小型壺・壺・高台壺（115）、1層からは、須恵系土器小型壺・壺・高台壺、灰釉陶器皿（狼投窯製品）、平瓦などの破片が少数出土した。平瓦には多賀城跡政府第Ⅰ期の平瓦ⅠA類、政府第Ⅱ期の平瓦ⅡB類がある。出土遺物からみて10世紀中頃に廃絶した井戸跡とみられる。



第69図 SE10012 井戸跡平面図・断面図

（7）土壤

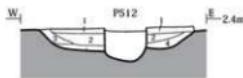
南2西1区からは今回の調査で土壤14基（SK10010・10020・10064・10129・10130・10132・10140・10142・10153・10187・10235・10236・10237・10244）を検出した。断面図を第70図に、検出位置、調査の区別（本発掘調査・確認調査）、平面図、断面図、新旧関係、規模（長径・短径・深さ）、形状、堆積土の区別（人為・自然）、出土遺物、年代を記した一覧表を表10に示し、事実記載に換える。

なお、これらの土壤のうち、SK10040土壤からは、8世紀後半頃に位置付けられる比較的良好な土器群が出土している（第73図、図版40上）。

①SK10010 土壌（平面図：第 62 図）



②SK10129 土壌（平面図：第 52 図）



③SK10129 土壌（平面図：第 52 図）



④SK10130 土壌（平面図：第 52 図）



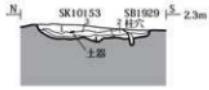
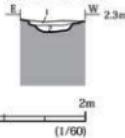
⑤SK10132 土壌（平面図：第 41 図）



⑥SK10140 土壌（平面図：第 44 図）



⑦SK10153 土壌（平面図：第 56 図）

⑧SK10187 土壌
(平面図：第 62 図)

0 2m
(1/60)

遺構・層位	土色	土性	その他の特徴
① SK10010 土壌	1層 鮎庭色 (10YR3/3)	粘質崩解	炭化物・植物等の混入がわずかに見られる。
	2層 にざい・黄褐色 (10YR4/3)	粘質崩解	炭化物・植物等の混入がわずかに見られる。
	3層 灰褐色 (10YR4/2)	粘質崩解	炭化物・植物等の混入がわずかに見られる。
	4層 鮎庭色 (10YR3/3)	粘質崩解	炭化物・植物等の混入がわずかに見られる。
② SK10129 土壌	1層 鮎庭黄色 (2.5YR4/2)	シルト	
	2層 鮎庭黄色 (2.5YR4/2)	シルト質粘土	粗砂を含む。
	3層 鮎庭黄色 (2.5Y3/2)	シルト	炭化物を含む。
	4層 鮎庭色 (2.5Y4/1)	粘土質シルト	炭化物・堆山ブロックを含む。
④ SK10130 土壌	1層 鮎庭色 (7.5YR3/1)	粘質シルト	褐色 (7.5YR4/2) 細プロック ($\phi 0.5\sim 1cm$) を不均一に多く含む。人為堆積。
	2層 鮎庭色 (7.5YR3/1)	粘質シルト	褐色 (7.5YR4/3) 細プロック ($\phi 1\sim 4cm$) を不均一に多く含む。人為堆積。
	3層 鮎庭色 (7.5YR4/2)	シルト	人為堆積。
⑤ SK10132 土壌	4層 鮎庭色 (7.5YR3/2)	粗砂	人為堆積。
	5層 黒褐色 (7.5YR3/1)	粘質シルト	
	6層 黒褐色 (7.5YR4/2)	砂質シルト	白色炭灰岩粒 ($\phi 1\sim 4mm$)・灰褐色 (10YR5/2) 細砂プロック ($\phi 1\sim 2cm$) を多く含む。しまりよく固い。人為堆積。
⑥ SK10140 土壌	7層 黒褐色 (10YR3/1)	シルト	しまりあり。粘性あり。炭化物を多く含む。灰褐色 (2.5Y5/2) シルトの堆山ブロックを少し含む。
	8層 黑褐色 (10YR3/2)	シルト	しまりあり。粘性あり。後土・灰褐色を多く含む。堆山ブロックを少し含む。
	9層 黑褐色 (10YR3/2)	シルト	しまりあり。粘性あり。堆山ブロックを多く含む。炭化物を少し含む。
	10層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	しまりあり。粘性あり。炭化物を1・2層より多い。块土片2層より多い。
	11層 開土リーフ層色 (2.5Y3/3)	シルト	しまりあり。粘性あり。堆土片を少し含む。
	12層 開土リーフ層色 (2.5Y3/3)	シルト	しまりあり。粘性あり。堆土片5層より多く含む。炭化物を含む。
	13層 黑褐色 (10YR2/2)	シルト	しまりあり。粘性あり。炭化物・堆土片1層より多く含む。
⑦ SK10153 土壌	14層 黑褐色 (10YR2/3)	シルト	しまりあり。粘性あり。炭化物・堆土片を少し含む。
	15層 黑褐色 (10YR3/1)	シルト	しまりあり。粘性少ない。灰褐色・炭化物・堆土片を多く含む。
	16層 黑褐色 (10YR3/3)	シルト	しまりあり。粘性あり。堆山プロックを含む。炭化物を少し含む。
	17層 黑褐色 (10YR4/1)	シルト	固を含む。
⑧ SK10187 土壌	18層 灰黃褐色 (10YR5/2)	シルト	1層より粘質灰白色 (10YR7/1) の土が覆る。

第70図 南2西1区土壤断面図

登録土壌名	検出位置	調査	平面図	断面図	新旧関係(旧→新)	長径	短径	深さ	形状	堆積土	出土遺物	年代
SK10010土壤	橋脚66	本調査	第62B	第70B(?)		1.5m	1.2m	55cm	箱型	自然		
SK10020土壤	橋脚66	本調査	第62B		SI10014住居跡→SK10020土壤	1.6m	1.6m		円形	自然		
SK10064土壤	橋脚66	本調査	第64B	第65B(?)	SI10182住居跡→SI10137住居跡 →SI10019住居跡→SK10064土壤	1.9m	1.6m	35cm	箱型	人為		
SK10129土壤	橋脚65	本調査	第52B	第70B(?)・3	SI10129土壤→SF1812建物跡	5.7m	2.0m	30cm	不整形	自然	非クロコ土師器底、ロクロ土師器 内面部(手揉みラメ入り)、圓底 系切・蓋、須恵器等多賀城政府 第1期(神龜元年(727)~天平宝字 6年(762))の瓦片1C類(第35B 2)	9世紀後半
SK10130土壤	橋脚64- 65B、 66B	確認	第52B	第70B(?)		2.7m	1.8m	40cm	不整形	人為		
SK10132土壤 (住居跡?)	橋脚64- 65B	確認	第41B	第70B(?)	SI10132土壤→SD1530溝→SD 1618溝	2.9m 以上	0.9m 以上		丸い楕円 形?	人為	非クロコ土師器底、須恵器 方盤?	8世紀後半 以降
SK10140土壤	橋脚62	本調査	第44B	第70B(?)	SF3627A小溝状遺構群→SF3627 B小溝状遺構群→SK10140土壤	2.4m	1.8m	30cm	不整形	人為	非クロコ土師器底有段丸底杯(第73 14B)、直口杯(第730B(135-137) ・直口杯(第730B(139)・直口高台杯 (第730B(140))、直底高台杯 (第73B(141))、縫・縫・縫 ・縫、須恵器(へう切り)、圓底(ヘ ケズ)・第73B(142-144)、縫・縫・縫 (第73B(145))、縫・縫・縫、鐵 石(第38B(1))	8世紀後半
SK10142土壤	橋脚62- 63B	確認	第43B		SF3627A小溝状遺構群→SF3627 B小溝状遺構群→SK10142土壤	1.2m	1.2m		不整形	自然	ロクロ土師器内黒跡(手揉み切削 調節)、内輪大型(手揉みラメ 入り)、縫・縫・縫(手揉み 入り)、縫・縫・縫(手揉みラ メ入り)、須恵器(第72B(117)) ・高台皿(第72B(119))	10世紀前半
SK10153土壤	橋脚63	本調査	第56B	第70B(?)	SI1929-10266・10227・ 10328建物跡と重複するが、新 旧関係不明	1.3m	1.0m	20cm	不整形円形	人為	ロクロ土師器内黒跡(手揉み切削 調節)、内輪大型(手揉みラメ 入り)、縫・縫・縫(手揉み 入り)、須恵器(第72B(118)) ・高台皿(第72B(119))	10世紀前半
SK10187土壤	橋脚66- 67B	確認	第62B		SI10013住居跡→SK10187土壤	0.7m	0.5m	20cm	不整形	人為		
SK10233土壤	橋脚65	本調査	第66B	第66B	SI10125住居跡と重複するが、 床面下まで削平されていたため、 新旧関係不明	0.9m	0.9m	25cm	不整形円形	人為	非クロコ土師器底、ロクロ土師器 内面部(手揉みラメ入り)、縫・縫 ・縫、須恵器等(第72 B(111))、縫・縫・縫(手揉み 入り)、須恵器	9世紀後半
SK10236土壤	橋脚65	本調査	第66B	第66B	SI10125住居跡と重複するが、 床面下まで削平されていたため、 新旧関係不明	0.6m	0.4m	6cm	不整形円形	人為	須恵器(ヘラ切り)	9世紀前半
SK10237土壤	橋脚65	本調査	第66B		SI10125住居跡と重複するが、 床面下まで削平されていたため、 新旧関係不明	0.9m	0.7m	10cm	不整形円形	自然	非クロコ土師器底、須恵器	8世紀後半 以降
SK10244土壤	橋脚65	本調査	第66B		SI10125住居跡と重複するが、 床面下まで削平されていたため、 新旧関係不明	1.1m	0.4m	25cm	不整形円形	人為	ロクロ土師器内黒跡	9世紀前半 以降

表10 南2西1区検出の土壤一覧

(8) 小溝状遺構群(烟跡)

【SF1625小溝状遺構群】(平面図: 第41・42・45図、断面図: 第46図、写真図版: 図版22)

南北方向に平行する小溝状遺構群(烟跡)で、橋脚P 64の確認調査区とその東側で検出した。位置関係からみて、SX3461南1-2間道路跡よりも南に位置する南北方向のSF3627A小溝状遺構群と一連の可能性が高いと考えられる。

SX3461南1-2間道路跡、SD1602B河川跡と重複し、これらよりも新しい。この地点では、河川跡→南1-2間道路跡→小溝状遺構群(烟跡)へと土地利用が変化したことがわかる。

0.2~1.2m間隔で、小溝を28条確認している。検出長は最長約5mで、上端幅0.2~0.7m、底面幅は0.1~0.5mである。深さは2~18cmで、断面形は浅いU字状を呈する。方向は真北方向から北で東に約15°偏するものまで、若干のばらつきがある。堆積土は1層で、黒褐色土からなる。遺物は、旧調査では堆積土中からロクロ土師器、須恵器、円板状土製品などが少量出土した。

【SF3201小溝状遺構群】(平面図: 第40・41図)

橋脚P 66で6条検出した小溝状遺構群(SD10016・10022・10030・10031・10033・10034)で、

北で東に約 20° 傾る。同様の方向の小溝を南西部の旧調査区で 7 条検出している。

重複関係からみて、これらは SB3212・3215・3216・10014 建物跡よりも古く、SI3213・3217 竪穴住居跡よりも新しい。この地点では、竪穴住居跡群→小溝状遺構群（畑跡）→建物跡群へと土地利用が変化したことがわかる。

検出長は最長約 6 m で、上端幅 0.3 ~ 0.5 m、底面幅は 0.1 ~ 0.3 m である。深さは 5cm 前後で、断面形は浅い U 字状を呈する。堆積土は 1 層で、黒褐色土からなる。遺物は、須恵器破片が出土したのみである。

【SF3627A・B 小溝状遺構群】（平面図：第 43・44・45 図、写真図版：図版 22 上・中）

橋脚 P 64 南側から橋脚 P 61 の間の本発掘調査・確認調査区で検出した小溝状遺構群である。新旧 2 時期あり、ほぼ南北方向の SF3627A 小溝状遺構群が古く、ほぼ東西方向の SF3627B 小溝状遺構群が新しい。SX3461 南 1 ~ 2 間道路跡よりも南側から南 2 道路跡までの南北約 80 m と、広範囲に分布する。同様の方向の SF3627A・B 小溝状遺構群は、SX1900 南 2 道路跡から少なくとも約 30 m まで分布することを旧調査で確認している。

旧調査を合わせると、SF3627A・B 小溝状遺構群は、SB1690・1691・1929・3438 ~ 3442・3445 ~ 3447・3449・10224・10225・10227・10228 建物跡、SA1609 堀跡、SE1606 井戸跡、SD1718 溝、SK10148・10154 ~ 10160 土壌などと重複し、これより古い。南 2 西 1 区の南 1 ~ 2 間道路跡から南 2 道路跡までの間の南側 1/3 の区域では、生産域（畑跡）から居住域（建物群）に土地利用が変化し、畑跡（小溝状遺構群）は南北から東西へと歛方向を大きく変えたことがわかる。

SF3627A 小溝状遺構群は、上幅 30cm 前後、深さ 20cm 前後、断面 U 字状を呈する小溝が 70cm 前後の間隔を置いて南北方向に平行する。方向は北で東に 0 ~ 8° 傾する。

今回の調査では非ロクロ土師器内黒丸底环・内黒环・甕、ロクロ土師器内黒环・内黒高台环・両黒高台环・小型甕・甕、須恵器环・壺・甕、須恵系土器環、灰釉陶器壺、円面硯脚部などの破片が出土し、旧調査では土師器环・甕、須恵器环・甕・壺などの破片と金銅製帶金具が出土した。このうち、ロクロ土師器内黒环には体下部～底部手持ちヘラケズリのもの、回転糸切り無調整のものがあり、須恵器环には静止糸切後に体下部～底部周縁を回転ヘラケズリしたもの、体下部～底部回転ヘラケズリのもの、ヘラ切り無調整ものがある。これらの中で最新の遺物は 10 世紀前半頃の須恵系土器環、9 世紀後葉～10 世紀前葉頃の回転糸切り無調整のロクロ土師器内黒环だが、これらは小破片で数も少なく、遺物取り上げミスの可能性が高いと思われる。残存率の高い土器には 9 世紀前半頃のヘラ切り無調整の須恵器环があり、調整のわかるロクロ土師器環、須恵器环にも再調整されたこの頃のものが多く、これらが本来の時期を示す遺物と思われる。

SF3627B 小溝状遺構群は、上幅 30cm 前後、深さ 20cm 前後、断面 U 字状を呈する小溝が 70cm 前後の間隔を置いて南北方向に平行する。方向は東で南に 2 ~ 6° 傾する。今回の調査では非ロクロ土師器内黒环・両黒环・甕、ロクロ土師器内黒环、須恵器环・蓋・甕・壺、須恵系土器環など、旧調査では土師器环・甕、須恵器环・甕などの破片が出土した。これらの中で最新の遺物は須恵系土器環で 10 世紀前半頃のものだが、小破片で数もなく、遺物取り上げミスの可能性が高いと思われる。

(9) 区画溝等の溝跡

【SD1538 溝跡】(平面図: 第 41・42・45 図、断面図: 第 46 図、出土遺物: 第 72 図 120・121、図版 33-121)

南 2 西 1 区の中央南寄り、SD1602B 河川跡、SX3461 南 1—2 間道路跡近く、橋脚 P 64 の本発掘調査区とその北側の確認調査箇所で検出した南北溝である。仙塩道路の本線部分の旧調査で検出した新旧 2 時期の SD1538 溝とこれよりも新しい SD1539 溝が今回の調査区で 1 箇所に集まり、側道部分の旧調査で検出し、2 時期ある SD1538 溝に繋がり、新旧 3 時期あることを今回の調査で確認した(第 46 図右上)。検出長は併せて約 31 m となる。方向は北で東に約 19° 偏る。今回の精査した本発掘調査区箇所では、新旧 2 時期ある。

SD1602B 河川跡、SX3461 南 1—2 間道路跡の北側溝・南側溝、SD1618・10143 溝と重複し、SD1602B 河川跡、SD10143 溝よりも新しく、SX3461 南 1—2 間道路跡の北側溝・南側溝、SD1618 溝よりも古い。

旧調査の所見では、A 溝は上幅約 1.0 m、深さ 33cm、B 溝は上幅約 0.7 ~ 1.0 m、深さ 14cm、C 溝(SD1539 溝)は上幅約 0.8 ~ 1.2 m、深さ 10 ~ 23cm で、断面形はいずれも断面 U 字状、A・B 溝は人為的に埋められ、C 溝については人為・自然堆積土の区別が記載されていない。A・B 溝より非クロコ土師器、ロクロ土師器、須恵器、瓦、C 溝よりロクロ土師器、須恵器の破片が少数出土した。

今回の調査では、B 溝より非クロコ土師器甕、ロクロ土師器内黒坏、須恵器坏・折縁高台坏、C 溝より非クロコ土師器内黒丸底坏・両黒平底坏、ロクロ土師器内黒坏・甕、須恵器坏・甕、須恵系土器坏(第 72 図 120・121)の破片が出土した。B 溝出土土器のうちロクロ土師器内黒坏には体下部~底部手持ちヘラケズリのもの、須恵器坏にはヘラ切りのもの、C 溝出土土器のうちロクロ土師器内黒坏には体下部~底部回転ヘラケズリのもの、回転糸切り無調整のもの、須恵器坏にはヘラ切り無調整のもの、体下部~底部回転ヘラケズリのものがある。

【SD1718 区画溝跡】(平面図: 第 43・44 図)

南 2 西 1 区の南端近く、橋脚 P 62 と橋脚 P 61 の間の確認調査箇所で検出し、側道部の旧調査区で検出した SD1718 溝に接続する東で北に傾く直線的な区画溝である。東側で浅くなつて途切れるものの位置関係からみて、東側の仙塩道路の本線部分で検出した SD1713 溝に接続するとみられる。長さ約 33.5 m 検出したことになる。幅 30cm、深さ 30cm、断面 U 字状で、方向は東で北に 16° 偏る。堆積土は 1 層で、黒色土が自然堆積している。10 世紀前葉に十和田火山より降灰した灰白色火山灰(十和田 a 火山灰)が中位に入り、側道部の旧調査で検出した SK3455 土壌と重複し、これよりも新しい。また、SF3627A・B 小溝状遺構群と重複し、これよりも新しい。10 世紀前葉よりも新しく、道路の方向とは大きく異なる区画溝である。もう少し西側延長の未調査箇所で南 2 道路と重複することになるが、新旧関係と方向からみて、南 2 道路廃絶以降の区画溝と考えられる。そして、D 期の南 2 道路跡よりも新しく、旧調査で南 2 道路 E・F 期に位置付けた SD10238 溝と同時期の区画溝である可能性もあるのかかもしれない。

堆積土より非クロコ土師器甕、ロクロ土師器内黒坏・両黒塊、須恵器坏・鉢・壺・甕、須恵系土器坏・

高台坏、須恵器坏・鉢・甕、製塙土器の破片が出土した。このうちロクロ土師器内黒坏には回転糸切り後に体下部を手持ちヘラケズリしたもの、体下部～底部手持ちヘラケズリのもの、回転糸切り無調整のものがある。

【SD3050 奈良時代集落区画溝】(平面図：第8・40・49図、断面図：第13図)

奈良時代の集落跡を区画する北西から南東に延びる区画溝で、これまでの調査を併せると長さ約107m検出したことになる。砂押川やこれまで検出されている奈良時代の遺構との位置関係からみて、集落跡の西辺を区画する区画溝と考えられるが、接続関係や集落跡との位置関係を含め、詳細はまだ不明確である。今回の調査では北は橋脚P68北側の確認調査箇所から南は橋脚P66北側の確認調査箇所にかけての長さ約35mを検出し、橋脚P67・68の本発掘調査区で精査・完掘した。

SX1350 西1道路跡、SX1300 南1道路跡、SB3035 建物跡、SE3048 井戸跡、SD2228 溝跡、SK3066・3074・3080などの南2西2区の土取り穴群、SK1474・3024・3043 土壌などと重複し、SK3080より新しく、その他より古い。

今回の調査では掘り直しは認められなかったが、旧調査では3時期の変遷(A・B・C)が認められ、B溝については材木堆積跡の可能性が指摘されている。方向は東で42°南に偏る。

旧調査の所見では、A溝は上端幅1.5～1.6m、深さ20～45cmで、断面形は逆台形状を呈する。堆積土は2層に細分され、いずれも自然堆積土とみられる。B溝は上端幅約2.6m、深さ約31cmで、断面形はU字状を呈し、柱を抜き取った痕跡がみられる。堆積土は1層で、人為堆積土である。C溝はB材木堆積跡の柱を抜き取った後、そのまま溝跡として利用したものと考えられ、上端幅1.8m前後、深さは11～21cmで、断面形は「U」字状を呈する。堆積土は10層に細分され、いずれも自然堆積土である。遺物はC溝の堆積土中から土師器・須恵器の甕破片が3点出土しているのみである。

今回の調査では1時期で、幅約1.3m、深さ20cm前後である。遺物は出土していない。

【SD10238A・B区画溝】(平面図：第44・47図、断面図：第48図、写真図版：図版13下)

旧調査で南2道路E・F期南側溝と位置付けた区画溝である。南2道路跡の事実記載で前述したように、南2道路の南側溝とはみず、SX1900南2道路跡廃絶後の、南2道路とは無関係の区画溝とみることにした。橋脚P61の本発掘調査で検出し、精査した。東側の仙塙道路本線部分の旧調査区から西側の側道部分の旧調査区にかけて、「く」字状に折れ曲がる直線的な区画溝である。

SD2000B河川跡(直線的に河川改修された旧砂押川跡)、SF3627A・B小溝状遺構群、SF3700B水田跡、SX1900南2道路跡、SX1950西0道路跡と重複し、いずれよりも新しい。

SD2000B河川上部(旧調査の5層；層番号はA～C期の変遷を持つSD2000河川跡を通した番号)には、10世紀前葉の灰白色火山灰(十和田a火山灰)が自然堆積している。その後、SD2000B河川跡は河道を東に位置を変え、SD2000B河川右岸よりも右岸が6～10m東となり、A期からC期のSX1900道路跡、南2西0道路交差点以北のSX1850西0道路跡、交差点以南のSX1950西0道路跡と同時に存在していたSD2000B河川は完全に埋没している。

旧調査の見解では、河道の位置を変えたSD2000C河川の当初(3層)にD期の南2・西0道路が伴うとみている。SD10238区画溝が掘削されたのはまさにこの後の時期で、旧調査の所見によれば、

SD2000C 河川右岸に接続するとみられる（宮城県教育委員会 1995、第 39 図の遺構変遷図）。その時期は、SX1900 南 2 道路が廃絶した 10 世紀中頃以降と考えられる。

また、前述したように、この「く」字状に屈曲する SD10238 区画溝は、SX1900 南 2 道路跡北側溝の南に位置する SD1713 区画溝と同時期になる可能性がある。両区画溝が同時期であるならば、両区画溝の間隔は SD2000C 河川右岸箇所で約 26 m、SD10238 区画溝屈曲部で 15.5 m、西側の検出した西端で 26 m となり、その西側ではさらに間隔が空いて行くことになる。

SD2000C 河川右岸から西北西に直線的に約 16 m 延び（方向は西で北に約 22° 傾む）、そこから南西に屈曲して 21 m 以上延びる（方向は北で東に 43° 傾む）。屈曲部は 113° の鈍角をなしている。新旧 2 時期あり、古い SD10238A 溝は上幅 0.9 m 以上、底幅 0.4 m、深さ 60cm の逆台形状で、新しい SD10238B 溝は上幅 1.3 m、底幅 0.9 m、深さ 30cm の逆台形状である。SD10238B 溝は、古い SD10238A 溝を人為的に埋戻ししてから同位置で掘り直し、深さが約半分となり、浅くなっている。その後、SD10238B 溝には自然堆積土が堆積し、廃絶している。

今回の調査では、SD10238B 溝からロクロ土師器内黒環・壺、須恵器高台环・蓋・壺・壺、須恵系土器環の破片が出土した。

（10）河川跡

【SD1602 河川跡】（平面図：第 45 図、断面図：第 46 図、写真図版：図版 12）

南 2 西 1 区の南側 1/3、南 1—2 間道路跡と重複してこれよりも古い東西方向の河川跡で、新旧 2 時期ある。橋脚 P 64 の本発掘調査区で検出した。旧調査では下層の河川跡からほとんど遺物が出土していないことから、上層の河川跡のみ精査・完掘し、下層の河川跡はトレーニング調査に留めた。

なお、旧調査報告書の本文事実記載では、古い河川跡を SD1602A 河川跡、新しい河川跡を SD1602B 河川跡として記載するが、南 1—2 間道路跡の平面図・断面図では新しい河川跡のみ SD1602 河川跡とし、下層の河川跡を SD3458 河川跡とする一方で、同じ箇所の SD1602 河川跡の断面図では SD1602A・B 河川跡とし、SD3458 河川跡の事実記載がないなど、齟齬がある（宮城県教育委員会 1995、第 35・36・215 図、p.264）。以下、旧調査報告書の本文事実記載に従い、SD1602 河川跡には新旧 2 時期があり、SD1602A 河川跡→SD1602B 河川跡に変遷するものとして記載する。

SX3461 南 1—2 間道路跡、南北方向の SF1625 小溝状遺構群（烟跡）、SD1538A・B 溝、基本層Ⅲ b 層と重複し、いずれよりも古い。

東側の仙塩道路本線部分と西側の側道部分での SD1602A・B 河川跡の川底の標高について、旧調査報告書で図示された南北方向の断面図（第 215 図）でそれぞれ検討すると、東側では SD1602A 河川跡の川底が標高 1.6 m、SD1602B 河川跡の川底が標高 1.75 m、西側では SD1602A 河川跡の川底が標高 1.6 m、SD1602B 河川跡の川底が標高 1.75 m となる。したがって、当時の川の流れは西から東であり、東側に位置する砂押川本流である SD2000 河川に注いでいたとみられる。

《SD1602A 河川跡》

上端幅 9 m 前後、底面幅約 5 m で、深さは 0.9 ~ 1.1 m ある。堆積土は上部が砂層、下部が植物遺存体を多量に含む黒褐色スクモ層である。旧調査では調整不明の土師器甕が 20 片程度出土したが、今

回の調査では遺物は出土していない。

《SD1602B 河川跡》

上端幅 8 ~ 10 m、底面幅 4 ~ 8 m で、深さは 75cm 前後ある。底面は幅 0.7 ~ 1.0 m、深さ 18cm の小溝状となり、当初の SD1602A 河川跡が洪水などで埋没した後、水潤れ状態になっていたことをうかがわせる。

堆積土は東側の旧調査区では上層が炭化物を含む黒・黒褐色の粘質土で、下層が細砂層である。一方、西側の旧調査区では、下層から上層に向かって細砂から中砂、さらに粗砂へと級化構造が認められた。今回の調査区では側道部の旧調査と同様に級化構造をなす砂層が自然堆積し、上層には粒径数 mm 前後の白色凝灰岩粒が多く含まれていた。

今回の調査では、非クロコ土師器内黒塊・甕、ロクロ土師器内黒环・甕、須恵器环・盤・壺・甕、多賀城跡政府第Ⅱ期の平瓦Ⅱ B 類、丸瓦Ⅱ B 類などの破片が少數出土した。このうちロクロ土師器内黒环には体下部～底部手持ちヘラケズリのもの、須恵器环にはヘラ切り無調整のものがあり、9世紀前半頃のものである。須恵器盤は高台径 10.7cm と大きく、回転糸切り後に付高台した 8世紀後半～9世紀前半頃のものである。回転糸切り無調整のロクロ土師器内黒环と須恵器环、須恵系土器は含まれず、9世紀中葉頃には埋没し、その上面に SX3461 南 1—2 間道路跡が施工されている。

なお、旧調査では回転糸切り無調整のロクロ土師器内黒环、須恵器环の他、須恵系土器環がごく少量含まれていると報告した。これらは上層の基本層Ⅲ b 層に含まれ、上位の南 1—2 間道路が貞觀 11 年 (869) 陸奥国巨大地震後に施工されたとみられることから、取り上げミスと判断した。

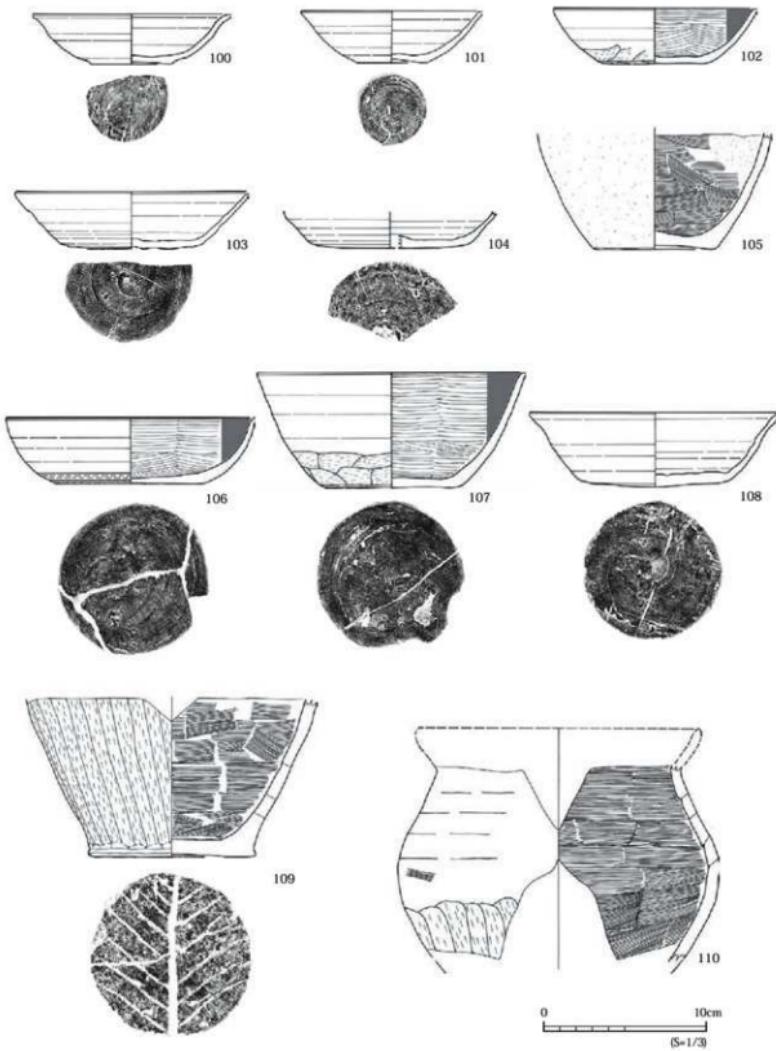
また、旧調査ではロクロ土師器内黒环、両黒高台塊（金属製品模倣）・両黒塊、須恵器环・壺・甕が図示されている（宮城県教育委員会 1996、第 94・95 図）。

(11) 基本層Ⅲ b 層（平面図：第 41 図、出土遺物：第 72 図）

発泡した φ 2 ~ 4mm 程の白色凝灰岩粒を多く含む褐灰色砂質シルト土で、旧調査では SX3461 南 1—2 間道路跡から SD2000 河川跡にかけてのほぼ全面に分布していた。今回の調査では SX3461 南 1—2 間道路跡の北側、橋脚 P 65 周辺に特に顕著に認められた。10 ~ 20cm 程の厚さがあり、旧調査では灰白色火山灰降灰後のもので、「洪水等の短期間に大量の土砂が供給されるような自然灾害によって堆積したもの」と推定している。そして、SX3461 南 1—2 間道路跡の B 期と C 期の間にこの基本層Ⅲ b 層が当初の路面 1 の上に自然堆積し、C 南側溝がこのⅢ b 層を掘り込み面とすることを示す断面図を掲載している（宮城県教育委員会 1995、第 38 図；「基本層位Ⅲ d 層」と図示している箇所だが「Ⅲ b 層」の誤植）。南 1—2 間道路跡は埋没した SD1602B 旧河川跡上面に造営され、周囲より低い位置にあることから、この低い箇所に流入した砂層が周辺にオーバーフローしたと考えられる。

今回の調査では、基本層Ⅲ b 層から非クロコ土師器内黒丸底环・内黒塊・甕、ロクロ土師器内黒环・鉢・甕・甕、須恵器环・双耳环・蓋・鉢・壺・甕、須恵系土器环・高台环・大型台付鉢・灰釉陶器塊 (129)、丸瓦Ⅱ B 類などの破片が出土した。

ロクロ土師器内黒环には体下部～底部手持ちヘラケズリのもの、回転糸切り無調整のものがあり、須恵器环には底径が大きく、底部手持ちヘラケズリ (127) や底部回転ヘラケズリのもの (128)、ヘ



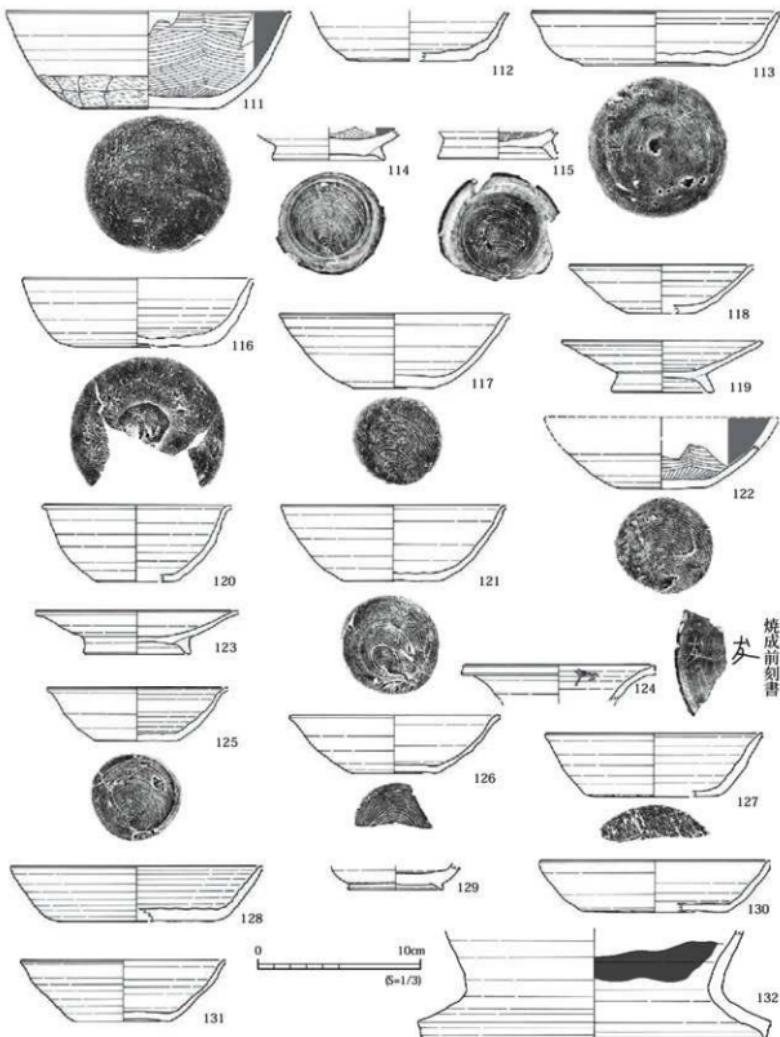
【種類】100・101：須恵系上器環 102・106：クロ口土師器環 103・104・108：須恵器環 105：非クロ口土師器小型環

107：クロ口土師器喉 109：非クロ口土師器喉 110：非クロ口土師器却刷裏

【出土遺構等】100・101：南1—2間道路跡D南側溝 102：SI10013住居跡床面 103：SI10013住居跡カマド脇ピット

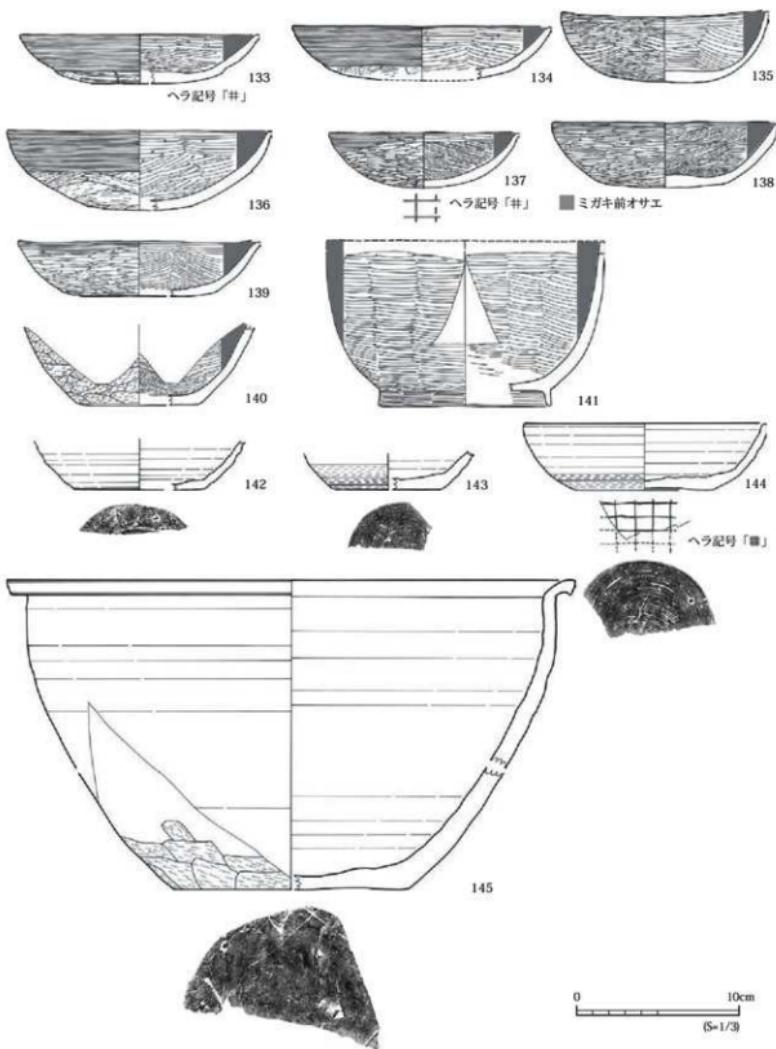
104：SI10013住居跡掘方 105：SI10137住居跡カマド支脚 106～108：SI10019住居跡床面 109・110：SI3206住居跡壁道

第71図 南2西1区出土の主な土器（1）



【種類】111：ロクロ土師器環 112・113・116・127・130・131：須恵器環 114：ロクロ土師器高台杯
 115：須恵系土器高台杯 117・118・120・121・125・126：須恵系土器環 119・123：須恵系土器高台皿 122：ロクロ土師器環
 124：須恵器皿 129：灰釉陶器塊 132：ロクロ土師器環
 【出土遺構等】111：SK10235上塙 112：SI10125住居跡側方 113：SI10134B住居跡カマド検出面
 114・115：SE10012井戸跡井戸内 116：SK10129上塙 117：SK10142上塙 118・119・122：SK10153上塙
 120・121：SD1538C溝 123：PIt722 124：住居跡調査区埋土 125：PIt742 126：SB3441建物跡東側柱列北より1間目柱穴
 127～132：基本層IIIb層

第72図 南2西1区出土の主な土器（2）



【種類】133・134・136：非口クロ土師器有段丸底环 135・137～139：非口クロ土師器丸底环 140：非口クロ土師器平底塊形环
 141：非口クロ土師器内高台块 142～144：須恵器环 145：須恵器鉢
 【出土遺構】133～145：SK10140土壤

第73図 南2西1区出土の主な土器（3）—SK10140土壤

回数	No.	種類	出土遺構等	特徴	口径 cm	底径 cm	高さ cm	残存率		登録 番号	写真図版
								口径 cm	底径 cm		
第1回	100	須恵系土器窯	窓I-2間周跳跡跡 D南側窓	外面：底部周跳跡切り。内面：コナデ。	12.2	5.1	3.1	>1/4	<1/2	R1106	32
	101	須恵系土器窯	窓I-2間周跳跡跡 D南側窓	外面：底部周跳跡切り。内面：コナデ。	11.2	4.2	3.2	むすか	完形	R1107	32
	102	ロクロ土器窯	SI10013住居跡床面	外面：体下部～底部手持ちハラケズリ。 内面：平ヨミガキ～黒色處理。	12.6	7.2	3.4	1/4	1/2	R1001	28
	103	須恵窯	SI10013住居跡 カマド支ビット	外面：ハラ切り～焼成前へ記号「-」。	14.3	7.6	3.5	1/4	1/2	R1004	
	104	須恵窯	SI10013住居跡 カマド支ビット	外面：ハラ切り～ナリダ～焼成後へ記号「×」。	-	9.6	-	-	1/3	R577	
	105	井口クロ土器窯	SI10013住居跡 小型窓	外面：焼減、底部木炭斑。内面：ハケメ。胎土に海綿骨粉含む。	-	7.6	-	-	3/4	R1017	34
	106	ロクロ土器窯	SI10019住居跡床面	外面：体下部～底部手持ちハラケズリ。 内面：平ヨミガキ～黒色處理。	15.4	9.0	4.1	1/4	完形	R1014	28
	107	ロクロ土器窯	SI10019住居跡床面	外面：ハラ切り～体下部～底部手持ちハラケズリ。 内面：平ヨミガキ～黒色處理。	16.6	8.9	7.1	完形	完形	R1016	29
	108	須恵窯	SI10019住居跡床面	外面：ハラ切り～焼成前へ記号「-」。内面：底部手ずれ痕。	15.6	8.0	4.6	1/4	完形	R1015	31
	109	井口クロ土器窯	SI3206住居跡縁道	外面：体下部手持ちハラケズリ、底部木炭斑。内面：ハケメ。	-	10.4	-	-	完形	R594	
第2回	110	井口クロ土器窯	SI3206住居跡縁道 壁側面	外面：体下部手持ち輪滑輪状痕・ハケメ、体下部タチ手持ちハラケズリ。内面：ハケメ。	-	-	-	-	-	R595	
	111	ロクロ土器窯	SI10125住居跡内 SK10235土壤	外面：底部手持ちハラケズリ。内面：平行ミガキ～黒色處理。	17.6	9.0	6.0	<1/6	完形	R1029	29
	112	須恵窯	SI10125住居跡前方	外面：底部ハラ切り。	-	7.6	-	-	1/4	R1030	
	113	須恵窯	SI10134住居跡 カマド突出面	外面：底部ハラ切り。	15.4	8.8	3.3	<1/2	完形	R1032	31
	114	ロクロ土器窯	SI10012付跡 窓内付	外面：底部周跳跡切り～付高台。 内面：放熱状ミガキ～黒色處理。	-	7.0	0.9	-	完形	R580	
	115	須恵土器	SI10012付跡 窓内付	外面：底部周跳跡切り～付高台。高台径7.4cm、高台高12cm。	-	7.4	1.2	-	完形	R582	
	116	須恵窯	SI10129土壤	外面：底端ハラ切り。	14.2	9.5	4.25	<1/4	2/3	R1038	
	117	須恵土器窯	SI10142土壤	外面：底部周跳跡切り。内面：軽いコナデ。	14.2	5.3	4.6	<1/6	完形	R1174	32
	118	須恵土器窯	SI10151土壤	外面：底部周跳跡切り。内面：コナデ。	11.5	4.0	3.0	7/8	1/3	R1129	33
	119	須恵土器	SK10151土壤	外面：底部周跳跡切り～付高台。 内面：放熱状ミガキ～黒色處理。	12.4	-	3.2	<1/4	-	R1132	32
第3回	120	須恵土器	SD1538C溝	外面：底端ハラ切り。内面：コナデ。	11.8	5.2	4.7	1/6	1/6	R1074	
	121	須恵土器	SD1538C溝	外面：底端ハラ切り。内面：コナデ。油煙。	13.9	6.2	4.7	1/4	完形	R1083	33
	122	ロクロ土器窯	SK10151土壤	外面：底端ハラ切り。内面：放熱状ミガキ～黒色處理(消失)	5.8	-	-	-	完形	R1131	
	123	須恵土器	PS722	高台径6cm、高台高1cm。内面：コナデ。	12.5	-	2.6	完形	完形	R1152	32
	124	須恵窯	□調査区灰土	□縫隙片。内面：焼成前割引「□」。	11.6	-	-	1/4	-	R1582	
	125	須恵土器窯	PS742	外面：底部周跳跡切り。内面：さきつロクロ。少し焼け出る。	11.2	5.3	2.8～ 3.3	完形	完形	R1151	33
	126	須恵系土器窯	SB3441建物跡輪郭 糸北よりI間斜材穴	外面：底部周跳跡切り。体部～底部に黒斑。内面：コナデ。	13.0	4.9	3.55	<1/6	<1/4	R1154	
	127	須恵窯	基本層a層b層	外面：底部手持ちハラケズリ。	13.4	8.2	3.9	>1/4	1/4	R1179	
	128	須恵窯	基本層b層	外面：底部周跳跡切り。	15.6	9.4	3.4	<1/4	<1/4	R1184	
	129	灰釉陶器	基本層a層b層	外面：底部周跳跡切り～付高台。崩れた三日月高台。透明灰釉。 内面：灰色灰釉。猫窓焼成品。黒90号式後。	-	-	5.8	<1/6	1/4	R1180	33
第3回	130	須恵窯	基本層a層b層	外面：底部周跳跡切り。内面：放熱状ミガキ～黒色處理。	14.2	(9.0)	3.2	1/3	1/3	R1183	31
	131	須恵窯	基本層b層	外面：底部周跳跡切り。 内面：放熱状ミガキ～黒色處理。	12.6	5.8	3.8	完形	完形	R1185	31
	132	ロクロ土器窯	基本層a層	瓶底式。底部「△」字形に外に開き、受口状となる。 内面：体下部～底部手持ち。	-	21.8	-	>1/4	-	R1212	34
	133	井口クロ土器窯 有段底窯	SK10140土壤	外面：口ヨミコテ。体下部～底部手持ちハラケズリ。 焼成前～後記号「△」付。	14.8	10.4	3.0	1/4	-	R1251	39
	134	井口クロ土器窯 有段底窯	SK10140土壤	外面：口ヨミコテ。体下部～底部手持ちハラケズリ。 内面：平行ミガキ～黒色處理。	16.0	12.0	3.4	1/4	-	R1252	28
	135	井口クロ土器窯 丸底窯	SK10140土壤	外面：口ヨミコテ。体下部～底部手持ちハラケズリ。 内面：平行ミガキ～黒色處理。	12.8	-	4.4	2/3	完形	R1246	28
	136	井口クロ土器窯 有段底窯	SK10140土壤	外面：口ヨミコテ。体下部～底部手持ちハラケズリ。 内面：ハラケスル。火はね痕。	16.4	6.4	4.9	1/4	-	R1250	28
	137	井口クロ土器窯 丸底窯	SK10140土壤	外面：口ヨミコテ～ハラケスル。口部に油煙。底部中央に 焼成前～後記号「△」付。	11.0	6.6	3.4	>1/3	1/2	R1247	28,39
	138	井口クロ土器窯 丸底窯	SK10140土壤	外面：口ヨミコテ。口部～体下部～底部手持ちミガキ。 部分的にミガキが不十分。内面：升鉢式ミガキ～黒色處理。	14.0	-	4.0	1/4	1/4	R1248	28
	139	井口クロ土器窯 丸底窯	SK10140土壤	外面：口ヨミコテ。底部手持ちケズリ～ハラケスル。 内面：ハラケスル。	15.0	9.4	3.4	1/4	1/4	R1249	28
第3回	140	井口クロ土器窯 平底窯	SK10140土壤	外面：体下部～底部手持ちハラケズリ。内面：黒色處理。	-	7.6	-	-	1/3	R1253	
	141	井口クロ土器窯 内黒外白陶	SK10140土壤	外面：ハラミガキ～画面黒色處理。黒色處理が消失した破片と 消失しない焼片が接合。	(16.2)	-	(10.2)	-	-	R1254	29
	142	須恵窯	SK10140土壤	外面：底端ハラ切り。	-	4.0	-	-	1/3	R1244	
	143	須恵窯	SK10140土壤	外面：体下部～底部手持ちハラケズリ。	-	6.4	-	-	1/4	R1242	
	144	須恵窯	SK10140土壤	外面：口ヨミコテ。口部～体下部～底部手持ちケズリ。 内面：ハラミガキ～黒色處理。	15.0	8.6	4.1	>1/4	1/3	R1241	31
	145	須恵窯	SK10140土壤	口ヨミ～体下部破片と同一接合の体下部～底部～1/4破片。 体下部手持ちハラケズリ。	35.2	14.6	(19.0)	1/3	>1/4	R1255	31

表11 南2西1区出土土器観察表

ラ切り後に底部周縁手持ちヘラケズリのもの（130）、回転糸切り後に底部周縁手持ちヘラケズリのもの、体下部～底部回転ヘラケズリのもの、体下部～底部手持ちヘラケズリのもの、ヘラ切り無調整のもの、回転糸切り無調整のもの（131）などがあり、8世紀後半～10世紀前半頃までの特徴を持つ土器が混在している。ロクロ土師器瓶（132）は多賀城跡周辺では希少な器種で、無底式のものである。

3. 南2道路跡以南

南2道路跡以南の区域では、道路跡2条（SX1950西0道路跡、SX10240東0道路跡）、掘立柱建物跡3棟、井戸跡1基、土壙6基、水田跡2面（SF3700A・B水田跡）などの主要遺構の他、河川跡3（SD2000・10195・3625河川跡）、湿地1箇所（SX10211）、砂層1箇所（SX10234）を検出した。

（1）SX1950西0道路跡（平面図：第44・74図、断面図：第75図、写真図版：図版14）

SX1950西0道路跡は、南2西0道路跡交差点より南側の南北道路跡で、SD2000B河川右岸に沿って平行する。道路側溝は西側溝のみで、東側溝はなく、SD2000B河川右岸との間が西0道路跡の路面となっている。SD2000河川跡は古代の砂押川の本流跡で、東西大路跡と交差した地点以南については、位置関係からみて、直線的に河川改修された運河跡と推定されている（多賀城市教育委員会2002）。今回のSD2000河川跡の調査では、表土からの土層を意図的に残したベルトを両岸箇所に幅広く残して調査したところ、SD2000B・C河川跡の両岸には堤防の痕跡が認められなかった。当初より堤防が存在しなかったどうか不明だが、存在しなかった場合には西0道路跡の東側はSD2000B河川右岸に直接なっていたことになる。

旧調査の見解では、SX1950西0道路跡西側溝には3時期（B期→C期→D期）の変遷があり、以下のように南2道路跡、SX1850西0道路跡（南2西0道路跡交差点以北）、SX1950西0道路跡（南2西0道路跡交差点以南）が変遷するとみていた（宮城県教育委員会1995、第39図の遺構変遷図）。

①南2道路跡A期段階 SX1850・1950西0道路は施工されずにA期南2道路が7層段階のSD2000B河川右岸に直接接する。

②南2道路跡B期段階 10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰を道路側溝に含む時期。7層段階のSD2000B河川が7層まで埋没して、河道が心々で東に約6m移動し、埋没したSD2000B河川跡7層上面にSX1850・1950西0道路が新たに造営された時期。6層段階のSD2000B河川右岸との間の旧河川跡上面の幅約4mがSX1950西0道路跡の路面となる。

③南2道路跡C期段階 灰白色火山灰降灰後、10世紀前葉以降。4層段階のSD2000B河川右岸との間の幅約6mがSX1950西0道路跡の路面となる。

④南2道路跡D期段階 河道の位置を東に変えた3層段階のSD2000C河川右岸との間の幅約7mがSX1950西0道路跡の路面となる。その後、1～2層段階のSD2000C河川の段階にはSX1950西0道路は廃絶している。

今回、橋脚P61と橋脚P60の間の確認調査箇所から橋脚P60の本発掘調査区にかけてSX1950西0道路跡を検出し、本発掘調査区で精査・実掘した。その結果、旧調査と同様に3時期の変遷を確認でき（第75図①）、旧調査の見解を裏付けることができた。旧調査と併せ、南2西0道路交差点の

南西隅より南に 41 m 分検出したことになる。

SD2000B 河川跡、SD10192 溝と重複し、7 層段階の SD2000B 河川跡よりも新しく、SD10192 溝よりも古い。液状化現象とみられる痕跡が SD2000B 河川跡底面までで、貞觀 11 年（869）陸奥国大地震が起きた時の河川が SD2000B 河川跡とみられること、SD2000B 河川跡 8 層出土のロクロ土師器内黒坏と須恵器坏には回転糸切り無調整のものと手持ちヘラケズリのものが多いこと、SD2000B 河川跡 7 層には底部回転糸切り無調整のロクロ土師器内黒坏と須恵器坏が多く、須恵系土器をほとんど含まないこと、上位の 5 層が 10 世紀前葉の灰白色火山灰であること（宮城県教育委員会 1996）から、貞觀地震からしばらくたった 9 世紀末～10 世紀初頭頃に河道が東に移動した時に、SX1850・1950 西 0 道路が施工されたとみることができる。このことは、SX1950 西 0 道路跡の施工が貞觀地震直後の南 2 道路跡 A 期ではなく、B 期からであるとした旧調査の見解を補強している。

【西側溝と路面の遺構期】

旧調査では西側溝と路面で 3 時期の変遷を確認し、南 2 道路の B 期→C 期→D 期の変遷に対応するとしていた。今回の調査でも西側溝と路面で 3 時期の変遷を確認し、旧調査と同じく、南 2 道路の遺構変遷に対応させてみて差し支えないと判断した。旧調査の所見（宮城県教育委員会 1995、第 42 図、p.55・56・61）をまとめると、それぞれ 3 時期ある路面と西 0 道路西側溝との関係は以下のようになる。

路面 II = 埋没した SD2000B 河川 7 層上面（路面 4 層） \Leftrightarrow 西 0 道路跡 B 期西側溝

↓ 路面 II の上に路面 3 層（黒褐色土とその上を覆う灰白色火山灰の一時堆積層）が自然堆積

路面 III = 路面 3 上面 \Leftrightarrow 西 0 道路跡 C 期西側溝

↓ 路面 III の上に路面 2 層（黒褐色スクモと黄褐色粗砂・細砂の互層、層厚 40cm）が自然堆積

路面 IV = 路面 2 層、埋没した SD2000B 河川 4 層上面（路面 1 層） \Leftrightarrow 西 0 道路跡 D 期西側溝

西 0 道路跡は東側に側溝がなく、SD2000B 河川（古代の砂押川）右岸となり、そこには堤防がなかつたため、40cm もの厚さで自然堆積した路面 3 層は、この河川の氾濫による洪水堆積層と考えられる。

【側溝の規模】

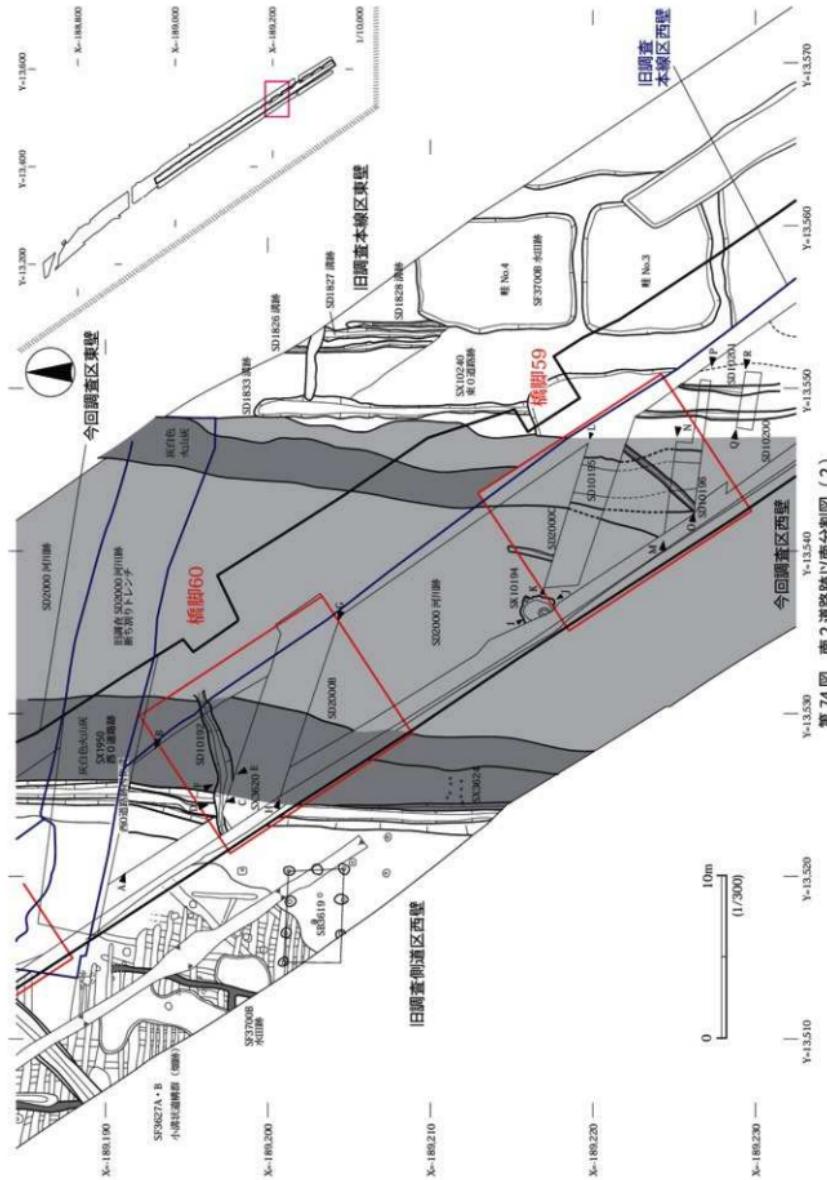
B 西側溝は上幅 0.9 m、深さ 25cm（路面 II からの深さで推定）、C 西側溝は上幅 1.1 m 以上、深さ 10cm（路面 III からの深さで推定）、D 西側溝は上幅 1.3 m、深さ 40cm である。

【路幅・方向】

旧調査によれば、路幅は B 期が約 4 m、C 期が約 6 m、D 期が約 7 m と順次大きくなる（宮城県教育委員会 1995、第 42 図）。これは年代的に新しくなるにつれ、SD2000B 河川の河道が東側に移動し、西 0 道路の東縁を画する東岸が離水して行くことによる。方向は西側溝でみると北で東に 2° 傾る。

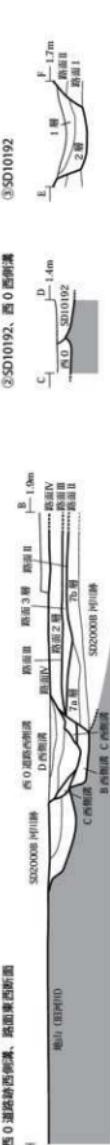
【出土遺物】

今回の調査では、西 0 道路跡 B 西側溝からロクロ土師器内黒坏・塊、須恵器坏・壺・甕、製塙土器、C 西側溝からロクロ土師器内黒坏・甕、須恵器坏・壺・甕、須恵系土器大型台付鉢、製塙土器、D 西側溝からロクロ土師器内黒坏・甕、須恵器坏・甕、須恵系土器环、製塙土器、路面 3 層（路面 II・III 間）からロクロ土師器内黒坏・甕、須恵器坏・甕、須恵系土器环・大型台付鉢、製塙土器、路面 2 層（路面 III・IV 間）からロクロ土師器内黒坏・高台坏・甕、須恵器坏・壺・甕、須恵系土器环、

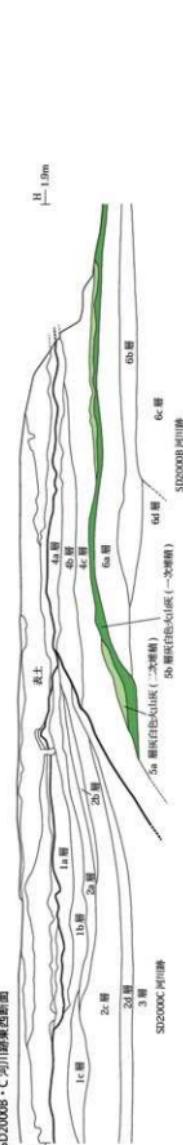


第74圖 南2道路跡以南分割圖（2）

① 西 0 道路路基、路面東西斷面



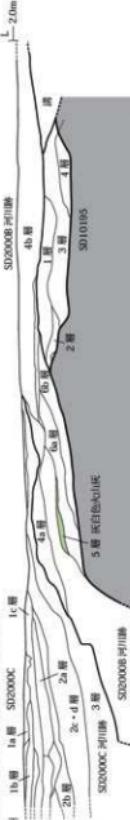
④ SD2000B + C 河川堵東西斷面



⑤ SK10194 土壠



⑥ SD2000B + C 引渠、SD10195 + 10196 清東西斷面



⑦ SD2000B + C 河川堵、SD10195 + 10196 清東西斷面



⑧ SD2000C 河川堵、東 0 道路妨東西斷面



第 75 図 SD2000 河川堵、西 0 道路跡、東 0 道路跡、SK10194 土壠斷面図

通称・類位	土 色	土 性	その他の特徴
西 〇道路B西側溝 〇道路C西側溝	黒褐色 (2.5Y 3/1)	粘土質シルト	灰白色火山灰・炭化物(ø 0.5~1 cm)を少量含む。
	黒褐色 (2.5Y 3/2)	シルト	灰白色火山灰(ø 1~3cm)を含む。
西 〇道路跡D西側溝	1層 黒色 (10YR 4/1)	粘土質シルト	炭化物(ø 0.5~1cm)を含む。
	2層 底黃褐色 (10YR 4/2)	シルト	炭化物(ø 1~2cm)を含む。
	3層 墓灰褐色 (10YR 4/1)	シルト	炭化物(ø 0.5~1cm)を少量含む。
路面2種	底黃褐色 (10YR 4/2)	粘土質シルト	灰白色火山灰ブロック(ø 0.5~3cm)を含む。
路面3種	墓灰褐色 (10YR 4/1)	シルト	灰白色火山灰を多く含む。
西 〇道路跡 SD102001東側溝	1層 底白褐色 (10YR 8/1)	水白山	灰白色火山灰(ø 0.5~1cm)を含む。
	2層 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3)	シルト	上層に灰白色を多少含む。鷹山小トロックを含む。
西 〇道路跡 SD10201東側溝	1層 底白褐色 (10YR 8/1)	水白山	灰白色火山灰(ø 0.5~1cm)を含む。
	2層 墓灰褐色 (10YR 4/1)	砂質シルト	マンガンを多く含む。
4 a 種	暗褐色 (10YR 4/1)	粘土質シルト	シルトと細砂との互層。
4 b 種	暗灰褐色 (2.5Y 4/2)	粘土質シルト	シルトと細砂との互層。
4 c 種	暗灰褐色 (2.5Y 4/1)	粘土質シルト	シルトと細砂との互層。
5 a 種	暗灰褐色 (2.5Y 5/2)	シルト	灰白色火山灰の一次堆積。灰白色火山灰ブロックを多く含む。
5 b 種	底白褐色 (10YR 8/2)	シルト	灰白色火山灰の一次堆積。厚さ5~10cm。
6 a 種	暗灰褐色 (2.5Y 4/2)	シルト	シルトと細砂との互層。遺物を含む。
6 b 種	黑褐色 (10YR 3/2)	粘土質シルト	シルトと細砂との互層。
6 c 種	黑色 (5Y 4/1)	砂	粗粒・遺物を含む。
6 d 種	黑褐色 (2.5Y 3/2)	粘土質シルト	粗粒ブロック(ø 1~3cm)を少量含む。
7 a 種	黑褐色 (10YR 3/1)	シルト	灰白色火山灰・炭化物(ø 1~2cm)を少量含む。
7 b 種	黑褐色 (2.5Y 3/1)	粘土質シルト	炭化物(ø 1~3cm)を含む。
SD2000B河川跡	1層 黑褐色 (10YR 3/2)	砂質シルト	シルトと細砂との互層。
	1層 にごり 黑褐色 (10YR 5/3)	砂質シルト	粗粒と細砂の互層。
SD2000C河川跡	2 a 種 黑褐色 (2.5Y 3/2)	シルト質砂	スケモと細砂の互層。
	2 b 種 黑褐色 (10YR 3/2)	砂質シルト	スケモと細砂の互層。
2 c 種 岩オリーブ褐色 (2.5Y 3/3)	砂質シルト	スケモと細砂の互層。	
	2 d 種 黑褐色 (2.5Y 3/1)	砂質シルト	スケモと細砂の互層。
3 種	暗灰褐色 (2.5Y 4/2)	粘土質シルト	粗粒ブロック(ø 1~3cm)を少數含む。スケモヒシルトの互層。
1 種	暗灰褐色 (10YR 4/1)	粘土質シルト	炭化物(ø 0.5~1cm)を少數含む。
2 種	暗灰褐色 (2.5Y 4/1)	粘土質シルト	灰白色火山灰ブロック(ø 1~4cm)を含む。
1 種	暗褐色 (7.5Y 4/1)	粘土	
2 種	暗灰褐色 (10YR 4/1)	粘土	灰白色 (10YR 8/2)→中砂ブロックを含む。
3 種	暗褐色 (N8/0)	シルト	灰斑层。木質遺物を含む。
1 種	青灰色 (10BG 5/1)	砂質シルト	
2 種	灰色 (7.5Y 4/1)	砂質シルト	
3 種	青灰色 (10BG 6/1)	シルト	
4 種	暗青灰色 (10BG 4/1)	シルト→砂質	
1 種	暗褐色 (10YR 3/3)	シルト	白色粒子・マンガン粒子を含む。
2 種	黑褐色 (10YR 2/2)	粘土	マンガン粒子を含む。

表12 第75図掲載西0道路跡、SD2000B・C河川跡等断面図土層観察表

製塙土器などの破片が出土した。

このうち、ロクロ土師器内黒坏ではB・C・D西側溝、路面3層（路面II・III間）、路面2層（路面III・IV間）とも回転系切り無調整で内面底部放射状ミガキのものが主体を占めるが、C西側溝には体下部～底部手持ちヘラケグリで内面底部平行ミガキのもの、路面2層（路面III・IV間）には体下部～底部手持ちヘラケグリで内面放射状ミガキのものも少数含まれる。

須恵器環ではC西側溝、路面3層（路面II・III間）、路面2層（路面III・IV間）とも回転糸切り無調整のものが主体を占めるが、路面3層（路面II・III間）には底部手持ちヘラケズリのものも含まれる。

このように、西O道路関連遺構・層から出土した土師器・須恵器は、いずれも底部回転系切り無調整のものが主体を占めている。

(2) SX10240 東〇道路跡(平面図: 第74・76・77図、断面図: 第75図、写真図版: 図版14)

東0道路跡は、山王遺跡多賀前地区旧調査で南北方向に流れ、直線的に河川改修された古代の砂押川左岸に沿って平行する直線的な南北溝を数条検出していたが、道路跡とは認識していなかった南北方向の道路跡である。その後、北に位置する東西大路東道路に接続する箇所で、多賀城市教育委員会が調査してこの東0道路跡を検出したことから、この東0道路に接続する道路跡として市川橋遺跡八幡地区の調査で位置付けていたものである（宮城県教育委員会 2009）。

旧調査の仙塩道路本線部分の調査及び今回の調査で、併せて長さ 53 m 分検出したことになる。

SD2000B 河川跡を挟んで西側の対称の位置にある SX1950 西〇道路跡は西側溝のみ備えた南北道路跡であるが、この SX10240 東〇道路跡は東西両側溝を備えている。旧調査の仙塩道路本線部分で検出した SD10240 溝、橋脚 P 59 から橋脚 P 58 と橋脚 P 59 の間までの今回の調査で検出した SD10200 溝、及び旧調査の側道部分で検出した未登録の南北溝が西側溝、旧調査の仙塩道路本線部分で検出した SD1826・1827・1828 溝、今回検出した SD10201 溝が東側溝にあたる可能性がある。これらが道路側溝であるならば、東側溝の SD1826・1827・1828 溝、西側溝の SD10200・10201 溝が東西に位置を少し変えて平行していることから、3 時期の変遷があったことになる。

今回検出した SD10200・10201 溝は幅 55cm、深さ 10 ~ 20cm、断面浅い皿状の溝で、心々で 1.5 m 離れて平行し、いずれも堆積土は 2 層で上部に灰白色火山灰を多く含む自然堆積土である。両者は同時に存在する平行した溝で、路面としては狭いものの最も新しい段階の道路跡である可能性がある。北側の仙塩道路本線部分の旧調査で検出した溝はいずれも浅く、灰白色火山灰は含まれていない。

これらは SF3700B 水田跡と重複し、これよりも古く、SF3700B 水田跡は 9 世紀前半頃に位置付けられていることから、道路跡ならば道路による方格地割の成立する 9 世紀初頭から 9 世紀前半頃にかけての時期に位置付けられ、今回検出した SD10200・10201 溝よりも古い時期のものとなる。

東〇道路跡の可能性のあるこれらの溝は、9 世紀後葉頃に造営された西〇道路跡との関係を含め、帰属時期、SF3700B 水田跡との新旧関係、溝相互の接続関係など、不明確な点が多い。

これらの溝については、SD2000 河川跡との位置関係、及び東西に一定の間隔を置いて平行する溝であることから、東〇道路跡の可能性がある遺構として扱うことにしてよい。

また、今回検出した SD10200・10201 溝の南延長にあたる旧調査側道部の調査でも、灰白色火山灰の一次堆積層の入る平行する SD3617 溝を検出している。

この溝について、旧調査報告書は本文では重複して新しい溝を SD3627、第 216 図で SD3617 と記載し、矛盾している（宮城県教育委員会 1995、第 216 図、pp.267・267）。SD3627 は南 2 道路跡以南、SD2000 河川跡右岸にある新旧 2 時期の小溝状遺構群で、第 216 図に示された SD3617 溝とは形態、規模が大きく異なる。本文事実記載が間違っており、SD3617 溝とするのが正しい。しかし、この SD3617 溝については本文事実記載がまったくなく、平面図での位置も提示されていない。SD3625 河川跡の事実記載で後述するように、この第 216 図は北北東に傾いた断ち割り断面であることや、およその位置も判明した。

第 216 図の左側（西側）の SD3617 溝は幅 1.7 m、深さ 30cm、右側（東側）の SD3617 は幅約 0.8 m、深さ 40cm である。それぞれ 2 層に分層され、下層が 10 世紀前葉に降灰した灰白色火山灰の一次堆積層、上層がその再堆積層と共に通する。底面レベル、上面レベルもほぼ同じで、両溝の間は平坦で心々で約 3.0 m 離れている。

東〇道路跡については、旧調査の調査時点及び報告書刊行時点には、認識してこなかった道路跡である。2 つの SD3617 溝は、SD3625 河川跡の埋没した上面で、東・西平行する状態で検出されたようである。これらも SD10200・10201 溝と同時期で、東〇道路跡の南延長にあたる可能性が高い。

また、旧調査で 8 世紀後半頃の SF3700A 水田跡の時期の南北溝としているのが SD3703A・B 溝で、

西に平行する SD10241 溝も同時期の南北溝としている（第 234・235 図）。両者はほぼ等間隔で平行しており、北に位置する仙塩道路本線部分で検出した SD1826・1827・1828 溝の南延長上に SD3703 溝が位置していると指摘されている。SD3703B 溝からは回転糸切り無調整の土師器环が出土していると記されていることから、これらは灰白色火山灰降灰以前の東 0 道路跡となる可能性が考えられ、東 0 道路跡が 3～4 時期にわたって変遷していたことを示唆している。

（3）掘立柱建物跡

南 2 道路跡以南では、以下の掘立柱建物跡 3 棟を検出した。

【SB3685 建物跡】（平面図：第 44・47 図、断面図：第 48 図）

側道部の旧調査で一部検出し、橋脚 P 61 の本発掘調査区で東妻柱穴 3 箇所を検出した桁行 3 間、梁行 2 間の東西棟である。未調査の隙間箇所に位置する北側柱列の西より 2 間目柱穴以外の柱穴を検出し、規模が確定した。南 2 西 0 道路交差点の南西すぐ際、SX1900 南 2 道路跡南側溝から 2.5 m 南に離れた至近距離の位置にある。方格地割の区画では、南 3 西 1 区の北東部にあたる。

SF3627A・B 小溝状遺構群（畑跡）、SF3700B 水田跡と重複し、いずれよりも新しい^{註6}。この箇所での遺構の重複状況から、SF3627A 小溝状遺構群（南北方向の畑跡）→SF3627B 小溝状遺構群（東西方向の畑跡）→SF3700B 水田跡→SX1900 南 2 道路、SX1950 西 0 道路の造営、南 3 西 1 区北東部における SB3685 建物跡の建設へと、土地利用のあり方が大きく変化したこと（生産域→居住域）がうかがえる。

平面規模は、桁行が北側柱列で総長 6.8 m、柱間寸法が西より 2.4 m、4.4 m（2 間分）、梁行が東妻で 3.3 m である。方向は東妻でみると北で東に約 4° 傾する。柱穴は一辺 40cm 程の隅丸方形を基調とし、深さは 10～25cm で、掘方埋土は地山ブロック、炭粒を含む褐灰色・黒褐色粘質シルト土の互層である。柱痕跡は径 15cm の円形で、堆積土は灰黄褐色粘質シルト土である。遺物は出土していない。

【SB10242 建物跡】（平面図：第 80 図、断面図：第 85 図）

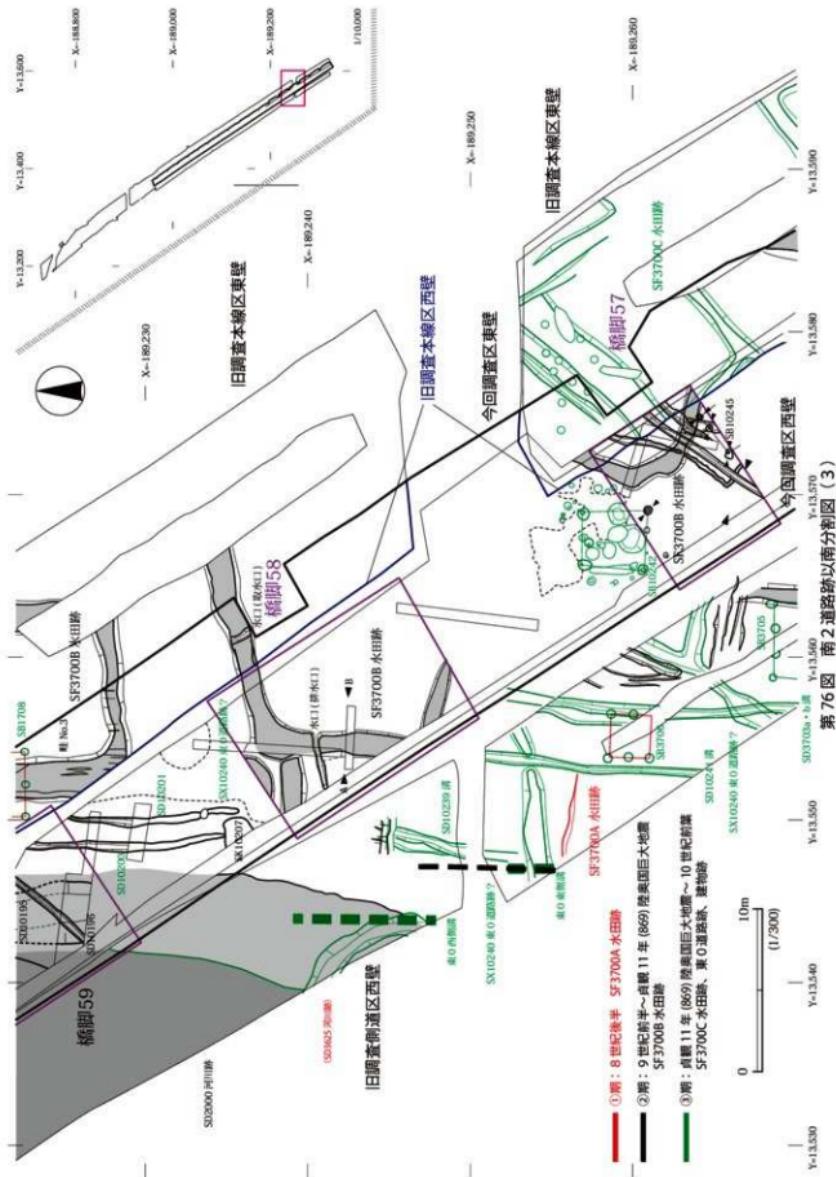
橋脚 P 57 北側の確認調査区から橋脚 P 57 の本発掘調査区において検出した。SF3700B 水田跡と重複してこれよりも新しい。桁行 2 間、梁行 1 間の東西棟で、平面規模は桁行が北側柱列で総長 6.8 m、柱間寸法が西より 2.4 m、4.4 m（2 間分）、梁行が東妻で 3.3 m である。方向は東妻でみると北で東に約 4° 傾する。柱穴は長径 30～60cm、短径 30～50cm の楕円形を基調とし、本発掘調査した南東隅柱穴での深さは 40cm である。埋土は地山ブロックを含む黒色土で、柱は抜き取られていた。南東隅柱穴には礎板が敷かれていた。遺物は出土していない。

【SB10245 建物跡】（平面図：第 80 図、断面図：第 80 図）

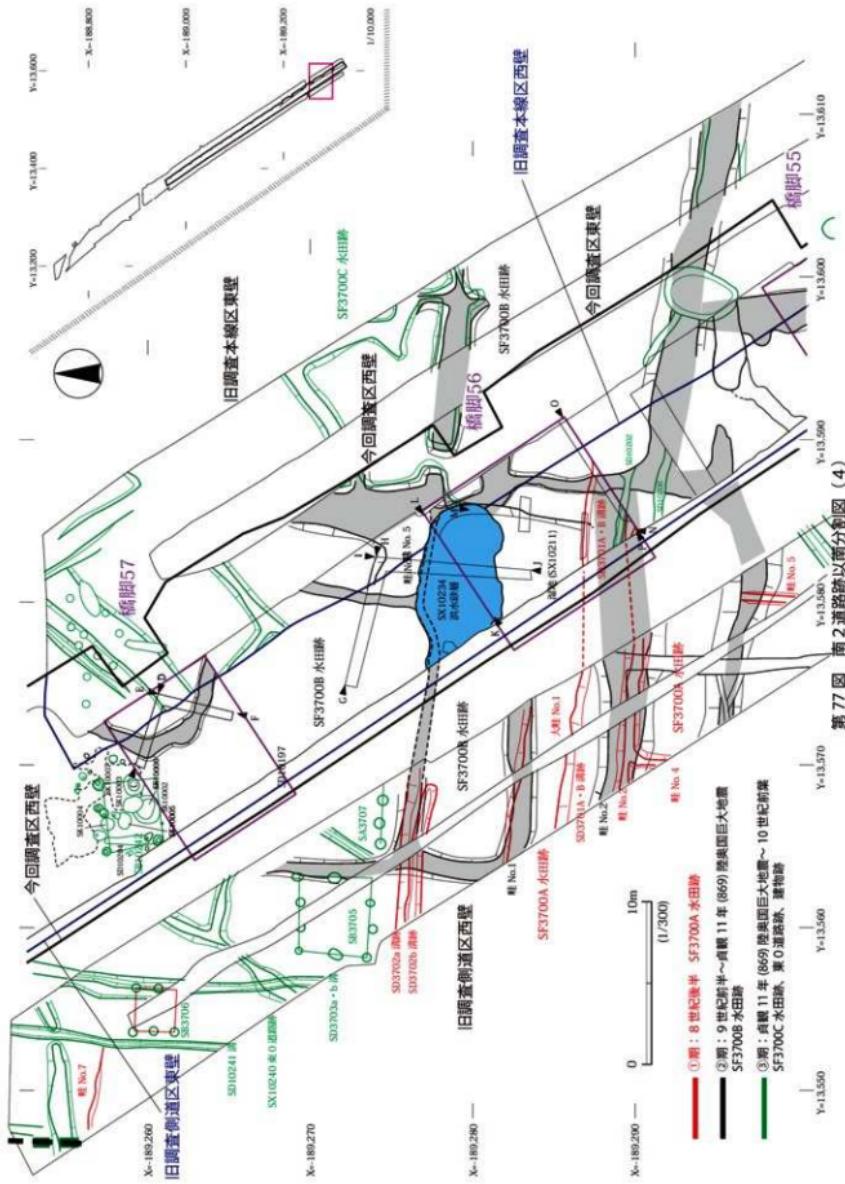
橋脚 P 57 の本発掘調査区において、SF3700B 水田跡を掘り下げた第 V 層上面で検出したが、本来的には SF3700B 水田跡よりも新しいものと考えられる。柱穴 3 箇所を検出し、北側柱列になるものと考えられるが詳細は不明である。SD10198 溝と重複し、これよりも新しい。一辺 30～50cm の隅丸長方形、方形で、方向は北で東に約 50° 傾る。遺物は出土していない。

（4）井戸跡

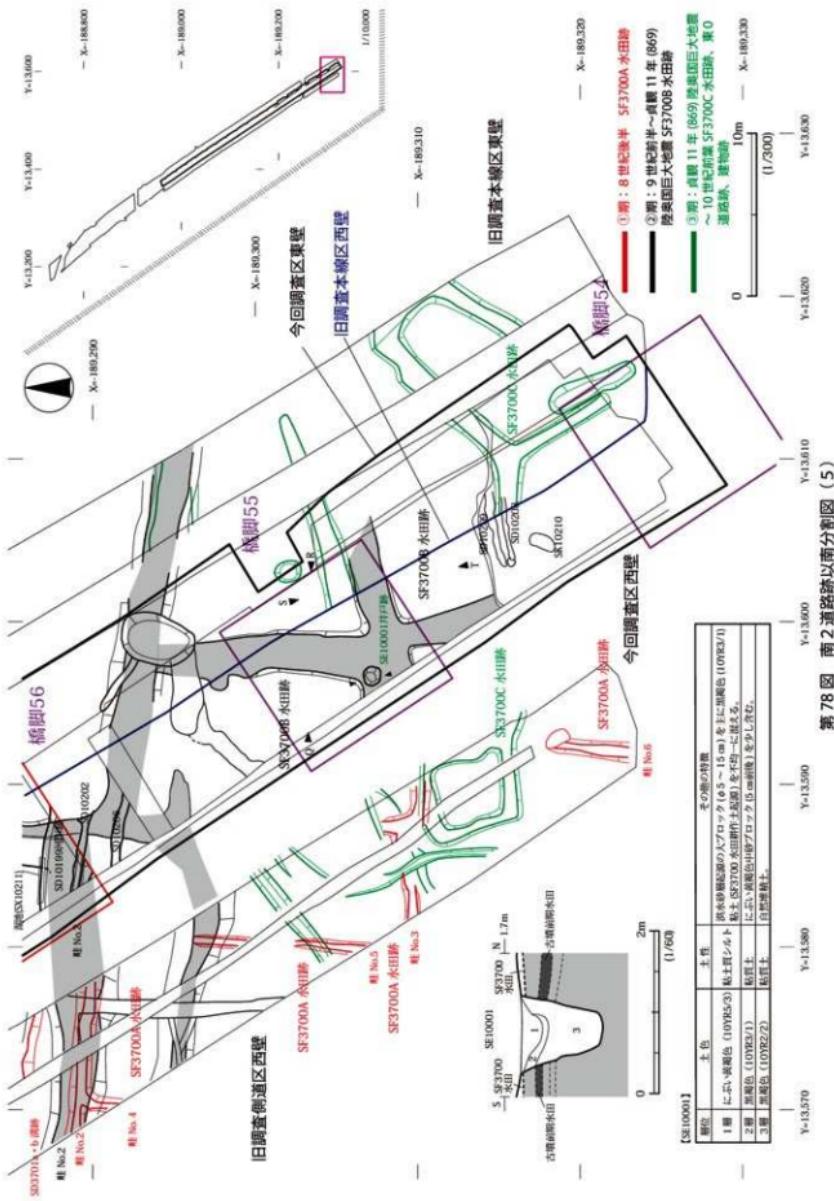
南 2 道路跡以南からは、井戸跡 1 基（SE10001）を検出した。



第76図 南2道路跡以南分割図 (3)



第77図 南2道路跡以南分割図



第78図 南2道路跡以前分割図（5）

- ① 橋脚 58 本調査区 SF3700 東西断面 (平面図: 第 76 図)

② 橋脚 57 本調査区東西断面 (平面図: 第 77 図)

③ 橋脚 57 本調査区南北断面 (平面図: 第 77 図)

④ 橋脚 57-56 間確認調査区東西断面 (平面図: 第 77 図)

⑤ 橋脚 57-56 確認調査区間南北断面 (平面図: 第 77 図)

⑥ 橋脚 56 本調査区北壁断面 (平面図: 第 77 図)

⑦ 橋脚 56 本調査区 SF3700 水田南北断面 (平面図: 第 77 図)

⑧ 橋脚 56 事前調査区南壁断面 (平面図: 第 77 図)

⑨ 橋脚 55 本調査区東西断面 (平面図: 第 78 図)

⑩ 橋脚 55 本調査区南北断面 (平面図: 第 78 図)

第79図 SF3700B水田跡周辺断面図

遺構・部位	土色	土性	その他の特徴
SF3700B水田耕作土上層	黒褐色(10YR3/2)	粘質シルト	スクモ輯。
	にぶ・黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	
	黒褐色(10YR3/2)	粘質シルト	スクモ輯。
	にぶ・黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	
SF3700B水田跡	灰褐色(10YR4/2)	シルト	細化鉄観色を多く含む。灰白色の小石ブロックを含む。しまりあり。
	明褐色(10YR3/3)	シルト	灰白色の小石入りブロック厚さ2cm、幅10~20cmを散在。しまりあり。
	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	黄褐色(2.5Y5/3)粘土ブロックを含む。底面に内凹がある。しまりあり。
	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	黒色(10YR1/7)の土小石(?)を1cm位まばらに含む。しまりあり。
洪沢砂層上位層	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	灰白色の小石ブロックがまばらに散じる。
	灰黃褐色(10YR4/2)	粗砂と細砂の互層	上部より下部黄褐色(10YR4/2)粗砂層、厚さが1~2mm。下部はφ1mm以下。下面に赤褐色の軟泥(沈泥)。①にぶ・黄褐色(10YR4/3)細砂(シルト)が少ない細砂・微砂、②崩潤、③細化鉄観色(5Y4/2)細砂(上部はφ1mm以下)、④オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗砂(上部はφ1mm以下)や細砂、⑤下部がφ3~4mmと粗い。⑥オリーブ褐色(2.5Y4/3)細砂(微砂質)均一。一部は下層のSX10211地盤黒褐色粘土層中に多くこむ。大きくまとまる細砂・粗砂と細化鉄観色をなす2つのユニットからなる。
SX10234洪沢砂層	灰黃褐色(10YR4/2)	粗砂と細砂の互層	上部より下部黄褐色(10YR4/2)粗砂層、厚さが1~2mm。下部はφ1mm以下。下面に赤褐色の軟泥(沈泥)。①にぶ・黄褐色(10YR4/3)細砂(シルト)が少ない細砂・微砂、②崩潤、③細化鉄観色(5Y4/2)細砂(上部はφ1mm以下)、④オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗砂(上部はφ1mm以下)や細砂、⑤下部がφ3~4mmと粗い。⑥オリーブ褐色(2.5Y4/3)細砂(微砂質)均一。一部は下層のSX10211地盤黒褐色粘土層中に多くこむ。大きくまとまる細砂・粗砂と細化鉄観色をなす2つのユニットからなる。
	黒褐色(10YR3/1)	粘質土	均質な粘質土。自然堆積土。
	黒褐色(10YR3/2)	粘質土	均質な粘質土ブロック(φ2~4cm)を少量含む。自然堆積土。
	黒褐色(10YR3/2)	粘質土	粗砂ブロック(φ2~4cm)をや多く含む。自然堆積土。
SD10197	黒褐色(10YR2/1)	粘質土	均質な粘質土ブロック(φ2~4cm)を少量含む。自然堆積土。
	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質シルト	炭化物(φ1~2cm)・地山(?)を含む。
	黒褐色(10YR3/2)	粘質シルト	灰黃褐色(10YR4/2)粘土質シルトが少くない複数に現れる。自然堆積土。
	黒褐色(10YR2/1)	粘質土	草木茎・風化した貝殻・無機骨片を少し含む。
SD3701 A	黒色(10YR2/1)	粘質土	褐灰色(10YR5/1)粘泥土地(?)ブロック(φ5cm前後)を多く含む。
	黒色(10YR2/1)	粘質土	
SD3701 B	褐灰色(10YR4/1)	粘質シルト	にぶ・黄褐色(10YR5/3)中砂ブロックを多く含む。
	黒褐色(10YR2/2)	シルト	にぶ・黄褐色(10YR5/3)中砂ブロックを多く含む。
	にぶ・黄褐色(10YR5/3)	中砂	
	黒褐色(10YR5/1)	粘質シルト	薄解。
	にぶ・黄褐色(10YR5/3)	中砂	

表13 第79号掲載SF3700B水田跡周辺断面図土層観察表

【SE10001 井戸跡】(平面図: 第78図、断面図: 第78図)

橋脚P 55の本発掘調査区に位置し、SF3700B 水田跡の畦畔上で検出した井戸跡で、SF3700B 水田跡よりも新しい。平面形は直径 0.9 m のほぼ円形、深さ 1.0 m の素掘りの井戸跡で、自然堆積土である。遺物は出土していない。

(5) 土壌

南2道路跡以南からは、今回の調査で土壌 6 基 (SK10002・10004・10005・10006・10194・10210) を検出した。検出位置、調査の区分別 (本発掘調査・確認調査)、平面図、断面図、新旧関係、規模 (長径・短径・深さ)、形状、堆積土の区分 (人為・自然)、出土遺物、年代を記した一覧表を表14 に示し、事実記載に換える。

登録土壌名稱	検出位置	調査	平面図	断面図	新旧関係 (旧→新)	長径	短径	深さ	形状	堆積土	出土遺物	年代
SK10002土壌	確認	第76回			SK10002土壌→SK10006土壌→SK10033土壌	1.8m	1.8m		楕円形	自然		
	確認	第76回										
SK10003土壌	確認	第76回			SK10002土壌→SK10006土壌→SK10003土壌	1.3m	0.9m		不整楕円形	自然		
	確認	第76回										
SK10004土壌	確認	第76回				0.8m	0.8m		円形	自然		
	確認	第76回										
SK10005土壌	確認	第76回				1.0m	0.8m		楕円形	自然		
	確認	第76回										
SK10006土壌	確認	第76回			SK10002土壌→SK10006土壌→SK10003土壌	1.3m	0.9m		楕円形	自然		
	確認	第76回										
SK10194土壌	本調査	第75回	第75回	第75回	SD20000川田跡→SK10194土壌	1.0m	0.9m以上	35cm	不整楕円形	自然		10世紀後半以降
	確認	第78回				1.7m	0.8m		不整楕円形	自然		
SK10210土壌	確認	第78回										

表14 南2道路跡以南検出の土壌一覧

(6) 溝跡

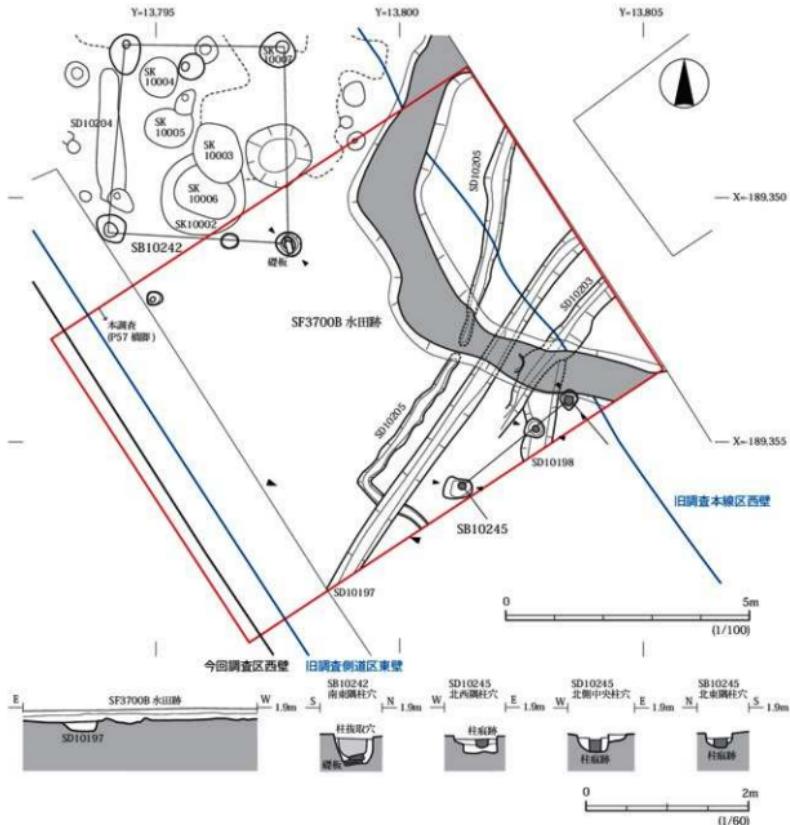
橋脚P 57の本発掘調査区において、SF3700B 水田跡の下層で、溝跡 4 条を検出した (平面図・断面図: 第80図)。

【SD10198溝】

上幅 60cm、深さ 10cm、断面 U 字状で、北で東に約 8° 傾の溝で、長さ 2.2 m 検出した。SF3700B

【SD10197 溝】

上幅 50cm、深さ 12cm、断面 U 字状の直線的な溝で、長さ 8.9 m 検出した。方向は北で東に約 33° 傾む。SF3700B 水田跡、SD10205 溝と重複し、SD10205 溝よりも新しく、SF3700B 水田跡よりも古い。非クロコロ土師器内黒坏・甕、ロクロ土師器内黒坏、ヘラ切り無調整の須恵器坏・甕の破片が少数出土した。水田営農前の 9 世紀前半頃の溝と考えられる。



造構・部位	土色	土性	その他の特徴
SF3700B 水田跡	粘土質色 (10YR3/3)	粘土質シルト	灰白色火山灰ブロックを少量含む。
	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	地山ブロック ($\phi 2 \sim 4$ cm) を含む。
SD10197	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土質シルト	炭化物 ($\phi 1 \sim 2$ cm) × 灰白色を含む。
柱抜跡	褐褐色 (10YR4/1)	粘土質シルト	炭化物を少量化。地山ブロック ($\phi 1 \sim 3$ cm) を含む。
抜取穴	オグレーブ色 (5YV1/1)	粘土質シルト	地山ブロック ($\phi 1 \sim 3$ cm) を含む。
柱方埋土	黄褐色 (2.5Y4/1) ~ 黑褐色 (2.5Y3/1)	粘土質シルト	地山ブロック ($\phi 1 \sim 4$ cm) を含む。

第 80 図 横脚 P57 本調査区の SF3700B 水田跡下層調査—古代の建物跡と溝

水田跡、SB10245 建物跡、SD10198 溝と重複し、いずれよりも古い。遺物は出土していない。

【SD10203 溝】

上幅 50 ~ 60cm、深さ 10cm、断面逆台形状で、北で東に約 38° 偏る溝である。SF3700B 水田跡、SD10198 溝と重複し、SD10198 溝よりも新しく、SF3700B 水田跡よりも古い。遺物は出土していない。

【SD10205 溝】

上幅 40 ~ 60cm、深さ 10cm、断面 U 字状の溝で、北東から南西に向けて延び、南西部でほぼ直角に曲がる。SF3700B 水田跡、SD10197 溝と重複し、いずれよりも古い。遺物は出土していない。

(7) 水田跡

山王遺跡多賀前地区の旧調査で検出された古代の水田跡は 3 面あり、以下のように位置付けられている（宮城県教育委員会 1995・1996b）。

① SF3700A 水田跡 8 世紀後半頃。基本層Ⅲ e 層で検出。SD2000 河川跡左岸（以東）のほぼ全域に分布（宮城県教育委員会 1995、234 図）。SD2000 河川跡右岸（以西）には SF3627A・B 小溝状遺構群（烟跡）が分布し（同 238 図）、SD2000 河川跡を挟んで左岸（東側）が水田域、右岸（西側）が烟域に利用されている。南北方向の畔は北で東に約 5° 偏り、区画の形態は南北約 18 m、東西約 10 m の長方形と推定されている。

大溝南隣の同時期の SD3701 溝からは非ロクロ土師器内黒丸底坏、須恵器坏、水田耕作土から須恵器坏が出土し、図示されている（宮城県教育委員会 1996a、第 113 図）。非ロクロ土師器内黒土師器坏は、口縁部がヨコナデ、体上部以下が手持ちヘラケズリされ、須恵器坏はいずれも底径が大きな平底坏で、ヘラ切り無調整のものと体下部～底部が手持ちヘラケズリされたものがある。これらは 8 世紀後半頃のもので、SF3700A 水田跡の所属時期を示す。

なお、旧調査報告書では基本層Ⅲ f 層上面で検出したとするが、前述の第 3 章「基本層序」で述べたように、これはⅢ e 層の誤植であり、訂正する。

② SF3700B 水田跡 9 世紀前半頃。基本層Ⅲ e 層上面で検出。直線的な南北方向の古代の SD2000 砂押川の右岸（西側）と左岸（東側）に分布する。約 110 m 離れて平行する東西方向の大畦畔が検出されたことなどから、条里制を反映して水田が營まれた可能性が指摘されている（宮城県教育委員会 1995・1996b）。

SD2000 河川跡右岸では、東西方向の SD1602 河川跡（後に施工される南 1—2 間道路跡）以南に SF3700B 水田跡が分布するが、これと後に施工される SX1900 南 2 道路跡との間では遺存状態が悪く、部分的に検出されたにすぎない〔宮城県教育委員会 1995、224 図（図中に「SF3700C」と記されているが「SF3700B」の誤植）〕。

SX1900 南 2 道路跡以南での残りは比較的よい（同書、第 239 図）。この SX1900 南 2 道路跡は、SF3700B 水田跡の東西方向の大畦畔と重複し、この上に造営されている〔同書、第 41 図、p.55（重複関係記載の「SF3700C」は「SF3700B」の誤植）；宮城県教育委員会 1996b、p.102・108〕。そして SX1900 南 2 道路跡以南、SD2000 河川跡右岸の区域では、この SF3700B 水田跡の下位で SF3627A・B 小溝状遺構群を検出している。

したがって、このSD2000 河川跡右岸区域では、8世紀代：SF3627A・B 小溝状遺構群（畑跡）→9世紀前半：SF3700B 水田跡→9世紀後半：SX1900 南2道路跡の造営とこの道路跡以北の方格地割の成立（宅地の拡大）。と大きく土地利用が変化したことがうかがえる。

また、SD2000 河川跡左岸では、SX1900 南2道路跡の東延長以北は調査範囲外で不明だが、少なくとも SX1900 南2道路跡以南のほぼ全域に分布することが明らかとなっている（宮城県教育委員会 1995、236図）。また、左岸の旧調査では、この SF3700B 水田跡が基本層III d層（水成堆積した砂層）に覆われ、その上位には基本層III c層（10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰）があると記載されている（宮城県教育委員会 1995、p.17・290）。この基本層III d層は、今回調査した SX10234 イベント堆積物に相当するようだが、分布範囲が明示されず、詳細は不明確である。

③ SF3700C 水田跡 9世紀後半～10世紀前半頃。SD2000 河川跡左岸（以東）の橋脚57付近以南に分布（宮城県教育委員会 1995、237図）。旧調査では「耕作土は SF3700B 水田跡の耕作土をすき込み、搅拌をあまり受けない灰白色火山灰塊を含んだ暗灰黄色のグライ化した砂質シルトである」、「畔跡の残りが比較的良好のは南3東1区の南半で、この部分の畔の規模は上幅が50cm前後であるが、方向は一様でなく、区画の形態も不整形である」と記載されている（宮城県教育委員会 1995、p.294）。

今回、SD2000 河川跡左岸、橋脚P 58以南で検出した水田跡は、最下層の SF3700A 水田跡と中位の SF3700B 水田跡の2面で、最上位の SF3700C 水田跡は残りが悪いため検出できなかった。

以下、今回の調査で検出した最下層の SF3700A 水田跡と中位の SF3700B 水田跡について記す。

【SF3700A 水田跡】（平面図：第77図、断面図：第79図、出土遺物：第83図179・180）

橋脚P 56の本発掘調査区で、当該期の SD3701A・B 溝跡の東延長部分（SD10199溝）を SF3700B 水田跡の下層で検出した。SD3701A溝は上幅約3.2m、下幅約2.2m、深さ約45cm、断面逆台形状の東西方向の溝で、これを改修した SD3701B溝は上幅約2.0m、下幅約1.2m、深さ約20cm、断面逆台形状の東西方向の溝である。この溝は、幅約2.8mの大畦畔No.1のすぐ南に位置してこれと平行する。大畦畔No.1は新しいSF3700B水田跡に壊され、今回の調査では検出されなかった。

SD3701A溝からは、非クロコ土師器両黒塊、須恵器环（第82図179・180）・甕などの破片が出土した。このうち179・180の須恵器环は底径が8～9cmと大きく、179は体下部～底部が回転ヘラケズリ、180がヘラ切り無調整で、8世紀後半頃のものである。

【SF3700B 水田跡】（平面図：第74・76～78図、断面図：第79図、出土遺物：第83図172・173・175～180、写真図版：23・24）

橋脚P 54～橋脚P 58の間の本発掘調査区とその間の確認調査箇所において、SF3700B 水田跡を検出した。SF3700A 水田跡、SD3601A・B 溝、SX10231 砂層と重複し、SF3700A 水田跡、SD3601A・B 溝より新しく、SX10231 砂層よりも古い。

橋脚58の本発掘調査区で検出した SF3700B 水田跡は、屈曲部の畦畔が約1.0mと幅広くなるものの、南北方向の畦畔が幅約60cm前後、東西方向の畦畔が幅約50cm前後となっていて、東西12m以上、南北約12mの方形の区画をなしている。東西・南北方向の畦畔には、それぞれ幅15cm前後、深さ15cm前後の小規模な溝がある。この水田跡の西側に SD2000B 河川跡が位置し、北から南に向けてご

く緩やかに傾斜する旧地形であることから、両者は水口で、旧調査で検出した東西方向の畦畔上の小溝が取水口、今回検出した南北方向の畦畔上の小溝が排水口と考えられる。

この橋脚 P 58 よりも北側の仙塩道路本線部分の旧調査では、比較的整った長方形区画となる当該期の水田跡を検出している（第 74 図）。

これに対し、橋脚 P 57 ～橋脚 P 54 の北側で検出した SF3700B 水田跡は、畦畔の遺存状態があまり良くない箇所もあるため不明確な部分もあるが、東西に細長い長方形区画を基調としながらも区画の形状がやや崩れている箇所もあるようである（第 77 図）。これも橋脚 P 56 北側から橋脚 P 56 にかけて、SF3700B 水田域内に小規模な SX10234 湿地が存在することと関連する可能性が考えられる。

SF3700B 水田跡の畦畔からは須恵器坏（172）、耕作土から非ロクロ土師器平底坏、須恵器坏（173・175・176）、製塙土器、検出面から須恵器生焼坏（177）、須恵系土器坏（178）、多賀城跡政府第Ⅱ期の刻印「伊」丸瓦 II B 類などの破片が出土した。検出面出土土器には新しい時期の土器が混ざるもの、畦畔・耕作土出土土器は、ヘラ切り無調整や回転ヘラケズリ、手持ちヘラケズリの須恵器坏など、9 世紀前半頃までのものである。

《SX10211 湿地》（平面図：第 77 図、断面図：第 79 図⑤・⑥、写真図版：図版 24・25）

橋脚 P 56 北側の確認調査区のトレンチ断面から橋脚 P 77 の本発掘調査区にかけて検出した。SF3700A・B 水田域の中にある小規模な湿地跡と考えられる。

規模は南北約 10 m、東西 10 m 以上で、湿地の南際に沿って SF3700A 水田に伴う SD3701A・B 溝がある。上部を SX10231 砂層（イベント堆積物）に覆われる。遺物は出土していない。

《SX10234 砂層（イベント堆積物）》（平面図：第 77 図、断面図：第 79 図⑤・⑥、写真図版：23・24・25）

橋脚 P 56 北側から橋脚 P 57 の本発掘調査区にかけて検出した。厚さ 15 ～ 25cm（平均 20cm）の砂層で、SF3700B 水田跡の東西方向の畦畔から、その南側に位置する SX10211 湿地北半部にかけて、東西約 10.5 m、南北約 5.2 m の長楕円形の範囲に分布する。遺物は出土していない。

前述したように、旧調査で検出した基本層 III d 層（SX3461 南 I ～ 2 間道路跡以南に分布し、S F 3700 B 水田跡を覆う層厚最大 10cm 程のしまりのない水成堆積の砂層）がこれに該当すると考えられる。旧調査報告書ではこれ以外に詳細な記載がなく、全体の分布状況は不明確だが、今回の調査区の西側の側道調査区の広範囲に分布していたものと思われる。

箕浦幸治教授、山田努助教（東北大学大学院理学研究科）と松本秀明教授（東北学院大学教育学部地域構想学科）にご指導いただき、SX10234 砂層を断ち割った南北トレンチ断面 I ～ J（第 77 図、第 79 図⑤）と橋脚 P 56 本調査区北壁断面（第 77 図、第 79 図⑥）を詳細に観察した。

その結果、下底が火炎状構造をなし、逆級化構造（下部が極細砂・細砂で、上部が粗砂）の砂層が 3 ユニットをなして水成堆積し、偽礫も含まれていることが判明した。南北トレンチ断面 I ～ J をみると、この 3 つの逆級化構造ユニットは、全体として南側が少し早く水成堆積し、その後に北側に水成堆積していることも知られる。

この SX10234 砂層については、第 7 章で詳細に取り上げた。

(8) 河川跡

【SD2000 河川跡（古代砂押川本流）】（平面図：第 74・76 図、断面図：第 75 図、出土遺物：第 81～83 図、写真図版：図版 26）

SD2000 河川跡は古代の砂押川の本流跡である。東西大路跡と交差した地点以南については、位置関係からみて、直線的に河川改修された運河跡と推定されている（多賀城市教育委員会 2002）。

方向は北で約 3° 東に偏る。新旧 3 時期（SD2000 A 河川跡→SD2000B 河川跡→SD2000C 河川跡）あり、河道が西から東へと移動していることが旧調査で判明している（宮城県教育委員会 1995、第 39～43 図、pp.56～61・265）。現在の砂押川はこの付近では北で西に約 34° 偏る。そして、今回検出した地点の約 90 m 北で、SD2000 河川跡とは約 37° の角度で交差する。検出した地点での旧砂押川 SD2000C 河川跡左岸（上流から下流に向かって左手が「左岸」）は、現在の砂押川から西に約 60 m の位置にある。

したがって、巨視的にみれば、砂押川は古代から現代に至るまでの間に、河道を西から東に向けて大きく移動させ、かつ方向も古代以降は自然の流れにまかせて北西から南東に向けて流れを変えていることになる。

今回、橋脚 P 61 の北隣から橋脚 P 59 の南隣までの間の確認調査区と本発掘調査で SD2000 河川跡を検出し、橋脚 P 59・60 の本発掘調査区で精査した。ただし、本発掘調査区においては、すでに基本設計・実施設計で各橋脚のフーチング・レベル（橋脚設置箇所を全面的に掘削してから、パイルを打ち込むための上面径 1.2 m の円筒形 12 本を掘り込み始める面の高さ）が決められており、開発側と当課との間の協議により、この面以下は調査をしないことになっていた。このレベル（橋脚 P 59 で標高 0.346 m、橋脚 P 60 で標高 0.471 m）以下を調査すると橋脚が建設できなくなるため、これ以下の本発掘調査は行わなかった。そのため、掘削深度はおおむね SD2000B 河川跡 6c 層までで、旧調査で大量の遺物が出土した同河川跡 8～10 層、及び SD2000B 河川跡と重複してその下位にある SD2000A 河川跡の調査は実施できなかった。また、旧調査では最も新しい SD2000C 河川跡から遺物があまりまとまって出土しなかったため、この河川跡はトレンチ調査に留めた。

また、SD2000 河川跡の左岸（橋脚 P 59）と右岸（橋脚 P 60）で、表土からの土層を意図的に残したベルトを幅広く残して調査したところ、SD2000B・C 河川跡の両岸には堤防基礎地業や堤防積土などの痕跡が認められなかった（第 75 図④・⑥）。東西大路以南の SD2000A 河川跡が直線的に河川改修された運河跡ならば、掘削した廃土は両側に盛り上げて堤防状にした可能性が高いと考えられる。今回の調査では堤防の痕跡は認められなかったが、その後削平されて痕跡が残らなかった可能性も考慮すべきかもしれない。

河床レベルが上がって河道心々の位置が東に移動するつれ、左岸は離水し、遺構との新旧関係も複雑となる。SD2000B 河川跡は 7 層段階で、西から東に延びる SX1900 南 2 道路跡と接し、7 層が埋没した後に SX1850・1950 西 0 道路跡が造営され、すぐ東がこの道路路面となる。SD10192・10196 溝、SX10240 東 0 道路跡（SD10200 西側溝、SD10201 東側溝）は SD2000B 河川埋没後の溝・道路跡、SK10194 土壌は SD2000C 河川埋没後の土壤で、これらよりも新しい。SD10195 河川跡は SD2000B

河川以前、SD2000A 河川と同時期の支流とみられる。

旧調査では 3 時期ある河川跡を通して以下のように層名を付けている。以下、これに準じて記載する。

SD2000A 河川跡：5 層に大別。上位より 8・9・10・11・12 層。

SD2000B 河川跡：4 層に大別。上位より 4・5・6・7 層。

SD2000C 河川跡：3 層に大別。上位より 1・2・3 層。

《SD2000B 河川跡》

旧調査の前述の断面図と事実記載によれば、上幅約 25 m、下幅約 18 m、深さ約 1.5 m である。層は大別 4 層（上位より 4・5・6・7 層）に区分されている。5 層が 10 世紀前葉に降灰した灰白色火山灰で、下部の 5 ~ 10cm の厚さの 5b 層が一時堆積した灰白色火山灰（十和田 a 火山灰）、上部の 5 ~ 10cm の厚さの 5a 層が二次堆積した灰白色火山灰である。その上位の 4 層はシルト・細砂または粗砂の互層、下位の 6・7 層がシルト・細砂または粗砂の互層である。

南 2 西 1 道路交差点から南に約 17 m 離れた位置の旧調査断面図（宮城県教育委員会 1995、第 42・43 図）によると、当時の河道の位置は SD2000A 河川跡とほぼ同じだが、河床が 1.5 m 程度となって浅くなり、次第に河道心々の位置は東に移動している。西 0 道路が新たに建設される南 1 道路 B 期（9 世紀後葉頃）には、SD2000B 河川は 7 層まで埋没して右岸が陸化し、河道が心々で東に約 6 m 移動している²⁷。

今回の調査で出土した遺物は下記のとおりで、出土土器の特徴は旧調査とほぼ同様である。

〔7 層〕非クロ土師器甕、ロクロ土師器内黒坏・内黒高台坏・内黒柱状高台坏・両黒塊・内黒鉢・甕・羽釜、須恵器壺、灰釉陶器壺、製塙土器（第 81 図 150・151・153 ~ 160・162・163、第 82 図 164・165・169）、丸瓦 II B 類。

〔6 層〕ロクロ土師器内黒坏・内黒高台坏・両黒塊・小型甕・甕、須恵器坏・高台坏・漆壺・壺・短頸壺・甕、製塙土器（第 83 図 181・182・185 ~ 187・189）。

〔4 層〕ロクロ土師器内黒坏・須恵器甕、製塙土器。

《SD2000C 河川跡》

上幅約 10 m、下幅約 3 m、深さ約 2 m である。層は大別 3 層（上位より 1・2・3 層）に区分されている。1 層がシルト・細砂・粗砂・細砂の互層、2 層がスクモと細砂の互層、3 層がスクモとシルトの互層である。

南 2 西 1 道路交差点から南に約 17 m 離れた位置の旧調査断面図（宮城県教育委員会 1995、第 42 図上、第 43 図）によると、SD2000C 河川は貞觀 11 年（869）陸奥国巨大地震直後の SD2000B 河川跡から心々で約 10 m 東に、その後東に移動した 6 層段階の SD2000B 河川跡段階とは心々で約 4 m 東に移動している。こうした河道の東への移動は、さらに 9 m、21 m 南の今回の調査断面でも再確認できた（第 75 図④・⑥）。

今回の調査では 2 層よりロクロ土師器甕、須恵器甕、須恵系土器坏、1 层よりロクロ土師器内黒坏・甕、須恵器坏・壺・甕、須恵系土器坏、製塙土器、平瓦 II B 類、丸瓦 II B 類などの破片が少数出土した（第 82 図 183・188）。このうちロクロ土師器内黒坏は各層とも回転糸切り無調整で内面底部放射状ミガ

キのものが主体を占め、手持ちヘラケズリのものもやや多く含まれている。須恵器壺も各層とも回転糸切り無調整のものが主体を占めるが、ヘラ切り無調整のものもやや多く含まれている。

SD2000 河川跡各層出土土器については、旧調査の遺物編（宮城県教育委員会 1996a）で図面と事実記載で詳細に報告されている。その年代については、出土量の多い第2・3・4・8・10・11・12層について、旧調査の考察編（宮城県教育委員会 1996b）では、SD2000A 河川跡 12 層出土土器が8世紀中葉～9世紀初頭頃、11層出土土器が8世紀末～9世紀初頭頃、10層出土土器が9世紀前半頃、8層出土土器が9世紀後半頃で、同層堆積時に貞觀 11 年（869）陸奥国大地震が発生したとする。そして、SD2000B 河川跡 4 層出土土器が 10 世紀代、SD2000C 河川跡 3・2 層出土土器が 10 世紀後半を中心とする頃としている。

この年代的位置付けについては、一部修正が必要である。SD2000A 河川跡は、方格地割の形成に伴って、東西大路以南が直線的に河川改修された運河跡と推定されている。また、最下層の 12 層には延暦 15 年（796）初鉄の隆平永宝が共存する。したがって、SD2000A 河川跡の上限年代は、旧調査で位置付けた 8 世紀中葉ではなく、方格地割の形成される 8 世紀末と推定される。そして、この河川跡は 8 世紀末～貞觀 11 年（869）陸奥国大地震までの砂押川本流（運河跡）とみてよい。

旧調査の考察と前述の各層の概観を併せまとめる、SD2000 河川跡の変遷と年代的位置付けについては、以下のように再整理される。

《SD2000A 河川跡》 8世紀末～貞觀 11 年（869）陸奥国大地震までの砂押川本流（運河跡）。

〔12・11層〕 8世紀末～9世紀初頭頃。

〔10・9層〕 9世紀前半～9世紀中葉頃。

〔8層〕 9世紀中葉～貞觀 11 年（869）陸奥国巨大地震。

《SD2000B 河川跡》 貞觀 11 年（869）陸奥国大地震～10世紀前半頃の砂押川本流（運河跡）。

〔7層〕 貞觀 11 年（869）陸奥国大地震以降の 9 世紀後葉頃。

〔6層〕 10世紀初頭頃～灰白色火山灰の降灰期（10世紀前葉頃）。

〔5層〕 灰白色火山灰の降灰期（10世紀前葉頃）。

〔4層〕 10世紀前葉頃～10世紀中葉頃。

《SD2000C 河川跡》 10世紀中葉以降の砂押川本流（運河跡）。

〔3・2層〕 10世紀中葉以降。

【SD10195 河川跡】（平面図：第 74・76 図、断面図：第 75 図、出土遺物：第 83 図 174）

橋脚 P 59 の本発掘調査区で検出した南北方向の小河川跡で、SD2000B 河川跡右岸に近い位置にある。SD2000B 河川跡の下層で長さ約 9 m 分を検出し、南・北側にそれぞれ延びる。新旧 2 時期あり、古い SD10195A 河川跡は、上幅 3.1 m、下幅 2.0 m、深さ 40cm である。4 層に細分され、シルト土・砂層が自然堆積している。新しい SD10195B 河川跡は、河道心々が東側に移動して調査区外に延び、上幅不明である。SD10195B 河川跡より須恵器高台壺（第 83 図 174）・壺・甕などの破片が出土した。この須恵器高台壺は、静止糸切後に底部回転ヘラケズリしてから付高台した高台径のもので、8世紀後半頃のものである。

【SD3625 河川跡】(平面図: 第 76 図)

側道部の旧調査で検出した河川跡で、SD10195 河川跡の南延長の位置にある（宮城県教育委員会 1995、第 42 図下、第 216 図、pp.267 ~ 268）。SD2000C 河川跡、SD3617 溝よりも古く、SD2000 河川跡の東にある支流と位置付けられている。

この旧調査報告書での事実記載には不備があり、この河川跡の位置が明示されていない。この箇所の執筆を担当した佐藤憲幸氏に事実関係を尋ねたところ、①どの部分の断面図かわかりにくい第 42 図下の断面図は側道部分の旧調査区西壁にかかる断面図で、SD2000 河川跡を北西から南東方向に向けて斜めに断ち割った状態の断面図であること、②第 42 図下の左端箇所の断面が一部重複しながら、SD3625 河川跡の断面図である第 216 図の右端に重複して接続すること、③第 216 図は SD3625 河川跡を北西—南東に断ち割った断面図となり、第 42 図下と同様に河川の幅を直接示さないこと、④ SD3625 河川跡の位置関係と第 216 図のセクション・ポイントの位置は平面図には図示されていないこと、をご教示いただいた。

旧調査で検出していった SD3625 河川跡は、SD2000 河川跡左岸に位置し、旧調査側道部に位置する。およその位置は第 76 図に示した。側道部の調査は事前調査だったので、長さ約 13 m 検出してしたことになる。この北延長には、今回の調査で検出した SD10195A・B 河川が位置している。

旧調査報告書の事実記載では、この SD3625 河川跡は 1 時期のように記載されている。しかし、7 層に分層されたこの河川跡の 5 層上面で、ヒト、ウシとみられる足跡を多数検出していることから、5 層段階には離水して陸化し、生活面となっていたことがわかる。したがって、SD3625 河川跡は新旧 2 時期に細分され、以下古い河川跡を SD3625A 河川跡、新しい河川跡を SD3625B 河川跡として簡単にその調査成果をまとめなおす。位置関係と新旧関係からみて、SD10195A 河川跡が SD3625A 河川跡、SD10195B 河川跡が SD3625B 河川跡に対応するとみてよい。

なお、第 216 図での幅は、側道調査区の南西—北西壁が北で西に約 30° 傾いていることから、河川断面の実長は第 216 図の実長の半分となるので、この計算式で換算した数値を用いる。また、認証を防ぐため、層名は旧調査報告書の層名を用いる。

《SD3625A 河川跡》

上幅約 3 m、下幅約 1.6 m、深さ 70cm の河川跡である。古墳時代前期の SF3124 水田跡（第 216 図の基本層 V 層=第 42 図の SF3124）、基本層 IV 層、基本層 III e 層と重複し、いずれよりも新しい。

3 層（旧調査報告書の第 5・6・7 層）に細分される。最下層は SD2000 河川跡以南に分布する基本層 III e 層（黒色粘質シルトのスクモ層）起源の黒色粘土層で、中位の 6 層が細砂、植物遺体を含むシルト、最上層の 5 層が細砂、スクモ薄層が互層となる砂質シルトである。こうした堆積状況は、次第に離水して湿地化し、さらに陸化する過程を示す。最上層の 5 層上面から検出した多数のヒト、ウシとみられる足跡は、このことを裏付けている。

また、SD3625A 河川跡の川底箇所では、基本層 III e 層は渦巻状に攪拌されたような堆積状況が確認されている。旧調査報告書では、「地盤が軟弱な場所では急激な土砂の流入に伴う土圧などによって地層が褶曲することがある」という地理学の松本秀明氏（当時、東北大学理学部助教授）の教示を註で

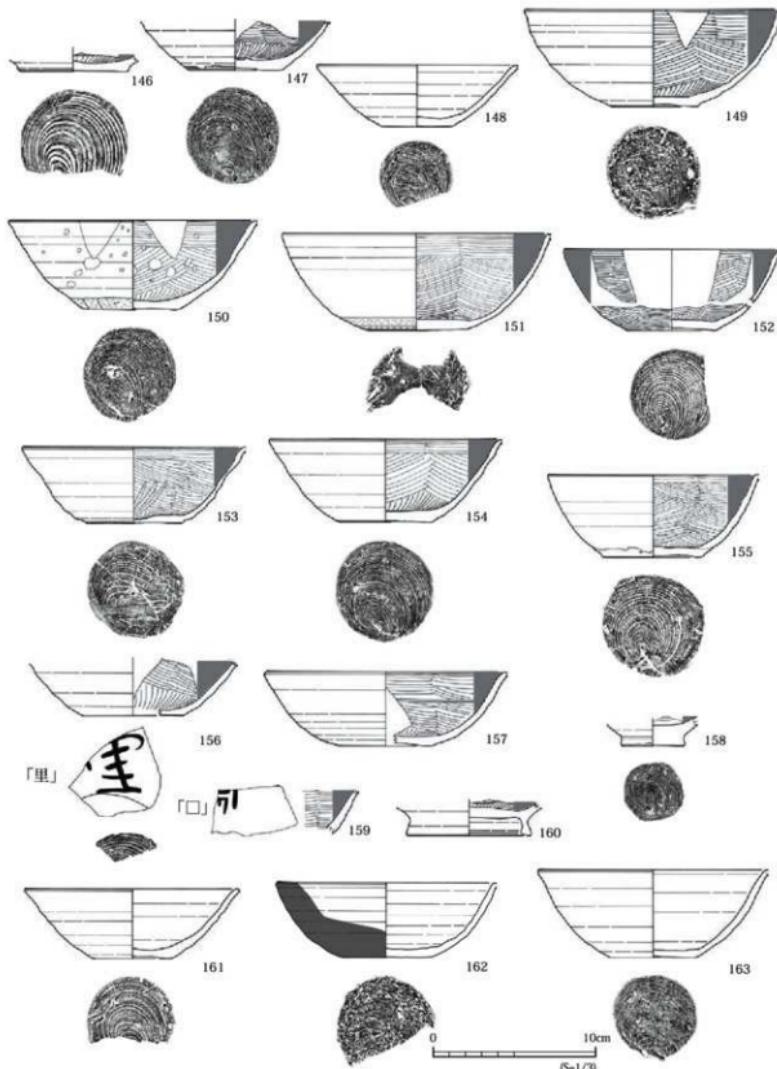
記し、5層堆積時に噴砂が起きたとしている。

《SD3625B 河川跡》

陸化した SD3625A 河川跡が再び河川となったもので、上幅 8 m 以上、下幅約 4 m、深さ 60cm ある。SD3625A 河川跡、SD2000C 河川跡、下部に灰白色火山灰の入る SD3617 溝（東〇道路跡？）と重複し、SD3625A 河川跡よりも新しく、SD2000C 河川跡、SD3617 溝（東〇道路跡？）、灰白色火山灰よりも古い。

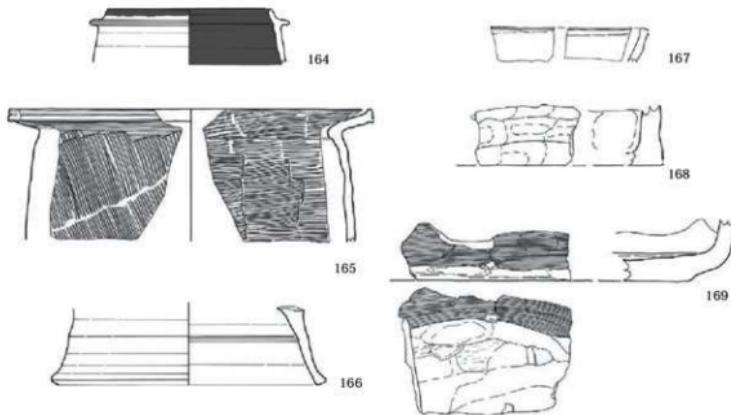
4 層に分層され、最上層の 1 層がシルト土、2・3 層が砂質シルト土、最下層の 4 層が砂層である。

SD2000 河川跡右岸にあたり、SD3625 河川跡が検出された側道部分の旧調査成果を再検討すると、SD2000B 河川跡（砂押川本流）の支流である SD3625 河川が埋没した後で、東〇道路跡の東・西両側溝とみられる平行した溝（SD3617）が作られ、灰白色火山灰降灰期の 10 世紀前葉にこれが廃絶し、さらにその上が SD2000C 河川跡（10 世紀中葉以降の砂押川本流跡）となる、という変遷を知ることができた。そしてこの SD3625 河川跡は、前述の河道が東に大きく移動する前、8 層～7 層段階の SD2000B 河川跡と約 5 m 東に離れて平行する時期の砂押川支流ということになろう。

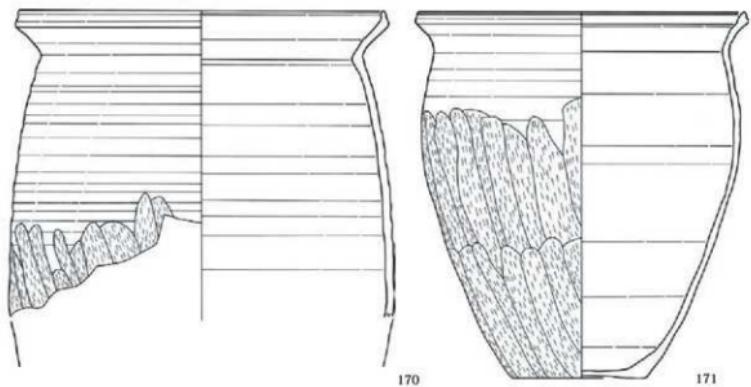


【種類】 146・147・149～151・153～157・159：ロクロ土師器両耳杯 148・161：須恵器系上器環
 152：ロクロ土師器柱状高台杯 160：ロクロ土師器高台杯 162・163：須恵器生焼环
 【出土遺構等】 146：西O道路跡B西側溝 147：西O道路跡C西側溝 148・149：西O道路跡D西側溝
 150・151・153～160・162・163：SD2000B河川跡7層 152・161：西O道路跡路面3層

第81図 南2道路跡以南出土の主な土器（1）



SX1964 織物模



0 10cm
(S=1/3)

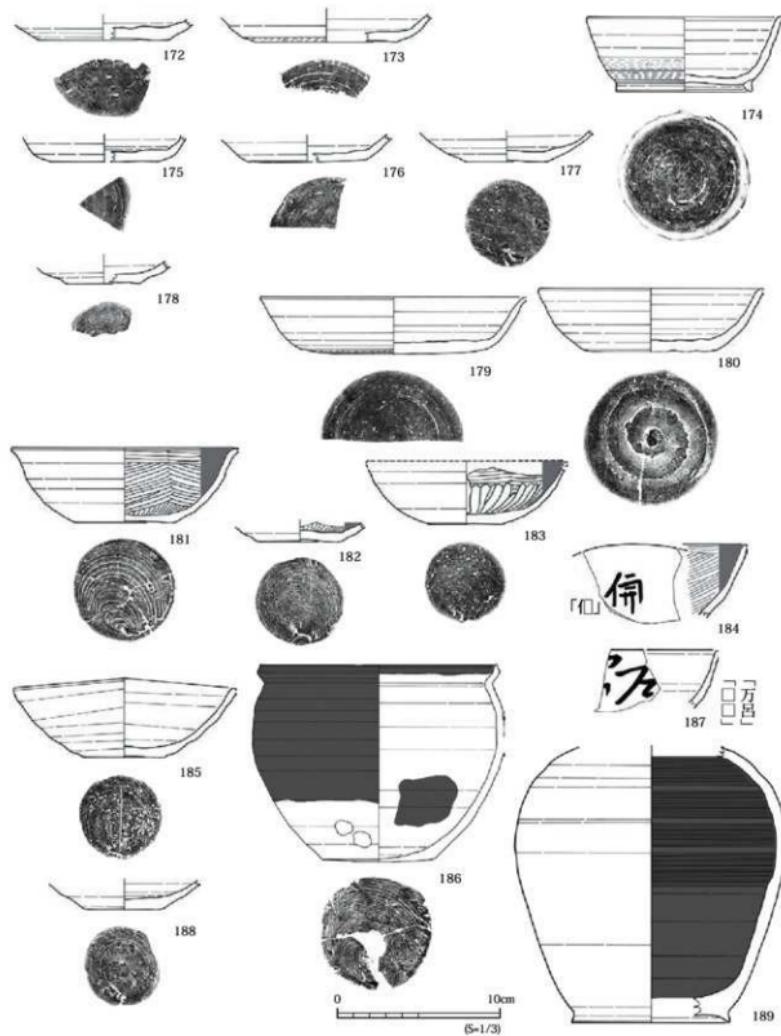
【種類】164：ロクロ土師器羽釜 165：非ロクロ土師器裏 166：須恵系上器大型台付鉢 167～169：製埴土器

170・171：ロクロ土師器長胴甕

【出土遺構等】164・165・169：SD2000B 河川路7層 166・167：西O道路路面3層 168：西O道路跡C西側溝

170・171：SX1964横位合口土師器織物模

第82図 南2道路跡以南出土の主な土器（2）



【種類】172・173・175・176・179・180・185・187：須恵器環 174：須恵器高台环 177：須恵器生环

178・188：須恵系土器环 181～184：ロクロ上師器杯 186：ロクロ上師器小型甕 189：須恵器（漆容器）

【山上遺構等】172：SF3700B水田跡鞋印 173・175・176：SF3700B水田跡耕作土 174：SD10195B河川跡

177・178：SF3700B水田跡模出面 179・180：SD3701A溝 181・185・186・187：SD2000B河川跡 6d層

182・189：SD2000B河川跡 6a層 183・188：SD2000B河川跡 1b層 184：SD2000B河川跡

第83図 南2道路跡以南出土の主な土器（3）

回数	No.	種類	出土遺物等	特 装			口径 cm	底径 cm	器高 cm	残存率		登録	写真回数
				口径	底径	器高				口径	底径		
146	ロクロ土師器	西O道路跡B西側溝	外面：底部4軒舟切り。内面：放射状ミガキ→黒色處理。	-	6.8	-	-	-	-	-	-	完形	R1338
147	ロクロ土師器	西O道路跡C西側溝	外面：底部4軒舟切り。 内面：放射状ミガキ、底部円削込み→黒色處理。	-	6.0	-	-	-	-	-	-	完形	R1344
148	須恵系土器	西O道路跡D西側溝	外面：底部4軒舟切り。内面：コチナ。	12.4	4.5	3.8	1/2	3/4	-	R1354	33		
149	ロクロ土師器	西O道路跡D西側溝	外面：底部4軒舟切り。内面：放射状ミガキ→黒色處理。	16.0	5.6	6.0	>1/4	-	-	R1457	28		
150	ロクロ土師器	SD2000B河川跡7号	外面：放射状ミガキ→黒色處理。内面：火はね痕。	15.4	6.0	5.5	<1/4	-	-	R1367	29		
151	ロクロ土師器	SD2000B河川跡7号	外面：体下部4軒舟切りケズリ。 内面：中心円孔ミガキ→黒色處理。	16.6	6.5	6.0	2/3	1/2	-	R1363	29		
152	ロクロ土師器	西O道路跡路跡3号 西E黒帯	外面：底部8軒舟切り。体下部放射状ミガキ。同一器接合の口縁むずかず体上端破片点。内面：黒色處理。	15.4	5.5	(5.0)	-	3/4	-	R1433	-		
153	ロクロ土師器	SD2000B河川跡7号	外面：底部8軒舟切り→底部縁部分の手持ちケズリ。 内面：放射状ミガキ→黒色處理。	13.8	6.0	4.7	<1/4	-	-	R1366	29		
154	ロクロ土師器	SD2000B河川跡7号	外面：底部8軒舟切り。同一器接合の口縁むずかず体上端破片点。内面：黒色處理。	14.4	6.0	5.1	1/4	1/2	-	R1364	28		
155	ロクロ土師器	SD2000B河川跡7号	外面：底部8軒舟切り。粘土輪を輪付けて底部に直し(輪付柱作り)。内面：放射状ミガキ→黒色處理。	13.0	6.0	5.1	1/2	完形	-	R1365	28		
156	ロクロ土師器	SD2000B河川跡7号	外面：底部8軒舟切り。体底部正面部書「黒」。	-	6.3	-	-	<1/4	-	R1376	30		
157	ロクロ土師器	SD2000B河川跡7号	外面：底部8軒舟切り。内面：放射状ミガキ→黒色處理。	15.0	6.0	4.6	1/4	1/3	-	R1397	-		
158	ロクロ土師器	SD2000B河川跡7号 鉢底有り	外面：底部8軒舟切り。底厚13mm。 内面：底部黒色處理。	-	4.0	0.6	-	-	-	R1395	-		
159	ロクロ土師器	SD2000B河川跡7号	外面：体下部正面部書片(□)。内面：ミガキ→黒色處理。	-	-	-	-	-	-	R1380	-		
160	ロクロ土師器	SD2000B河川跡7号 轟耳付	外面：底部8軒舟切り付高部。 内面：放射状ミガキ→黒色處理。	-	7.7	-	-	-	1/2	R1377	-		
161	須恵系土器	西O道路跡路跡3号	外面：底部8軒舟切り。内面：コチナ。内面底部に油煙付着。	13.2	5.3	4.3	1/4	>3/4	-	R1429	33		
162	須恵器牛耳焼	SD2000B河川跡7号	外面：底部8軒舟切り。火はね痕、縦に黒色。	13.6	5.7	4.6	1/2	2/3	-	R1382	31		
163	須恵器牛耳焼	SD2000B河川跡7号	外面：底部8軒舟切り。断面：体上部灰白色、下部黒色。	14.2	5.2	5.2~5.4	1/4	完形	-	R1400	31		
164	ロクロ土師器引手	SD2000B河川跡7号	小形引手。口径12.4cm。内面全体・外縁口部に保付着。	10.0	-	-	<1/4	-	-	R1394	34		
165	須クロ土師器	SD2000B河川跡7号	口縁等一休端破片。口崩部の器はロクロ土師器要と同じで、調査はロクロ土師器の少特徴的。	22.6	-	-	<1/4	-	-	R1406	-		
166	須恵系土器	西O道路跡路跡3号 大型付手鉢	高台瓦頭片。底部との接合面は連続斜面瓦頭(ボジ)。	-	19.0	-	-	-	-	R1439	-		
167	製塙土器	西O道路跡路跡3号	口縁等一休端片。非クロク調整、土軸輪轉輪のみで破損。	-	-	-	-	-	-	R1441	36		
168	製塙土器	西O道路跡B西側溝	内面サエ工。非クロク調整、土軸輪轉輪・ガラス粒多く含む。赤褐色。	-	-	-	-	-	-	R1349	36		
169	製塙土器	SD2000B河川跡7号	体下部・底部端片。非クロク調整。粘土輪轉輪のみで破損。	-	-	-	-	-	-	R1392	36		
170	ロクロ土師器	SX1964横位合口 土師器表面有り	横位合口土師器表面有りに使用。口縁部受け口部。 外面：ロクロナナニ角端等手持ちケズリ。	23.0	(7.0)	(40.0)	3/4	-	-	R1326	34		
171	ロクロ土師器 長脚付	SX1964横位合口 土師器表面有り	外面：ロクロナナニ手持ちケズリ。内面：ロクロナナニ。煮沸痕として未記載。	20.4	8.2	22.5	完形	-	-	R1327	34		
172	須恵器	SF3700B木輪軸跡	外面：底部8軒舟切り底部手持ちケズリ。	-	8.0	-	-	-	-	R1515	-		
173	須恵器	SF3700B木輪軸跡作手	外面：底部8軒舟切り底部手持ちケズリ。	-	8.6	-	-	<1/4	-	R1517	-		
174	須恵器台背	SD10195B河川跡	外面：底部8軒舟切り。底部の接合面は連続斜面瓦頭(ボジ)。	8.4cm	高台5.5cm、高台1/2残存。	12.0	-	4.6	1/2	-	R1501	31	
175	須恵器	SF3700B木輪軸跡作手	外面：底部8軒舟切り。	-	7.4	-	-	<1/4	-	R1523	-		
176	須恵器	SF3700B木輪軸跡作手	外面：底部8軒舟切り手持ちケズリ。	-	-	5.4	-	<1/4	-	R1524	-		
177	須恵器牛耳焼	SF3700B木輪軸跡作手	外面：底部8軒舟切り。内面底部に油煙付着。	-	5.20	-	-	-	-	R1505	-		
178	須恵器牛耳焼	SF3700B木輪軸跡作手	外面：底部8軒舟切り。底部輪轉輪ケズリ。	-	4.6	-	-	<1/4	-	R1507	-		
179	須恵器	SD3701A鍋	外面：底部8軒舟切り。底部輪轉輪ケズリ。	16.4	9.0	3.5	1/4	1/2	-	R1527	31		
180	須恵器	SD3701A鍋	外面：底部8軒舟切り。	13.8	8.2	3.9	3/4	完形	-	R1526	31		
181	ロクロ土師器	SD2000B河川跡6号	外面：輪轉輪ケズリ。内面：放射状ミガキ→黒色處理。	14.0	6.2	4.6	ほぼ完形	-	-	R1458	28		
182	ロクロ土師器	SD2000B河川跡6号	外面：輪轉輪ケズリ。内面：放射状ミガキ→黒色處理。	-	5.0	-	-	-	-	R1473	-		
183	ロクロ土師器	SD2000B河川跡1号	外面：底部4軒舟切り。 内面：粘土輪轉輪のみ放射状ミガキ→黒色處理。	14.8	4.8	3.9	-	-	-	R1483	-		
184	ロクロ土師器	SD2000B河川跡1号	体外側正面部書片(□)。内面：ヘラミガキ→黒色處理。	-	-	-	-	-	-	R1484	39		
185	須恵器	SD2000B河川跡6号	外面：底部8軒舟切り。底部輪轉輪ケズリ。	13.8	5.1	4.3~4.9	<1/4	-	-	R1461	-		
186	ロクロ土師器	SD2000B河川跡6号	口縁部受け口部でやや内傾。外面：底部8軒舟切り。ほぼ全面に輪轉輪付着。体下部に火はね痕。内面：輪轉輪。体下部に輪轉輪付着。	15.0	7.0	12.1	1/6	ほぼ完形	-	R1464	34		
187	須恵器	SD2000B河川跡6号	外面：体下部正面部書片(万字)。	-	-	-	<1/6	-	-	R1467	39		
188	須恵系土器	SD2000B河川跡1号	外面：底部8軒舟切り。	-	4.8	-	-	-	-	R1482	-		
189	須恵器(抹谷器)	SD2000B河川跡6号	体上部:4~5体下部1~3高台輪轉輪のみ輪轉輪。輪轉輪大径約16.7cm。内面：体上部に回転カキ。漆皮塗アーバー球に付着。底部11mmと厚さ。	(0.8)	-	-	-	-	-	R1476	33		

表15 南2道路跡以南出土土器観察表

第6章 第V・VII層（古墳・弥生時代）の調査

山王遺跡多賀前地区の第1～3次調査では、基本層第V層で古墳時代前期（塩釜式期）の水田跡とこれに伴う溝などを検出していた。これらは、以下のように3つの水田域に区分されている。そして、水田域Ⅰと水田域Ⅱの間が微高地上の水路、溝、水田域Ⅱと水田域Ⅲの間が低湿地となっていた（宮城県教育委員会 1995、第8図）。各水田域とも、短辺3.0～5.5m程、長辺4.5～7.0m程の長方形に小畔や大畔で区画され、西辺が北で西に約40°偏る水田が比較的整然と配置されている。

《SF3124 水田域Ⅰ区》

古代の南1道路跡の下位にあって、これより以北に広がるSF3124水田域。橋脚P69北側から橋脚P71の間の範囲にあたる。

《SF3124 水田域Ⅱ区》

古代のSD2000河川跡（砂押川跡）右岸から南1～2間道路跡に至る範囲の下層にある水田域。橋脚P60北側から橋脚P64の間の範囲にあたる。

《SF3124 水田域Ⅲ区》

側道調査区南端から古代のSD2000河川跡（砂押川跡）左岸に至る範囲の下層にある水田域。橋脚P54北側から橋脚P57の間の範囲にあたる。

《SF3124 水田域Ⅰ区と SF3124 水田域Ⅱ区の間》

古代の南1～2間道路跡から南1道路跡に至る範囲の下層にある。水田域Ⅰ区と水田域Ⅱ区の間の微高地で、水田は營まれず、北西から南東に向けて流れる水路や溝が築かれている。橋脚P64から橋脚P69の間の範囲にあたる。

《SF3124 水田域Ⅱ区と SF3124 水田域Ⅲ区の間》

低湿地で、橋脚P60から橋脚P57の間の範囲にあたる。

また旧調査で検出した基本層第VII層は、山王遺跡八幡地区、市川橋遺跡八幡地区などの基本層第VI層で弥生時代中期（楕円形圓式期）の遺物包含層や溝などを検出していた層準に相当するものの、遺物包含層などは検出されず、スクモ層であった。

震災前であれば橋脚部すべての本発掘調査区でこれら第V層、第VII層を対象にした本発掘調査を実施していたところだが、震災後に宮城県発掘調査基準を弾力的に運用し、三陸沿岸道路4車線化事業がすでに実施設計段階までに入った復興道路建設であるという事情を考慮しながら事業者と協議を重ねた結果、調査対象地区の北端にあたる橋脚P71でまず第VII層までの本発掘調査を実施し、その成果をみてから周辺の他の橋脚での第VII層までの本発掘調査の必要性について協議することとなった。また、第V層の古墳時代前期（塩釜式期）の水田域の調査は、西側の側道部分の旧調査でその広がりや概要をつかんでいたため、微高地の水路・溝の東側延長部分にあたる橋脚P65のみ本発掘調査を実施することにした。

橋脚P71の本発掘調査の結果、第VI層で遺物包含層が検出されなかったため、他の橋脚について第VII層を対象とした本発掘調査は行わないことにした。

1. 橋脚P 71の調査（平面図・断面図：第84図、写真図版：図版27）

古墳時代前期のSF3124 水田域Ⅰ区の範囲内にあり、この畦畔の一部を検出したものの、水田の多くはこの古墳時代前期（塩釜式期）よりも新しく、古代の方格地割成立以前のSD10232 河川跡により大きく壊されていた。弥生時代中期（楕形圓式期）の層準は、第V層の約1m下位にあるが、このSD10232 河川の深さがこの層準以下まで及んでいたことから、仮に同層準が残されていたとしても大きく破壊されていることが予想された。そして、東隣の砂押川の現河底よりもレベルが低く、水が豊富に湧き出てきて壁の崩壊の危険性が高かったことから、さらに下層の調査は不要と判断した。

この橋脚P 71のV層以下の本発掘調査からは、以下のように河川→陸化→河川→陸化という大きな地形環境の変化があり、最初に陸化した後の古墳時代前期（塩釜式期）に水田域となり、2番目に陸化した後の9世紀初頭に方格地割が成立したことが知られる。

- ①大きな旧河川跡（SD10232 河川跡；直径60cm、長さ8mの流木が入り、当時の砂押川本流か）、
- ②大きな旧河川跡の埋没＝半乾燥・半湿地に陸化（古墳時代地山）、③古墳時代前期（塩釜式期）のSF3124 水田の営農、④古代以前の河川（SD2112+1111 河川跡）、⑤陸化、⑥9世紀初頭 SX2121 整地、SD1020 遺り水遺構の構築＝方格地割の成立

2. 橋脚P 65の調査

古墳時代前期のSF3124 水田域Ⅰ区とSF3124 水田域Ⅱ区の間の微高地上にあり、側道部の旧調査で検出した水利施設（SD1943 水路跡、SD3137溝）の他、これらと同方向のSD10180・10181溝を検出した（平面図・断面図：第85図）。

【SD1943 水路跡】

取水のための水路と考えられる。上端幅3m前後、底面幅2m、深さ40～60cm、断面U字形の溝で、取水のための水路とみられる。この水路跡は蛇行しながら北西から南東方向に流れる。堆積土は2層に分かれ、自然堆積である。旧調査では堆積土から土師器壺破片が出土している。

【SD3226溝跡】

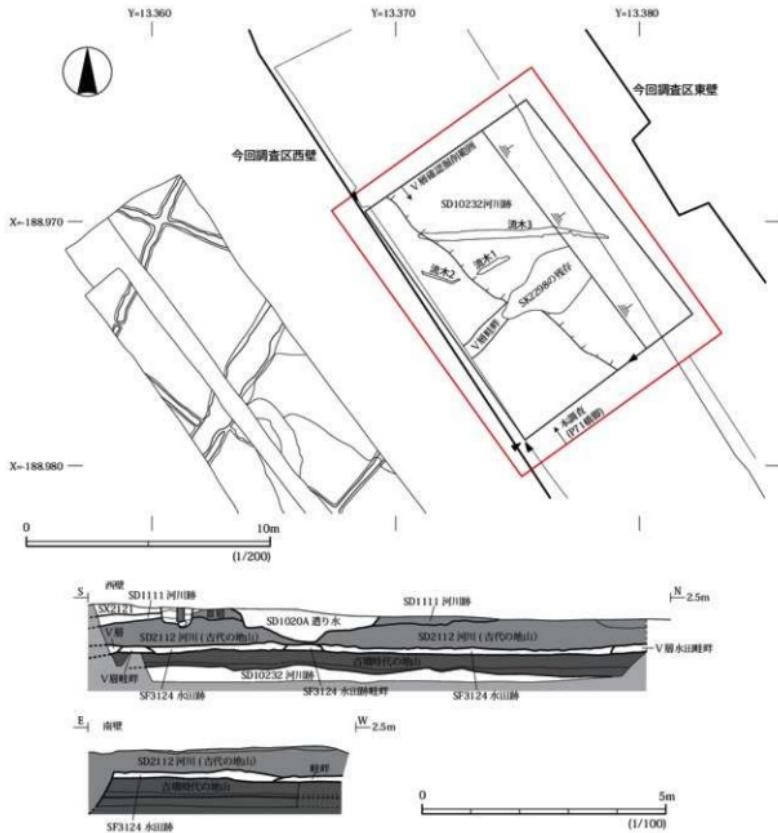
上端幅1m、底面幅80cm、深さ50cm、断面形「U」字形の溝である。SD1943 水路跡南辺に沿い、本溝とSD1943 水路跡との間が通路（畔道）で、本溝がこの側溝と考えられている。堆積土は2～3層に分かれ、自然堆積である。今回の調査では底面に小ピットが連続する箇所がある。旧調査ではSD1943 水路跡内に打ち込み杭があることから、本例もこの溝に伴う打ち込み杭の可能性がある。

【SD10180溝】

上幅15～20cm、深さ10cmの浅い溝で、SD1943 水路跡の南辺に沿い、長さ4.3m検出した。SD3226溝と同様の性格の溝と考えられる。遺物は出土していない。

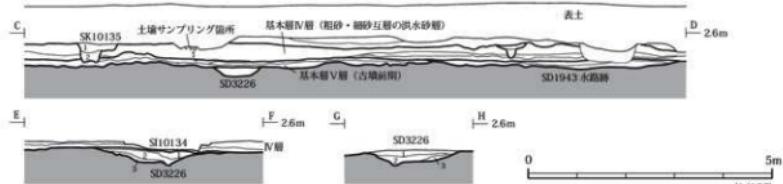
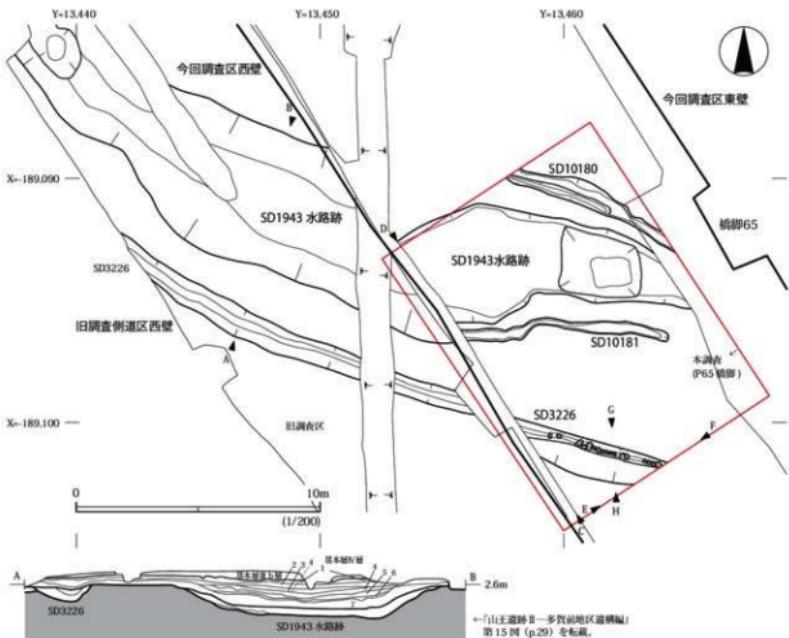
【SD10181溝】

上幅20～50cm、深さ15cmの浅い溝で、SD1943 水路跡の北辺に沿い、長さ3.7m検出した。SD3226溝と同様の性格の溝と考えられる。遺物は出土していない。



編號・層位	土色	土性	その他の特徴
SD1020A透水	黒色 (7.5YR2/1)	シルト	やや粘質。しまりあまりない。自然堆積。
	黒色 (7.5YR2/1)	シルト	地山の灰褐色 (5YR4/2) 粘土ブロック (ø 0.5~4cm) を少し含む。自然堆積。壁際の崩壊土。
	黒褐色 (7.5YR3/1)	シルト	地山の灰褐色 (5YR4/2) 粘土ブロック (ø 2~4cm) と地山の黒褐色 (10YR5/1) 細砂ブロック (ø 2~5cm) を多く含む。自然堆積。壁際の崩壊土。
SX2121 駁地層	黒色 (7.5YR2/1)	粘質シルト	灰褐色 (7.5YR3/2) 粘質シルトブロック (ø 2~6cm) ・ 黒褐色 (10YR5/1) 細砂ブロック (ø 2~10cm) を多く含む。
SD1111 河川跡	黒褐色 (7.5YR3/2)	粘質シルト	
SD2112河川(古代の地山) (基本層IV層)	灰褐色 (5Y7/1)	シルト、砂粗	シルトと細砂・粗砂の互層。
	青灰色 (10BG6/1)	シルト	ラミナ状の自然堆積層。
SF3124水田跡 (基本層V層)	黒色 (N1.5/0)	シルト	古墳時代前期の水田耕作土。
SF3124水田跡畔 (基本層V層)	黒色 (N1.5/0)	シルト	緑灰色 (7.5G5/1) シルトブロックを含む。
古墳時代の地山 基本層VI層	灰褐色 (7.5YR5/2)	粘土	有機質に富んだ薄層を 8枚程度繰り返してほぼ水平に含む。
	灰褐色 (7.5YR5/2)	粘土	下位の旧河川跡が埋没して疎化した当時の自然堆積層。
SD10232河川跡	黒褐色 (10YR4/1)	粗砂	黒褐色が互層に入る。

第84図 橋脚P71本調査区の第V層面調査平面・断面図



道構・層位	土色	土性	その他の特徴
SD1943水路跡	1層 黒色(10Y2/1)	粘質シルト	地山プロックを含む。
	2層 錫灰色(10G5/1)	粘質シルト	にぶい黄褐色(10YR4/3)地山砂を多く含む。
SD3226溝 (奈良・平安時代の地山)	1層 錫灰色(10YR5/1)	粘質シルト	炭酸物(φ0.5~1cm)、地山プロック(φ1~3cm)を含む。
	2層 錫灰色(10YR3/2)	粘質シルト	地山プロック(φ1~3cm)を含む。
	3層 灰青褐色(10YR5/2)	シルト	地山プロック(φ1~3cm)を多く含む。
基本層Ⅳ層 (古墳時代)	にぶい黃褐色(10YR4/3)	粗砂	白色湖沼色を多く含むる泥炭色(10YR4/1)シルトを含む。灰白色大山脚下隕後の自然堆積層で、SX3461道路跡からSD2000河川跡にかけてほぼ全層に分布する。
基本層Ⅴ層 (奈良・平安時代の地山)	1層 黄褐色(2.5Y5/3)	シルト	水成堆積層。
	2層 無色(10YR3/1)	シルト	水成堆積層。
	3層 黄褐色(10YR4/1)	シルト	水成堆積層。
	4層 黑色(10TR2/1)	シルト	水成堆積層。
	5層 にぶい黃色(2.5YB/4)	シルト	水成堆積層。
	6層 黄褐色(2.5Y4/1)	シルト	水成堆積層。
	7層 灰褐色(10G5/1)	シルト	水成堆積層。
基本層Ⅵ層 (古墳時代)	1層 鞍褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山砂を含む。
	2層 黑褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山プロック(φ1cm)を含む。
SK10135	1層 黑褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物(φ0.5~1cm)を含む。
	2層 灰青褐色(10YR4/2)	シルト	にぶい黃褐色(10YR4/3)地山砂を含む。

第85図 橋脚P65本調査区の第V層面調査

第7章 イベント堆積物の検討

今回の山王遺跡多賀前地区第4次調査では、北より3箇所の特異なSX10233・10114・10234砂層を検出した（第86図）。これらの砂層は、上下の堆積層（粘質土やシルト土）とは明らかに異なる層相で、地質学・堆積学や津波堆積物研究で言われているイベント堆積物に相当する。イベント堆積物とは、通常の静穏な堆積環境下とは明らかに異なる特殊で短期間の自然現象（大波・津波・洪水・高潮など）によって、運ばれて堆積した砂や泥などの堆積物のことである。以下、堆積の要因を特定せずに総称として用いられる「イベント堆積物」という用語を用い、検討する。

1. 各イベント堆積物の概要と年代の検討

山王遺跡多賀前地区で検出した3箇所のイベント堆積物について、検出位置（第86図）、規模、特徴、下位堆積層、上位堆積層、イベントの年代の概要をまとめると、以下になる。

（1）SX10233 イベント堆積物

〔本文記載〕p.47、〔平面図〕第17図、〔断面図〕第18図、〔写真図版〕図版15・16。

〔検出位置〕橋脚P71の本発掘調査区で検出。埋没したSK2298B大土壤、SD10061B連結溝上面の窪みに自然堆積。検出位置の標高は2.00mである。

〔規模〕長さ約6m、幅約3m、厚さ約10cm。

〔特徴〕上層に向かって細粒化する正級化構造する砂層で、ユニットは単一で繰り返しはない。下層の黒褐色・黒色粘質土、上層の黒色粘質シルト土とは層相は明瞭に異なる。中位の薄い粘質土を挟んで3層に細分され、下位より灰褐色細粒砂の下部砂層、0.5～1cm程の薄い褐色粘質土（暗色帶）、灰黃褐色極細粒砂の上部砂層からなる。

〔下位堆積層〕SK2298B大土壤、SD10061B連結溝に自然堆積した黒褐色・黒色粘質土。

〔上位堆積層〕黒色粘質シルト土の基本層Ⅲa4層、黒褐色粘質シルト土の基本層Ⅲa3・Ⅲa2層・Ⅲa1層がこの順に堆積する。

なお、最下部の基本層Ⅲa4層最下部については、本章3の粒度分析試料No.17・18に相当し、この試料は「さらに粒径が小さくなる氾濫末期の堆積物」と指摘されている。このことから、基本層Ⅲa4層がSX10233 イベント堆積物と一連の堆積物である可能性が指摘されることになる。

また、このイベント堆積物の分布する箇所では検出されなかったが、周辺での検出状況と各層の土器・瓦出土状況から、Ⅲa1層とⅢa2層の間に10世紀前葉の灰白色火山灰（十和田a火山灰）の降灰が推定された。出土土器・瓦より、イベント堆積物の直上の基本層Ⅲa4層は9世紀後葉、基本層Ⅲa2層は9世紀後葉～10世紀前葉頃、基本層Ⅲa1層は10世紀前半頃に位置付けられる。

〔イベントの年代〕SX10233 イベント堆積物から遺物は出土していないが、その年代は上下の堆積層の年代と遺構期との関係の中で絞り込むことが可能である。

直下のSK2298B大土壤、SD10061B連結溝は、このSX10233 イベント堆積物の堆積時にはすでに埋没し、窪みとなっていた。SD1020遺り水遺構は3時期にわたって変遷し、SX10233 イベント堆積物は最も古いSD1020A遺り水遺構が埋没して窪みとなっていた時期のものである。



第 86 図 陸奥国府多賀城跡の方格地割、発掘調査区とイベント堆積物、珪藻分析試料の採取位置

旧調査成果によると、出土遺物より、SD1020A 遺り水遺構は 9 世紀前半に機能し、SD1020B 遺り水遺構は 9 世紀中頃以降、灰白色火山灰の降灰した 10 世紀前葉以前に掘削されていることが判明している（宮城県教育委員会、1995・1996b）。遺構期との関係からみると、SX10233 イベント堆積物は SD1020B 遺り水遺構の時期のものであり、9 世紀前半より新しく、灰白色火山灰の降灰した 10 世紀前葉より古い。

今回の調査では、SK2298B 大土壙出土のロクロ土師器内黒環には、体下部～底部が手持ちヘラケズリ、内面底部が平行ミガキされたもの（第 27 図 10）、須恵器环には底部ヘラ切りのもの（第 27 図 12）があり、SD10061B 連結溝出土の須恵器环には底部ヘラ切りのもの、底部静止糸切り後に体下部～底部を手持ちヘラケズリしたものがある。これらは、多賀城跡城内・城外の基準土器群^(補注)からみて、9 世紀前半に位置付けられる。

また、上位の基本層Ⅲ a4・Ⅲ a3・Ⅲ a2・Ⅲ a1 層のうち、Ⅲ a1 層とⅢ a2 層の間に 10 世紀前葉の灰白色火山灰の降灰が推定され、直上の基本層Ⅲ a4 層は 10 世紀前葉よりも古い。Ⅲ a4 層出土の須恵器环には底部が回転糸切り無調整のもの（第 27 図 14）があり、10 世紀代の須恵系土器は含まれていない。底部回転糸切り無調整のロクロ土師器内黒環、須恵器环は貞觀 11 年（869）陸奥国巨大地震以降の 9 世紀後葉頃に盛行するので、直上の基本層Ⅲ a4 層は 9 世紀後葉に位置づけられる。

以上より、SX10233 イベント堆積物は、9 世紀前半よりも新しく、9 世紀後葉よりも古い。

（2）SX10114 イベント堆積物

〔本文記載〕 p.37、〔平面図〕 第 11 図、〔断面図〕 第 13 図、表 4、〔写真図版〕 図版 11。

〔検出位置〕 橋脚 P 68 の本発掘調査区。南 1 西 1 道路跡交差点より南側約 10 m、SX1350 西 1 道路跡面上で検出。検出位置の標高は 2.10m である。

〔規模〕 長さ約 3.1 m、幅約 2.0 m の長楕円形状で、層厚約 25cm。

〔特徴〕 南 1 西 1 道路跡交差点南側、平坦な SX1350 西 1 道路跡路面中央が平面長楕円形で深さ 25cm の土壤状に抉り取られ、その中に砂層が自然堆積している。この窪みは人為的に掘削された土壤ではなく、自然營力による窪みである。路面を深く抉り取り、流速が早く強い流れの水流があったことを示す。底面は凸凹で、堆積土は下層が細粒砂、上層が粗砂で、上方に向かって砂粒の粒径が大きくなる逆級化構造をなす。ユニットは單一で繰り返しはない。層中には黒褐色泥質の偽礫が散見される。下位は路面構築時の整地層で、これとは層相が明瞭に異なる。

〔下位堆積層〕 9 世紀前半頃の路面 I 構築土（整地層 I）、路面 II 構築土（整地層 II）。

〔上位堆積層〕 路面 III 構築土（整地層 III）。

〔イベントの年代〕 SX10114 イベント堆積物から遺物は出土していないが、その年代は上下の堆積層の年代から絞り込むことが可能である。

下層の路面 I 構築土（整地層 I）からは、ロクロ土師器内黒環・内黒甕・甕、底部ヘラ切りの須恵器环（第 32 図 57）、天井部回転ヘラケズリの須恵器蓋、路面 II 構築土（整地層 II）からは底部ヘラ切りの須恵器环が出土している。ロクロ土師器内黒環・甕は多賀城周辺では 8 世紀末頃に出現し、底部ヘラ切りの須恵器环、天井部回転ヘラケズリの須恵器蓋は 9 世紀前半頃のものである。路面 II 構築土（整地層 II）

からの出土遺物は少ないが、9世紀前半頃の底部ヘラ切りの須恵器环がある。

上層の路面Ⅲ構築土（整地層Ⅲ）は、SX10114 イベント堆積物よりも新しく、西1道路路面上で部分的に検出した整地層である。出土遺物は少なく、ロクロ土師器内黒環・甕、須恵器环・甕・壺、須恵系土器大型台付鉢などの破片がある。このうちロクロ土師器内黒環には底部回転糸切り無調整で内面放射状ミガキのもの（第34図85）、須恵器环には底部回転糸切り無調整のものなどがある。85のロクロ土師器内黒環や底部回転糸切り無調整の須恵器环は、多賀城跡城内・城外基準土器群からみて、9世紀後葉に位置付けられる。また、須恵系土器大型台付鉢も9世紀第4四半期頃に出現する。したがって、路面Ⅲ構築土（整地層Ⅲ）は9世紀後葉に位置付けられる。

以上より、SX10114 イベント堆積物は、9世紀前半よりも新しく、9世紀後葉よりも古い。

（3）SX10234 イベント堆積物

〔本文記載〕 p.150、〔平面図〕 第77図、〔断面図〕 第79図⑤・⑥、〔写真図版〕 図版23・24・25。

〔検出位置〕 橋脚P56北側の確認調査箇所から橋脚P57の本発掘調査区にかけて、SF3700B水田域内の小規模なSX10211湿地跡と周囲のSF3700B水田跡上面で検出。検出位置の標高は2.05mである。

〔規模〕 SF3700B水田跡の東西方向の畦畔から、その南側に位置するSX10211湿地北半部にかけて、東西約10m、南北約5mの範囲に分布する。層厚は15～25cm（平均20cm）。

〔特徴〕 逆級化構造（下部が極細砂・細砂で、上部が粗砂）の砂層が南北方向に3ユニットをなして水成堆積する（3ユニットの繰り返し）。直下堆積層は黒褐色粘質土で、これとは層相が明瞭に異なる。

下面是凸凹し、直下の粘質土を抉りこむように砂層が堆積している。

〔下位堆積層〕 SX10211湿地、SF3700B水田跡。

〔上位堆積層〕 SF3700C水田跡。

〔イベントの年代〕 SF3700B水田跡からは底部ヘラ切り（第83図175）、底部ヘラ切り後に底部手持ちヘラケズリ（第83図172・176）、体下部へ底部回転ヘラケズリ（第83図173）の須恵器环などが出土した。これらは多賀城跡城内・城外出土基準土器群からみて、9世紀前半のものである。また、旧調査で検出し、SF3700B水田跡よりも新しいSF3700C水田跡の耕作土には、10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰（十和田a火山灰）ブロックが含まれ、10世紀前葉頃の須恵系土器环が含まれる。

以上より、SX10234 イベント堆積物は9世紀前半よりも新しく、10世紀前葉よりも古い。

（4）市川橋遺跡八幡地区D区 SX700西4道路跡のイベント堆積物

山王遺跡多賀前地区で検出した3箇所のイベント堆積物の他に、本章2では平成24年度に発掘調査した市川橋遺跡八幡地区D区で検出したイベント堆積物の珪藻分析結果も掲載している。

この発掘調査は、多賀城インター・エンジの建設事業に先立つもので、平成25・26・27年度も発掘調査は行われている。発掘調査報告書は平成27年度刊行予定で、遺物・遺構の整理作業にはまだ着手していない。このため、イベント堆積物の年代的検討についてはここでは詳細に行えない。

〔検出箇所〕 北2西4道路交差点のすぐ北側、北2道路跡と北2a道路に挟まれた区間のSX700西4道路跡で検出。イベント堆積物は、このSX700西4路面上とそのB西側溝の上を覆い、C西側溝に一部削られる状態で検出された（第87図）。検出位置の標高は2.7mである。

〔特徴〕層厚 10 ~ 25cm (平均 20cm)。2層に細分され、下部が細砂、上部が粗砂・粘土を含む砂層で、上方に向かって粗粒化する逆級化構造をなす。ユニットは単一で繰り返しはない。下面是火炎状構造をなし、層中には偽礫が散見される。

〔下位堆積層〕SX700 西 4 道路跡路面整地層、SX700 西 4 道路跡 B 西側溝、SX700 西 4 道路跡 A 西側溝

〔上位堆積層〕SX700 西 4 道路跡 C 西側溝

〔イベントの年代〕SX700 西 4 道路跡は西側溝に 3 時期、東側溝に 4 時期の変遷があり、全体として 4 時期の変遷があった。交差点を挟んで隣接する C 期の SX390 北 2 道路南側溝の中位には灰白色火山灰ブロックが多く含まれていた。旧調査では 3 時期目の C 期側溝に灰白色火山灰ブロックが含まれており、西 4 道路の存続年代を 9 世紀後半から 10 世紀前半としている（宮城県教育委員会、1997）。

一方、平成 24 年度の SX700 西 4 道路跡の調査では、イベント堆積物直下の路面整地層、これより



第 87 図 平成 24 年度市川橋遺跡八幡地区 D 区西 4 道路跡で検出されたイベント堆積物 (砂層)

も古いB西側溝には、底部手持ちヘラケズリの須恵器环、体下部～底部回転ヘラケズリの須恵器环、須恵器高台环など9世紀前半の土器が含まれ、9世紀後半のロクロ土師器内黒环、須恵器环は含まれていない。また、イベント堆積物よりも新しいC東側溝には9世紀後葉頃の底部回転糸切り無調整の須恵器环が含まれ、これよりも新しい10世紀前葉の須恵系土器环は含まれていない。

したがって、現段階ではこの市川橋遺跡の西4道路跡のイベント堆積物は、9世紀前半より新しく、9世紀後葉よりも古いくことになる。ただし、周辺の道路の再検討も必要であり、詳細な年代的位置付けは今後刊行の正式報告書に委ねることとし、ここに示した年代的位置付けはあくまでも参考年代である。

(5) 各イベント堆積物の比較

次に、これら4箇所のイベント堆積物の共通点と相違点などを列記すると、以下のようなになる。

〔検出場所〕 検出場所は、SX10233 イベント堆積物が国司館跡に位置付けられる南1西2区の埋没したSD1020A造り水道構の窪み、SX10114 イベント堆積物が南1西1道路交差点南側の平坦な西1道路路面を抉った窪み、SX10234 イベント堆積物がSF3700B 水田域のSX102111 湿地、SF3700B 水田、市川橋遺跡八幡地区のイベント堆積物が西4道路跡路面上とその西側溝上面であった。検出場所の性格は異なるが、いずれも周囲よりも低い箇所であるという共通点がある。山王遺跡多賀前地区で検出した3箇所のイベント堆積物の標高は、2.0～2.1mの間にある。市川橋遺跡八幡地区で検出したイベント堆積物は、今回の多賀前地区調査区の中で最も北に位置するSX10233 イベント堆積物よりもやや西に約520m離れた地点にあるため、標高はこれら山王遺跡多賀前地区的イベント堆積物よりもやや高く、標高2.7mにある。

〔層相〕 層相は、SX10234 イベント堆積物が單一ユニットの正級化構造の砂層、SX10114 イベント堆積物が單一ユニットの上方に向かって粗粒化する逆級化構造の砂層、SX10234 イベント堆積物が3ユニットの上方に向かって粗粒化する逆級化構造の砂層、市川橋八幡地区では單一ユニットの上方に向かって粗粒化する逆級化構造の砂層という違いがあるものの、細粒砂～粗砂の級化構造であるという点では共通している。また、イベント堆積物の下層が凸凹していることが共通し、下底に火炎状構造が認められるものもある。また、層中に偽礫が認められるものもある。

〔年代〕 各イベントの年代については、SX10233・10114 イベント堆積物が9世紀前半よりも新しく、9世紀後葉よりも古く、SX10234 イベント堆積物が9世紀前半よりも新しく、10世紀前葉よりも古く位置付けられる。市川橋遺跡八幡地区西4道路跡イベント堆積物は、まだ不確定要素が残るが、参考年代は9世紀前半より新しく、9世紀後葉よりも古く。これら4箇所のイベント堆積物は、いずれも9世紀前半から10世紀前葉(下限年代を狭く取ると9世紀後葉)の間に位置付けられることになる。

なお、山王遺跡多賀前地区西4道路跡路面上のSX10114 イベント堆積物、市川橋遺跡八幡地区の西4道路跡路面上のイベント堆積物と同様に、道路跡路面を抉りこんで堆積しているイベント堆積物(砂層)が他に2箇所検出されている(第86図)。いずれも南北大路跡路面上で、①古代の砂押川にかかるSX1777 橋跡の北側約56mでSX1779 イベント堆積物、②SX1777 橋跡のすぐ南隣でSX3072 イベント堆積物、③東西大路交差点でSX2451 イベント堆積物が検出されている(多賀城市教育委員会

2004a・b)。震災前の調査による標高は①・②が約 2.8 m (震災後に沈下した推定標高は約 2.5 m)、③が約 1.3 m (同約 1.0 m) である。年代幅も前述 4 箇所のイベント堆積物と同様である。ただし、海水～汽水種の珪藻は検出されていない。

以上のように、陸奥国府では古代の砂押川右岸で 4 箇所、左岸で 2 箇所、計 6 箇所のイベント堆積物がこれまでに検出され、ほぼ同時期のものと推定される。このうち 1 箇所 (SX10234 イベント堆積物) が方格地割外で、他の 5 箇所が方格地割内に位置している (第 86 図)。

(補注) ここに示した年代の比定は、多賀城跡域内、城外で蓄積されてきている基準土器群のうち、8 世紀末～10 世紀前葉頃にかけての以下の中堅土器群との比較・検討結果や遺構期の検討による。

① 8 世紀末～9 世紀初頭頃の基準土器群

土師器内黒環・甕にはロクロ調整のものと非ロクロ調整のものがある。ロクロ土師器甕には回転カキ目のものやロクロ調整前に平行叩きされるものもある。ロクロ土師器内黒環は体下部～底部が回転ヘラケズリまたは手持ちヘラケズリで再調整され、内面底部は平行ミガキされている。須恵器環はヘラ切りが主体である。环の底径は大きい。須恵器には棱塊や双耳环、長岡京期の壺 G が含まれる場合もある。

・市川橋遺跡 SX1351C 河川跡第 2 層出土土器群 (多賀城市教育委員会 2003、市第 70 集)

・市川橋遺跡市第 7 次 SK236 土壌出土土器群 (多賀城市教育委員会 1990、市第 21 集)

② 9 世紀第 1 四半期頃の基準土器群

非ロクロ土師器は少なくなり、ロクロ土師器内黒環の再調整は前段階とほぼ同様で、須恵器環にも回転ヘラケズリまたは手持ちヘラケズリで再調整されるものが含まれるようになる。

・多賀城跡第 62 次 SI2153 穫穴住居跡出土土器群 (宮城県多賀城跡調査研究所 1993『年報 1992』)

・多賀城跡第 62 次 SI2160 穫穴住居跡出土土器群 (宮城県多賀城跡調査研究所 1993『年報 1992』)

③ 9 世紀第 2 四半期頃の基準土器群

ロクロ土師器内黒環・須恵器環の再調整のものが主体を占める点やその特徴は前段階と同様だが、底径の大きな回転糸切り無調整の須恵器環がわずかに認められるものもある。

・多賀城跡第 60 次 S E 2101 B 井戸跡第Ⅲ層出土土器群 (宮城県多賀城跡調査研究所 1992『年報 1991』)

④ 9 世紀前半頃の基準土器群

・多賀城跡第 62 次 SK2167 土壌出土土器群 (宮城県多賀城跡調査研究所 1993『年報 1992』)

⑤ 9 世紀後葉頃の基準土器群

ロクロ土師器内黒環・須恵器環とも底部回転糸切り無調整のものが主体を占め、ロクロ土師器内黒環の内面底部は放射状ミガキとなる。环の底径は小さくなる。

・多賀城跡平成 6 年度現状変更 SK2270 土壌出土土器群 (宮城県多賀城跡調査研究所 1995『年報 1994』)

・多賀城跡第 61 次第 10 層出土土器群 (宮城県多賀城跡調査研究所 1992『年報 1991』)

・多賀城跡第 66 次 SK2361 土壌第 7 ～ 4 層出土土器群 (宮城県多賀城跡調査研究所 1996『年報 1995』)

・山王遺跡多賀前地区 SK820 土器廐棄土壌出土土器群 (宮城県教育委員会 1996a、県第 170 集)

・山王遺跡多賀前地区 SD2000 河川跡第 8 層出土土器群 (宮城県教育委員会 1996a、県第 170 集)

・山王遺跡伏石地区 SK3047 土壌出土土器群 (宮城県教育委員会 1997、県第 174 集)

・仙台市五本松窯跡第 8・10・15 号窯出土土器群 (仙台市教育委員会 1987、市第 99 集)

⑥ 10 世紀前葉の基準土器群

須恵器系土器環・高台环が一定量含まれるようになる。ロクロ土師器内黒環・須恵器環の特徴は前段階と同様に底部回転糸切り無調整だが、底径がさらに小さくなる。

・高崎遺跡第 11 次 SX1080 土器廐棄土壌出土土器群 (多賀城市教育委員会 1995、市第 37 集)

・山王遺跡第 9 次千刈田地区 SK543 土器廐棄土壌出土土器群 (多賀城市教育委員会 1991a、市第 26 集)

・山王遺跡町地区 SK2861 土壌出土土器群 (宮城県教育委員会 1998、県第 175 集)

3. 山王遺跡多賀前地区におけるイベント堆積物の粒度分析結果 松本秀明（東北学院大学教養学部）

本稿では貞觀地震津波（西暦 869 年）の時期に相当する堆積物のうち、イベント堆積物（砂層）に注目し、堆積物の粒度分析を行い、堆積原因を推定した。分析したのは、多賀前地区で検出された 3箇所のイベント堆積物（砂層）のうち、SX10233・10234 イベント堆積物（砂層）の 2 箇所である。

（1）SF3700 水田域内の SX10234 イベント堆積物（三陸自動車道、橋脚 56-57 間）

試料採取は、東に隣接する三陸自動車道の橋脚 56-57 間に位置する写真 1 の地点で、2012 年 5 月 17 日に行った。採取時点での土層断面は地表から最大で 20cm の層厚をもつ粗粒砂層が確認され、その直下には黒色の有機質粘土層が堆積している（写真 2）。地表直下の砂層は直径 1-2mm 程度の白色の軽石を多く含むが、軽石は層状ではなく層内に散在する状況である。砂層の最下部には層厚 1.5cm 程度の細粒堆積物が堆積底面の凹部に断片的に確認される。粒度分析用の試料は写真 2 に示すように、地表から 4cm 付近（20120517-①）、10cm 付近（20120517-②）そして 19cm 付近（20120517-③）から採取した。分析は、試料中に粗粒砂分が多く含まれていることから、篩い法による分析を行った。篩いは -3.0 ϕ （直径 8mm）から 4.0 ϕ （0.063mm）まで、1/4 ϕ 間隔に揃え各粒度階の重量%を求めた。また、Friedman(1961, 1967) が示した積率法により、平均粒径、淘汰度、歪度の統計指標値を算出した。

試料 20120517-①は、-2 ϕ 付近（直径 4.00mm）から 3.5 ϕ （0.09mm）付近までの粒子をほぼ均等に含んでおり、淘汰不良な堆積物である。平均粒径は 0.99 ϕ （約 0.5mm）、淘汰度は 1.27 である。試料 20120517-②も①と同様で平均粒径は 1.00 ϕ 、淘汰度は 1.25 であった。これに対し砂層の下部付近から採取した試料 20120517-③は、細粒砂層により構成され、平均粒径 2.42 ϕ 、淘汰度 0.68 の値を示す（第 94 図）。

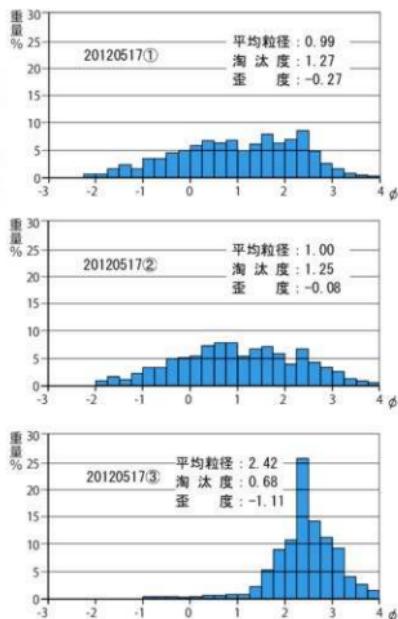
仙台平野に分布する砂質堆積物について、現生の河成堆積物と海浜堆積物との粒度組成を比較した松本（1977）は、海浜堆積物の平均粒径は 2.2 ~ 1.2 ϕ 、淘汰度は 0.7 以下であることが多いこと、そして河成堆積物の淘汰度は 0.8 を越えることを明らかにした。本調査地点における分析結果と比較すると、試料 20120517-①および 20120517-②については、粗粒砂から細粒砂までをほぼ均等に含み、淘汰度がそれぞれ 1.27、1.25 の値を示すことから、淘汰不良の河成堆積物と判断される。また、試料 20120517-③については淘汰度が 0.68 であり、比較的淘汰は良好で海浜堆積物の可能性もあるが、平均粒径が 2.42 ϕ であり、海浜堆積物としては粒径が小さい。同試料については、海浜砂起源の堆積物である可能性を積極的に否定することはできないが、それに連続して堆積したと考えられる上部の砂層が河成堆積物と判定されることから、これらの層厚 20cm 余りの砂質堆積物は、河成堆積物であると判断される。これらのことから、写真 2 に示される土層は、低湿地が広がる地帯に洪水により河成堆積物が侵入し堆積したと考えられる。



写真1 SX10234 イベント堆積物 試料採取位置



写真2 SX10234 イベント堆積物
土層断面



第94図 SX10234 イベント堆積物の粒度分析結果

(2) SD1020A 遺り水遺構付近の SD10161 連結溝の SX10233 イベント堆積物
(三陸自動車道橋脚 No.71 付近)

灰色シルト中に層厚 10cm 前後の細粒砂層が挟在する。細粒砂層は色調や粒度をもとに上部と下部に分けられる(写真3)。上部と下部の境界に 1cm 程度の暗色帶を挟む。上部はシルト分を含む細～微細砂であり、下部はシルト・粘土分も含むが概ね均質な細粒砂からなる。



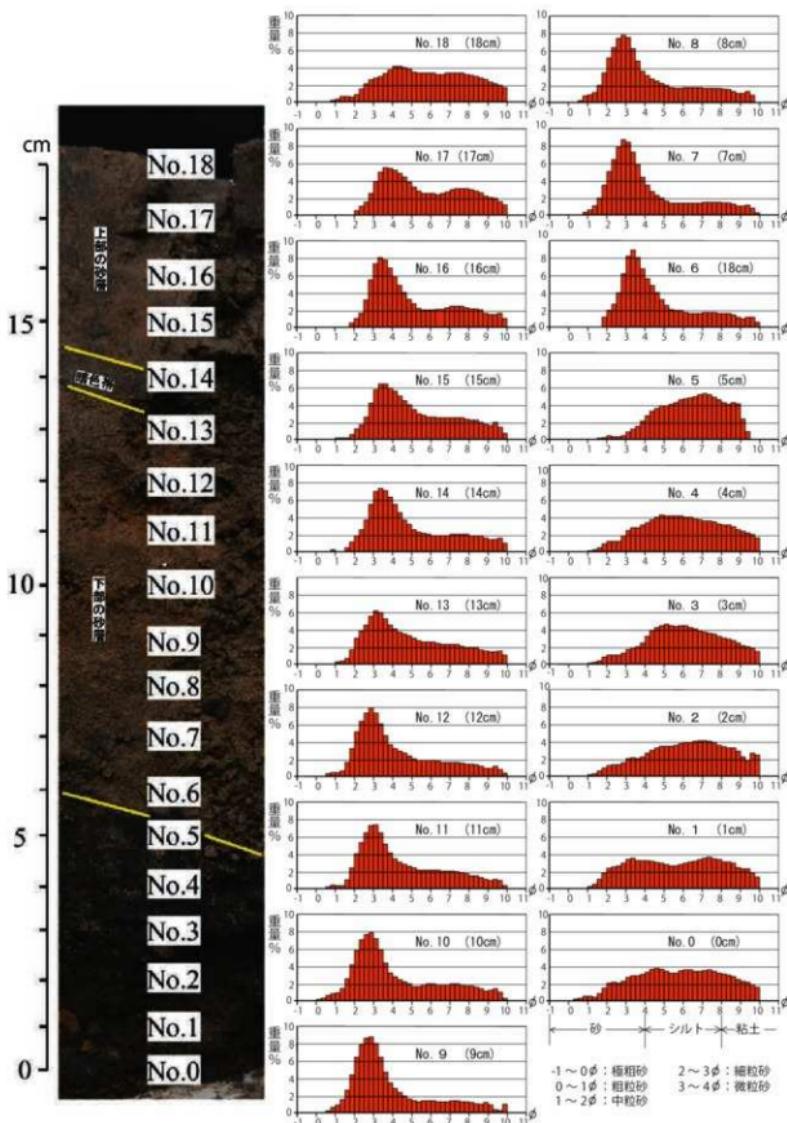
写真3 SD10161 連結溝連結溝のイベント堆積物 (西から)

試料採取は 2012 年 7 月 10 日に実施し、土層断面から横 7cm 奥行き 5cm、上下の長さ 18cm の角柱状に採取した。これらの堆積物は細～微細砂を主体とし、さらにシルト・粘土分も多く含まれることから、細粒堆積物の粒度組成を求めるために設計されているレーザー回析式粒度分析装置 (Malvern Instruments 社製 Hydro 2000MU) を用いて分析を行った。本装置は粗粒側が 0ϕ (1mm)、細粒側は 12ϕ ($0.1\mu\text{m}$) までの計測が可能である。ここでは自然堆積物の分析を目的としているため、粗粒側を 0ϕ 、細粒側は 10ϕ ($1\mu\text{m}$) に限定して分析を行った。柱状に採取された土柱を下から 1cm 每にスライスし、No.0 ~ No.18までの分析試料を取り出した。第 95 図に示すように、No.0 ~ 5 は砂層より下位のシルト質堆積物、No.6 ~ 13 は砂層の下部層、No.14 ~ 16 は砂層の上部層、そして No.17-18 は砂層上位のシルト質堆積物に相当する。

試料 No.0 ~ 5 は、主にシルト～粘土から構成される堆積物であり、砂分は僅かであること、そして腐植物を多く含むことから後背湿地堆積物と判断される。

試料 No.6 ~ 13 は、 3ϕ (0.125mm) 付近の細粒砂・微粒砂を主体とし、シルト分、粘土分を含む細粒かつ淘汰の悪い堆積物である。腐植物の混入がほとんどないこと、他地域の自然堤防堆積物と類似した粒度組成を示すことから、河川氾濫にともなう堆積物と判断される。

試料 No.14 ~ 16 は、 $3 \sim 4 \phi$ (0.125 ~ 0.63mm) の微粒砂にピークが認められるが、シルト・粘土分も比較的多く含まれる。下位に堆積する試料 No.6 ~ 13 に対してより細粒な河川起源の堆積物であると考えられる。



第95図 SD10061 連結溝のイベント堆積物 粒度分析結果

試料 No.17、18 は、砂層直上の堆積物である。微粒砂にピークが見られるもの、次第にシルト・粘土分へと粒径が小さくなっている。下位に堆積する試料 No.14～16 に連続する上方細粒化の傾向を読み取ることができる。試料 No.14～16 よりさらに粒径が小さくなる氾濫末期の堆積物と判断される。

以上の通り、No.6～16までの試料は粒径はいずれも 3 φ 前後よりも細粒な堆積物により構成されている点、シルト・粘土分を多く含んでいる点から、河川氾濫にかかる堆積物であると考えられる。

(3) 多賀前地区に見いだされる貞觀地震津波層当時期の砂質堆積物の堆積原因

以上のように多賀前地区で今回みいだされた砂質堆積物は、いずれも砂分を多く含むものの微粒砂が中心であり、さらにシルト・粘土分も相当に含むことなどから、河川氾濫に起因する洪水堆積物であると判断される。

文 献

松本秀明(1977)：「仙台付近の海岸平野における微地形分類と地形発達－粒度分析法を用いて－」『東北地理』29、229-237

Friedman, G.M. (1961) : Distribution Between Dune, Beach and River Sands from Their Textural Characteristics. *Journal of Sedimentary Petrology*, 31, 514-753

Friedman, G.M. (1967) : Dynamic Process and Statistical Parameters Compared for Size Frequency Distribution on Beach and River Sands, *Journal of sedimentary Petrology*, 37, 327-354

第8章 総括

1. 東西大路跡以南における土地利用の変遷

(1) 南1西2区における土地利用の変遷

南1西2区は、北辺がSX10東西大路跡、東辺がSX1250西1道路跡、西辺がSX30西2道路跡、南辺がSX1300南1道路跡で区画され、区画南西隅が南1西2道路交差点となる1町規模の区画で、庭園（造り水）のある国司館跡と評価されている。

方格地割の変遷についての近年の調査・研究成果²⁸、山王遺跡多賀前地区的旧調査成果及び今回の発掘調査成果をもとに検討すると、南1西2区の土地利用状況の変遷は、以下のようにまとめられる（第96図）。なお、ここでの遺構期の設定と年代的位置付けは旧調査成果を踏襲した。

①A期 8世紀代

北西から南東に向けて蛇行しながら流れるSD1111河川がほとんど埋没し、その周間に北西から南東に偏する畑跡や材木塙、小規模な掘立柱建物が作られた段階。区画成立前の遺構群で、8世紀代のA1期と8世紀後半のA2期に細分されている。

A1期には北西から南東方向の区画溝（SD164・2036・3050）があり、北と南に位置するこれら区画溝の間の空間が主に耕作域（畑地）として利用されていた。

A2期には、北がSA19材木塙跡（後に造営されるSX10東西大路の南側溝より南約15mの東西方向材木塙跡）、南がSD2228区画溝（後に造営されるSX1300南1道路の北側溝より北約30mの東西方向区画溝）で区画される南北約100mの範囲が主に耕作域（畑地）として利用されていた。また、このSA19材木塙跡の北約100mには同方向のSA831材木塙跡があり、SA19材木塙跡とSA831材木塙跡の間が掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡で構成される居住域となっていた。これら材木塙跡と区画溝は、後に建設される東西大路跡と同様の方向で、約100mを単位とした地割りの存在が想定されている。

②B1期 9世紀前葉頃

南1西2区の成立段階。掘立柱建物跡10棟を検出し、主屋は明らかではないが、中には廂付建物や床束を持つものもある。区画北部中央から南に向けて7回屈曲しながら、区画南部中央に向かって流れるSD1020A溝、これに伴う水利施設と推定される大土壙を2箇所検出し、庭園（造り水）遺構と評価される。今回の調査では、SD1020A溝とSK2298大土壙、これを繋ぐSD10061連結溝に新旧2時期あることが新たに判明した。

南1西2区の1町全域を占有し、施釉陶器が多く出土して中国産輸入陶磁器も出土したこの国司館跡は、四～五位が1町以上、六位が1/2～1/4町を班給された藤原京、平城京での宅地班給のあり方からみると、正六位下である介以下の国司の宅地であったとはとても考えられない。「守」墨書き土器が旧調査、今回の調査併せてこの区画内より5点出土していることからみても、国守館跡と考えられる。

③B2期 9世紀中葉頃

区画北半部から中央部で、造り水遺構のSD1020A溝をほぼ同位置で改修するとともに、中央部以

南では南に向けて流れていたこの溝を東に位置する西1道路の西側溝に接続するように改修した段階。掘立柱建物跡21棟を検出し、B1期よりも建物数が倍増している。庭園を構成する造り水遺構を伴い、施釉陶器、中国陶磁器も多く出土し、在地の食膳具も多いことから、B1期と同様に奢侈品を多く消費する饗宴の場であり、1町を占有する国守館跡と推定される。

南側で東に折れ曲がるように流れるSD1020B溝の南側には、南・東二面廂付東西棟を中心にコ字形配置を取る一郭もある。この西側、B1期にSD1020A溝、SD10061連結溝、SK2298大土壙があった一郭は、本期には埋没して窪みとなっていた状態であったとみられる。本期の終末にはこの窪み箇所にSX10233イベント堆積物の砂層が自然堆積し、この付近一帯が砂押川の氾濫によって冠水したことがわかった。

④ B3期 9世紀後葉頃

B2期の終末に南1西2区のうち少なくとも南東部一帯が砂押川の氾濫で冠水したことが知られるので、本期はその復興期として位置付けられることになる。区画北西部の建物構成や造り水遺構には大きな違いは認められないが、中央部では建物数が激減し、南東部では建物の構成や配置が大きく変化している。特に南東部ではB1期の造り水遺構埋没後の窪みに堆積したイベント堆積物の砂層よりも新しい東西方向のSF10231小溝状遺構群が一時期営まれ、その後に掘立柱建物が建設されている(第17図)。そして、南東部では、廂付建物を中心としたコ字形構成の配置から、ほぼ同規模の南北棟をコ字形に配置するようになり、建物の配置・構成も変化している。

⑤ B4期 10世紀前半頃

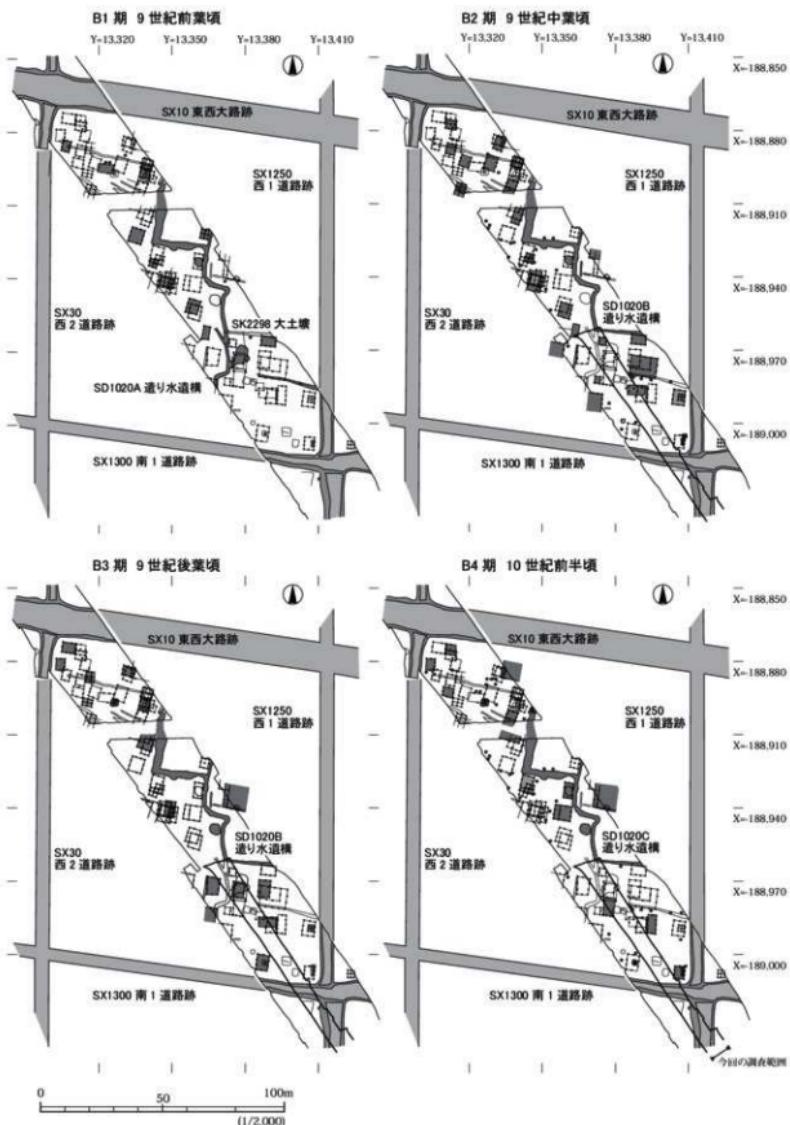
造り水を構成するSD1020B溝をほぼ同位置でSD1020C溝に改修した段階。中央北側の北から2番目の屈曲部に接して流れ込む南北溝が新たに付け加えられている。その南側にはSD1020C溝を挟んで東側に西廂付南北棟、西側に南北棟2棟が北妻を揃えて配置されているが、主屋は未検出である。

なお、旧調査では区画南東部のSA3035材木壠跡と南北方向のSF2260小溝状遺構群をB1期、区画北西部のSF32小溝状遺構群をB2期に位置付けているが、遺構の新旧関係や1町全域を占有する国守館跡であるという土地利用の観点からみても疑問である。区画成立前のA期に相当するものと考えられる。また、旧調査ではB4期に南北方向のSF2202小溝状遺構群(烟)が北部に存在するとした。旧調査ではSF2202小溝状遺構群は造り水を構成するSD1020C溝よりも古いことを確認していたが、SD1020A造り水遺構造営直前のSX2121整地層との関係は不明としていた。今回の調査では、SF2202小溝状遺構群と一連の小溝状遺構群をSX2121整地層直下で検出したので、旧調査の見解を改め、SF2202小溝状遺構群を造り水遺構造営前のA期に構成される、と訂正する。

(2) 南2西1区における土地利用の変遷

南2西1区は、北辺がSX1300南1道路跡、東辺がSX1850西0道路跡、西辺がSX1350西1道路跡、南辺がSX1900南2道路跡で区画され、区画南西隅が南2西1道路交差点となる1町規模の区画である。

方格地割の変遷についての近年の調査・研究成果、山王遺跡多賀前地区の旧調査成果、及び今回の発掘調査成果をもとに検討すると、南2西1区の土地利用状況の変遷は以下のようにまとめられる(第



第96図 南1西2区における主要遺構の変遷

97図)。なお、ここでの遺構期の設定と年代的位置付けは、南1西2区の遺構期に対応させ、旧調査の遺構期を併記した。

①A期(旧調査A期) 8世紀代

区画成立前の遺構群で、SD2228区画溝(後に造営されるSX1300南1道路の北側溝より北約30mの東西方向区画溝)とその南約100mに位置する東西方向のSD1602A河川で区画された南北約100mの範囲が居住域(竪穴住居跡群)、SD1602A河川以南が耕作域(畑地)となっている。

②B1・2期(旧調査B期) 9世紀前葉～中葉頃

本区に接する北側に南1西2区が成立し、本区北辺にSX1400南1道路、西辺にSX1350西1道路が施工され、東側に砂押川本流のSD2000A河川(運河)が運河として河川改修された段階。SX1400南1道路跡とSD1602B河川跡の間の南北約90m、SX1350西1道路とSD2000A河川の間の東西約100mの範囲が居住域(工房を含む竪穴住居跡群)、SD1602B河川よりも南側が耕作域(畑地、後に南側が水田に転用)として利用されている。その後、この耕作域は後に南2道路が施工される位置に東西方向の大畦畔が作られ、その南北両側が水田域に作り替えられている(第44・47図)。その転用時期は、前後の遺構期との関係からみて、9世紀中葉頃と推定される。また、北側の水田域は痕跡的で残りが悪い(第43図)。本期における北側の土地利用状況からみて、SD1602B河川が北限と考えられる。

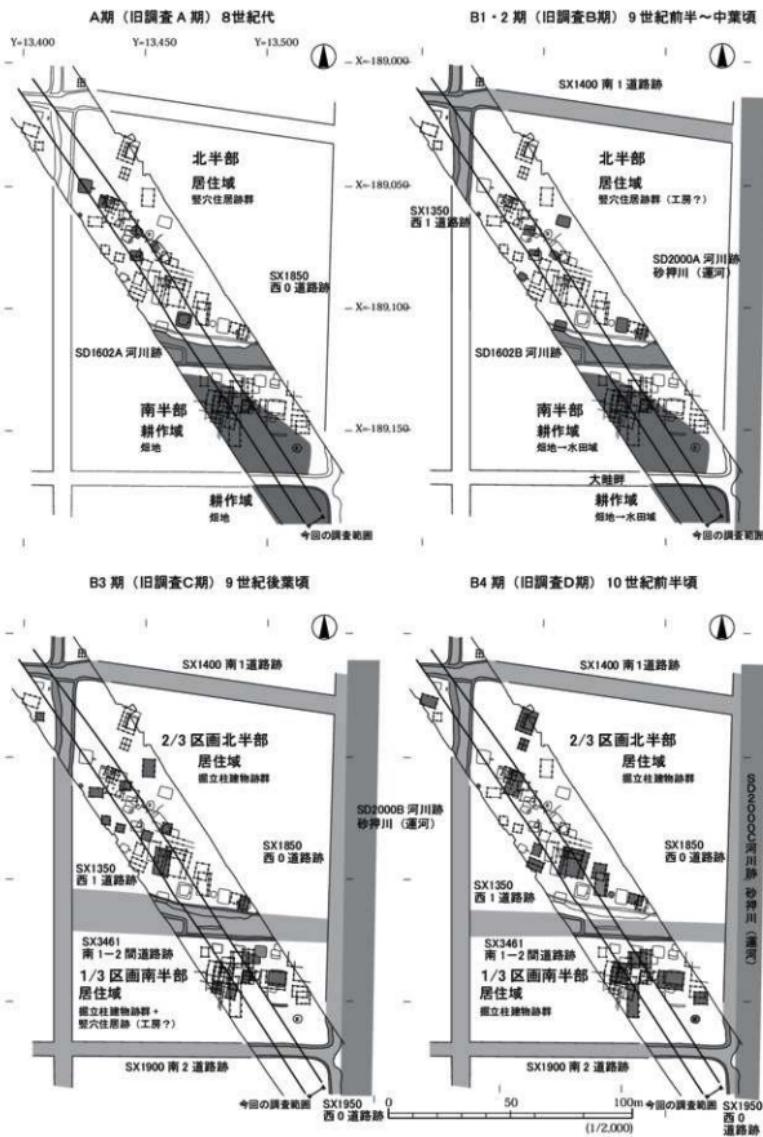
また、本期終末に属し、西辺を区画する西1道路路面上を抉り込んで堆積するSX10114イベント堆積物の砂層を検出した。この頃、この一帯がSD2000A砂押川の河川氾濫で災害にあったことがうかがえる。SD1602B河川の埋没したのもこれに関連する可能性が考えられる。

③B3期(旧調査C期) 9世紀後葉頃

SX1300南2道路、SX1850西0道路、SX1350南1—2間道路が新たに造営され、四辺を道路で区画された南2西1区が成立した段階。埋没したSD1602B河川跡上面を整地した後に、SX1350南1—2間道路が施工され、東西方向のこの小路によって本区は北半部(南北約85m、東西約100m)と南半部(南北約45m、東西約100m)に二分されている。これは、区画を南北に3分割して北側約2/3町の大きな区画と南側約1/3町の小区画に二分したものとみられる。北半部では桁行5間、梁行3間の南北棟1棟があるものの、多くは小規模な建物跡からなり、南半部では小規模な建物跡とカマドがなく工房の可能性のある竪穴住居跡から構成され、北半部とは使われ方が異なるようである。建物の方向は北で東に5~10°程偏るものが多い。北半部、南半部とも国守館跡と推定される南2西1区と比べると施釉陶器の出土量が激減し、ここにも居住者の階層差がうかがえる。

④B4期(旧調査D期) 10世紀前半頃

SX3461南1—2間道路で区画を二分する構成はB3期と同様である。北半部は、東・西・北三面廂付き南北棟(身舎桁行4間、梁行3間)や桁行5間、梁行3間の南北棟など規模の大きな建物跡が目立ち、他に倉庫を含む小規模な建物跡から構成される。建物の方向は北で東に15°前後偏るものが多い。南半部は二面廂付き東西棟や桁行5間、梁行2間の南北棟など規模の大きな建物跡、小規模な建物跡、井戸跡などから構成される。建物の方向は北で東に5~10°程偏るものが多い。



第97図 南2西1区における主要遺構の変遷

(3) 南2道路以南における土地利用の変遷

旧調査成果と今回の発掘調査成果をもとに検討すると、南2道路以南の土地利用状況の変遷は、以下のようにまとめられる。

① A期 8世紀代

SD2000 河川跡右岸地域では、SF3627 小溝状遺構群からなる耕作域（畠地）として利用されている。2時期の変遷があり、南北方向のSF3627A 小溝状遺構群から東西方向のSF3627B 小溝状遺構群に作りかえられている（第44・47図）。一方、砂押川左岸地域では、8世紀後半頃には畠地ではなく SF3700A 水田として利用されていた（第76・77図）。東西方向の大畦畔が検出され、この後に SX1900 南2道路の下に位置して作られることになる東西方向の大畦畔との間が約 110 mで、条里地割の約 1町に相当することから、条里を反映している可能性がある（宮城県教育委員会 1996b、p.108）。

② B 1・2期 9世紀前半～中葉頃

SD2000A 河川跡右岸地域では、SF3627B 小溝状遺構群（畠地）から SF3627B 水田に作り直され、畠地から水田域に変化している。その後、この耕作域は後に南2道路が施工される位置に東西方向の大畦畔が作られ（宮城県教育委員会 1996b、p.108）、その南北両側が SF3700B 水田域に作り替えられている（第44・47図）。その転用時期は、南2西1区における前後の遺構期との関係からみて、9世紀中葉頃と推定される。また、SD2000A 河川跡左岸地域では、9世紀前半頃には SF3700A 水田から SF3700B 水田に作り直されている。そして、本期の終末にはこの SF3700B 水田と水田域内の湿地の上を覆う SX10234 イベント堆積物の砂層が検出され、この区域の広範囲が SD2000A 砂押川の氾濫で冠水したことがうかがえる。

③ B 3期 9世紀後葉頃

SD2000B 河川跡右岸地域では、SF3700B 水田跡の廃絶後の9世紀後葉頃、SF3700B 水田の東西方向の大畦畔の上に SX1900 南2道路、SD2000B 河川右岸に沿って西0道路が施工された。これに伴って南2西0道路交差点の南西側区画（南3西1区）は新たに居住域となり、掘立柱建物跡 1棟が検出されている。一方、SD2000B 河川跡左岸区域では、SX10240 東0道路が新たに作られた。被害を受けた SF3700B 水田域が部分的に SF3700C 水田域に作り直されているが、形状は不揃いで一定していない（第77～78図）。

④ B 4期 10世紀前半頃

SD2000C 河川跡右岸地域の南3西1区の状況は不明だが、区画北辺の SX1900 南2道路、東辺の SX1950 西0道路は維持されている。SD2000C 河川跡左岸区域でも SX10240 東0道路が維持されている。また、SF3700C 水田が廃絶して、居住域となり、小規模な掘立柱建物跡が数棟建てられるようになる。

2. イベント堆積物の要因

第7章で取り上げた4箇所のイベント堆積物は、年代幅、層相、珪藻分析結果が類似していることから、同一時期に起きたイベントである可能性が高いとみられる。

9世紀前半～10世紀前葉頃の間、陸奥国に起きたイベントには、貞觀11年(869)陸奥国大地震に

伴う貞觀津波が知られている。この記事には、「驚濤涌潮、潮涸漲長、忽至城下。」と記されており、津波が発生して河川を遡上し、忽ち陸奥国府多賀城の城下に至ったことが知られている（『日本三代実録』貞觀 11 年 5 月 26 日癸未条）。仙台市沼向遺跡発掘調査報告書（仙台市教育委員会 2010）や付章 1 で論じられているように、古代の砂押川の下流には潟湖が存在すると推定されている。この記事と潟湖の存在からは、七ヶ浜町淡浜に開口していた下流の潟湖を通って、古代の砂押川を津波が遡上して多賀城城下にまで達し、河川が氾濫した可能性のあることがうかがえる。

今回、山王遺跡多賀前地区で検出された 3 箇所のイベント堆積物と市川橋遺跡八幡地区で検出された 1 箇所のイベント堆積物は、海水種珪藻をわずかに含み、下流域の潟湖に生息した可能性のある湖沼沼澤湿地指標群珪藻を多く含む 9 世紀前半～10 世紀前葉頃の間の河川氾濫堆積物であることから、貞觀 11 年（869）陸奥国巨大地震に伴って当時の砂押川を遡った津波に起因する可能性がある。

陸奥国府域に津波が到達したか否かについては、発掘調査資料ではこれまでよくわからなかった。今後、さらに多くのイベント堆積物の類例が増え、さらに多くのイベント堆積物の分析試料を集めが必要があるものの、発掘調査資料に基づき、貞觀津波の実態を解明するための手掛かりが得られた。

3. 南 1 西 1 道路交差点近くの SX10090 橫位合口土師器甕棺墓

南 1 西 1 道路跡交差点の南西コーナーから南西約 1.5 m に位置して、甕棺墓が 1 基検出された。ロクロ土師器長胴甕と非ロクロ土師器長胴甕を底部が外側になるように対向させ、その間に焼成前に底部と水平方向に体下部を切り落としたロクロ土師器長胴甕を横位に連結させている。長胴甕 3 点はいずれも煮沸された痕跡はなく、中央部の長胴甕が焼成前に体下部～底部を水平に切り落としていることから、中央部の長胴甕だけではなく、両端の長胴甕も甕棺墓専用に製作された可能性が高い。

中の土壤をすべて水洗選別した結果、ヒトの幼児の乳歯小破片 156 点（うち乳臼歯 17 点）、骨小破片 46 点を検出した。鑑定の結果、下顎第一乳臼歯、下顎第二乳臼歯、上顎・下顎第一大臼歯の 4 点が接合され、埋葬されたのは 2 歳（24 か月）かそれよりもやや前の幼児と判明した（付章 2）。

長胴甕 3 点を 3 連結した甕棺の外側長は 91cm、内側長は 88cm、頭部や胸部にあたる位置にあたると思われる合口にした箇所の内径（長胴甕の口頭部内径）は 17.6cm である。身長 88cm 以下、頭径・胸部径 17.6cm 以下（頭回・胸部回 55cm）でないと、この甕棺墓の中にヒトを一次埋葬の状態で埋葬することはできない。現代人の調査データを用いて検討すると、2 歳程度の幼児はこの大きさの甕棺墓にそのまま一次埋葬可能であることが判明した（付章 2）。3 連結された甕棺墓の各部位毎に土壤を採取して水洗選別すれば、歯がどの部位から出土したのか特定可能であったが、残念ながら調査の過程で指示が徹底されず、こうした土壤採取は行っていない。今後の課題としたい。

陸奥国府多賀城跡の横位合口土師器甕棺墓は、方格地割内の道路交差点や道路近くが 7 例、方格地割外が 12 例（集団墓地 8 例、単独墓 4 例）、計 19 例になる（柳澤和明 2012a）。旧調査で検出された道路交差点や道路近くの 6 例は、いずれも祭祀に関わる埋設土器遺構として報告された。全国で調査により検出された古代の横位合口土師器甕棺墓は多数あるが、ヒトの歯が検出された例は皆無で、本例が最初となる。本例が 2 歳程の幼児専用の一次埋葬甕棺墓と判明した意義はきわめて大きい。また、甕棺墓が検出された際には、中の土壤をすべて持ち帰って水洗選別することが今後は必須となる。

第9章　まとめ

1. 弥生時代中期（樹形圓式期）

調査区北端部の橋脚部を対象に弥生時代中期（樹形圓式期）の遺物包含層や遺構の存在の有無を確認するため該当層準まで調査したが、古代以前の河川跡に大きく壊され、これらは検出されなかった。

2. 古墳時代前期（塩釜式期）

旧調査で検出した古墳時代前期（塩釜式期）の水田跡と用水路の東延長の一部を検出した。

3. 奈良時代

北より南に向けて約 100 m 間隔で、①居住域（掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡等）、②耕作域（畑地）、③居住域（竪穴住居跡群）、④耕作域（畑地）となる土地利用状況を再確認した。①の北辺は東西方向の SA19 材木塀、①と②の間は東西方向の SA831 材木塀、②と③の間は東西方向の SD2298 区画溝、③と④の間は東西方向の SD1602B 河川跡でそれぞれ区画されている。さらに南側の西側は畑地、後に掘削される SD2000 河川左岸区域では水田域となっていた。条里地割りを反映した可能性も考えられる。

4. 平安時代

①南 1 西 2 区では、庭園（造り水）遺構を作う国守館跡が 9 世紀前葉頃の B 1 期、9 世紀中葉頃の B 2 期、9 世紀後葉頃の B 3 期、10 世紀前半頃の B 4 期の 4 時期にわたり変遷することを再確認した。

②南 2 西 1 区では、区画成立前の 9 世紀前半～中葉頃の B 1・2 期には、東西方向の SD1602B 河川を挟んだ北側が北西に隣接する国守館を支えた竪穴住居群からなる居住域、河川を挟んだ南側が耕作域（畑地）として土地利用されていた。9 世紀後葉頃の B 3 期には四辺が道路で区画された区画が成立して、埋没した河川跡上に南 1～2 間道路が施工されて区画が二分され、北半部が掘立柱建物からなる居住域、南半部が掘立柱建物と竪穴住居からなる居住域へと土地利用が変化し、10 世紀前半頃の B 4 期にもこれが引き継がれていることを再確認した。

③南 2 道路以南では 9 世紀前半～中葉頃の B 1・2 期には SD2000 河川右岸が畑地から水田域に変わり、左岸では水田が作り直されている。9 世紀後葉頃の B 3 期にはその両岸に西 0・東 0 道路が施工され、右岸では小規模な掘立柱建物からなる居住域となり、左岸では水田が一部作り直されている。10 世紀前葉頃の B 4 期には左岸でも水田域から小規模な掘立柱建物からなる居住域となっている。

④南 1 西 2 区、南 2 西 1 区では B 2 期と B 3 期の間の 9 世紀中葉頃、南 2 道路以南では 9 世紀中葉頃の水田域にそれぞれイベント堆積物の砂層が存在し、9 世紀中葉～後葉にかけて調査区の広範囲が冠水した状況が判明した。イベント堆積物の分析により、砂押川の氾濫による海水種珪藻などを含む堆積物とわかった。貞觀 11 年（869）陸奥国巨大地震に伴う津波の週上に起因する可能性があり、これまで調査でよくわからなかった貞觀地震・津波の痕跡を解明する手掛かりが得られた。

⑤西 1 道路東側溝より馬 1 頭が解体されない状態で出土し、貞觀地震との可能性も考えられた。

⑥南 1 西 1 道路交差点近くの横位合口土師器甕棺墓の中から、2 歳程のヒト幼児の歯が検出された。

古代の横位合口土師器甕棺墓で、ヒト幼児歯が検出された全国初めての貴重な出土例となった。

註

- 註 1 國土地理院では震災前の標高値を近似的に震災後の標高値に補正するプログラム「PatchJGD(標高版)」もWeb公開している。このプログラムを用いて前述4点の座標の地盤沈下量を推計すると、26.7cmとなる。この値も電子平板で再実測した標高値に基づく地盤沈下量と近似している。調査区付近では震災に伴う地殻変動で30cm近く地盤沈下したと推定される。今回の調査や本遺跡北東の多賀城跡城内、及び多賀城市埋蔵文化財センターが実施した周辺遺跡で行った発掘調査での「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」に伴う地殻変動の推定は近似する。多賀城跡周辺では東に約3.2m、南に約1.0m、東南東に約3.4m地殻が変動し、30cm程地盤沈下したものとみられる。
- 註 2 今回の調査では、この他、南2西2区の北東隅がわずかにかかり、豎穴住居跡1軒、横位合口土師器壺棺墓1基を検出した。便宜的に、SX10090 横位合口土師器壺棺墓については隣接する南2西1区に、SI10123 豊穴住居跡については南2西1区の豎穴住居跡の項目の冒頭に事実記載した。
- 註 3 多賀城跡城内・城外の主な基準土器群は、第7章の1補注参照。
- 註 4 地質学・堆積学・地形学では、通常の静態な堆積環境下とは明らかに異なる特殊で短期間の自然現象(大波・津波・洪水・高潮など)によって、運ばれて堆積した砂や泥などの堆積物のことを「イベント堆積物」と呼んでいる。詳細は本章の各イベント堆積物の事実記載、及び本書第7章を参照。
- 註 5 「赤焼土器」と旧調査報告書(宮城県教育委員会1995・1996a)で記載している土器は、宮城県多賀城跡調査研究所が多賀城跡の継続的な発掘調査・研究を通して初めて明らかにし、その後もこの名称を使用してきており「須恵系土器」のことである。本書では「赤焼土器」の代わりに「須恵系土器」の名称を使用する。
- 註 6 灰白色火山灰は、十和田a火山灰と一緒に呼ばれる広域火山灰と同じだが、宮城県では灰白色火山灰と呼び習わしてきた。これは、十和田カルデラのマグマ水蒸気爆発(過去2,000年間に日本列島で起きた最大の火山噴火)によって、東北地方の広範囲に分布する広域火山灰である。噴火年代は、通説(町田洋他1981)では915年(『扶桑略記』延喜15年(915)7月13日条「出羽国言上土雨」灰高二寸、諸郷農桑枯損由...)。考古学的には912年(秋田県大館市道目木遺跡埋没家屋の年輪年代)~934年(陸奥国分寺七重塔の焼失年代:『日本紀略』承平6年閏正月15条)の間となる。
- 註 7 旧調査の報告書では、南3西1区においてSF3627 小溝状遺構群→SB3685 建物跡→SF3700B 水田跡→南2道路跡→SB3619 建物跡という変遷を想定していた(宮城県教育委員会1995, pp.290・291)。南2道路造営以前に畠跡から居住域に変わり、その後に水田域に変わってから道路が造営されるという変遷はきわめて考えにくい。また、SB3685 建物跡の方がSF3700B 水田跡よりも新しいと読み取れる平面図も図示されている(同書, p.300、第239図)。したがって、SB3685 建物跡については、SF3627A・B 小溝状遺構群(畠跡)、SF3700B 水田跡と重複し、いずれよりも新しい、と判断した。
- 註 8 SD2000 河川跡(古代の砂押川本流)の河道の位置の変更の原因については、これまで言及されてこなかった。平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震では、本遺跡周辺の地殻は南東に約3m移動し、30~38cm程地盤沈下している。M 8クラスの巨大地震と推定される貞觀11年(869)陸奥国巨大地震でもこれに近い程度の地殻変動があったとみてよいだろう。そして、貞觀地震に伴う地殻変動の影響によって、当時の砂押川の河道の位置が東にずれ、砂押川右岸が次第に離水したとみられよう。なお、貞觀11年(869)陸奥国巨大地震後に河道の位置が東にずれた現象は、本地点から北西約1kmに位置する新市川橋の建設に伴う橋脚部分の調査でも認められている(宮城県教育委員会2009)。
- 註 9 陸奥国府多賀城跡の方格地割の変遷については、これまで多賀城跡城外で行われてきた大規模発掘調査や関連する研究成果(高倉敏明1992、菅原弘樹1993、千葉孝弥1993・1994a・1994b・1995、高野芳宏・菅原弘樹1997、平川南1999、山中章2000、鈴木孝行2006)を受け、近年では方格地割I期(8世紀末~9世紀初頭頃)、方格地割II期(9世紀初頭~中葉頃)、方格地割III期(9世紀後葉~10世紀前葉頃)、方格地割IV期(10世紀前葉以降)の4時期にわたって段階的に変遷し、II期とIII期の間を多賀城跡第IV期(貞觀11年(869)陸奥国巨大地震後の復興期)の開始期である貞觀11年(869)とするという見解で一致している(鈴木孝行2010、武田健一2010a・b、千葉孝弥2010、村松稔2013、柳澤和明2013a・b)。

引用文献

- 秋山国三 1968 「平安京における宅地分配と班田制」同志社大学人文科学研究所『社会科学』第10号 p.33 ~ 61
- 吾妻俊典 2004 「多賀城とその周辺におけるロクロ土師器の普及開始年代」『宮城考古学』第6号(宮城県考古学会) pp.187 ~ 196
- 吾妻俊典 2005 「奈良時代における多賀城の土器」『古代の土器研究 聖武朝の土器様式』(古代の土器研究会第8回シンポジウム) pp.84 ~ 99
- 安倍辰夫・平川南編 1989 「多賀城碑—その謎を解く」(雄山閣出版)
- 家原圭太 2012 「第4章 平城京における宅地の構造・分布・変遷」西山良平・藤田勝也編『平安京と貴族の住まい』(京都大学学術出版会) pp.157 ~ 192
- 家原圭太 2013 「多賀城と古代都城」『宮城考古学』第15号(宮城県考古学会) pp.173 ~ 190
- 桑原滋郎・高野芳宏・千葉孝弥 1993 「掘り出された近世の様子」『多賀城市史 第2巻 近世・近現代』
- 菅原大助・箕浦幸治・今村文彦 2002 「西暦869年貞觀津波による堆積物に関する現地調査」『月刊海洋号外』No. 28(総特集「津波研究の最前線—過去の津波の事例研究—」) pp.110 ~ 111
- 菅原弘樹 1993 「多賀城周辺の様子」『日本歴史』第544号 pp.87 ~ 95
- 鈴木孝行 2006 「多賀城外の方格地割」『第32回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp.86 ~ 97
- 鈴木孝行 2010 「多賀城外の方格地割」『考古学ジャーナル』第604号 pp.14 ~ 18
- 仙台市教育委員会 1997 『五本松遺跡「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書』(仙台市文化財調査報告書第99集)
- 仙台市教育委員会 2010 『沼向遺跡第4 ~ 34次調査』(仙台市文化財調査報告書第360集)
- 高倉敏明 1992 「多賀城周辺の計画的地形について」『条里制研究』第8号(条里制古代都市研究会) pp.36 ~ 54
- 多賀城市教育委員会(高倉敏明) 1980 『館前遺跡—昭和54年度発掘調査報告一』(多賀城市文化財調査報告書第1集)
- 多賀城市教育委員会(千葉孝弥) 1990 『新田遺跡(第4・11次調査報告)』(多賀城市文化財調査報告書第23集)
- 多賀城市教育委員会(石川俊英・相沢清利) 1991a 『山王遺跡—第9次発掘調査報告書一』(多賀城市文化財調査報告書第26集)
- 多賀城市教育委員会(千葉孝弥・石本敬編) 1991b 『山王遺跡—第10次調査概報(仙塩道路建設に伴う八幡地区調査)一』(多賀城市文化財調査報告書第27集)
- 多賀城市教育委員会(千葉孝弥編) 1992 『山王遺跡—第12次調査概報(仙塩道路建設に伴う八幡地区調査)一』(多賀城市文化財調査報告書第30集)
- 多賀城市教育委員会(千葉孝弥・伊藤浩) 1995a 『高崎遺跡—第11次発掘調査報告書一』(多賀城市文化財調査報告書第37集)
- 多賀城市教育委員会(千葉孝弥・鈴木孝行) 1997 『山王遺跡I—仙塩道路建設に係る発掘調査報告書一』(多賀城市文化財調査報告書第45集)
- 多賀城市教育委員会(千葉孝弥・武田建市・鈴木孝行編) 1999 『市川橋遺跡—第23・24次調査報告書一』(多賀城市文化財調査報告書第55集)
- 多賀城市教育委員会(千葉孝弥編) 2001 『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書I一』(多賀城市文化財調査報告書第60集)
- 多賀城市教育委員会(千葉孝弥・鈴木孝行) 2002 『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書4一』(多賀城市文化財調査報告書第67集)
- 多賀城市教育委員会(千葉孝弥・鈴木孝行編) 2003 『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II一』(多賀城市文化財調査報告書第70集)
- 多賀城市教育委員会 2004a 『市川橋遺跡—第34・35・37・38次調査報告書一』(多賀城市埋蔵文化財調査報告書第74集)
- 多賀城市教育委員会(千葉孝弥・鈴木孝行編) 2004b 『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書III一』(多賀城市文化財調査報告書第75集)

告書Ⅲ一』(多賀城市文化財調査報告書第75集)

多賀城市教育委員会(武田健市) 2006『山王遺跡 第58次調査報告書』(多賀城市文化財調査報告書第86集)

多賀城市教育委員会(島田敬・廣瀬真理子) 2007『高崎遺跡-第56次調査報告書一』(多賀城市文化財調査報告書第89集)

多賀城市教育委員会(村松稔・吉田智治) 2008『山王遺跡 第60・64次調査報告書』(多賀城市文化財調査報告書第94集)

多賀城市史編纂委員会 1991『多賀城市史 第4巻 考古資料』

高野芳宏・菅原弘樹 1997『第六章第五節 古代都市多賀城』多賀城市史編纂委員会編『多賀城市史 第1巻 原始・古代・中世』(多賀城市) pp.335~367

武田健市 2010a『多賀城廃寺と多賀城南面の様子』『第36回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp.115~134

武田健市 2010b『多賀城と城下の木簡出土遺構』木簡学会多賀城特別研究集会『古代東北の城柵と木簡』 pp.1~25

館野和己 2005『平城京の形態と機能』『東アジアにおける古代都市と宮殿』(奈良女子大学21世紀COEプログラム報告集Vol.5) pp.5~31

千葉孝弥 1993『多賀城周辺の道路遺構』『古代交通研究』第2号(古代交通研究会) pp.35~40

千葉孝弥 1994a『多賀城周辺遺跡の様相』『第20回古代城柵官衙遺跡検討会資料』 pp.57~62

千葉孝弥 1994b『多賀城周辺の道路遺構』『季刊考古学』第46号 pp.56~59

千葉孝弥 1995『多賀城城外の道路と方格地割り』『古代文化』第47巻第4号 pp.45~54

千葉孝弥 1997『第十章 考古学からみた中世の多賀城』『多賀城市史 第1巻 原始・古代・中世』 pp.549~591

千葉孝弥 2008『桓武朝期の多賀城』国立歴史民俗博物館編『歴博フォーラム 桓武と激動の長岡京時代』(山川出版社) pp.95~96

千葉孝弥 2010『多賀城周辺の古代道』『月刊文化財』560号(特集 古代道路の意義と保存・活用) pp.34~37

奈良国立文化財研究所 2010『平城京 奈良の都のまつりごとくらし』

平川南 1982『付章 律令制下の多賀城』宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政序跡 本文編』 pp.429~471

平川南 1999『古代地方都市論』『国立歴史民俗博物館研究報告』第78集 pp.1~30

平川南 2012『東北「海道」の古代史』(岩波書店)

町田洋・新井房夫・森脇広 1981『日本海を渡ってきたテフラ』『科学』51 pp.562~569

宮城県教育委員会(赤澤靖章) 1990『山王遺跡-仙塩道路建設関係遺跡八幡地区調査概報一』(宮城県文化財調査報告書第138集)

宮城県教育委員会(菅原弘樹ほか) 1991『山王遺跡-仙塩道路建設関係遺跡 平成2年度発掘調査概報一』(宮城県文化財調査報告書第141集)

宮城県教育委員会(菅原弘樹ほか) 1992『山王遺跡-仙塩道路建設関係遺跡 平成3年度発掘調査概報一』(宮城県文化財調査報告書第147集)

宮城県教育委員会(菅原弘樹・吾妻俊典ほか) 1994a『山王遺跡I-古墳時代中期遺物包含層編一』(宮城県文化財調査報告書第161集)

宮城県教育委員会(後藤秀一・村田晃一編) 1994b『山王遺跡八幡地区的調査-県道泉塩釜線関連調査報告書I-』(宮城県文化財調査報告書第162集)

宮城県教育委員会(菅原弘樹ほか) 1995『山王遺跡II-多賀前地区遺構編一』(宮城県文化財調査報告書第167集)

宮城県教育委員会(菅原弘樹・高橋栄一・佐藤憲幸・古川一明) 1996a『山王遺跡III-多賀前地区遺物編一』(宮城県文化財調査報告書第170集)

宮城県教育委員会(菅原弘樹・佐藤憲幸ほか) 1996b『山王遺跡IV-多賀前地区考察編一』(宮城県文化財調査報告書第171集)

- 宮城県教育委員会（佐藤則之・佐藤恵幸編）1997『山王遺跡V－第1分冊（八幡地区）－』、『山王遺跡V－第2分冊（伏石地区・考察）－』（宮城県文化財調査報告書第174集）
- 宮城県教育委員会（村田晃一編）1998『山王遺跡町地区的調査－県道泉塩釜線関連調査報告書II－』（宮城県文化財調査報告書第175集）
- 宮城県教育委員会（佐藤則之・菅原弘樹・吉野武）1999『発掘ダイジェスト－山王・市川橋遺跡－』
- 宮城県教育委員会（佐久間光平・古川一明ほか）2001a『市川橋遺跡の調査－県道「泉－塩釜線」関連調査報告書III－』（宮城県文化財調査報告書第184集）
- 宮城県教育委員会（村田晃一編）2001b『山王遺跡八幡地区的調査2－県道「泉－塩釜線」関連調査報告書IV－古墳時代後期SD2050B河川跡編』（宮城県文化財調査報告書第186集）
- 宮城県教育委員会 2003（吉野武編）『市川橋遺跡』（宮城県文化財調査報告書第193集）
- 宮城県教育委員会（吉野武編）2004『山王遺跡伊勢地区的調査－県道「泉－塩釜線」関連調査報告書V－』（宮城県文化財調査報告書第198集）
- 宮城県教育委員会（大和幸生・佐藤貴史編）2007『市川橋遺跡の調査－県道「泉－塩釜線」関連調査報告書VI－』（宮城県文化財調査報告書第209集）
- 宮城県教育委員会（柳澤和明・豊村幸宏編）2009『市川橋遺跡の調査 伏石・八幡地区－県道「泉－塩釜線」関連調査報告書VII－』（宮城県文化財調査報告書第218集）
- 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 1982『多賀城跡 政庁跡 本文編』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1986「第48次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1985 多賀城跡』
- 宮城県多賀城跡調査研究所（真山悟・柳澤和明編）1992「第60次調査」「第61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991 多賀城跡』
- 宮城県多賀城跡調査研究所（丹羽茂）1995「Ⅲ. 現状変更に伴う調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1994 多賀城跡』
- 宮城県多賀城跡調査研究所（丹羽茂）1996「第66次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1995 多賀城跡』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2002「第72次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2001 多賀城跡』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2013「V. 付章 1. 特別史跡多賀城跡附寺跡災害復旧事業」『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2012 多賀城跡』
- 村松稔 2013「多賀城跡城外の災害痕跡について」『第39回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp.61～72
- 柳澤和明 2010a「多賀城市田屋場横穴墓群の再検討」『東北歴史博物館研究紀要』第11号 pp.13～42
- 柳澤和明 2010b「多賀城市山王・市川橋遺跡における住社式～栗廻式期集落跡の様相」『宮城考古学』第12号（宮城県考古学会） pp.59～85
- 柳澤和明 2012a「多賀城の墓制」『考古学研究』第58巻第4号（通巻232号、考古学研究会） pp.67～86
- 柳澤和明 2012b「『日本三代実録』より知られる貞觀十一年（八六九）陸奥国巨大地震・津波の被害とその復興」『歴史』第119輯（東北史学会） pp.27～58
- 柳澤和明 2013a「発掘調査より知られる貞觀十一年（八六九）陸奥国巨大地震・津波の被害とその復興」『史林』96巻第1号（京都大学史学研究会） pp.5～41
- 柳澤和明 2013b「発掘調査からみた貞觀11年(869)陸奥国巨大地震の被害と復興」『宮城考古学』第15号（宮城県考古学会） pp.81～98
- 山下信一郎 1998「宅地の贈与と売買」古代都城制研究集会第3回報告集『古代都市の構造と展開』 pp.185～217
- 山中章 2000「多賀城方格地割と交通」『古代交通研究』第9号（古代交通研究会） pp.137～149
- 横山徹爾他 2012「乳幼児身体発育評価マニュアル」平成23年度厚生労働科学研究費補助金 成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業「乳幼児身体発育調査の統計学的解析とその手法及び利活用に関する研究」（H23-次世代・指定-005、研究代表者：横山徹爾国立保健医療科学院生涯健康研究部長）：<http://www.niph.go.jp/soshiki/07shougai/hatsuiku/> 公開 PDF
- 吉野武 2014a「陸奥の城柵と交通・交流」『第40回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp.107～122
- 吉野武 2014b「陸奥の城柵と交通・交流」『第40回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp.187～192

付章2 山王遺跡多賀前地区 SX10090 横位合口土師器甕棺墓出土の歯

鈴木敏彦（東北大学歯学部）

1. はじめに

宮城県多賀城市山王遺跡多賀前地区第4次発掘調査において、土壤内から発掘された甕棺内の土壤中からヒトと思われる歯および骨の破片が発見された。時代は棺に使われた土師器甕の特徴などから9世紀前葉とみられる。本稿はこれらの遺存体の形態学的分析結果を記すとともに、若干の考察を加えるものである。

2. 人骨の遺存状況

資料は甕棺墓内部から回収された土壤から、水洗選別により検出された多数の断片化した歯および骨の集積である（写真1～4）。

このうち骨片は約 $11 \times 6 \times 1\text{mm}$ 程度および $7 \times 3 \times 0.5\text{mm}$ 程度の細片2点が最大であり、いずれも骨の種類と部位を同定するには至らない。他にもおよそ $1 \sim 0.5\text{mm}$ 角 $\times 5\text{mm}$ 程度の類角柱状の細片が多数残されているが、木片と形状が類似しているため区別がつかないようなものも含まれ、人骨であるか否かも含めて詳細は不明である。

歯についても歯冠エナメル質と考えられる細片が多数遺存するが、歯冠の外形が完全に残るものは皆無であった。可能な限り破片の接合に努めたが、接合面が失われているものも多く、種類と部位の同定に至ったのは以下に述べる4点であった。

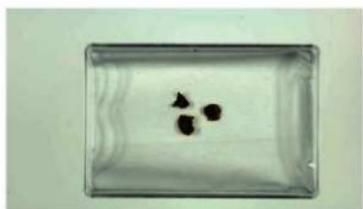


写真1 原資料 4mm メッシュで回収されたもの



写真2 同 2mm メッシュ



写真3 同 1mm メッシュ



写真4 同 1mm メッシュ

3. 歯の同定結果

(1) 下顎右側第二乳臼歯

3片の破片が接合したものである（写真5a）。エナメル質の厚さから乳歯と考えられ、形態的特徴から下顎右側第二乳臼歯の頬側面の近心半から近心面を経て舌側面の近心半に至る歯冠外周部と判断される。写真5bには現代人の下顎右側第二乳臼歯の該当部分を示す。咬合面のほとんどは欠損するが、断端にわずかに残る咬頭頂の部分には咬耗は認められない。

(2) 下顎左側第一乳臼歯

2片の破片が接合したものである（写真6a）。エナメル質の厚さから乳歯と考えられ、形態的特徴から下顎左側第一乳臼歯の頬側面の近心半とこれに続く咬合面の近心半と判断される。写真6bには現代人の下顎左側第一乳臼歯の該当部分を示す。残存する近心頬側咬頭頂の咬耗は認められない。

(3) 上顎左側第一大臼歯

2片の破片が接合したものである（写真7a）。エナメル質の厚さから永久歯と考えられ、形態的特徴から上顎左側第一大臼歯の咬合面の中央やや近心寄り、近心小窩から斜走隆線を経て遠心小窩に至る部分と判断される。写真7bには現代人の上顎左側第一大臼歯（模型）の該当部分を示す。

(4) 下顎左側第一大臼歯

单一の破片から同定できたものである（写真8a）。エナメル質の厚さから永久歯と考えられ、形態的特徴から下顎左側第一大臼歯の遠心咬頭周囲の遠心面およびこれに続く咬合面の一部と判断される。写真8bには現代人の下顎左側第一大臼歯（模型）の該当部分を示す。

4. 考察

(1) 1体分か、複数個体か

明らかな部位の重複があれば複数個体の同時埋葬が考えられるが、本資料では重複する歯はなかった。複数個体の存在を完全に否定することはできないが、残っている歯の破片の形態的特徴からは、同一部位と思われる破片は含まれておらず、複数個体である可能性は非常に低いと考えられる。

(2) 永久歯か、乳歯か

乳歯の構造的特徴として歯質の厚さが薄いことが挙げられる。乳歯のエナメル質の厚さは永久歯の約1/2とされ、破片状となった歯冠では破断面で比較観察可能である。前述のように種類が同定できた歯には乳歯と永久歯が共に含まれ、この他同定不可能であった細片にも明らかに厚いものと薄いものが混在している。

(3) 火葬骨か否か

本資料では歯の象牙質が欠落し、エナメル質のみが遺存している。この理由としては、土中での有機成分の分解により、無機成分が多いエナメル質のみが残ったためと考えられる。火葬のように高熱が歯に加えられた場合、300～400°C程度ではエナメル質・象牙質とともに炭化状態となり黒色を呈するが、700°C以上の熱を長時間加えると白色化し、また硬度も増すとされる（鈴木、1988）。本資料では亀裂の発生や、炭化・白色化のような明確な被熱の痕跡は見受けられないものの、多くの資料片

でエナメル質表面の自然な光沢が失われ、すりガラス状となっていることは熱を受けた可能性を否定することはできない。しかし熱作用で硬度を増すはずの象牙質が本資料では遺存していないことは熱作用の結果と解釈するにはやや不自然である。時代は異なるものの、例えば仙台市王ノ壇遺跡の中世段階の遺構群から出土した人歯（鈴木・菊地、2000）は火葬骨に伴って出土したものであるが、象牙質はエナメル質と同程度に形態を保って遺存している。さらに9世紀前半では一般民衆よりも相対的に優位な階層が火葬を採用したとされる（吉澤、1995）ことからも、本例が火葬骨である可能性は極めて低いと判断される。

(4) 被葬者の死亡時年齢

(2) で述べたように本資料には乳歯と永久歯とが混在しており、この点を踏まえてさらに詳細な検討を加える。幼小児古人骨の死亡時年齢は、現代人での歯の形成段階をそのまま当てはめて推定する方法が用いられる。これは過去における成長状態が現代人とほぼ同様の推移をたどることを前提としているが、過去の成長を直接検証することは不可能であるため、本稿でもこの方法に従って考察する。なお年齢比定のための基準値は文献によりかなりの差があるが、本稿では Ubelaker(1989) の成書の記載をもとに判断する。

まず年齢の下限である。確認された2本の乳歯は歯頸部まで完成していると判断される。永久歯のうち上顎第一大臼歯は歯頸部が遺存しないため判断不可能であるが、下顎第一大臼歯は少なくとも歯冠3/4までは完成していると考えられる。歯冠だけを考えれば第一乳臼歯の完成は生後5ヶ月頃、第二乳臼歯ではやや遅れて生後9か月頃、また第一大臼歯の歯冠3/4完成は生後18か月頃から2歳頃である。本資料では歯根は残存していないから歯根の形成段階は判断不能であり、乳歯の歯根が形成されていないことを意味するものではない。よって第一大臼歯がほぼ完成している2歳よりもやや前程度が年齢の下限と判断できる。

次に年齢の上限を考察する。確認された歯の咬合面には咬耗が認められず、歯は口腔内で機能していないことは明らかで、萌出後間もないか未萌出で顎骨内にある段階と推測される。第一乳臼歯の萌出は生後1歳過ぎ、第二乳臼歯では2歳頃、第一大臼歯では6歳頃である。第一大臼歯の萌出時には当然乳臼歯は咬耗を受けているから、第一乳臼歯が咬合を開始する2歳程度が年齢の上限と判断できる。

以上より、本被葬者の死亡時年齢は、上限・下限ともに2歳（24か月）かそれよりもやや前に収束すると考えるのが妥当であろう。

(5) 埋葬状況をふまえた検討

棺に使用された土器のサイズは、内側の長さが88cm、頭部や胸部の位置と思われる箇所の内径は17.6cm（周囲径では55cm）であるという。現代人（2000年調査）のデータ（横山他、2012）に基づけば、身長が88cmに至るのは男児で28か月、女児で30か月である。また頭囲、胸囲ともにこの年齢では55cm以下であり、現代人と古代人との成長差や肩幅を勘案したとしても遺骸にそのまま一次埋葬可能と考えられる。



写真 5a 同定した下顎右側第二乳臼歯

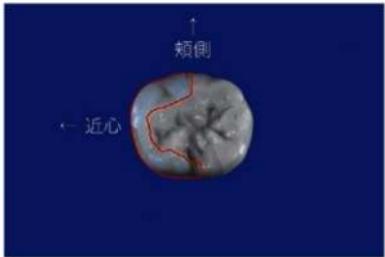


写真 5b 現代人の下顎右側第二乳臼歯該当部分



写真 6a 同定した下顎左側第一乳臼歯

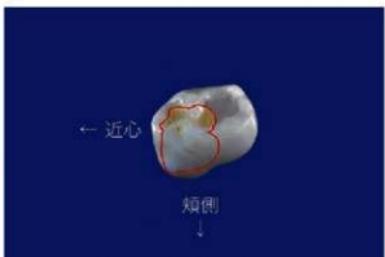


写真 6b 現代人の下顎左側第一乳臼歯該当部分

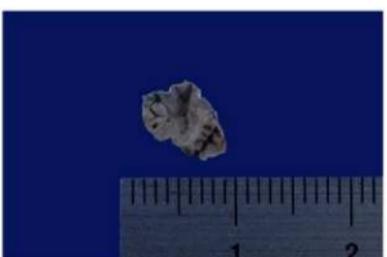


写真 7a 同定した上顎左側第一大臼歯

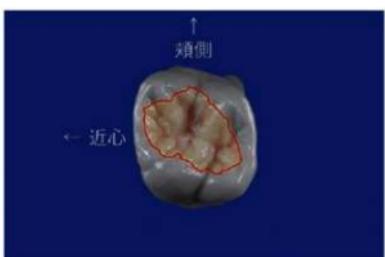


写真 7b 現代人の上顎左側第一大臼歯該当部分



写真 8a 同定した下顎左側第一大臼歯



写真 8b 現代人の下顎左側第一大臼歯該当部分

文献

- 鈴木和男（1988）法医学、承末書店、東京。
- 鈴木敏彦、菊地正嘉（2000）王ノ壇遺跡井戸堆積物中より出土した人歯、仙台市文化財調査報告書 第249集 王ノ壇遺跡—都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡—発掘調査報告書Ⅰ 第2冊 分析・写真図版編。
- Ubelaker D H (1989) Human skeletal remains second edition. Taraxacum, Washington, pp.63-69.
- 横山徹爾 他 (2012) 乳幼児身体発育評価マニュアル、平成23年度厚生労働科学研究費補助金「乳幼児身体発育調査の統計学的解析とその手法及び利活用に関する研究」報告書。
- 吉澤悟（1995）煙の末々—日本における火葬の導入と展開過程に寄せる想念—、東国火葬事始—古代人の生と死—、栃木県立博物館。

付章3 1号馬周辺堆積物中の珪藻化石群衆

藤根 久 ((株)パレオ・ラボ)

1.はじめに

珪藻は、10～500 μmほどの珪酸質殻を持つ单細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉、1988；安藤、1990；千葉・澤井、2014）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境（例えばコケの表面や湿った岩石の表面など）に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積環境について知ることができる。

ここでは、山王遺跡の多賀前地区で、南1西1道路交差点から約15m南の西1道路跡A東側溝上面から出土した1号馬の頭骨の周辺から採取された堆積物中の珪藻化石群集を調べ、堆積環境およびイベント堆積物の可能性について検討した。

2. 試料と方法

試料は、1号馬の周辺から採取された堆積物2点である（表1）。出土状況から、1号馬は解体されずに側溝に投げ込まれたか、あるいは不慮の事故などによって側溝内に落ち込んだと考えられている（第5章1、pp.37～39、図版9・41参照）。1号馬の頭部直下から9世紀中頃のものと推定されるロクロ土師器内黒環（第14図190）が出土した。

なお、1号馬出土箇所の北西約5mの西1道路路面上は梢円形に窪んで抉られ、特異な砂層「イベント堆積物」が堆積していた（第5章1、第11・13図）。この砂層は、粒度分析では河川砂と判断されたが、珪藻分析において汽水域や海洋性の珪藻化石が検出され、貞觀11年（西暦869年）陸奥国巨大地震に伴い潮上した津波による河川氾濫の可能性が指摘された（第7章、pp.164～186参照）。

各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレバーラートを作製した。

表1 硅藻分析を行った試料

分析No.	遺跡	遺跡略号	地区	位置	層位	堆積物の特徴
1	山王遺跡	FX12	多賀前地区	西1道路A東側溝	1号馬頭骨直下土	黄灰色（2.5Y4/1）砂混じりシルト
2	山王遺跡	FX12	多賀前地区	西1道路A東側溝	1号馬頭骨まわりの土	黒褐色（2.5Y3/2）砂混じり粘土

(1) 濡潤重量約1gを取り出し、秤量した後ビーカーに移して30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を10回ほど繰り返した。(3) 混沌残渣を遠心管に回収し、マイクロビペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレバーラートを作製した。

作製したプレバーラートは顕微鏡下1500倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形（原則として半分程度残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率とし

て示した。また、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物 1g 当たりの殻数を計算した。なお、写真図版は、代表的な完形殻からなる珪藻種を掲載した。

3. 珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定し、千葉・澤井（2014）により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種（W）として、海水～汽水種は不明種（?）としてそれぞれ扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明（?）として扱った。

以下に、小杉（1988）が設定した海水～汽水域における環境指標種群と安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

[外洋指標種群（A）]：塩分濃度が 35 パーミル以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

[内湾指標種群（B）]：塩分濃度が 26 ~ 35 パーミルの内湾水中を浮遊生活する種群である。

[海水藻場指標種群（C1）]：塩分濃度が 12 ~ 35 パーミルの水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群である。

[海水砂質干潟指標種群（D1）]：塩分濃度が 26 ~ 35 パーミルの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミニナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。

[海水泥質干潟指標種群（E1）]：塩分濃度が 12 ~ 30 パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミニナ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。

[汽水藻場指標種群（C2）]：塩分濃度が 4 ~ 12 パーミルの水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

[汽水砂質干潟指標種群（D2）]：塩分濃度が 5 ~ 26 パーミルの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。

[汽水泥質干潟指標種群（E2）]：塩分濃度が 2 ~ 12 パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

[上流性河川指標種群（J）]：河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

[中～下流性河川指標種群（K）]：河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

[最下流性河川指標種群（L）]：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

[湖沼浮遊生指標種群（M）]：水深が約 1.5m 以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

[湖沼沼沢湿地指標種群（N）]：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても

優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

〔沼沢湿地付着生指標種群（O）〕：水深1m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。

〔高層湿原指標種群（P）〕：尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを中心とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

〔陸域指標種群（Q）〕：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

〔陸生珪藻A群（Qa）〕：耐乾性の強い特定のグループである。

〔陸生珪藻B群（Qb）〕：A群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

4. 結果および考察

堆積物から検出された珪藻化石は、海水種が6分類群5属5種、淡水種が62分類群26属47種1変種であった。これらの珪藻化石は、海水域における4環境指標種群（A、B、C1、E1）、淡水域における6環境指標種群（K、M、N、O、Qa、Qb）に分類された（表2）。

以下では、各試料における珪藻化石の特徴と堆積環境について述べる。

（1）分析No.1（1号馬頭骨直下土）

堆積物1g中の珪藻殻数は 3.0×10^6 個、完形殻の出現率は41.1%である。淡水種が特徴的に多く、海水種を僅かに伴う。環境指標種群では、湖沼沼沢湿地指標種群（N）や湖沼浮遊生指標種群（M）、陸生珪藻A群（Qa）が特徴的に多く出現し、陸生珪藻B群（Qb）や沼沢湿地付着生指標種群（O）、中～下流性河川指標種群（K）、海水種の内湾指標種群（B）や海水藻場指標種群（C1）、海水泥質干潟指標種群（E1）を伴う。

環境指標種群の特徴から、湖沼～ジメジメとした陸域などを伴う沼沢湿地環境が推定される。

（2）分析No.2（1号馬頭骨まわりの土）

堆積物1g中の珪藻殻数は 1.6×10^6 個、完形殻の出現率は42.6%である。淡水種が特徴的に多く、海水種を僅かに伴う。環境指標種群では、湖沼浮遊生指標種群（M）や湖沼沼沢湿地指標種群（N）、陸生珪藻A群（Qa）、沼沢湿地付着生指標種群（O）が特徴的に多く出現し、陸生珪藻B群（Qb）のほか、海水種の外洋指標種群（A）や海水藻場指標種群（C1）、海水泥質干潟指標種群（E1）を伴う。

環境指標種群の特徴から、湖沼～ジメジメとした陸域などを伴う沼沢湿地環境が推定される。

いずれの堆積物も湖沼～ジメジメとした陸域などを伴う沼沢湿地環境が推定され、外洋指標種群（A）あるいは内湾指標種群（B）などの海水種を僅かに伴う珪藻組成であった。

山王遺跡多賀前地区は、多賀城市山王地区の砂押川の河口から約7km上流の地点に位置する。この地点は、現在は比較的河口から近いため砂押川の潮上域と思われる。堆積環境の変遷の詳細は不明であるが、対象とした堆積物は汽水種珪藻化石を全く含んでいないこと、海水種珪藻化石が極端に少ないとから、河川による潮上域からは隔離された湖沼～ジメジメとした陸域などを伴う沼沢湿地環境と考えられる。堆積当時、僅かに検出された海水種珪藻化石は、津波によるイベントによる混入の可

能性があると考えられる。なお、上下層の珪藻化石組成を調べるなど、堆積環境の変遷について調べる必要がある。

さらに、北西約5mの西1道路路面上では梢円形に窪んで抉られた特異な砂層「イベント堆積物」が確認されており、その堆積物から汽水域や海洋性の珪藻化石が検出されている点を考慮すると、同時期に発生した津波堆積物の可能性が考えられる。

表2 堆積物中の珪藻化石産出表（種群は、千葉・澤井（2014）による）

No.	分類群	種群	試料1	試料2
1	<i>Cocconeis</i>	<i>acutellum</i>	C1	1
2	<i>Coccinodiscus</i>	<i>marginatus</i>	A	1
3	C.	spp.	?	1
4	<i>Cyclotella</i>	<i>stylorum</i>	B	1
5	<i>Diploemeis</i>	<i>smithii</i>	E1	3
6	<i>Nitzschia</i>	<i>cocconeiformis</i>	E1	1
7	<i>Achnanthes</i>	spp.	?	4
8	<i>Amphora</i>	<i>montana</i>	Qb	1
9	<i>Aulacosira</i>	<i>italica</i>	M	1
10	A.	<i>granulata</i>	M	5
11	A.	<i>islandica</i>	M	48
12	A.	<i>pensylvanica</i>	W	52
13	A.	<i>pusilla</i>	N	14
14	A.	spp.	N	72
15	A.	?	13	30
16	<i>Caloneis</i>	<i>bacillifum</i>	W	1
17	C.	<i>lauta</i>	W	1
18	<i>Cocconeis</i>	<i>placentula</i>	W	2
19	<i>Cymbella</i>	spp.	?	1
20	<i>Diadesmus</i>	<i>contenta</i>	Qb	1
21	<i>Diploemeis</i>	<i>ovalis</i>	W	2
22	D.	<i>parva</i>	W	1
23	D.	<i>yatakaensis</i>	W	1
24	D.	spp.	?	1
25	<i>Epithemia</i>	<i>adnata</i>	W	1
26	E.	<i>turgida</i>	W	1
27	E.	spp.	?	1
28	<i>Eunotia</i>	<i>bilobaria</i>	W	2
29	<i>Fragilaria</i>	<i>constricta</i>	N	3
30	F.	<i>nitzschioidea</i>	N	1
31	F.	<i>pinnaata</i>	S	4
32	F.	spp.	?	6
33	<i>Frustulia</i>	<i>vulgaris</i>	W	2
34	F.	spp.	?	1
35	<i>Gomphonema</i>	<i>parvulum</i>	W	4
36	G.	spp.	?	9
37	G.	<i>arcuata</i>	W	1
38	G.	<i>arcuata</i>	K	1
39	G.	spp.	?	1
40	<i>Nitzschia</i>	<i>angulifolia</i>	Qb	28
41	L.	<i>mitica</i>	Qb	7
42	M.	<i>undulata</i>	W	2
43	M.	<i>circinalis</i> var. <i>constricta</i>	K	1
44	M.	<i>navicula</i>	W	2
45	M.	<i>elginiensis</i>	O	3
46	M.	<i>veneta</i>	W	3
47	M.	spp.	?	6
48	N.	<i>ambigua</i>	W	1
49	N.	<i>parvula</i>	W	1
50	N.	<i>palae</i>	W	1
51	N.	spp.	?	1
52	P.	<i>barbata</i>	Qb	2
53	P.	<i>gibba</i>	O	5
54	P.	<i>interrupta</i>	W	11
55	P.	<i>viridis</i>	O	7
56	P.	spp.	?	1
57	P.	<i>microstauron</i>	W	2
58	P.	<i>nodosa</i>	O	1
59	P.	<i>subcapitata</i>	Qb	16
60	P.	<i>viridis</i>	O	2
61	P.	spp.	?	5
62	R.	<i>gibba</i>	W	14
63	R.	<i>gibberula</i>	W	13
64	S.	<i>obtusa</i>	Qb	1
65	S.	<i>phoenicenteron</i>	O	3
66	S.	spp.	?	2
67	S.	<i>anguusta</i>	W	12
68	S.	<i>minuta</i>	W	10
69	S.	spp.	?	4
70	S.	<i>alna</i>	W	8
71	S.	spp.	?	3
72	S.	<i>inequalis</i>	K	1
73	S.	<i>Unknown</i>	?	1
74	S.	?	7	4

No.	分類群	種群	試料1	試料2
1	外洋	A	1	1
2	内湾	B	1	1
3	海水藻場	C1	1	2
4	海水沈貯干潟	E1	1	3
5	海水不定・不明種	?	1	1
6	中～下流性河川	K	3	1
7	湖沼浮遊生	M	54	57
8	湖沼泥沼湿地	N	79	38
9	沼澤地付着生	O	8	21
10	陸生A群	Qb	51	33
11	陸生B群	Qb	19	8
12	広布種	W	64	52
13	淡水不定・不明種	?	43	31
14	その他の不明種	?	7	4
15	海水種	?	3	7
16	淡水種	?	321	240
17	合計	?	331	251
18	壳形殻の出現率(%)	?	41.1	42.6
19	堆積物1g当たり個数(個)	?	3.0 × 10 ⁶	1.6 × 10 ⁶

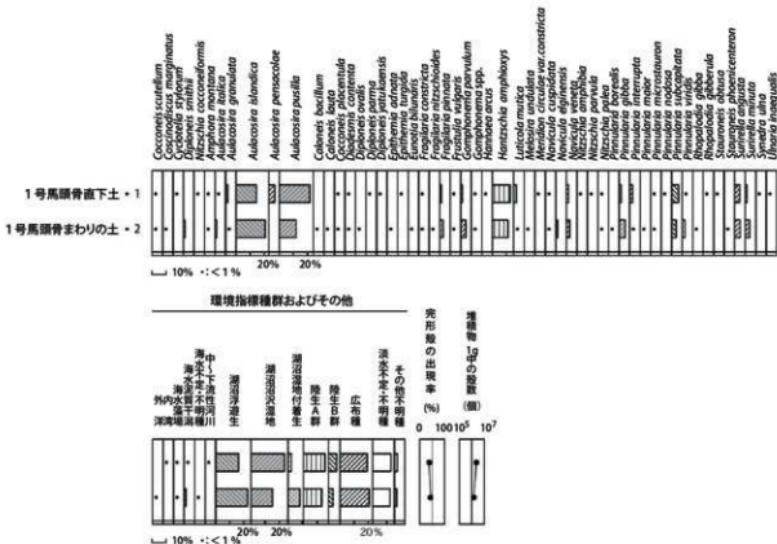


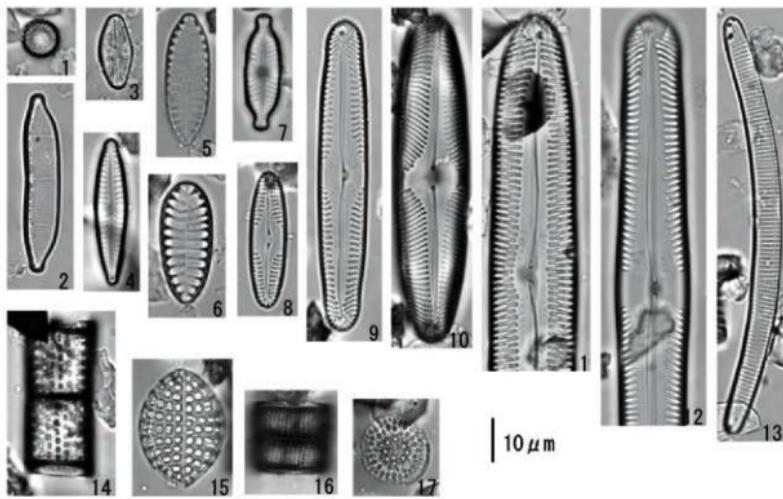
図1 堆積物中の珪藻化石分布図(主な分類群を表示)

5. おわりに

1号馬の周辺から採取された堆積物について珪藻分析を行った。その結果、いずれの堆積物も湖沼～ジメジメとした陸域などを伴う沼澤湿地環境が推定され、外洋指標種群(A)あるいは内湾指標種群(B)などの海水種を僅かに伴う珪藻組成であった。今回の分析結果は、津波によるイベントによる珪藻化石の混入の可能性を示唆する結果であった。

引用文献

- 安藤一男 (1990) 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42, pp.73-88.
- 千葉 崇・澤井裕紀 (2014) 「環境指標種群の再検討と更新」『Diatom』30, pp.7-30.
- 小杉正人 (1988) 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27, pp.1-20.



1. *Aulacosira pusilla* (No.1: 湖沼沼澤湿地指標種群(N)) 2. *Hantzschia amphioxys* (No.2: 陸生珪藻A群(Qa))
 3. *Luticola mutica* (No.1: 陸生珪藻A群(Qa)) 4. *Gomphonema parvulum* (No.2: 広布種(W))
 5. *Surirella angusta* (No.2: 広布種(W)) 6. *Surirella minuta* (No.1: 広布種(W))
 7. *Navicula elginensis* (No.2: 沼澤湿地付着生指標種群(O)) 8. *Pinnularia subcapitata* (No.2: 陸生珪藻A群(Qa))
 9. *Pinnularia gibba* (No.2: 沼澤湿地付着生指標種群(O)) 10. *Pinnularia microstauron* (No.2: 広布種(W))
 11. *Pinnularia viridis* (No.2: 沼澤湿地付着生指標種群(O)) 12. *Pinnularia gibba* (No.2: 沼澤湿地付着生指標種群(O))
 13. *Eunotia bilunaris* (No.2: 広布種(W)) 14. *Aulacosira granulata* (No.2: 湖沼浮遊生指標種群(M))
 15. *Cocconeis scutellum* (No.2: 海水藻場指標種群(C1)) 16. *Aulacosira pusilla* (No.2: 湖沼沼澤湿地指標種群(N))
 17. *Aulacosira islandica* (No.2: 湖沼浮遊生指標種群(M))

図版1 堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真

写真図版



昭和24年(1949)当時の道跡周辺航空写真 - 米軍撮影 R365-7 (縮尺約1/16,000)



平成5年(1993)の道跡周辺航空写真 - 建設省国土地理院撮影 C3-22 (縮尺約1/16,000)に、多賀城跡と城外道路跡、旧河川跡を合成

図版1 多賀城跡と山王遺跡・市川橋遺跡の航空写真



調査区遠景（南東上空より）



調査区遠景（南上空より）

図版2 調査区遠景（1）



調査区遠景（南上空より）



調査区遠景（北西上空より）

図版3 調査区遠景（2）



調査区北部空撮（真上上空より）



調査区中央部空撮（真上上空より）



調査区南部空撮（真上上空より）

図版4 調査区真上空撮



橋脚 71 道り水道橋周辺空撮



橋脚 70 周辺空撮

図版5 南1西2区真上空撮



橋脚 69+68 南1西1道路交差点空撮



橋脚 67+66 周辺空撮

図版6 南2西1区真上空撮（1）



橋脚 66・65周辺空撮



橋脚 64 南1—2箇道路跡周辺空撮

図版7 南2西1区真上空撮(2)



南1道路跡全景（東から）



南1道路跡完掘状況（東から）



南1西1道路交差点（北西から）

図版8 南1道路跡、南1西1道路交差点



1号馬出土状況遠景（南から）



1号馬出土状況（北から）



1号馬出土状況（東から）

図版9 西1道路跡A東側溝内出土1号馬



西1道路跡全景（北東から）



西1道路跡全景・路面構築土除去後（北東から）

図版 10 西1道路跡全景



西1道路跡路面断面（北から）



SX10114 砂層 (イベント堆積物) の分布 (南東から)



SX10114 砂層 (イベント堆積物) と路面整地Ⅰ断面 (北から)



SX10114 砂層 (イベント堆積物) 断面 (南から)



SX10114 砂層 (イベント堆積物) と路面整地Ⅰ断面 (北から)



SX10114 砂層 (イベント堆積物) と路面整地Ⅰ断面拡大 (北から)



SX10114 砂層 (イベント堆積物) と路面整地Ⅰ断面 (北から)



SX10114 砂層 (イベント堆積物) と路面整地Ⅰ断面拡大 (北から)

図版 11 西1道路跡路面上の SX10114 砂層 (イベント堆積物)



南 1-2 間道路南側溝と
古い SD1602 河川跡、
新しい SF1625 小溝跡群（東から）



南 1-2 間道路南側溝と
古い SD1602 河川跡、
新しい SF1625 小溝跡群（南東から）



S 南 1-2 間道路南側溝。
SD160B 河川跡完掘状況（北東から）

図版 12 南 1—2 間道路跡



南2道路跡、SF1625B小溝状造模群
検出状況（北西から）



D期南2道路跡（東から）



SD10238A・B区画溝
(南西から)

図版 13 南2道路跡、SD10238A・B区画溝



西0道路跡断面（北から）



西0道路跡、SD20008 河川跡
(南から)



東0道路側溝（北から）

図版 14 西0・東0道路跡



SD1020A 造り水道構
周辺全景（南東から）



SD1020A 造り水道構
周辺全景（北から）



SD1020A 造り水道構
周辺全景
(掘り上げ後、南東から)

図版 15 SD1020A 造り水道構周辺



SK2298 大土壤西壁断面（西から）



SK2298 大土壤西・北壁断面（西から）



SD10161 連結溝縦断面（北西から）



SD10161 連結溝内 SX10233 砂層分布（南東から）



SD10161 連結溝の SX10233 砂層断面（北西から）



SD10161 連結溝の SX10233 砂層断面（北西から）



SX10233 砂層と SD10082 断面（北から）



SX10233 砂層と SB10084 柱穴（北西から）

図版 16 SK2298 大土壤・SD10061 連結溝と SX10233 砂層（イベント堆積物）



図版 17 積穴住居跡（1）



SI10013 穂穴住居跡カマド
(南西から)



SI10015・10013 穂穴住居跡
完掘状況（西から）



SI10182 穂穴住居跡
完掘状況（西から）

図版 18 穂穴住居跡（2）



図版 19 積穴住居跡 (3)



SX10090 横位埋設合口土師器壺棺墓
(東から)



SX10090 横位埋設合口土師器壺棺墓
の復元 (西から)



SX1964 横位埋設合口土師器壺棺墓
(東から)

図版 20 横位合口土師器壺棺墓



SB1929 建物跡西妻棟通り下柱穴（南から）



SB3439 建物跡南東隅柱穴（南から）



SB10023 建物跡西側柱列北より 1 間目柱穴（西から）



SB10224 建物跡北西隅柱穴（東から）



SB10083 建物跡南西隅柱穴（東から）



SB10084 建物跡南西隅柱穴（東から）

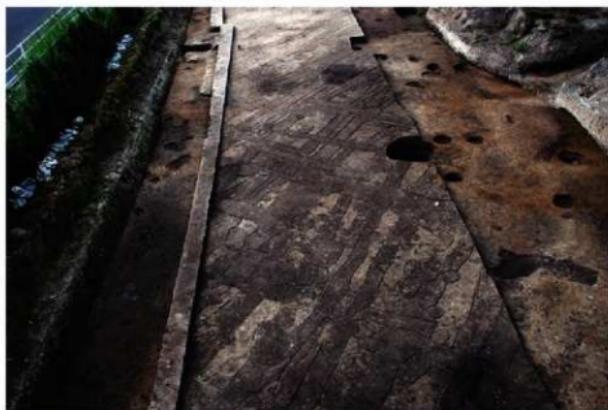


SB10084 建物跡南東隅柱穴（西から）



SB10085 建物跡東側柱列北より 2 間目柱穴（東から）

図版 21 主な掘立柱建物跡の柱穴断面



SF3627A・B 小溝状遺構群（南東から）



SF3627A・B 小溝状遺構群（南東から）



SD1602B 河川埋没後の SF1625
小溝状遺構群と南1-2間道路跡
(南から)

図版 22 小溝状遺構群（煙跡）



SF3700B水田跡
(橋脚 54・55、南東から)



SF3700B水田跡と SX10234 砂層
(橋脚 55～57、南東から)



SF3700B水田跡と SX10234 砂層
(橋脚 55～57、北西から)

図版 23 SF3700B水田跡と SX10234 砂層（イベント堆積物）



SX10234 砂層にかかるトレンチ設定（東から）



SX10234 砂層と SX10211 湿地断面（南東から）



SX10234 砂層断面（北から）



SX10234 砂層断面（北西から）



SX10234 砂層と湿地断面（北西から）



SX10234 砂層と湿地断面（西から）



SX10234 砂層断面拡大（西から）



SX10234 砂層と湿地断面（北西から）

図版 24 SF3700 水田域内の SX10234 砂層（イベント堆積物）と SX10211 湿地断面



箕浦・松本・山田先生による SX10234 砂層調査状況（北から）



箕浦・山田先生による SX10234 砂層剥ぎ取り準備（西から）



箕浦・山田先生による SX10234 砂層剥ぎ取り（西から）



箕浦・山田先生による SX10234 砂層剥ぎ取り（南東から）



SX10234 砂層柱状サンプル採取（北東から）



SX10234 砂層柱状サンプル採取（西から）



箕浦・松本・山田先生による造り水道構周辺の SX10233 砂層調査



松本先生による造り水道構周辺の SX10233 砂層調査

図版 25 砂層（イベント堆積物）の調査と断面剥ぎ取り



南1－2間道路南側溝と古いSD1602A
・B 河川跡断面（東から）



SD2000B・C 河川跡断面（北から）



SD2000B・C 河川跡断面（北東から）

図版26 SD1602・2000 河川跡断面



SD10132 旧河川跡断面（北東から）

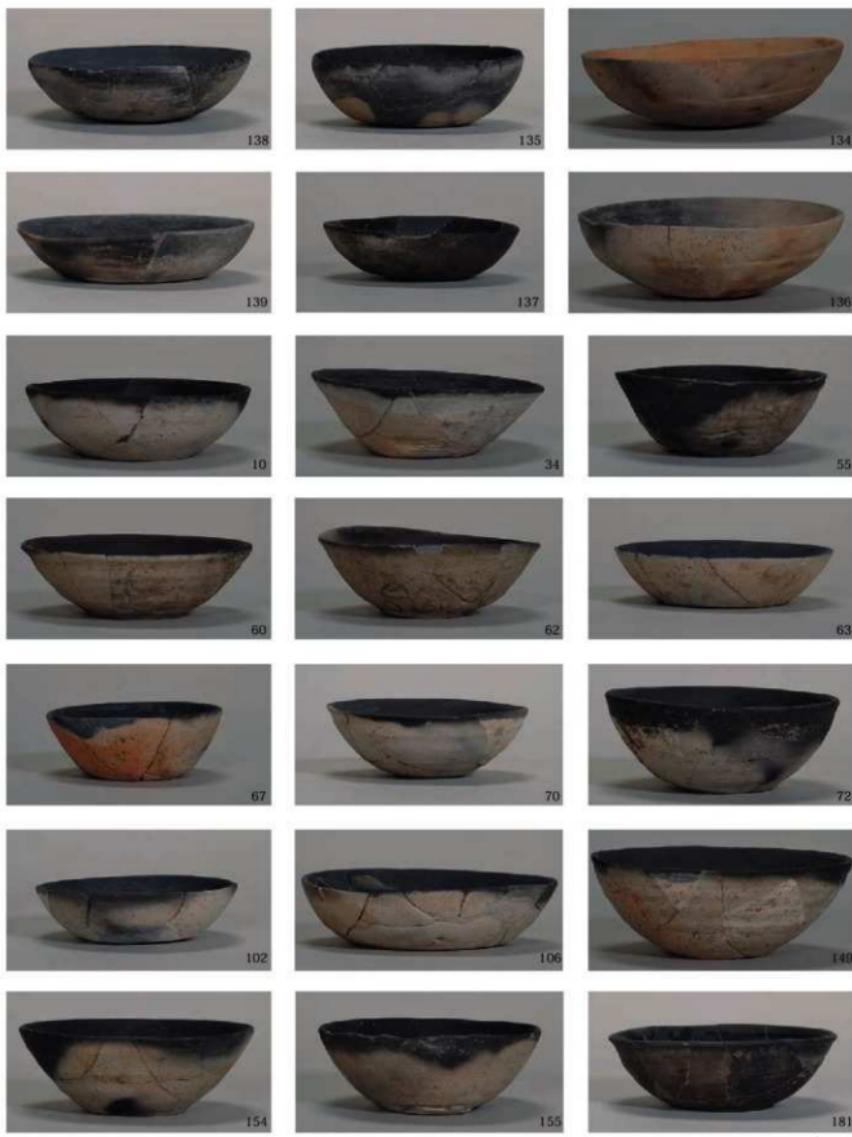


調査区西壁のⅢ層以下、
SD10132 旧河川跡断面（北東から）



調査区西壁のⅢ層以下、
SD10132 旧河川跡断面（北東から）

図版 27 橋脚 71 Ⅲ層以下の本調査



10・34・55・60・62・63・67・70・72・102・
 106・149・154・155・181：ロクロ土師器環
 134・136：非ロクロ土師器有段丸底环
 135・137・138・139：非ロクロ土師器丸底环
 10 : SK2298 大土壤下層
 34 : SK10185 土壤
 55 : 西1道路跡 A 東側溝
 60 : 西1道路跡 B 東側溝
 62 : 西1道路跡 C 東側溝
 63 : 南1道路跡 C 北側溝
 67 : 南1道路跡 A～C 北側溝
 70 : 南1道路跡 D 北側溝
 72 : 南1道路跡 D 南側溝
 102 : SH10013 住居跡床面
 106 : SH10019 住居跡床面
 63 : 南1道路跡 C 北側溝
 67 : 南1道路跡 A～C 北側溝
 70 : 南1道路跡 D 北側溝
 72 : 南1道路跡 D 南側溝
 102 : SH10013 住居跡床面
 106 : SH10019 住居跡床面
 134～139 : SK10140 上壤
 149 : 西0道路跡 D 西側溝
 154・155 : SD2000B 河川跡 7 層
 181 : SD2000B 河川跡 6 d 層

図版 28 遺物写真 (1) 土師器環



111



150



151



153



1



107



86



141

I・111・150～153：ロクロ土師器环

86：ロクロ土師器深碗

107：ロクロ土師器碗

141：菲ロクロ土师器内黑高台碗

S=1/3

I：SD1020A 遺り水

86：西1 道路跡上 東側溝

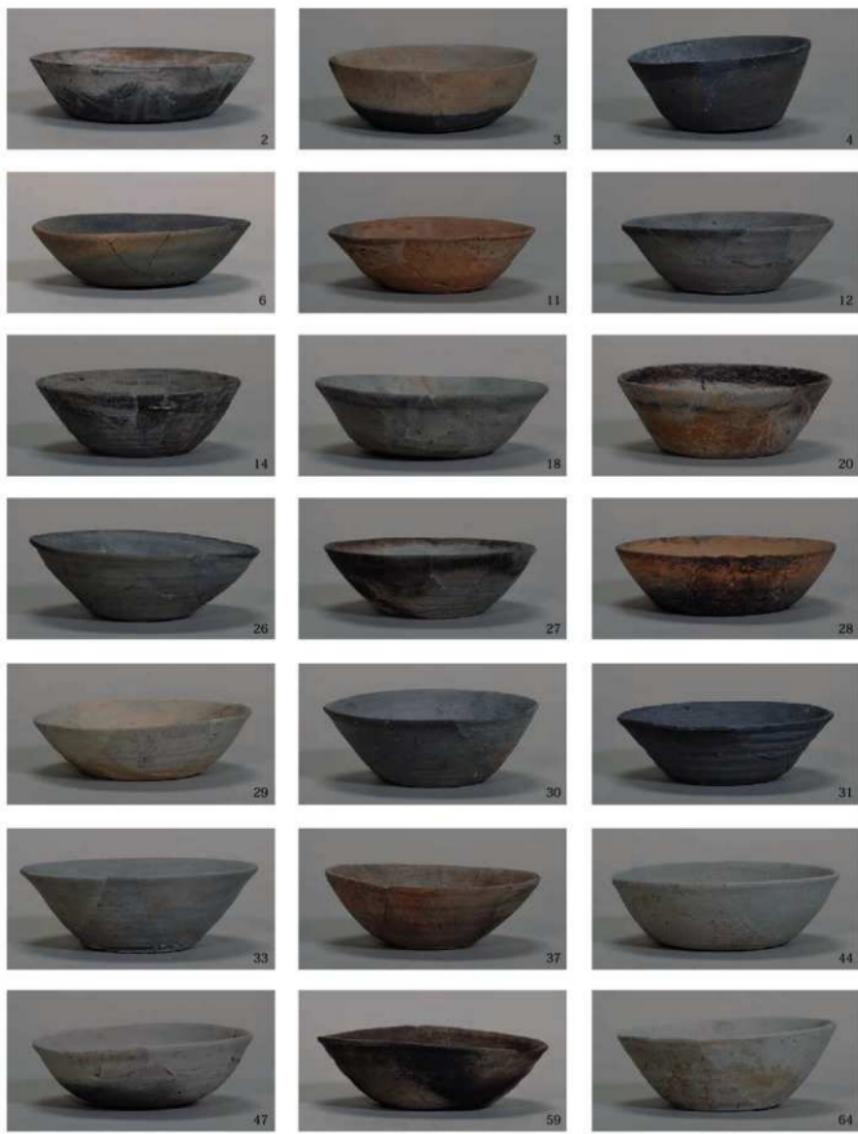
107：SH10019 住居跡

111：SH10125 住居跡内 SK2 土塼

141：SK10140 土塼

150～153：西0 道路跡路面 I

图版 29 遗物写真（2）—土师器环、碗



S = 1/3

2 ~ 4・6 : SD1020A 遺り水

11 : SK2298 大土壤 3・4 層

12 : SK2298 大土壤 2 層

14 : SK2298 大土壤上位のⅢa2・Ⅲa4 層

18 : SD10061 溝

20 : SD10038 溝

26 : SK10047 上壤

27 ~ 31・33 : SK10063 上壤

37 : SK10185 上壤

44・47 : 基本層Ⅲ a 層

59 : 西 I 道路跡 B 東側溝

64 : 南 I 道路跡 C 北側溝

図版 30 遺物写真 (3) 須恵器坏



65



108



113



130



131



144



179



180



162



163



5



174



145 S = 1/3

5・174：須恵器高台杯

5：SD1020A 遺り水

113：SI10134B 住居跡カマド検出面

162・163：SD2000B 河川跡 7層

65・108・113・130・131・144・

65：南1道路跡C 北側溝

130・131：基本層Ⅲ a層

174：SD10195B 河川跡

179・180：須恵器环

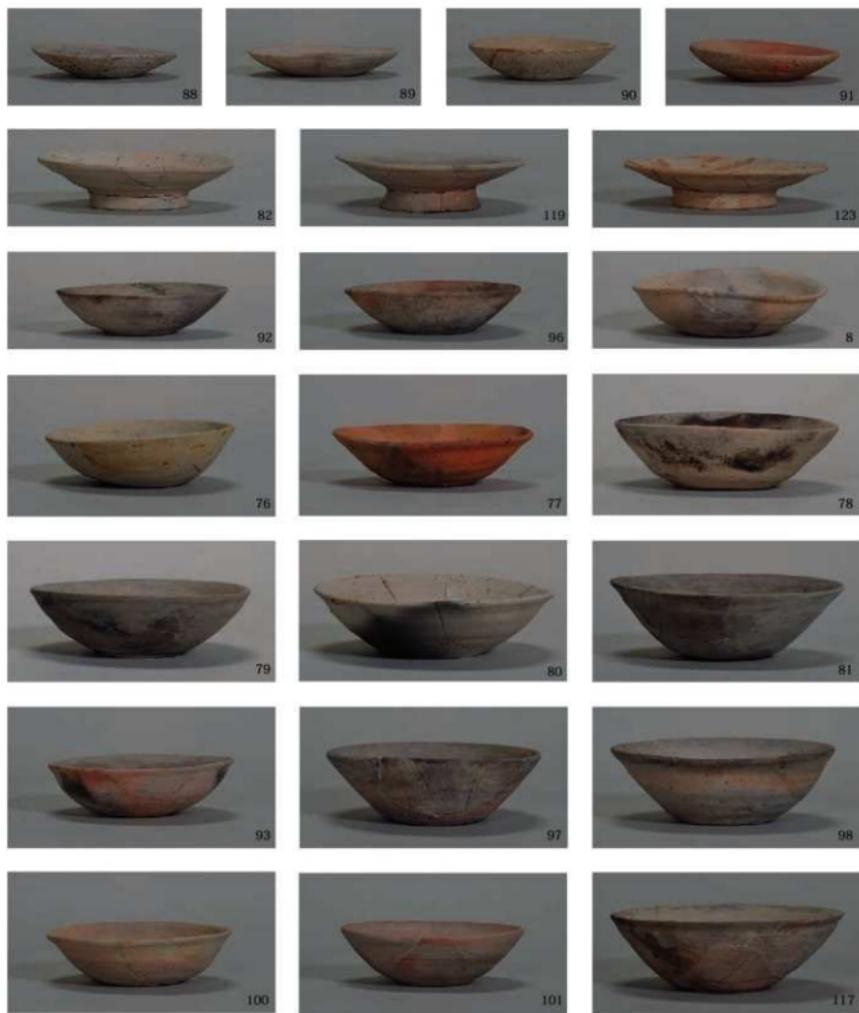
108：SI10019 住居跡床面

144・145：SK10140 土壌

179・180：SD3701A 講

145：須恵器鉢

図版 31 遺物写真（4）須恵器环、鉢



S = 1/3

8・76～81・93・97・98・100・

101・117：須恵系土器環

82・119・123：須恵系土器高台皿

92・96：須恵系土器小型环

88～91：須恵系土器小皿

8：SD1020C 遺り水

76：南I道路跡D北側溝

77～80・82：南I道路跡D南側溝

81：南I道路跡D北側溝

88・89：南I道路跡E南側溝

90・91・98：西I道路跡F西側溝

92：西I道路跡E西側溝

93：西I道路跡E 東側溝

96：南I道路跡E 期北連続溝

97：南I道路跡F 北側溝

100・101：南I～2間道路跡南側溝

117：SK10142 土壙

119：SK10151 土壙

123：Pt722

図版32 遺物写真（5）須恵系土器

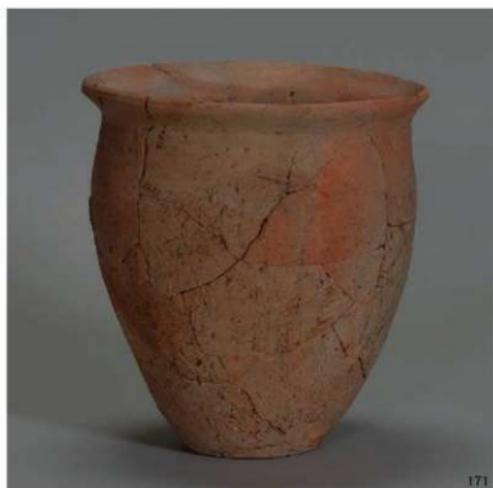


41 : 灰釉陶器段組
 49・118・121・125・148・161 : 須恵系上器環
 50・83 : 須恵系上器高台环
 68 : 灰釉陶器高台环
 99 : 屢足環
 129 : 灰釉陶器塼
 189 : 須恵器塼(漆容器)

41・49・50・129 : 基本層Ⅲa 層
 68 : 西1道路跡D東側溝
 83 : 南1道路跡D北側溝
 99 : 西1道路跡E西側溝
 118 : SK10151 土壙
 121 : SD1538C 溝
 125 : Pt742
 148 : 西0道路跡D西側溝
 161 : 西0道路跡路面3層
 189 : SD2000B 河川跡6a 層

S = 1/3

図版 33 遺物写真 (6) 須恵系土器、灰釉陶器、硬、漆容器須恵器塼



171



105



186



170



56



164

87

56: ロクロ土師器小型鉢

87・132: ロクロ土師器軒

105: 非ロクロ土師器小型甕

164: ロクロ土師器羽釜

170・171: ロクロ土師器長胴甕

186: ロクロ土師器小型甕

56: 西1道路跡A東側溝

87: 南1道路跡D～F北側溝

105: SH10137 住居跡カマド支脚

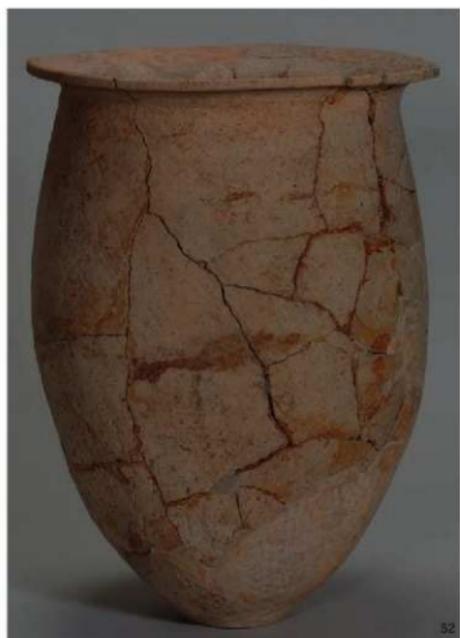
132: 基本層III a層

164: SD2000B 河川跡7層

170・171: SX1964 横位合口土師器甕棺蓋

186: SD2000B 河川跡6d層

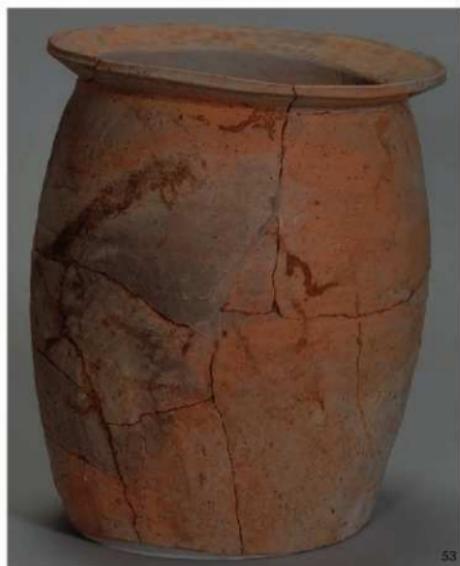
図版 34 遺物写真 (7) 土師器甕、鉢、羽釜、軒



52



54



53 S = 1/3

52・53：ロクロ土師器長胴甕
54：非ロクロ土師器長胴甕
52～54：SX10090 横位合口土師器甕棺墓



167



168

上段：SX10090 橫位合口土師器甕棺墓
中段：本調査出土の製塙土器破片全量 556点 .6382g
下段：西O道路跡出土の製塙土器破片
最下段：167：製塙土器口縁部破片 168・169：製塙土器体下部～底部破片
167：西O道路跡路面II 168：西O道路跡B西側溝 169：西O道路跡路面I

図版36 遺物写真 (9) SX10090 橫位合口土師器甕棺墓、製塙土器



図版 37 遺物写真 (10) 瓦



【土製品】



【石製品】



S = 1/3



SK10063土壤の頭巾出土状況

- 【土製品】 1～9：円盤状土製品 10～16：土鍤 17・18：編羽口
 1 : SD1020B・C造り水
 2 : SB10085建物跡東側柱列北より2間目柱穴柱抜取穴
 3 : SK2298大土壙下層
 4 : SK10183土壙
 5 : 西1道路跡路面Ⅰ構築土
 6・7 : 基本層Ⅲa層
 8 : 基本層Ⅲc2層
 9 : 南2道路跡F北側溝
 10 : 南1道路跡A～C南側溝

- 11 : 南1道路跡北側溝
 12 : 西0道路跡路面Ⅰ
 13 : SK10065土壙
 14 : 西1道路跡B東側溝
 15 : 南1・西1道路跡南西部遺構面
 16 : 南1道路跡F北側溝
 17 : SB3439建物跡南東隅柱穴掘方
 18 : 西1道路跡D東側溝

- 【石製品】 1 : 石帶（遠方） 2 : 石帶（九柄） 3～6 : 砥石

- 1 : 基本層Ⅲa層
 2 : Pit316
 3 : SB10083擬立柱建物跡南西隅柱穴掘方
 4 : SI3227住居跡堆積層
 5 : SK10140土壙
 6 : SK10063土壙
 【雲母片】 SI10013住居跡
 【琥珀】 SK10129土壙
 【頭巾】 SK10063土壙

図版 38 遺物写真 (11) 土製品、石製品、頭巾



17・18・29・30・187：須恵器環
 60・62・84・156・184：ロクロ土師器環
 68：灰釉陶器高台环
 99：楓字環
 133：非ロクロ土師器有段丸底环
 137：非ロクロ土師器丸底环

17：基本層Ⅲa2・Ⅲa4層
 18：SD1006I溝
 29・30：SK10063土壤
 60：西I道路跡B東側溝

62：西I道路跡C東側溝
 68・84：西I道路跡D東側溝
 99：西I道路跡E西側溝
 133・137：SK10140土壤

156：SD2000B河川跡7層
 184：SD2000B河川跡
 187：SD2000B河川跡6d層

図版 39 遺物写真 (12) 墨書・刻書土器



SK10140土壤



南1西2区 9世前半頃の土器



南1西2区 9世後葉頃の土器



南1西2区 南1・西1道路D-F期 10世紀前半頃の土器

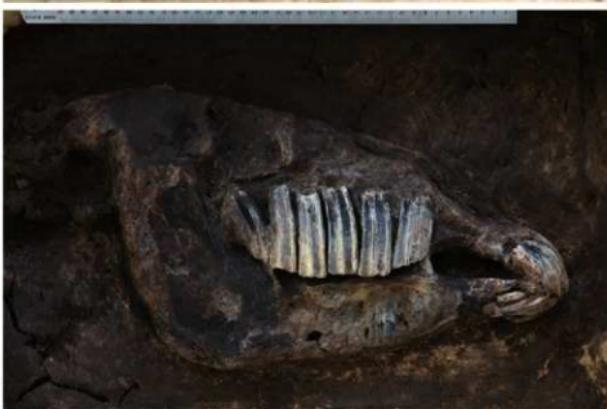
図版 40 遺物写真 (13) 集合写真



1号馬頭骨の取り上げ準備



発泡ウレタンによる1号馬
頭骨の取り上げ



クリーニング、保存処理終了
後の1号馬頭骨

図版 41 西1道路A東側溝出土 1号馬の保存処理

報告書抄録

ふりがな	さんのいせいVI-たがまえくちだい4 じはくつちようさほうこくしょー				
書名	山王遺跡VI-多賀前地区第4次発掘調査報告書				
副書名					
巻次	VI				
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書				
シリーズ番号	第235集				
編著者名	柳澤和明(編)、天野陽輔、箕浦幸治、平野信一、山田努、松本秀明、伊藤晶文、鈴木敏彦、藤根久				
編集機関	宮城県教育委員会				
在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 Tel.022-211-3682				
発行年月日	西暦 2014年12月26日				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所収遺跡名				
ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度 東経 度	調査期間	調査面積	調査原因
さんとうせき 山王遺跡	042099 宮城県 たかじょうし 多賀城市 市川字 たかまち 多賀前	18013 38° 17' 47" 140° 59' 15"	平成24年 (2012年) 3月26日 ~ 12月12日	本发掘調査 1,400㎡ 確認調査 3,320㎡	三陸沿岸道路仙塩道路4車線化工事 (東日本大震災復興関連事業)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
生産遺跡	古墳時代 前期	水田跡、用水路跡、溝 跡			
集落跡	奈良時代	磐穴住居12軒、区画溝 路1条、木材解体跡44棟、 小溝状遺構群(細部)3 箇所	非クロ口土師器(环・有段丸环・丸 环・平底环・深埋・鉢・甕)、須恵 器(环・鉢・甕)		方格地割成立前、多賀城跡第1期、 第2期、第3期に相当する階段の 多賀城をえた奈北100m間隔で 居住域と生産域が南北100m間隔で 判斷。分かれている。
古代地方都市	平安時代	道路跡6条(南1・西1 ・南2・南1・2間 ・西0・東0道路跡)、 掘立柱建物跡44棟、 磐穴住居跡3軒、井戸跡2 箇所、横位合口土師器 粗眉2基、上槽4端、 通り水間造構1(溝、 連結構、大土壤)、 溝跡多數	非クロ口土師器(环・ 高台环・深埋・中型壺・盆・鉢・甕 ・小型壺・瓶)、須恵器(环・高台环 ・双耳环・瓶・折唇高台盆・盆・鉢・甕 ・高台环・大型竹筒形鉢)、須恵土 器(环・小型环・高台环・中型壺・ 盆・鉢・甕)、高台环・矮高台盆・小 高台・高台环・大型竹筒形鉢)、灰陶陶 器(环・中型环・高台环)、須恵陶 器(环・粗眉・土器・甕)、輪扁(环・ 盆・粗眉)、土器(印彫陶器・扇形器 ・壺・盖・器)、土器(印彫文字)、木製品 (円筒形木容器、方形器形 容器器)、墨書き(鉢・瓶)、 瓦(丸瓦・軒瓦・平瓦・瓦丸・ 瓦直)、瓦(丸瓦・軒瓦・平瓦・瓦丸・ 瓦直)、「宇多口」(部カ)、「小」 〔大〕、「匱」、「田」、「中」 〔里〕、「耕」、「升」(他)、織機製品 (織物)、漆谷器須恵器、 鉄器(刀・鎌)、骨器(骨筒・骨環)、 動物遺存体(ウマ・ウシ・ イヌ・タヌキ・ニホンジカ・ヒト・他)、 種子(モモ・他)		(1)陸奥府多賀城跡の城外、方格地 割のうち、南2西1区の守護御跡、 南2西2区、その南の方格地割外を調 査なし、それぞれの様相と土地利用 の変遷がより明確化した。(2)南1西 2区(南1区)の通り水路跡、南1西 2区道交差点近くの西1号道路面上 南2西2道以南、古代の運河(砂押川 左岸の牛頭城の3箇所)、真理院11 (869)陸奥郡(大庭郡)に起因する 川原郡の堆植物の可能性があるイベ ント堆植物を検出した。(3)南1区1 道上より一部残ぐりを除く限りの よい土が出土した。解体されない 不自然な状態で、注目される。(4) 南1西2区、道交差点近くの横位合口 土師器遺構から、1-2歳児の歯 が検出された。全国初めての貴重な 出土例となる。
山王 遺跡 多賀前地区					
【古墳時代前期 (塙釜式期)】					
備後郡の山崎調査で発掘しておいた水田跡とともに関連する用水路跡、溝跡の東側延長箇所の一部を検出。					
【奈良時代】					
北より南に向て約100m間隔で、①居住区(掘立柱建物跡、磐穴住居跡、井戸跡等)、②耕作区(畠地)、③居住区(磐穴 住居跡)、④耕作区(畠地)となる土地利用状況を再確認した。④の北辺は東西方向のSA19木林跡、③と④の間は東西方向 のSA831木林跡、②と③の間は東西方向のSD2298区画溝、③と④の間は東西方向のSD1602B井戸跡でそれぞれ区画されている。 さらに南側の西側は畠地、後に掘削されたSD2000井戸川左岸区域では水田域となっていた。条里地割りを反映した可能性 も考えられる。					
【平安時代】					
①南1西2区において1町規模の区画全体を占有して、庭園(造り水)道構を作り守護御跡が9世紀前葉頃のB1期、9世紀 中葉頃のB2期、9世紀後葉頃のB3期、10世紀前半頃のB4期にかけて存在して変わらせる様子を認証した。					
②南2西1区では、区画全体の9世紀前葉頃のB1・2期には、東西方向のSD1602B河原を挟んだ北側が北西に隣接 する守護御跡を支えた磐穴住居群からなる居住区、河原を挟んだ南側が耕作地(畠地)として土地利用されていた。9世紀前 葉頃のB3期には四辺の道路で区画された構造が成立して、埋没した河原跡に南1・2号道路が築かれて区画が二分さ れ、南半部が掘立柱建物からなる居住区、南半部が掘立柱建物と磐穴住居からなる居住区へと土地利用が変化し、10世紀前 半期のB4期にもこれ引き継がれていますことを再確認した。					
③南2西2区以南では9世紀前半～中葉頃のB1・2期にはSD2000井戸川河原が埋めかから水田域に変わり、左岸では水田が作 直されている。9世紀後葉頃のB3期にはSD2000井戸川河原の南端に西0・東0道路が施設化され、右岸では小規模な掘立柱建 物からなる居住区となっている。10世紀前葉頃のB4期には左岸でも水田域から小規模な掘 立柱建物からなる居住区となっている。					
④南1西2区、南2西1区ではB2期とB3期の間に9世紀前葉頃、南2道交差点では9世紀前葉頃の水田域にそれぞれイ ベント堆植物の砂崩が存在し、9世紀中葉～後葉にかけて調査した広範囲が汚染化が判明した。イベント堆植物の分析 により、砂押川の氾濫による海水移入藻類などを含む堆積物であった。真理院11(869)陸奥郡(大庭郡)に伴う波津の邊上に 記載する可能性があり、これまで調査によってわからなかつた古墳地盤・地形の変遷を解説する手掛かりが得られた。					
⑤西1道跡A東側斜面から残りのよい土が出土した。解体されない不自然な状態で、9世紀中に位置に置けられ、 海水移入藻類も検出されたことから、真理院11(869)陸奥郡(大庭郡)に伴う波津の邊上に記載する可能性も考えられる。					
⑥南1西2区道交差点近くの3連合土石積構造物(8世紀末～9世紀前葉頃)の中から2段階のヒト幼児の歯 が出土した。					

宮城県文化財調査報告書第 235 集

山王遺跡VI

—多賀前地区第 4 次発掘調査報告書—

平成 26 年 12 月 19 日印刷

平成 26 年 12 月 26 日発行

発行 宮城県教育委員会

〒 980-8423

仙台市青葉区本町 3 丁目 8 番 1 号

印刷 株式会社 東北プリント

〒 980-0822

仙台市青葉区立町 24 番 24 号
